

---

# とある常識の異常能力（アブノーマル）

紅蓮烈火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある常識の異常能力<sup>アブノーマル</sup>

### 【Nコード】

N2475N

### 【作者名】

紅蓮烈火

### 【あらすじ】

『これは科学と魔術が交わる一年前の話』

何の変哲も無く、常識の内にだけに入るはずの学園都市外『東京』

そんな日常の中の『東京』で『異常』が起き始めていた……

己の信念を曲げずに、常識に囚われずに戦い続ける者達……

彼らの『常識』は『異常』へと塗り替えられる……

これは『とある魔術の禁書目録』の二次創作です。

最初の辺りはオリキャラだけでお送りします。ご了承ください。

番外編の『とある奴らのSS物語』<http://ncode>.

s y o s e t u . c o m / n 5 8 0 5 n /

## プロローグ（前書き）

最初の「日常編」「湖事件」では全てオリジナルキャラです。  
三つ目の「旅行編」から原作キャラが少しずつ出てきます。  
よろしくお願いします。

## プロローグ

> i 1 0 9 9 0 | 1 5 6 2 <

これは、とある都市で科学と魔術が交差する一年前のお話……  
これは、そんな都市外でのお話……そんな常識の中で物語が始まっ  
た……

その少年は、全てを失った。だから新しく出来た者を守るために戦う  
この少年は、何も無かった。だから何かを得るために戦うと決意した  
あの少年は、全てを持っていた。だからこそ何もかもを破壊し尽くす

彼らは戦う。己の信念を貫くためにも…… それぞれの思いを乗せる  
信念が力へと変わる時、イレギュラー異常能力者の物語は動き出す……

暗い闇の中、ソレ物体は語る。

君は常識が何か知ってるかい？

日常的な世間一般的に正しいと言われている……それが常識。

しかし、それは本当に常識なのか？ 勝手に常識と決め付けただ  
けじゃ？

世間に認められない者を異常と人は呼ぶ。

これは、そんな異常な奴らの異常な物語だ……。さあ、楽しいシ  
ョーの始まりだよ。

その少年は実に平凡だった。成績、運動共に普通。ラブレターを貰った経験も無ければ、バレンタインデーは中学三年連続義理チョコという新記録更新中。

そんな少年は高校受験をギリギリ合格し、それで東京の高校に通う事になった。親の許可も難なく貰い、ボロアパートで一人暮らしをする事になり、色々と忙しい。

引越しの準備も終わり、明日はいよいよ高校の入学式だ。そして少年は切実に願う。

「どうか……昔みたいに不幸生活になりませんように……」

神に願いながらも、二畳半の狭い部屋にすいた布団に潜り込み眠りにつく。しかし少年は知らない。次の日に、その願いがあつさりイレギュラーと絶えることを。そして、異常な生活に巻き込まれることを……

## プロローグ（後書き）

初めまして、紅蓮烈火です。

今回が初投稿となります。とても緊張しています……

今回は二次創作として「とある魔術の禁書目録」の二次創作ですが・

・  
・

「どこがだよ？」って思った方も居ると思います。

まだ始まったばかりなので、全然関係無いように見えますが、少し

ずつチラチラと原作の方のキーワードなどを出す予定です。どうか、

これからよろしくお願いします。





少年の願いは初日から脆くも崩れ去った。これが少年の入学式の当日。不幸な学園生活の始まりだった……。

少年は急いで着替え荷物を持ち、トレードマークである黒いニツト帽を装着して部屋を出る。

そして特急電車並みの勢いで走る。実際には普通にこいでいる自転車並みの早さだが。

「初日から遅刻とか……下手したら退学……!？」

基本ネガティブな少年は最悪のパターンを思い浮かべて、速度を上げる。

家から学校までの距離は結構あり、普通は15分程かかる。つまりは頑張っても遅刻は変わらないのだが。

十字路を突っ切ろうとし、危険など関係なしに突っ切った所、少年は見事に黒い車に跳ねられた。

ブホッ!? と奇妙な悲鳴を上げながら中を舞う少年。

漫画でもめつたに無いレアなシュチュエーションに会った少年。

何とか急所は外れたが、今にも死にそうな状態だった。

そして車の中から人が出てきた。どこかのお嬢様でもなければ、どこぞの美人女性でも無く、出てきたのは顔中に傷がある強面な黒いスーツを着た男だった。

「おい、小僧。……人の車にぶつかつたとして何も言わねえのか？」

心配した様子も、救急車を呼ぶと言う事もせず、倒れこんでいる少年を威嚇するようにしゃがみ込む男。

どう見ても堅気の間じゃないことが分かる。

車の正面は見事にへこんでおり、つまりは弁償しろという事だ。

「す、すいません……」

何とか立ち上がり、体中が痛いのだが、瞬間土下座を繰り返す少年。

この少年は、どうやらトラブルに巻き込まれるのに慣れてるよう  
で対応が早い。

しかし……、

「ごめんて済むわけねえだろ！ そんなんで済んだら警察はいらねえ！！！」

どうやら、この男はモノホンのアッチ系の人間らしい。

その男に胸倉を捕まれ、今にも泣きそうになる少年。

遅刻以前の前に生命の危機が迫っていた。

「さっさと金を払えやゴラアツ！！！」

「ならば、わらわが払ってやろうか？」

ドスを聞かせた声を出す男の隣に立つポニーテールの少女が言った。

その服装には見覚えがあった。少年が通う高校の制服だと気付く。少年と男は一瞬、ポカンッとしたが、男が直ぐに立ち直り、怪訝の目を少女に向ける。

「誰だ、お前？」

男の威嚇したような声に、普通なら震え上がる所だが、その少女は威嚇を保ちながら言う。

「わらわが金を払うと言ったのだ。ほれッ！」

そして男に銀のアタッシュケースを渡す。

一瞬、何も無いところからアタッシュケースを出したかのように見えた。

男は警戒をしながら中を見る。そして驚愕の表情を浮かべる。

「て、テメエ！ こ、こんな金ど、どこから出しやがったッ！」

驚きの声をあげる男。

少年は中身を見ていないから何が何だか分からない。

「なんじゃ？ まだ文句があるのか？」

呆れたように尋ねる少女。男は何故かビクビクしながら怒鳴る。

「こ、こんなの偽金かもしれねえだろ！ そもそも、こんなガ

」

その先は男は喋る事が出来なかった。

何故なら少女がアタッシュケースを思いっきり男の頭に直撃させたからだ。男は少年と同じように呻き声をあげながら倒れた。

「うるさいのう……。さて、行こうか」

少女は少年に笑顔を見せ、手を引く。

そして少年を無理やり連れて走り出した。

あの男は放置にされ、少年はとても不安に思う。

「あ、あんた誰なんだ？ 何者なんだ？ てか、何で俺なんかを助け

「たんだ!？」

走りながら尋ねる少年に少女は少し悩んで答えた。

「うむ。わらわは学校までの道のりを忘れてな。同じ学校の奴を探していたんだ」

実にしょうもない理由で助けられたらしい。  
少年はつくづく不幸だと思う。

無事、学校にたどり着き職員室にて事情を説明して、指定された教室へと向かう。

先ほどの少女も少年と同じクラスだった。      なんか……運命を感じる。

しかし、先ほどまでの行動を見ると、ナシだ。  
そんな事を考えながら、いつの間にか教室についた。  
そして少年達はゆっくりと教室の扉を開ける。

「遅いんじゃないボケ!!」  
「ツガハ!!」

い。  
黒板消しが少年の眉間に当たる。投げたのは、どうやら教師らしい。

少しポツチャリ体形の教師は怒りをあらわにして叫ぶ。

「お前ら遅刻じゃ! このクラスで遅刻は許さん!!」

今時珍しい熱血そうな教師。

少年は、いつか教育委員会に訴えてやる、と内心誓いながら教室へと入る。

どうやら先生の自己紹介中だったらしい。

「ちょうど生徒に一人ずつ自己紹介させる所だったんだ。まずは遅刻組からだな」

初日から目立ってしまった少年。

目立たないようにと考えていたが、さっそく夢が潰れた。

すると、さきほどのポニーテールの少女が前に出て自己紹介を始める。

何人か男子生徒が歓喜の声をあげている。

「わらわの名は とよこみ みよし 豊臣美吉。好きな言葉は弱肉強食。ちなみに強い男にしか興味がないから、よろしく」

何人か闘志がついた目をしてる奴も居るが、半分は諦めたらしい。すると、少年は自分に視線が向いている事に気づく。そして少年も自己紹介をする。

「えっと……俺の名前は とくがわ こうほ 徳川功歩 です。よろしく……」

そして少年、徳川功歩の不幸な学園生活が幕を開けた……

「話」とある少年の不幸体質」（後書き）

やっと一話目です！

さっそく不幸な主人「徳川功歩」誰かと同じ性質・・・気のせいですよ

今後どうなるか、次回もお楽しみに！！

「二話」とある不良の神風少年」（前書き）

二話目突入ですよー！

無駄にテンションが高いですが、気にせずにご覧ください！

## 「二話」とある不良の神風少年」

彼の名は徳川功歩。

「ついてねえ……」

ため息を吐く。初日から遅刻。しかも堅気では無い屈強な男の運転するの車に跳ねられたのに慰謝料を請求される。

何より不幸なのは、恋愛フラグが一応、立ったと思われる少女が変人。

「ついてない……」

再び、大きなため息を吐く。現在は、先生が高校についての注意事項などを話している。徳川の席は窓際の後ろから二番目。クラスの中を見渡すが、ほとんど先生の話聞いておらず、徳川も己の不幸っぷりに落胆していた。

彼は生まれた時からの不幸体質だった。車に轢かれた事が数十回。強盗に押し掛けられたことが3回程度。刃物で刺された数は、既に数えられないほどだった。昔から問題事に巻き込まれ、死にかけて事は星の数。

そんな不幸少年は、これから始まる新し人生に期待と不安を

「これ以上の変人は止めてください神様……」

してなかったみたいだ。彼の不幸の原因は周りにあると彼は判断している。そして、これから始まる高校生活では、あまり大きな期待などせず、普通の友達と普通に暮らす生活を望んでいた。

しかし、初日から変な少女と関わってしまい、少年は思う。高校



も駄目かも……。空に向かつて神頼みをする徳川。そんな彼を何者かが肩をトントン叩いた。

「モシモシ？ さつきからブツブツ何を呟いてるゼヨ？」

ゼヨ……？ 徳川は振り返り、その話しかけてきた人物の顔を見る。知り合いでは無かった。茶色に染められたツンツンヘア。首元にはヘッドホンを着け、いかにも真面目じゃないです感を醸し出す少年。徳川にとつて、こういうタイプは俗に言う『不良』と呼ばれるタイプの人間だ。

今にも逃げ出す気準備万全の徳川の様子を見て、その茶髪の少年は小さく笑いながら勝手に自己紹介を始めた。

「俺の名前は さかもとひゅうへい 坂本龍平。同じクラスメイトっていう事で、これからよろしくゼヨー」

「よ、よろしく……」

友好的でゆつたりとした物腰。徳川は、見た目はこれだけ良い奴では無いかと思い始めた。そして坂本と名乗った少年は続ける。

「この辺りでは、妙な友達との関係が多くて、堅気の奴と友達になりたかったんだー。って事で、これから友達としてよろしく！」

「……ちよつと待て……。……言葉の意味が全く理解できないんだが！？」

坂本の言葉を簡単にまとめると、つまり坂本は普通の、本当に普通な一般生徒では無くて、堅気じゃない人と友達だったという事か。あまりの突然のさり気ないカミングアウト絶句する。そして、すぐに

気を取り直して色々と追及する。

「お前はやっぱり見た目通りの奴って事か!? てか、勝手に友達とか言ってるんじゃないやねえよ!!! いつ俺が友達って言ったっ!!!」

「まあまあ、落ち着けて親友。そんなんじゃないやモテナイぜえ?」

「元々モテねえよ! てか本当にさり気なく、友達から親友に格上げするなっ!!!」

そして徳川は気づく。先生のお話し中、周りの人が静かに聞いている(のか分からないが)最中を大声を出して、妨害してしまった事を。しかも喋ってる事が完全にバレてる。うっすらと血管を浮かべせた先生はゆっくりと言葉を吐きだした。

「とーくーがーわー君? そんなに先生の話はつまらないかあ?」

怒りの矛先&全クラスメイトの視線が徳川へと向けられる。言い訳を言いようにも、頭が回らず、言葉が詰まる徳川。すると、坂本が急に立ち上がり、手を挙げて大声で言う。

「先生!!! どうやら徳川君は緊張のあまりに錯乱してしまったみたいであります!!!」

「よし! 先生の怒りの鉄槌で緊張を吹き飛ばしてやろう!」

「え、ちょ……え!?!」

「って事で、俺は徳川を保健室へ連れていくであります大佐殿! ではっ!」

怒りを浮かべながら近づく先生よりも先に坂本は徳川の肩を掴みながら疾風のように教室へと出ていく。もちろん徳川は逆らう時間も無く、引きずられていく。クラスの全ての者が、ポカッと、その光景を眺めていた。一人笑みを浮かべていた者を除けば。

教室から引きずられて、学校の昇降口へと向かって歩く徳川と坂本。徳川は未だに錯乱状態で、坂本に勢いよく問い詰める。

「お前いきなり何言ってるんだ!!」

「別に大丈夫ゼヨ。皆やってるゼヨ!」

「いや、やってねえよ!」

コントのように会話をする二人。徳川は、ふと足を止めて考える。

どこに向かっているんだ?

文句ばかりを言って、目的も判明しないまま付いて行ってしまっていた。

「……どこに向かっているんだ?」

「さあ?」

実にシンプルで簡単な答え。徳川は拳をワナワナと震わせて、隣の男を睨みながら言い放つ。

「ふざけやがって……人をそんなにおちよくるのが好きか」

「別にふざけてる訳じゃないゼヨオ? こんな感じに歩いていれば

……ほら!」

坂本は校門の入り口を指差す。そこには、いかにも不良感を出している数名の男子高校生。確か、

隣辺りの高校の制服だ。その学校は不良が多く通う学校として有名だ。髪型がいかにも古臭く、冗談でやってるしか見えない。そして、その男たちは、こちらを見ながら叫ぶ。



来たようだ。そして分かっているが、念のために聞いておく事がある。

「……大体は予想できるけど……何で俺もターゲットなんですか？」  
「お前が、あのうざったらしいクソツたれ野郎と付き合いが長いからだよ……」

分かっていたが、やはり不幸だとしか思えない。彼らが言っているのは、先ほどターゲットの名前としてあげた『織田』という男の事だ。本人たちには付き合いが長いとか感覚は無いのだが。

「あのクソツたれ野郎が、また俺らの領地シムで暴れやがったんだよッ！」

またか、と呆れ混じりに呟く。しかし、集団でこられるのは久々だ。

「で、あいつには勝てないからって仲良しこよしっぽい俺をボコボコにしようって訳？ お勤めご苦労様。俺は、あいつとは全く無関係なので、帰らせてもらいます。てか帰らせてください！」

「そんな言い訳が通用するかッ！」

やはり逃げ出すのは不可能のようだ。戦うという選択肢もあるが、徳川は特別に強くもないし、むしろ弱いほうだ。それを一気に何十人も相手にしろというのは、素人にサメを取ってこいと言ってるようなものだ。

「さてと……遺書はそれだけで十分か？」  
「いや、遺書って書くもの……。って嘘、嘘！ ちょっとタイム！  
まだ書き終わってないから少し待って！」

指をポキポキ鳴らす不良たちの前で、必死に時間を稼ごうとする。しかし、これ以上は無理のようだ。ヤバイ、俺死ぬ？ 今まで何度死を覚悟した事か。そして、不良たちがなくなりかかってこ酔うとして来た瞬間、空から声が聞こえた。

「集団リンチっていくらか幼稚じゃないゼヨかぁーッ！！」

上空から降ってきた坂本は木刀を片手に振り下ろしながら地面に激突する。物凄い風力で砂埃が立つ。近くに居た不良ともは吹き飛ばされ、徳川は後ろに倒れこんでしまった。

「さ、坂本……？」

「大丈夫ゼヨか？ 流石に屋上からの登場は誰も居ないはずッ！」

その砂埃の中心で平然と立つ坂本。怪我の形跡も無い。周りの不良ともは、飛ばされたおかげで気絶したみたいだった。

「って……屋上って5階だぞ！！」

「そんな小さな事を気にしたら、脳みそが持たないゼヨ？」

「どこが小さいんだ！ と言いたいが、これ以上は拉致が飽かないので、あえて言わなかった。」

「そんな事より、何で一人俺を置いていきやがったッ！ こうなる事は分かってたんだろッ！」

「なーんの事ゼヨかねえー！。俺は知らないなあー」

こいつ、いつか殺してやる、と内心殺意を思いながら辺りを見渡す。これは、どう考えてもおかしい。何故、あんな突風が起きたのか？ そもそも坂本が無傷なのも異常すぎる。

「お前……一体なんなんだ……？」

「それは後ろの雇い主が教えてくれるぜいー」

徳川はあわてて振り返る。そこには見覚えのあるポニーテール少女。つまり豊臣が立っていたのだ。

「合格じゃな。さて行こうか」

はぁ？　と思わず疑問符を浮かべる徳川を後ろから坂本が拘束する。この時点で、既に日常には、戻れなかったのだ……。

「二話」とある不良の神風少年」（後書き）

新キャラ登場ですね、はい。

皆さん、お気づきかと思いますが、キャラの名前は昔の偉人の名前からとってあります。

今後、どんなキャラが登場するのか……



三話「とある学者の幼女疑惑」(前書き)

題名がふざけていますが良いのが思いつかず……  
とにかく少し長いかもしれませんが、どうぞっ！



「それは合ってるけど、本職はボディーガードゼヨー」

あまりに普通に言うから聞き間違えたかもしれない、と徳川は思ったが、どう取っても一語一句聞き取った。そして、あまりの衝撃に声も出せないまま、立ち上がる。が、ここが車の中だと言う事を忘れていたのか、車が段差に乗ったみたいで、調度見事なタイミングで車内がわずかに揺れる。

その絶妙なタイミングのおかげで、徳川は車内の天井に頭をぶつけて、舌を噛む事になった。

「功歩ー。お前って本当不幸っつーか、それを通り越して呪われるんじゃないゼヨか？」

「う、うるしやい……」

何とか自力に立ち上がり、ヒリヒリした舌を使って返事をする。そんな徳川を見つめている豊臣は顔こそは笑ってなく、無表情だが口元が微妙に笑っているのに徳川は気づき、さらなる恐怖を覚える。

「さ、坂本の事はわ、忘れるけど……この後、俺はどうなるんでしょうか？ マジでお願いします、教えてください」

ヒリヒリする舌を必死に回し、土下座までして願いを乞う。何かされるんだったら、まだ知っていたほうがまだ。

豊臣はツフツと小さく笑い、ずっと沈黙を保っていた口を開いて言う。

「さつき、お主が答えを言ったはずなのだが……それに坂本がヒントを言ったんだけどのー。もう一度言っつてやれ」

「簡単に言っつて、功歩には国家秘密組織に加入して貰います。おめでとっつー……」

「……………はあああああつ！？」

本日一番の驚きの声をあげる。あっさりと言う彼らとは違って、徳川は混乱という沼のどん底に落とされている。すると、リムジンが急停止し、車内が大きく揺れる。徳川は思うが、この運転手危ない。

それは日本では滅多にお目にかかれないと言う程の強大な屋敷だった。全体的に白くて清らかで、いかにも上品という感じがする。その屋敷に目を奪われながら徳川は謹んで質問する。

「こ、ここは誰の家なんでしょうか……………もしかして、国家のお偉いさん？」

「んにゃー違う違う。ここはお嬢の小さな小さな別荘だゼヨー」

答えた坂本はニヤニヤと笑いながら豊臣を指差した。豊臣はむすつとしながら「それはわらわに小さいと言っているのか？」と怒っているが、徳川は別の事で頭がいっぱいだった。

「お、お嬢様……………って事はお金持ち……………もしかして貧乏人の体を売ってお金にしていると」

見事な正拳突きが、徳川の腹へと命中する。隣では同じ技を喰らって苦しんでる坂本の姿が。豊臣は未だにプリプリしながら、二人を中へと案内する。

「全く……………さつきから世迷い事ばかり言いおって……………。本当にやっ  
てやるうか……………」

物騒な事を言う豊臣をなるべく怒らせないように黙りながら付いて行く。中は、庶民の徳川には絶対に分からないような凄そうな壺とか色々がある。

「さっき言ってたボディーガードって豊臣の事を守ってるのか？」  
「そうだけ。全くお嬢はわがままで大変ぜヨ？ 去年の夏なんてアイス買ってこいって言われたぜ」

それ以上は何も言うな、という目でこちらを睨んでいるので二人して肩を組んで、笑顔で返す。それで少し睨んでいたが、前を向いて歩き出した。徳川は、そのまま相手に聞こえないように尋ねる。

「……あいつって案外怖いな……。お嬢様ってイメージに全く合わないんだが……」

「現実なんて、そんなもんぜヨ……。何事も夢を見ないことが得策」  
それは分かっていると、言う徳川。不幸な徳川は良く分かっている。そして内緒話モードを止めて、普通に坂本に聞く。

「それで……お前って一体何者なんだ？ そんな歳でボディーガードって普通はおかしいだろ……」

「ん？ 別にボディーガードは歳とかじゃなくて、腕で雇われるもんぜヨ？それに俺は特別だぜー」

正直、意味は分からないが、坂本は相当の力量と言うことだろうか。徳川は最後の言葉が気になったが、その前に豊臣が話を振ってきた。

「お主……着く前に聞くが、学園都市とは知っておるよな？」

徳川は頷く。東京に住むにあたって、外からでも良いから見たいと思っていたほどだ。学園都市といえば日本人にとって有名な場所だ。なんでも変な実験とかしている噂もあれば未来的な街並みらしい。誰もが憧れると思う。徳川は、何故そんな事を聞くのか疑問にも思っただが、豊臣が口にする。

「今から話す内容は学園都市と日本政府が極秘にする機密情報……これを守る覚悟はあるか？」

真剣そのもの豊臣の気迫に徳川は少しビクッと震える。無理やり連れて来られた挙句、何故こんな危ない橋を渡らなければならぬのか。しだいに怒りが溜まってきて、それを一気に爆発させるように吐き捨てる。

「覚悟……？ ……そんなのに覚悟はいらねえよ。学園都市？ 日本政府？ そんな小さな事に構ってられるほど暇じゃねんだよ！ こっちは、とつくの当にどんな不幸だって相手してやるって覚悟してるんだよっ！」

その返答にど肝を抜かれたように驚く豊臣。徳川の後ろではクククッと笑いを堪える坂本。そんな光景を見て、豊臣はしだいに笑みがこぼれる。

「ここでビビって逃げ出すなら許したんじゃないけどな……フッフ、お主は中々見所があるのぉー」  
「功歩って凄い事言うぜヨなー。ここに政府のお偉いさんが居たら大変ゼヨ？」

怖い事を言わないで欲しいと切実に思う徳川。自分でも、あんな事を言ったのに驚いている。そんな徳川を見て、穏やかな笑みを浮

かべながら再び案内を始める。

「このエレベーターを使って地下に降りるぞ」

「……は？ ……豊臣さん。今、なんと？」

「地下に行くのだ。わらわの友人がそこに居ての。その友人が、そなたを呼んだんだ」

「俺の頭の中で一つの方式では地下＋研究所＋金持ち＝人体実験何ですが……」

「冗談で言ったのだが、豊臣は怒ってしまう雰囲気なので土下座を素早くやる。そして小さく呟く。

「……俺は生きて帰れるのでしょうか……？」

薄暗い道を進み、やっと目的の部屋へとたどり着いた。

「さて、ここからが大変ゼヨ……」

坂本が意味有り気な事を呟くが、豊臣は気にせず、ドアを開ける。

「ただいまぁー！！」

駆け込んでいく豊臣。中を覗いて、徳川は絶句した。

それは部屋の様だった。それが普通なら良いのだが。壁一面にポスターが張っており、本が沢山。

そのポスターは……少し危ないアニメのポスターらしき物。そして一面に広がる本は漫画ばかり。まさに日本で言うO T A K Uと言う奴だ。

そして中では、寝転がってアニメのキャラが描かれた抱き枕を抱

いてアニメを見ている少女が居た。年は12〜14歳くらいだろう。白い白衣を着ていて、小さい子のコスプレに見える。しかし、この部屋は一般人の徳川には異常過ぎた。

「お帰りなのだー。そういえば、今日が入学式だったなー」

坂本以上に呑気な少女。豊臣さんが言っていた親友とは彼女の事だろう。そして、ある事に気づく。

「こいつが俺を呼んだのか!？」

徳川は少女を指差し声を挙げる。しかし豊臣と、その少女は二人の世界に入っていて聞いてない。アニメの話をしているみたいだが、こちらにとっては外国語に聞こえる。

「……………人の話を……………聞けええええええええええええ!!！」

地下全体に聞こえるほどの大声を挙げる。そしてやっと、その少女は徳川の存在に気が付いた。

「……………誰なのだー?」

「今頃かよ! てか、気づけよ! お前が俺を呼んだんだろうがああああ!?!」

またもや怒りが爆発しようになる。豊臣が事情を話し、その少女は納得したのか自己紹介を始めた。

「ボクの名前は竹中月夜たけなかつきよなのだ!。ご覧の通りこの研究所の管理者なのだ!?!」



えっへん、と胸を張る。徳川は一番の疑問を投げかける。

「……こんな幼女が？」

「酷い！ こう見えても月夜は18歳なのじゃぞ！！ こう見えても！！」

つと、さり気なく胸を指しながらフォローする豊臣。その意味を察している竹中と言ったお姉さん(?)は少しシヨンボリと肩を落とす。未だに信じたいのだが年上には見えない。すると竹中は顔を上げて笑顔で、

「皆、電気ビリビリを喰らいたいのだー？」

スタンガンを懐から取り出して笑顔で尋ねる。徳川以外は全員避難していて、一人だけで必死に謝って止めて貰ったが。

「で、俺を呼んだ理由を聞かせてもらおうか……博士」

皆には博士と呼ぶようにと言っているらしい。豊臣は親友だから例外で呼ぶ。ゆったりとした口調で博士は語る。

「君を呼んだのは他にもない……単刀直入に言うのだー。君は超能力を信じるか？」

徳川は今までにないほどの現実味の無い事を言われて固まる。

### 三話「とある学者の幼女疑惑」(後書き)

今回は時間が無い&考えがまとまらなくて……

と、とにかく今頃ですが少しでも原作に触れました！

誤字脱語などありましたら、遠慮せずにご申しつけてください！

## 四話「とある常識の異常能力」(前書き)

前回の続きです。ついに物語の中核をついた話となっています。

#### 四話「とある常識の異常能力」

「君を呼んだのは他でもない……単刀直入に言うのだ。君は超能力を信じるか？」

指を突きつける竹中博士を見ながら徳川は少し考えてから答える。

「超能力って……アレだろ？ TVとかでやってるインチキ特番」

どうやら徳川は、そういう幽霊とか超能力とか信じないタイプらしい。竹中はフフフっと不気味に笑い話し出す。

「これだから事実だけを視野に入れる坊やは駄目なのだ。良い？ 超能力って言うのは……」

「知ってるよ……。アレだろ？ 念動力とか透視とか、遠くで聞こえた小銭の音を聞きつけるとか。てか、誰が坊やだっ！」

「いや……功歩。最後のは違うと思うぜヨ……？」

それが何の関係があるのだろうかと徳川は疑問に思う。竹中は途中で自分が言おうとした事を邪魔されて、こめかみをピクピクと動かしながら、若干怒り混じりにゆっくりと説明を始める。

「君が知ってる通り、超能力とは異常な事イレギュラーなのだ。科学を永遠に目指し続けた結果！」

「あのーなんで、そんな熱くなってるのでしょうか？ てか、全然関係性が見えてこないんだがっ！」

焦らす様に話す竹中にイライラし始めた。竹中は、それが分かっ  
ていてやってるようで実に楽しんでいる様に見える。

「徳川君！ 君は超能力者と戦ってもらおう！！」  
「豊臣さーん。この人、中二病ですよねブボバアツ！！」

最後に竹中に飛び蹴りを喰らって倒れこむ。その衝撃で倒れた徳川の上に竹中は馬乗りをする形になって、顔がすぐ近くにある。そして徳川は、

「って恋愛フラグになってたまるかあーっ！！誰がこんな少女とフラグを成立」

「やっぱ死んどくのだー？」

スタンガンを本気で突きつけられようとして、「嘘です！貴方様は立派な大人の女性であります！」と必死にお世辞を並べて回避した。そして徳川は疲れたように床に座りながら尋ねる。

「あのさあ……超能力者と戦うって……何？ そもそも超能力者なんて」

「居るゼイ。超能力者だったら」

そう答えたのは坂本だった。徳川は坂本を見て、それから竹中を見て、豊臣を最後に見る。

「分かったぞ！！これはドッキリだ！」

「認めるよ功歩。屋上5階から飛び降りて、無傷な人間なんて存在すると思うか？」

確かに、そんな芸当できる奴を人間だと認めたくない。徳川は真剣な面持ちの彼らの顔を見て、ため息を吐く。

「ついてねえな……。分かったよ。認めるよ。超能力者は居る。目の前に居るんだもんな？ でも、何で俺が戦わなきゃいけないんだよ……？」

こいつらは最初から自分を狙っていた。でも、自分にそれだけの価値があるのか？ ある訳が無い。今まで普通……とは言えないけど、一般的に生活をしてきた。喧嘩が特別強い訳ではない。

「実は上からの命なのでお……」

「上？ 上なんて存在するのか？」

豊臣の言葉に違和感を感じた。すると坂本が説明をし始めた。

「功歩ー。言っておくけど、これは組織だぜヨ？ 通称『対能力者

機関《ESP》』。ちなみに、俺とお嬢も所属しているぜー」

「そこの担当研究員がボクなのだー。ちなみの、これは国家秘密機関だから口外しちゃ駄目だよー？」

徳川は黙り込み、そして一番声を張り上げて叫ぶ。

「えええええええええええええええええツ！！」

「じゃあ、これからESPについて説明するのだツ！」

何故か伊達めがねをかけて、いかにも教師らしい格好をし、ホワイトボードを叩き説明を始めた。

「まず、ESPの目的についてなのだー。この組織は、日本で起こる能力者の暴走および、悪用する輩をとっ捕まえる組織なのだー！」

「全然意味が分からないのですが……。そもそも、さつき説明したけど、超能力者って学園都市内だけじゃないのか？何で外に超能力者が居るんだよ」

先ほど、超能力者とは何かをしつかりと説明された徳川。竹中達の話では、学園都市は超能力者の開発を行っているトンデモ都市らしい。でも、都市のセキュリティは万全らしいので、外に生徒が漏れる心配は無いと言っていた。そしたら、何故外に能力者が？疑問に思っている徳川に坂本が分かりやすく説明する。

「功歩<sup>ソニック</sup>ー。さつきも言ったとおり、俺は能力者ゼヨ。風を操る音速疾風<sup>ウィンド</sup>って言う能力ゼイ。さて問題です。俺は今まで一度も学園都市に言った事がありません。何故、能力者なのでしょう？」

「そんなの……いつの間にかに都市に行っていたりとか？」

「そんなの無理に決まっておるじゃろうが……」

豊臣に馬鹿にされる。徳川は悩んだ挙句、

「降参！！分かる訳が無かるうがっ！！」

「逆切れなのだ……。では、説明を始めるのだ。ここ最近、能力者の出現報告が増えているのだ……。東西南北。日本の中だけで、能力者の目撃情報が出ているのだ……」

日本という所を強調する竹中。徳川は一つの可能性を考える。

「それって、学園都市の情報の外に漏れたんじゃないか？」

「それを考えたものも居たが、学園都市と外とでの技術差は何十年分の差が開いておる。外に漏れたとしても解読する事は出来ん。しかし、外に存在する能力者は学園都市との能力者と同じように脳が開発された形跡があったんじゃない。そして外の存在する能力者には変

わった点があった」

「そう。普通は能力者ってーのは、演算とか面倒なのが必要なんだぜヨ。しかし、外に存在する能力者は、大半の奴が演算を必要としない」

豊臣と坂本が真剣に語る。徳川は、いつの間にか話にのめり込んでいた。そこには、自分が知らない世界が広がっている。

「学園都市と日本政府は、危険視して、この機関を作った。彼ら学園都市外の能力者、ここでは異常能力者と呼ばれている存在を捕らえるために」

「俺みたいな隠れた能力者とかは、いつ危険になるか分からないから、先に見つけてESPに勧誘してるみただぜヨー。俺も能力者って分かった時は驚いたぜヨな」

「俺みたいな一般人も……この組織には居るのか……？」

徳川が尋ねると、ずっと説明する出番を取られていて、イジケていた竹中が凄い勢いで説明する。

「それは本当に異常な事なのだ！ この機関は日本の各地に支部イレギュラーが存在するけど、全員が能力者なのだ！。普通のは研究員くらいだよ？」

「じゃあ何で俺はここに所属させられるんだ！？」

豊臣は「さつきも言ったとおり上の命令」それしか言わなかった。どうしても納得が出来ない。

徳川は考えても答えは出てこない諦めて、最終確認をする。

「それで、俺はこのESP東京支部に所属するって事で良いんだよな？ それとメンバーは俺と坂本だけって言わないよな？」



「わらわも所属しておるが？」

徳川の首が豊臣の方を見る。確か、所属できるのは俺を除いて能力者だけのはずだ。

「豊臣も……能力者……なのか？」

「そうだけど？ それが変な事か？」

ニヤリと怪しい笑みを浮かべる豊臣。嫌な予感がした瞬間、何か起きた。

気が付けば、何mか離れていたはずの徳川と豊臣が急接近していた。いや、徳川が豊臣の場所まで一瞬で移動したのだ。数cmの距離の徳川と豊臣。さらに豊臣は顔を近づけて、

「どう？ わらわの能力は……？」

慌てて後退る徳川。顔は真っ赤なトマトのように赤くなり、頭からは湯気が出そうな勢いだ。

「な、な、な、ななああああああつ！？」

「わらわの能力は瞬間移動テレポート。まあ、わらわは一方的移動オンサイドポーターと呼んでおる。何故だか、遠くにあるものを自分の手元を持つてくる事はできるんじやが、手元以外に移動させる事ができなくてのおー」

邪悪な笑みを浮かべたまま説明するが、徳川は緊張のあまり、聞いていなかった。

「取り合えず、この三人で協力して、この辺の能力者をぶっ潰そうなのだー！オーー！！」

竹中が腕を上に向かつて思いつきりあげるが、徳川は聞いていない。豊臣は知らん振り。坂本は笑いを堪えていて、竹中の話を誰一人聞いていなかった。

怒った竹中に追い出されて、屋敷の入り口まで来た。

「では、わらわの家はここだから、また明日」  
「俺は功歩が無事に帰れるように送るぜヨ」

徳川はまだ顔を赤くしている。それを見て豊臣は「産やのおー……」と笑って手を振って屋敷に戻っていった。そして徳川と坂本は一緒に徳川の住んでいるボロアパートに向かって歩き始めた。

「なあ……功歩。これは悪まで俺の予想なんだが……」

帰り道の途中、不意に坂本が話し始めた。

「俺は、何か陰謀染みを感じがするんだ……何か俺らの知らない所で起こっている……。政府とか都市とかの対応が早すぎるんだよ。まるで事前から分かっていたかのように……。能力者を作る……。それも何かがおかしい」

真剣に語る坂本。徳川は静かに聞いていた。

「……もしかして、能力者を能力で作るって事も出来るかもしれない。だっておかしいだろ？ 何で日本国内だけなんだって事に。それに隠蔽するのは、そう簡単な事じゃない。バレてもおかしくない事なんだよ……」

いつの間にか、徳川の住んでいるボロアパートの前にたどり着いていた。それに坂本は気づいて、ただ一言「気をつけるよ……」とだけ言っつて、手を振って去ってしまった。

「なんだっ たんだ……」

どこか、坂本の裏を知ったきがした。そして坂本が言った言葉を思い出す。そして覚悟を決める。あの日から分かっていたはずだ。自分はもう、日常には戻ってこれないと……

そして徳川は一日の疲れを癒すために、自分の部屋へと入っていた。

「四話」とある常識の異常能力」（後書き）

一日に四話も使ってしまった事に反省しております、はい。

## 五話「とある任侠の刀使い」(前書き)

ついに五話目突破です!!

誤字脱語などの指摘をどうかよろしくお願いします!

## 五話「とある任侠の刀使い」

高校生活二日目。昨日は一年分の衝撃を受けたのでは無いかと思う徳川。

今日は目覚まし時計をセットしたおかげで、遅れることなく登校できた。一つ気がかりな事があるとすれば、校門の近くを通った時、黒いスーツを来たオールバックの男が、ずっと睨みつけていた事だ。

気のせいだと心の中で信じて、自分の教室へと入る。席へ着くと、ある事に気づいた。後ろの席の坂本がまだ登校してなかったのだ。

「あいつ寝坊か……？」

まだ時間はあるから、登校するのが遅いだけだろうと言うことにして、そのまま気にしないことにした。が、突然廊下がざわめき始めたと思うと、教室の前に一人の女子が立っていた。

「徳川功歩って言うのは、このクラスに居るんだよね？」

そこに立っていたのは、これぞ和風と言えるような見事なまでにサラッとした黒いロンヘアー。その身長は女子の中でも高いほうで、周りの男子が思わず見つめてしまうほどの凛々しいルックス。

徳川のクラスの男子は一番美女という者に弱いらしく、全員が一目惚れ。そして名前を呼ばれた徳川の事を一斉に睨みつける。

「な、何の用でしょうか……？」

徳川は徳川で、女子（一般的な）との面識が全く無く、ドギマギしていた。

その美女とも言える女子は、皆の視線から徳川を特定し、ズカズカと教室に入ってきて徳川の腕を引っ張る。

「少し屋上まで付いて来てくれない？」

徳川の返事を聞く前に、強引に引きずっていく。周りからは「朝から青春だなー」「何であんな奴がつ！」「またかよ……」などと言う声が。当の徳川の本人も、

「え、ちょ……HRはっ！？ こっちの意見は無視ですか！？ てか二日連続で引きずり回されるのかよおおおおおおおっ！！」

その叫びはだんだんと教室から遠ざかっていった。それを眺めていた豊臣は楽しそうな笑みを浮かべて呟く。

「こいつは、また面白そうな厄介事に巻き込まれたのお……」

ここは屋上。風が優しく吹き付ける涼しい場所。そんな場所です。人は向かい合っていた。

徳川は、その女子にじつくりと見つめられ、縮みこんでいた。徳川の直感語る。また危ない事件に巻き込まれる気がする。ッ  
！！ 徳川は慎重に尋ねる。

「な、何か俺がしてしまったのでしょうか……？」

不安になりながらも徳川は答えを待つ。その女子は、少し俯きながら言う。

「大事な話が……あるんだ……」

その大事な話の内容が全て自分の嫌な事に繋がるのが徳川の特徴である。そして、その女子は清らかな笑顔になって言う。

「テメエの首……狩らせて貰うぞ……」

何故か背中から突如出した日本刀で、徳川を全力で突き刺す。かろうじでかわすした徳川は思わず尻餅をついてしまい、涙目で叫ぶ。

「ええッ！！ 分かっていましたともッ！ この徳川功歩、屋上で初対面の女性からいきなり告白されるなんて言う素晴らしい展開など、一生来ないと分かっていました。神様の馬鹿やろっおおおおッ……」

そんな徳川の事を気にもせず、その女子は斬りかかる。徳川は尻餅をついたまま後退りをして間一髪の所をかわす。しかし、後退りをしている内に、フェンスの所まで追い詰められてしまった。

「……私、徳川功歩。本当に何かしてしまいましたか！？ 本当にすいませんでした。心の底から謝るので許してください！！」  
「許すと思う？ 冥土の土産に持っていきな。アタシの名前は伊達<sup>だて</sup>真人<sup>まこと</sup>。伊達組の次期若頭……。昨日、うちの組のモンが世話になっ  
たな？」

口調がガラリと変わり、相手を脅すように喋る伊達。首元に刀を突きつけられ、動きようが無い状態。

徳川は伊達の言葉を聞いて、昨日の事を思い出す。豊臣がアタシシユケースで殴った男。やはり、あの男はアッチ系の人間だったらしい。



「あの、あのですね！ アレは俺がやったのでは無く、しかもアチラが轢いてヒイツ！！」

さらに刀が首に近づく。伊達は声を押し殺したような声で言う。

「そんな言い訳が通用するとも？ そこまで、アタシの組は甘くないんだよ……。あんたが知ってる世界とは違うんだよッ！ ……ちゃんと、その身に叩き込んでやる……！！」

そう言って、刀で首を切りつける。が、それは出来なかった。徳川が無言で刀を持つ伊達の手首を蹴り上げたからだ。徳川と伊達にらみ合う。

「逃げるのならば、いまのうち！！」

言うが早く、徳川は階段へと走り去っていた。伊達は、ゆっくりと地面に突き刺さった刀へと近づき、そのまま引き抜く。

（何だ……今の目……）

先ほどの徳川の目つきに違和感を感じた。まるで、裏の世界の人間のような死んだ目だった。考えても拉致が開かないと思い動き出す。獲物を見つけた狼のように徳川を追い始める。

「何なんだよおおおおおおお！！」

大声で叫びながら刀を持った者に校舎内で追いかけて。後にこの学校では、この事件の事をリアル鬼ごっこと呼んだそうだ。

「死ぬ！死ぬ！マジで死ぬ！！何なんですかコンニャロオオオオ  
！！」

大声で叫んでるから、誰かが反応してもおかしくないはずだ。しかし助けは来ない。不良のときと同じく、誰も関わりたくないのだ。先生でさえ見てみぬ振り。「薄情者ッ！！」と叫びながら校舎を走る。

「逃げるな！！」

逃げるなと言われて逃げない奴がどこに居る。後ろを追ってくる伊達に、そんな事を思いながら走り続ける。そのそも、あの日とは、何故学校に日本刀を持ってきているのでしょうか？

疑問に思っても仕方が無い。徳川はそのまま走り続ける。事情を知らない人が見れば、修羅場と勘違いする程の勢いだ。

「それでも男か！！男だったら正々堂々戦えッ！！」

「どこの世界に素手で刀を戦う奴が居ますか！？」

そんな事を叫ぶ。そして、必死になった徳川は言い返す。

「そもそもお前もだろッ！ それでも女ですか！？ 刀振り回す女子がどこに居るんですか！？ どこの昼ドラだよッ！！」

冷静に考えると、これは禁句では無いかと思う。徳川はゆっくりと後ろを振り向いた。そこには、優しい慈悲に満ちたマリアのようで、相手を確実に殺すと決意した鬼神のような笑顔を浮かべた伊達が、スピードをさらに上げて追ってきていた。つまり言葉では言い表せないほど怖い。そして徳川は自分の死を覚悟する。



逃げ出さず事もしなければ、相手を力強く睨みつける。全身に異常な汗をかき、その拳を強く握り締める徳川。先ほどまで逃げていたのとは別人のようだった。

「お前の噂……聞いたぞ。色々と暴れてるらしいじゃないか。マジで止めてくれよ」。俺にまで迷惑かけるの」

「お前なら簡単に逃げれるだろう？ そんな小さな事を気にする奴だったか」

「小さい？ ああーお前にとっては、どんな事も小さいだろうな。だがな、俺の目の前で暴れるのは止めるって言ってるんだよ……俺は昔とは変わったんだ。お前もいい加減に変われよ。俺が、わざわざお前を殴りに良くって言う馬鹿らしい迷惑をかけるなって言ってるんだよ……ッ！」

吐き捨てるように言い放つ徳川。先ほどまで逃げていた徳川とは正反対の冷たさを感じる伊達。呆然と眺めている伊達を織田は気づいて、

「俺も変わったさ……この世界はとつくとこの当に腐っていると自覚した。だからこそ変えるんだ……俺の手で……」

織田は伊達を見下すように立ち、徳川は織田が何をするのか気づく。

「まずは、世間的に邪魔な暴力団を潰すとするか……」

伊達は、あまりの威圧感に足がすくんだが、唇を強くかみ締め、相手に刀を振りかぶり叫ぶ。

「KILL YOU!!」

しかし、無残にも伊達は強さを砕かれる。振りかぶった刀は織田が突き出した拳に衝突した瞬間、鏡が割れるように粉々に砕けた。絶望に追い込まれた伊達に追い討ちをかける織田。

「……………雑魚が……………」

素手で刀を砕いた織田は、次は伊達の腹へと拳を突きつける。織田は容赦が無い。女だろが子供、老人だろが。そして容赦の無い拳は物凄い勢いで伊達へと飛んでいく。伊達は反応すら出来なかった。

「つぐぼお!!」

そして衝撃音が聞こえる。呻き声をあげながら飛んでいったのは徳川だった。徳川は伊達と織田の拳の間に立ち、その拳を真正面から受けたのだ。

そして天井にめり込み、ゆっくりと床へと崩れ落ちた。

「な、何で……………」

伊達には理解が出来なかった。刀が折られたことも。徳川が自分を庇った事も。さっきまで命を狙っていた人物に助けられる理由が分からない。

すると、倒れていた徳川が震えながら立ち上がる。

「織田あ……………駄目なんだよなあ……………俺以外の人に手を出すんじゃないよ……………!! お前の都合だけで周りの人間を巻き込んでるんじゃないねえッ!!」

心から奮え立つように叫ぶ徳川。その足はおぼつかず、今にも倒れそうだった。それでも徳川は声を荒げて叫ぶ。

「俺が、どんだけ不幸になっても構わない……でもなあッ!! 俺のせいで、誰かが不幸になっちゃいけないんだよッ! 誰かが傷ついちゃいけないんだよッ! ……だから、俺は……お前を……止め

それから先は、意識が飛んで言えなかった。そして徳川は全身に打撲を負って倒れた。

「ついてねええええええええええええええええええええええええ!!」

悪夢を見ていたのか、包帯だらけの徳川が叫びながら目を覚ました。ここは保健室。純白のベットの上で、徳川は目が覚めた。

「もうちょっとで影に食われる所だった……」

改めて夢の事を思い出して身震いを感じる。そして気づいた。自分が保健室に居る事に。

「あんだ、夢の中まで不幸なの?」

唐突に隣から離しかけられた。そして隣に伊達が座ってる事に気づき。

「ひゃあああああああああ!」

再び、妙な叫び声を挙げるなり、遠ざかるようにベットから転げ



「たぶん……体が勝手に動いたんだな……」

伊達は分かった。目の前の男はどうしようもないほどの馬鹿だ。伊達は病室を無言で出て行った。そして、ドアのすぐ側に立っていた黒いスーツでオールバックの男に話しかける。

「……何をやっていたんだ、片倉？」

「貴方様が、どれほど成長するか観察させて貰ってました」

片倉と言われた男は律儀に答える。伊達はフッと笑いながら片倉と呼ばれた男を引き連れて学校を出る。

「組長が言っていた……探し物は見つかりましたか？」

片倉の問いに伊達は笑いながら答えた。

「ああ……見つかったよ……守りたい者がな……」

一人病室に取り残された徳川。

「ヤベエ……ご飯炊いてない……。時間的に食べるの夜中じゃんッ  
ッ！」

ちょっとした理由でも不幸になる徳川。現在の時刻は夕方の6時。一日、病室で過ごしていたという事だ。昼食も食べてないので、余計に腹が減っていた。諦めて弁当……いや、予算的に駄目だ、なんて事で悩んでいると、不意に携帯電話が鳴った。非通知からの電話だった。

「もしもし？」



電話に出ると、そこから乱れたボイス音と共に聞きなれた声が聞こえた。

『もし……し。功歩……か？』

途切れ途切れに聞こえる声は昨日仲間となった坂本の声。

「何で俺の電話番号知ってるだツ！？　そもそも」

徳川はすぐさま気づいた。相手の様子がおかしいと言う事に。坂本は、それを悟られないように平常心で話し続ける。

『ちよつと……介事に巻き……れた。悪い……ど、お嬢の……衛を任せ……』

相手が言いたい事は分かる。徳川は相手の場所を急いで尋ねる。

「おいツ！お前何やってるんだツ！　どこに居るんだツ！？」

坂本が何かを言おうとした時、凄まじい爆発音が向こうから聞こえる。

「坂本……坂本ツ！！　おい！！　何があつたんだツ！」

しかし電話から聞こえてくるのは留守電の時の音だけだった。徳川は呆然と携帯電話を眺めていた。

五話「とある任侠の刀使い」(後書き)

やっとバトル(?)ですかねえー

だんだんとシリアスになっております。

次回をお楽しみに！

六話「とある組織の範囲爆弾」(前書き)

ついに六話ですよーッ！！毎回こんななんですいません。

今回もシリアスなバトルとなっておりましてーここでシリアス部分を挽回？

## 六話「とある組織の範囲爆弾」

時刻は6時。ここは辺りに人が寄ってこないような工事中のビル内部。コンクリートなどが塗り立てで少し暴れれば崩れてしまいそうな場所だ。

そこを平然と歩いていたのは変わった男だった。黒いローブを着ていて、どこか昔の旅人のようなイメージを連想させる。その手にはサイコロを回している。男は暗い夜に似合うほどの不気味な笑みを浮かべながら歩いていった。

そして、男は振り向きもせずに、大きく横にジャンプする。

突風が吹き荒れた。さっきまで自分が立っていた場所に向かつて飛んできた巨大な真空の刃。その刃は壁へと衝突し、壁が脆くも崩れた。男はチラッと後ろを見てため息をしてから呟く。

「夜中から物騒な物振り回してるねえー。おじさんに当たったら死んじゃうよ?」

男は後ろの少年をはつきりと見る。そこに居たのは体中がボロボロで、今にも倒れそうなほど息が荒い。片手には木刀を手に、その木刀を男へと向けていた。

「おじさんを殺すために来たゼヨ? 危なくて当然」

物騒な内容だが、男は笑うように笑みを浮かべる。どこまでも邪悪な笑みを。すると坂本が何かを呟きだした。

「イガルス・マッケンジー。所属は最近活発になってきたテロ組織パイロキネス? 推測からするに、遠距離方の能力。しかも発火能力か」

今までの戦いで判断したか、とイガルスは感心する。しかし、戦いといっても一方的なものだった。最初に襲撃を始めたのはイガルス。今までなら一発で終わっていたが、坂本は他の奴とは違って、シブとかった。妙に戦闘慣れをしていて、居場所まで当てられた。故に、イガルスは楽しそうに笑う。久々の敵だ。<sup>エモ</sup>壊しがいがある

「そっちは風を使うみたいだねえー。それとも物質を圧縮して飛ばすのかな？」

相手も、先ほどの一撃で坂本の能力を解析していた。坂本にとっては、あの一撃で終わらせるつもりだった。しかし、相手は見向きもせずに分かっていたようにかわした。

もしや、もう一人の協力者が居るのでは無いか、と坂本は周りを念入りに見渡す。

しかし、イガルス以外に人は見当たらない。イガルスは笑いながら言った。

「周りには一切人は居ない。さて、どうする？ おじさん、容赦と出来ないから」

そしてイガルスが動いた。坂本は避けるように後ろに下がる。相手が何かを投げたのが見えたからだ。すると、さっきまで自分が居た場所が凄まじい爆発音と共に爆発をした。

「……何かを投げて爆発させる？ ますます厄介ゼヨ……」

この暗い中で、投げた物を追うのは難しい。さらに相手は何かを投げてきている。それは坂本の近くに来た瞬間に爆発する。まるで手榴弾のような物体。

それを避けながら考える。今分かることを、脳をフル回転で働かせ、相手の動きを考える。

「おいおいッ！ 逃げてばかりじゃつまらねえぞッ！！」

不意に坂本の視界に、イガルスが投げた物体が見える。すぐ目の前に迫る物体。

(ヤバ ツー！)

坂本は大きく木刀を振り、その物体を叩つ斬る。すると、その物体は真つ二つに割れて破裂する。近距離から爆撃を受けて、その勢いで壁にまで吹っ飛ばされ激突する坂本。しかし呻き声はあげず、今ある思考を働かせる。

「おいーもう終わりかよ？」

(さっき爆発したのはサイコロ……？)

「じゃあ止めときますかあー」

(つまり、相手は発火能力バイロキネスでは無く、爆発ボムツ！?)

イガルスは坂本の異変に気づく。口元が……笑っている？違和感を感じながらも、手元にあるサイコロを倒れた坂本に向かって投げつける。

「これで終わりだなあー？」

イガルスは分かっていた。相手が何かをやる事に。

すると、坂本に向かつて投げたサイコロが、唐突に坂本から弾かれるように吹き飛ばされる。

やはり、こいつは風力使い。エアロマスターやはり狩りは面白い。相手の予想外の行動には、いつも胸が躍る。

「こじは、一時撤退でもするぜヨかな……」

すると、坂本が立ち上がりながら呟く。それと同時に、坂本の周りで旋風が起こる。そのおかげで、埃が舞い、視界が奪われる。

「めくらましか……」

ロープで目元を守り、イガルスは心底残念に思う。しょせんは、ガキ。とんだ腰抜けだ。

戦いから逃げるのは初心者で有り勝ちだが、それは逆効果だ。敵に背を向けるなど、愚の骨頂だ。

そんな思いながらも、坂本をどう潰すかを考える。すると、何か走る音が聞こえてきた。

「そこだあああああ!!」

木刀を振りかざし目の前で飛び上がった坂本。坂本は逃げるとは言ったが、逃げずに埃の中を走って、接近した。そして風を纏った木刀でイガルスを叩つ斬る。

回転をしながら吹き飛び、向こうの壁まで飛ばされるほどの威力を喰らったイガルス。

「ツク……」

咄嗟に片手を前に出し、イガルスは直撃は間逃れたが、犠牲とし

て片手を折られた。

「中々やるねえーだからガキは嫌いなんだよ……」

苛々しく坂本をギロリと睨みつける。坂本としては、今の一撃で終わらせるつもりだったのだが、どうにも相手が場慣れをしてるみたいだ。しかし、今の所は優勢。

「そうゼヨかー。じゃあ、そのガキに始末される気分はどうゼヨか？」

「最悪だよ……」

そう笑いながら呟く。それと同時に坂本の左足と右腕が爆発をした。「ツグフツ！」呻き声を上げながら、坂本は爆破された右腕を抑える。坂本は何が起きたか分からずに、イガルスを見つめる。

「どうだい？ 俺のボムは？ 俺の能力は範囲爆弾<sup>レンジボム</sup>。お前が予想した通り、サイコロや四角い物だったな何でも爆発させる事ができるんだよ？ まあ、アレだ。遊びは終わりだ」

坂本は右腕を見て気づく。腕に刺さっているサイコロの欠片。つまり、木刀の一撃の時に付けられたのだ。しかも気づかれないまま。心理戦で相手に致命傷を与えたと思ったらこの様だ。

「ヤバイな……足が……動かない……」

坂本は、爆発の衝撃で足が動かさなかった。それを哀れむように見るイガルス。



「あのサイコは普通のサイコじゃねえんだよ？ あの中は特殊でな。能力で作られていて、中に爆発と連動するように火薬が詰められているんだよ」

威力が違う訳だ。今の一撃のおかげで、坂本は全く右腕と左足が動かない。

「お前はせいぜい強能力者《レベル3》だろう？ お前じゃ一生、おじさんには勝てないよ。だって、おじさんは大能力者《レベル4》だからなあ！！」

そしてイガルスはサイコを坂本に向けて投げ、坂本は死を覚悟した。ヘマをやってしまったな。そして、いつ来るか分からない爆発を目をつぶりながら待つ。

しかし、一向に爆発音が聞こえない。ゆっくり目を開けると、そこには予想外の人物が立ちは阻んでいた。

「功……歩？」

自分の視力をおかしくなったのでは無いかと疑う。しかし、目の前に立つ少年は、確実に徳川功歩本人だった。

「新手か……しかもガキ。本当に嫌だねえー」

うんざりしたように呟くイガルス。そんなイガルスを睨み続ける徳川。その左手は血が滴っており、坂本は徳川がサイコを左手で握り締め、爆発を止めたのだと分かった。

「……ったく、一人で何やってるのやら……」

呆れるように言う徳川。そして吐き捨てるように続ける。

「このクソツたれ野郎は俺が絶対に潰すッ!!」

これで枷は外された

六話「とある組織の範囲爆弾」(後書き)

ついに能力覚醒の時は来たかッ!?

最後の言葉の意味は何でしょうねー? 誰が言ったのやら?

次回も引き続き、よろしくお願いします!!

七話「とある異常の吸収の罪」(前書き)

ぬあああああああああッ!!

二日だけで、7話も使ってしまったあああああ!!

原作以上のスローペースですが、よろしく願います!!

## 七話「とある異常の吸収の罪」

徳川は電話が切れた瞬間、すぐに行動に移していた。

ポロボロになった体を引きずるように向かう。今、一番事態を理  
解しているはずの、豊臣の元へ。

「知ってどうするつもり？」

ここは豊臣の屋敷。徳川は必死に走り、豊臣に状況説明をして、  
返ってきた返事がこれだ。

「どうするかだと？ 当たり前前事を聞くなッ！ 助けに行くに決  
まってるだろッ！！」

今にも相手を殴りかけない勢いで叫ぶ。しかし、豊臣は冷たい視  
線で言い放つ。

「お主に良い事を教えてやろう。能力者といっても、学園都市には  
大勢おる。そのせいか、能力者は力の序列が決まっておる。レベル  
1の低能力者。レベル2の異能力者。ここまでは、ほとんど日常に  
役に立つくらい力の力になっておる。そして坂本はレベル3の強能力  
者。そして、先ほど判明した事だが、坂本と戦っているのはレベル  
4の大能力者」

豊臣は真剣な眼差しで説明を続ける。

「力の序列はレベル5の超能力者があるが、今は関係ないから省く  
が、重要なのはレベル3とレベル4との実力の差。この差はとてつ  
も無く大きい」

その事実が徳川を心情を揺さぶる。それを見ながらも豊臣は説明を続ける。

「つまり、いくら坂本が強くて実践慣れをしていて、プロだとしても、足掻いて足掻いてやっと相手にダメージを与えられる程の差という事。戦地や能力の相性も関係するが、無能力者のお主が戦地に行って何をやる？ 何が出来るというの？」

徳川の心に深く鋭く尖った刺のようなものが突き刺さる。周りの者達は能力があり、実践慣れをしている。それに比べて自分は何だ？ 能力も無ければ、実践慣れをしている訳でも無い。逃げるだけしか能が無い俺が行って何になる？

そこまで考えて一度、考えるのを止める。むしろ、清々した。

徳川ははつきりと、そして力強く断言する。

「それが、どうした」

その言葉に若干目を細める豊臣。そして、

「だから、お前が行っても役に立つ所か、足手纏いになる」  
「だからって簡単に諦めて良いのか？ それで満足なのか？ 仲間も守れないで、何が仲間だッ！ 何が親友だッ！ 何度倒れようとも、何が起きようとも協力し合う。これが仲間って者だろッ！」

その言葉を聞いて、豊臣は観念したように坂本の居場所を言う。そして、徳川は真っ直ぐに、その場へと向かった。

「美吉は行かなくて良いのだー？」

不意に背後から声を掛けたのは竹中だった。豊臣は少し寂しそうな顔をして言う。

「わらわだって……行きたいよ。でもダメなんだ……」

真つ黒な空に輝く満月を眺めながら、二人の無事を祈る豊臣。

「上からの命令には逆らえない……」

「……上層部は何を考えているのか……謎なのだ……」

上層部に、この件に関わるな、と釘を刺された豊臣は、自分の情けなさをひたすら憎んだ。

指定された場所へと走る徳川。体の痛みなど、とつくの当に忘れてしまい、今は大切な仲間を助けるために走る。

（失ってたまうかよ……もう嫌なんだよ……自分の無力で誰かが傷つくのは……ッー！）

月が明るく照らす夜空の下をひたすら走る。少年は、己の信念を貫くために。

「このクソツたれ野郎は俺が絶対に潰すッー！！」

寸前の所で間に合った徳川。坂本に向かって投げられたサイコロに危機感を感じ、咄嗟に左手で掴んだ。案の定、それは爆弾のようで、左手の中で爆発する。激痛が走るが、それ以上に目の前の男が

許せなかった。

「功歩……お前、何でこんな所に来たッ！ お前じゃあ、そいつには勝てないッ！」

足を引きずりながらも止めようとする坂本。その坂本に向かって、それ以上の大声で徳川は叫ぶ。

「馬鹿野郎ッ！！ 一人で無茶してるんじゃないよッ！！ お前らが俺を巻き込んだんだ。だったら、俺は遠慮無しに戦いだって何でもやってやるうじゃねえか！ お前らは、そういう奴を仲間にしたって事だ！ 良く覚えておけッ！！！」

そう坂本がビビる程、大きな声で強く叫んだ後、向こう側に居るサイコロを投げた男を見て、唸るように言う。

「俺は……大切な人や、仲間、友を傷つける奴が大ッツツ嫌い何だよッ！！ だから大人しく俺に殴られるッ！！！」

拳を強く握り締め、痛みも関係なしに男を強く鋭く睨みつける。

「困ったねえーおじさんも人の邪魔をする奴が大嫌いなんだよー。一緒に炭になるかガキ？」

明らかに殺意を感じる眼光。しかし、徳川は恐れることもせず、相手の懐へ向かって走る。

「気をつける、功歩ッ！ 無闇に相手に近づくなッ！！！」

その忠告は遅く、既にイガルスが大量のサイコロを投げた所だっ



た。

「派手に黒焦げの死体になりやがれツ!!!」

高らかに笑うイガルス。そして、大量のサイコロが飛び交う場所。徳川の判断は早かった。

まるで爆発する場所が分かるように、次々と爆破を回避していく徳川。まるでプロボクサーのような動き。

「な　　!？」

イガルスが気付いた時には、徳川は懐に入り込んでいて、力強くイガルスの顔面にアツパーを決める。「ツガハアツ!？」そんな呻き声と共に、イガルスは数mほど後ろに飛んでいった。

「至近距離になったら得意の爆弾も使えないだろ？　それに、爆弾の動きなんて、不良のパンチよりも分かりやすいんだよツ!!!」

伸びて倒れてるイガルスに、そう吐き捨てて、怪我をしている坂本へと近寄ろうとする。

坂本は心底驚愕していた。あの喧嘩とは縁が全く無いように見える徳川が、あんな動きを出来るとは思っていなかった。そして、徳川とイガルスを見て気付く。イガルスの口元が笑っている事に。

「気をつける功歩！　奴はお前に　　」

それと同時だった。徳川の背中が何重にも爆発する。

「グガア、アアアアアアアアアアアアアアアアツ!？」

焼け付けるような痛みが徳川を襲う。いつの間にか、背中には何個ものサイコロが取り付けられていたのだ。イガルスは、それを見て心底楽しそうに笑いながら、よろよろと立ち上がる。

「いやー危なかったなあ。このクソガキ。お前が本物のボクサーだったら、本当に気絶していたよ?」

殴られた顎をさすりながら咳く。坂本は明らかに異変を感じていた。あの瞬間だけで、サイコロを背中に設置するなど、絶対に出来るはずが無い。これには何かの仕組みがある。カラクリ

しかし、そんな事よりも、優先すべき事がある。

「功歩ッ!」

足を引きずりながらも、何とか徳川に近づこうとする。

徳川の背中では服が完全に破れ落ち、その露出した体の皮膚から薄っすらと赤い肉が見えている。爆破によって、肉が抉えぐられている。血が滴り落ち、その場所を赤く染める。

「ここまでやっただけでもご褒美物だよ? って事で、君には商品として永遠の眠りを」

徳川の真上に立ち、そして手の中にあるサイコロを上向けとなった徳川の顔に落とす。

「功歩おおおおおおおおおおお!!」

坂本は叫ぶ。それしか出来なかった。能力を使う余力も無く、立ち上がる力さえ無い。そして、坂本は仲間を失う

という事にはならなかった。徳川は生きていた。

「そんなご褒美、いらねえよッ!!」

そう叫んだと同時に、何とか直撃を免れるために、サイコロを左手で掴み取る。ただでさえ、先ほど怪我をしたのに、右手が動かなく、最善の方法として左手を使った。

それは偶然と奇跡が重なった瞬間だった。

左手でサイコロを握った瞬間、サイコロは吸い込まれるように徳川の左手の中に消えていった。

ここに居た三人とも最初は何が起きたのか分からなかった。しかし、イガルスが、何かに気付いたように不気味に笑い出す。

「……ハハ、ハハハハハッハッハッハッ！　これは何の冗談だ？　こんな冗談が在って良いものかッ！　こんな所でお目に掛かれるとは……」  
『アブソールドクライ吸収の罪』ッ!!』

突然喚き始めたイガルスを不審に思いながらも、その言葉を聞いて、徳川も違和感を感じる。

(吸収の……罪？　何なんだ……この感じ。どこかで聞いた事があるような……)

そんな徳川と坂本を放って置き、背を向けて出口へと向かうイガルス。

「命拾いしたな、お前達。危うくお前を殺しておじさんが死んじやうところだったよー。危なっかしいっいたらありゃしない」

見逃された　　？　その理由も分からず、相手の真意が分からないまま、思わず徳川は叫ぶ。

「おいッ！　お前、何を知ってるッ！！」

「イガルスだ。別に、おじさんの上のうるさい奴が、お前を絶対に殺すなって言うんでな」

そして、後少しで見えなくなる所で、イガルスは呟く。

「成長を楽しみにしてるぞ……『吸収の罪』……」

そして、二人は客観的に見れば、敗北と言う形で生き残った。そして、彼らの本格的な戦いが……

今、始まる。

七話「とある異常の吸収の罪」(後書き)

ついに主人公覚醒!?

ジャンプなどで有り勝ちな、主人公が進化パターンですね、はい。

こんな感じでこれからも続けていくので、どうか生暖かい目で見守ってください。

第二部もよろしく願います!!

## 八話「とある忍者の行動原理」(前書き)

今回は果てし無く、暴走しておりますw

どうしてこうなってしまったのでしょうか……？

## 八話「とある忍者の行動原理」

暖かい温もりと、眩しい日差しを感じながら目が覚める。体が思うように動かせず、背中の感覚が全く無い。

ベットで寝ている少年の名は徳川功歩。昨日の戦いで背中に大怪我を負って、今はベットで寝ている状態だ。

その隣では昨日、同じく怪我を負った坂本が寝ている　はずだった。

「だから、俺っちは何が何でもロリが一番だあああああ！！」

「まだまだゼヨな！。そんなんじゃ、何も分かってないゼイ。一番最高は幼馴染ッ！！」

何やら、変な口論は気のせいだろうか。すると、どこから、大人の声が聞こえる。

「バツキヤロ！！　ガキ共は何も分かってないなあー？　最高つて言うのはなボイン&ビューティフルってパーフェクトな体を持った大人の女性って奴なんだよ！！！」

徳川は何とか体を起こして、状況を確認する。ここは、学校の保健室。その部屋で無秩序な口論は繰り返られていた。

怪我人である坂本と、丸眼鏡をかけた保健室の先生。そして、見覚えがある二人の生徒。

「ん？　おい坂本っちゃん！　徳っちが起きたぜ！！！」

赤いサングラスをかけ、ピアスなどを多数付けた生徒が叫ぶと、周りの視線が一斉に徳川に集まる。

「え？ 何で保健室……てか徳つちって何！？ 何故に勝手にあだ名がッ！？」

実を言うと、徳川はイガルスが去った後、すぐに気を失った。そして気付いたらここに居たのだ。

「功歩おおおおおおおおお！！！」

思いつき飛び込んだできた坂本を足で蹴り落とし、改めて思う。

俺は、生き残ったのか……。

未だに実感が無い。初仕事で想像以上の壮絶な戦いだっただ。

そして、これからも続く戦い。 まだまだ俺は弱い……。今

のままじゃダメだ……。

徳川は自分の左手を見ながら考える。あの男が言っていた<sup>アフター</sup>吸収の<sup>クライ</sup>罪。

これは能力なのだろうか？

「なあーに、辛気臭え顔してるんだ、徳つち？」

不意にサングラスの生徒に声を掛けられて我に返る。

「所で……あんたら誰？」

「酷いぜ徳つちッ！ 俺つちら同じクラスじゃねえかッ！ 坂本っちゃんの見舞いのついでで来てやったのにッ！」

「そうか……やっぱり俺は影が薄いのか……。そうか、そうか……」

……ここで初めて金髪の物静かな男が喋った。何か見覚えがあるが……てか、俺はついでかよ。

そんな事を思いながらも、頭の片隅にある初日の自己紹介の日の



事を思い出す。

「……坂上……?」

「ビンゴだぜ徳っち！ 徳っちなら答えられると思ってたぜ！」

「あの……さつきから徳っちって何？ いつの間にあだ名で呼び合う様な信頼関係築きましたっけ？」

正直、この二人と話すのは今日が初めてだ。そして、もう一人の金髪の男が『俺は？俺は？』みたいな感じで、自分の事を指差している。必死に考えるが、

「……誰でしたっけ？」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！ やはり神は俺を見捨てたのかああああああッ！！」

急に叫びだした金髪。徳川は妙に、その男から同族の気配を感じた。

「こいつは坂田だぜエー。高校になって頭を金髪にして高校デビューをしたかったみたいだけど、影が薄くて無意味だった空気キャラだぜヨ」

「良いですよ、はい。どうせ俺は空気なんだ……。世界中の奴が窒息死して死ねば良いッ！！」

クールなのか、根暗なのか良く分からないが、扱い方だけは分かった。

「何で俺の周りは変人ばかりなんでしようね……ハハハ……」

徳川は、自分の周りには変人しか集まらない事を悟り、深くため

息をつく。

「失礼な徳っちツ！ 俺は常識人です！！」

「可愛い女の子が外を歩いていたら？」

「即ナンパツ！！」「帰れ」

まるでコントをやっているかのような、坂上&坂田。この状況を打破するためにも、保健室の先生である、林先生はやしに助けを求め。

「あの……先生？ 普通は保健室では静かに！ つとか言わないんですか？ てか、すぐさまに、この馬鹿共を外に追い出さないと、回復するのも回復しないと思っんですがッ！」

「ガキに興味ねえ」

一言で一蹴された。それが教員の言う台詞かぁー、つと反論しようとしたが、片手で静止される。

「ああーガキは黙れ。俺は唯でさえ男には興味が無いって言うのに、ここは年上の女性が居ないからなー」

「林先生の年上って言ったら、もう熟女じゃないゼヨか？」

「俺は23だ」

さり気なく衝撃事実を知った徳川達。見た目からして、中年のオッサンのように見える。林先生は、保健室にも関わらず、煙草を吸うため、ライターを取り出しながらさり気なく言う。

「それで一つ聞きたいんだが、お前のシート。下半身の部分が膨らんでいるが、発情期か？」

人が聞けば恥ずかしくなるような言葉をサラリと言う林先生を気

にするよりも先に、皆の視線が徳川の下半身の部分に集中する。  
尋常じゃない程膨れ上がったシート。まるで人が一人、潜り込んで  
いる様な大きさの膨れ上がりだ。

「つて、誰だコイツツ!？」

慌ててシートを剥ぎ取ると、そこには一人の少女が潜り込んでい  
た。どこかの特撮のような、TVでイメージされている真つ黒な、  
くノ一の格好をし、その顔は布で覆われていた。

「ツチ……バレたか……」

「いや、バレルだろ」

坂田がさり気なく言う。すると、少女は顔の布を取り外し、徳川  
に可愛らしい笑みを浮かべる。

「お久しぶりです……若」

その顔を見て、この世の絶望のような顔を浮かべて後退る徳川。

「お、おま……お前は……服部三島はっとりみしまツ!？ な、何でお前が……お  
前がここに居るんだよツ!？」

「改めまして自己紹介致します。私は、服部三島。若の愛人または  
奴隷でございます」

「違えよ馬鹿! お前は、単なる小学生時代の同級生だったただら  
うがッ!」

ベツトの上で行儀良く正座をしている、自称徳川の愛人、服部。その格好は、露出度が高く、既に坂上は、その餌食になっていた。

「いやー徳っちも隅に置けないなあー。こんなトンデモ忍者っ子と主従関係を築いているなんてな！。何をやったのかな？ 何をヤツタのか？ ヤツチヤツタンデスカッ！！」

「お前は黙りやがれクソツたれッ！ R指定スレスレの台詞を大声で言ってるんじゃないよッ！」

徳川は大声で言い返す。そしてキツと服部を見て、怒りの矛先を変える。

「それよりも、何でお前はここに居るんだ……？ 確か俺の記憶では、お前は北海道に転校したんじゃないか？」

「実は……若の私物を盗んで色々と溜めていたんですが、最近それだけでは足りなくなって……それで、若の写っている写真を見ていたら、私の」

「それ以上は何も言うな。言うんじゃない。言わないでくださいッ！！！ てか、お前かッ！ 俺のリコーダが無くなった原因はッ！！」

あまりの危ない会話に、坂上は羨ましそうに見つめ、坂本は必死に笑いをこらえ、坂田は見ざる聞かざる触れるべからず、の様にほとんどの感覚を塞いでいる。林先生は興味は無いようだ。

「そ、そもそも功歩は、何でその子と知り合いになってるゼヨか？」

「それには色々と夜の」

「テメエは何も言うな。そこは俺が説明する」

まるで昔話を語るように、暗い顔で語る。

「こいつが、勘違いをして、俺がコイツの事を心配していると勘違いして、今まで孤立していたコイツは俺に……毎日のようにストーカ―を……」

思い出しただけでも寒気を感じるようだ。

「でも、俺たちにとっては、ストーカーする女子がこんな可愛い子だったら大歓迎なんだけどなあ？」

「馬鹿野郎！ お前らはコイツの本性を知らないんだよ！ こいつのせいで、人生の青春は半分分は潰されたと思うぞッ！」

服部を力強く指差して、必死に訴える。その目はすでに涙目寸前だった。

「若の照れ隠し……別に隠さなくても」

「隠してねえよッ！ 俺は心底全面的にお前を拒絶しているんだよッ！ いい加減気付いてくれませんかッ!？」

そんな徳川に向かって、坂上が全力で叫ぶ。

「馬鹿はお前だ徳っちッ！ 例え相手がヤンデレでもツンデレでもデレデレでも、スクール水着だろうが、ゴスロリだろうが、忍者服だろうが、ストーカーをしようが、自分を殺す程愛してる女の子だろうが、その子に愛されてる事は幸せなんだよ！ こいつを見る！」

そう言って指差した先に居たのは、坂田だった。

「コイツなんて、空気が薄くて女の子どころか、男でさえ寄り付かなかったんだぜッ！ 中学時代なんて、学校の七不思議に指定されてたんだぞッ!！」

「坂上君……それ、一番ダメージを与えてますが？」  
「どうせ俺なんて……」

奈落の底へ落とされた坂田は無視して、坂上は続ける。

「とにかく……お前はアレだ。その、一足先に大人の階段を上がるんだ徳つちツ！ って事で、邪魔者の俺つち達は退散するぜー」

そう言っつて、坂上は落ち込む坂田を引きずって、部屋から出て行った。

「じゃ、俺はデートの予約が入ってるから、後は勝手にしろ。あんまりシーツを汚すなよ」

「え……ちょ、どつという意味ですか？」

そう言い残して、林先生も出て行ってしまった。

「じゃあ、俺は寝るぜエ。ちゃんと後先の事を考えてからにしておくぜヨよ？」

そう言っつて、坂本はカーテンで遮断してしまった。そして残された徳川と服部。

「さて、若。諦めて私に身をゆだね……」

「ついてねえええええええええええええええええツー!!」

彼の絶叫が学校中に響く。身動きが取れない彼がどうなったかは、誰も知らない。

ついでを言っつと、二日分の宿題と、服部が同じクラスという事実  
に、彼は気絶するだろう。

八話「とある忍者の行動原理」(後書き)

……罵倒、罵り何でも来いよ(殴  
すいません、すいません、すいません。ホンマにすいませんでした。

九話「とある部活を結成奮闘」(前書き)

今日は久々に日常(?)でほのぼのしておりますー  
てか、彼に普通の日常はあるのでしょうか？



## 九話「とある部活を結成奮闘」

あれから一週間が経った。服部や坂本などにも絡まれながら、何とか高校生活を生き延びている。

そんな生活でも、楽しみは出来ている。まるで、あの組織の話が無かったかのように日常になっていた。

「さてつと……着替えるか……」

今日も日常な一日が始まる。そう願いながらクローゼットから制服を取り出す。

「……おはようございます。若……」

すると、いつの間にかクローゼット内に進入していた服部を静かに見つめ、クローゼットを閉める。

クローゼットを閉めてからため息を吐き、ガムテープで頑丈に扉を閉める。

「はぁ……今日も良い天気だな……」

拜啓母上。どうやら俺は入学する学校を間違えたようです。そんな事を呟きながら、学校へ向かう準備をする。朝の服部は無かった事にして、普通に学校へ登校する。

明るい朝日が照らす。もう、いつその事転校しようかな、なんて考えばかり浮かぶ。

「何か日に日に疲れてきましたよ私……、誰かヘルプミー」

今日の授業も始まっているのににも関わらず、既に疲れきっている徳川。そして学校へとたどり着いた。

何とか授業中にも関わらず、邪魔してくる服部と坂本などの妨害を掻い潜りながらも、半分ほどしか理解できない授業を何とか聞く。そして、昼休みになった。

「何か、これが日常になりかけ、慣れてきている自分が恐く感じなつてきましたよ……」

呟きながらも、腹が減ったので食堂へと向かおうと立ち上がる。すると、後ろに座った坂本が、急に肩を掴んで叫ぶ。

「部活を作るゼヨ!!」

「はぁ?」

気が抜けたと様な返事をした徳川を気にもせず、坂本は言う。

「だから! 俺達で俺達だけの部活を作るゼヨ!! そのための署名をお願いします!!」

何やら色々詳しく書かれた書類を徳川に無理やり押し付ける。

そう言えば、この時期になると、新入生の部活体験など色々始まっている。

「タンマ! 俺に整理をさせてくれ……いきなり何なんですか?」

それなのに、いきなり部活を作るなどと言い出した坂本。頭でも打ってしまったのかと心配になる。

やはり、さっきの授業中に強く頭を叩き過ぎたか?

「もう一度言うけど、俺達だけの部活を作るって事ゼヨ！ 安心したまえ！！ 校長の許可は取った！！」

「いや、何に安心しろと？ そして準備早……ッ！？」

色々と言いたい事が多い。 が、それよりも先に強引に引きずり回される。

徳川本人は引きずり回される事に慣れてしまったのか、反抗もせずに普通に尋ねる。

「取り合えず聞いておくけど……何人の署名が必要なんだ？」

「俺を合わせてで5人だったはず……」

「はずって何だよ……。それで何の部活が分からなきゃ、俺も考えられないんだが？」

すると坂本はしばらく悩み、そして笑顔で言う。

「自由部ゼヨ！！」

「今考えたろ。てか自由部って何だ？ 部活にする意味あるのか？ そもそも、そんな部活入る奴いねえよ！！」

最後の所を特に強調して大声で言う。そして、坂本は聞く耳を持たず引きずり回して、勧誘人物の元へ向かう。

「部活？ よかろう。わらわが入ってやろう」

もちろん見つかるとは思ってもなかったが、豊臣がまさか了解するとは思ってなかった。

「俺が全力で断ったって言うのに……この人は……」

呆れるべきなのか、自分が可笑しいのか路頭に迷う。

「それで、何の部活なんだ？」

「知らないで承諾したんですかッ！？　いくらなんでも無謀過ぎると思うのですがッ！？」

絶叫する徳川は放って置き、坂本は事情を説明する。

「実は、まだ何も決まってるないぜヨ……お嬢は何か案は無いか？」

すると、豊臣は目を輝かせながら宣言する。

「アニメ研究部なんてどうじゃ！！　顧問は竹中を呼んでやらせれば良かるうー！！」

流石、お嬢様は考える事は違うと思ひ知らされた。

「部活を作る？」

豊臣を入れるのは、色々と危ないので諦めて次に当たる事に。

そして何故か伊達の元へ。

「そうなんぜヨー。って事で、今は人が必要なんだゼイー」

「事情は分かったけど……後ろのそいつは何で、アタシの事を見て震えているの？」

伊達は坂本の後ろでガクガク震えてる徳川を指差しながら言う。  
徳川は、あの伊達に刀を持って追いかけられた事がトラウマとな  
っていたのだ。

「だ、だって……。また命を狙われた時に坂本をリリースして逃げ  
ようと……」

「だから、もう狙ってないって言うてるでしょ……!」

「功歩……それは流石に酷いゼヨ?」

二人に責められる事になった徳川。そんな三人を見て苛立ちを抑  
えながら話しかけてきた男が居た。

「君達……新しい部活を作らなくても、良い部活があるのだが……」

そんな肌白で明らかに根暗そうな眼鏡男を無視して話す三人。

「……その名もオカルト研究部! 通称オカ研! 伊達君……君み  
たいな人にはピツタリだと思っが?」

肌白男の熱弁にも耳を傾けず、話す三人。

「……いい加減にしないかね!! 人の話を聞きたまえ!!」

「さっきからうるさいゼヨ……岡本研究部なんて興味ゼロ」

「いや、オカ研ね。岡本って誰?」

眼鏡男をウンザリした様に見る坂本をウンザリした様と言う徳川。

「岡本なら他のクラスに居たぞ。確か……」

さり気なく伊達がフォローする。そんな三人を見て、さらに苛立ちを覚えたのか、眼鏡男は荒れたように叫ぶ。

「話をこじらすな！！ 人をおちよくってるのかね!？」

「てか、お前誰？ 岡本君？」

完全におちよくっている坂本に反抗するように眼鏡男は名乗った。

「ぼ、僕の名前は岡本じゃない！ 明智暗秀だ！！」あけちくらひで

「地味な名前……」

伊達に言い放たれる。それに相当のショックを受けたのか、急に涙目になる。

「お、お前ら……後で覚悟しておけよ!!」

そう言っつて、教室から駆け出していつてしまった。啞然とするクラス。そして徳川が呟く。

「いや、何もしてないだろ？」

自覚が無い三人だった。

「部活うー？ 無理だぜ坂本っちゃん。俺っちは既に、修羅の道を歩むと決めているのさ……」

格好を付けた台詞を吐きながら、うどんをテーブルまで運ぶ坂上。そして着いた席の向かいには、地味に坂田が座って同じうどんを食べていた。

「俺も行かなきゃいけないのか……?」

「何を言っているんだ坂田! 俺らはいつも一心同体ナンパ上等の二人組じゃないかッ!」

坂田は否定をしたいみたいただが、坂上がドンドン勝手に話しを進めて、上手く言えないみたいだ。

「それを言うなら俺も仲間じゃないゼヨか? 俺を合わせて三位一体だゼイツ!」

何やら熱く団結する三人。坂田は若干顔が引きつっているが。

「ねえ……こいつ等、学校で何て言われているか知ってる?」

「何?」

不意に伊達が徳川に耳打ちをする。

「学校中では『スリートライアングル三坂馬鹿』だつて……」

思わず噴出してしまった徳川を窺わしく見つめる三人。そして、徳川は話を逸らすように話題を変える。

「そ、そう言えば、坂上達はどこの部活に行くんだ?」

「良くぞ聞いてくれた徳っちッ! それはだな……テニス部だッ!」

全員の動きが止まる。そして坂本はもしや、と思い尋ねる。

「あの……坂上。お前、テニスの経験は?」

「無いッ!!」

「……その心は……?」

「だって、テニス部ってあれじゃんッ! 女テニの直ぐ隣じゃん! プレイ中にあの短いスカートが……パンチラにはなららいけど、何か興奮するだろうがッ!!」

今度こそ、この場所の時間が止まった。そう言う感覚になるほど、この場所全員が坂上達の事を、白い目で見る。

「俺っちも本当は迷ったんだよ? 剣道部って言えば、あの胴着の中には何も着てグホオオッ!!」

「いい加減に黙らんかいいいいい!!」

結局、坂田が興奮状態の坂上を押し止めて、万事休すを免れた。あのまま坂上が暴走していたら、全員が巻き込まれて変な噂が立っていただろう。そして、この二人を諦めて新たなメンバーを探す。

「お呼びでしょうか?」

天井の裏から現れた服部。何でコイツなんだよ……っと徳川は頭を抱えている。

坂本の説明を思ったよりも冷静に聞いている服部。

「事情は分かった……それで部活のメンバーと活動内容を考えているんだな?」

意外にも普通な思考回路で助かる、っと思った矢先だった。

「それなら活動内容は……若研究部にする……」



「全力で阻止をします！！ 何があっても認めませんよ、俺は！  
絶対にツ！！ そもそも俺の研究部って何？ 生態実験ですかッ！  
？」

必死に講義の声をあげる徳川。坂本は考えながら呟く。

「それもありゼヨな……」

「いや、無いよ！！ 何があってもありえないよ！！」

そうやって、講義を続けていると、豊臣が来た。

「まだ悩んでおるのか？」

「それが、功歩が中々認めてくれないくて……本当にわがままゼヨ  
な」

徳川は反論を言おうとしたが、それよりも先に伊達が訪ねてきた。

「じゃあ徳川に何か良い案はあるのか？」

え？つと言つ疑問符を頭の上に出す徳川。皆して徳川をジッと見  
つめてくる。

「え、何で俺ですか？」

「ワガママばかり言ってる功歩が悪いゼヨー？」

そんな無茶くちな。そう思いながらも、必死に良い案を考える。  
その場を見切つてか、坂本が何かを提案する。

「そうだ！ 超奇現象研究部はどうゼヨ？ それだったら徳川も文  
句ないゼヨね？」

「あ、ああ……それだったら……」

思わず、その勢いに押されて承諾してしまう。

「ならば、わらわも入るか……」

「だったら……私も……良いかな？」

「若が入るのでしたら、何があっても付いて行きます」

そして他の三人も入る事になって、調度5人。もしかして、坂本はこれを狙っていたのか？

流星に考えすぎか、と思う。

「よし！！ここに超奇現象研究部！略して超研部結成ゼヨ！！」

「……てか、俺的にはこのメンバーには色々と不安要素があああ痛い。痛いですよ伊達さあああ！」

壁に頭を押し付けられて、今にも潰されそうな徳川。そんな彼らを妬ましそうに見つめる者が。

「……伊達さん……」

明智は、呟いて姿をくらました。

「ところで、どんな活動をするんだ？」

午後の授業が終わり、掃除の時間に尋ねる徳川。

「そりゃ、この地域で起こる怪奇現象を研究していくゼヨ……」



九話「とある部活を結成奮闘」（後書き）

あんなこんなで出来てしまった『超奇現象研究部』略して『超奇研』  
！！

超危険……はい、どうでも良いですね。

これからもよろしく願います！（主に誤字脱語の指摘などw）

十話「とある部活で肝試し」(前書き)

ついに十話ッ!!

ここまでの道のりは非常に長かったです……

って言うんでも思いになりましたでしょうっ!! (なんか可笑しい)

これからも続きますぜッ!!

本編よろしくお願いしますぜッ!

## 十話「とある部活で肝試し」

「不気味だ……」

真夜中の学校。その不気味に暗闇が覆う校舎の目の前で立ち眩く徳川。その後ろでは豊臣と伊達と服部達は懐中電灯などを準備していた。この三人は徳川から見たら、とても楽しそうに話している。

徳川はふと思う。

この三人はいつ仲良くなったのだろうか？

そんなのをお構い無しに、夜中という事を忘れて大声を出す者が。

「肝試しゼヨオオオオオオオッ！！」

徳川は深く深くため息を吐く。思いつきり時期はずれ肝試しに鬱<sup>うつ</sup>気味になりながらも思った事をそのまま言っ。

「そもそもオカ研とやる事が同じなような……」

「全く違うぜヨ！。オカ研なんて一日中PCを弄ってるだけで、こっちは実地検証ゼヨ！」

隣で興奮している坂本。一つ言いたい事は、ほとんど同じだと徳川は言いたい。しかし、テンションが上がってきた坂本には無意味みたいだ。

「まあ、オカ研は不人気で現在は部員は一人らしいし、この機を使っつて……乗っ取るゼヨ！」

「何で、そんな考えに行き着くのか俺は本当に心の底から疑問に思っ」

そんな雑談を交わしている内に、女子陣の準備が終わった。そしていよいよ進入する事に。

「それでは真夜中の学校に向けてレッツゴーゼヨー!!」

大はしやぎな坂本達とは正反対でテンションが全く上がらない徳川。

「ついてねえ……」

徳川は幽霊など恐い系は苦手だ。そして、それよりも大きな問題があった……

「何でこの組み合わせなんですかバツキャロオオオオ!!」

誰も居ない暗い校舎の中を懐中電灯で照らしながらも進む徳川達。

「若……それ以上騒ぐと近所迷惑。そして邪魔者が入ったら若を襲えなくなる……」

「何をそんなに叫んでいるんだ？ アタシに文句がある訳じゃないだろうねえ……？」

文句なら大有りです、と思いながらも、両隣を歩く服部と伊達の対処に困る。

坂本の提案で、二手に分かれて探索しようと言う事になり、自分の意見がスルーされた結果がこれだ。

服部は体を擦り付けるようにくっついて来るし、伊達は伊達で、緊張感が足りないやら、もっと男だったらキッチンとしろ、とイチヤ

モンをつけて来る。

「敢えて言わせて貰うとアレですね。もう我慢の限界だ。いい加減に離れる&黙れ二重ツツダブルコミツツ!!」

二人を取り押さえようとしますが、服部は簡単に避け、伊達には逆に足蹴にされる。そして小さく咳く。

「つ、ついてええ……」

「お主も、よう考えるのぉー」

豊臣は坂本と二人だけで行動していた。暗い廊下を進みながら二人は話している。

あたりは真つ暗で彼ら以外の物音はしなかった。

「何のことゼヨ?」

「とぼけおって……より仕事を効率的にするために、こんな部活を作ったんじゃろ? ざっと、部活と称し、裏では能力者を取り押さえると言う算段じゃろ」

豊臣は数枚の資料を相手に渡しながら話す。それに目を通しながら坂本は笑みを浮かべながら返事をする。

「違つゼイ。俺は仕事と部活を一緒にやるために作ったんゼヨー。これぞまさしく一石二鳥ツツ!」

書類を見終わったのか、それを豊臣に返した。



豊臣は呆れたように「同じじゃろつが」と言い、その書類をしま  
う。そして言葉を続ける。

「今回の能力者の身元は不明。一応、能力は判明しており、心霊操  
作マジックと呼んでおる。そこまでが現段階で分かっている事じゃな」

「最近では能力者が増えてるぜヨね……。しかも、この地域周辺で…  
…。この前の能力者もあつたが、上層部の奴は何も言わないのか？」

「ああ……。わらわにも教えん。こいつは何が裏がある……。そして  
一つ問題があるのじゃが……」

「何ゼヨ？」

全く話を気にした様子も無く、本当に幽霊を探しているような坂  
本。豊臣は頭を抱えながらも言う。

「一般人を巻き込んで大丈夫なのか？ 伊達と服部は部外者じゃ  
ぞ？」

しばらく坂本は悩んだが、相変わらずの調子で答える。

「大丈夫ゼヨー。それはだなあ……」

「ついてねえ……」

現在の自分の状況を確認する。行きたくも無い肝試しにつき合わ  
され、そして現在は暗い廊下を歩いている。両隣には物騒な二人が  
ガツチリ手を捕捉。  
だて・はっとり

どうやったらこんな状況になるのか教えてくださいクンヤロウ神様と徳川は

ブツブツ呟いていた。

「なあ……本当にあんた大丈夫？ さっきから一人でブツブツ呟いてるし……」

「気安く若に話しかけるな。話しかけるのなら若とキスをした程の仲では無いと許さん。つまり、貴様が若に気安く話しかける機会は一生来ないという事だ」

服部が牙を向いたように伊達に言い放つと、伊達も負けじと反論する。現在、徳川を挟んで、極道VS忍者という普通はありえない戦いが繰り広げられている。

「別に喧嘩はするのは良いけど……この手を離してくれないでしようか……？」

そんな風に騒いでる三人を見つめる影が一つ。そして憎しみをこめて影は行動を起こす。

「ッ!？」

最初に気づいたのは徳川だった。教室の中で何かが蠢いている。

「も、も、もしかして……ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、幽霊!？」

今にも泣き出しそうな声で叫んだ瞬間だった。教室から巨大な物体が、徳川の横をかすり過ぎていく。

服部が徳川を強引に引っ張ってくれなかったら、飛んできた机が激突していただろう。

その衝撃で服部は倒れて、馬乗りのように徳川が跨っている。

「……若ったら……大胆……」

「なに顔を赤く染めて言ってるんだよツ！俺はそんなつもりねえーよ！ てかさり気なく俺のズボンに手をかけるなあーツ！！」

そんな馬鹿騒ぎを繰り返している二人に向かって、容赦なく教室から机が飛んでくる。

「何馬鹿な事をやってるのツ！！」

伊達が前に立ち阻み、そのまま腰にぶら下げた刀を抜刀する。机は見事に真ん中で真っ二つになり、地面へと落ちる。

「あんた達……アタシの目の前で何を暢気にイチャイチャしてるのか、十秒以内に説明して貰おうか……」

「いや、俺じゃないですよ伊達さんツ！？ こいつが無理やりやってきただけであって」

「若は現在発情期。だから私が若を癒して」

こいつは何を言っているんだ、と慌てて口を塞ごうとした時だった。徳川の目の前を教室にあるハサミが横切ったのは。

慌てて後退る徳川に向かって、再び机が飛んでくる。しかも複数の机が連続して。

「おツ！ あつとツ！ トウツ！！ てか、集中砲火ですか！？」

サーカス団顔負けの机避けを披露する徳川。それでも机の集中砲火は止まない。

「ああ……鬱陶しいッ……！！」

伊達が叫んで、刀を大きく振るう。すると、徳川へと向かっていた机は一斉にバラバラになって落ちていく。

すると、次は隣のクラスから机が飛んでくる。咄嗟に後ろから飛んできた机を避ける行動が一步遅れる。しかし、その机よりも先に服部が動いていた。

「忍法！ 網張り！！」

服部が無数に投げたクナイに頑丈な網が付属しており、複数の頑丈な網によつて、大きな物体はその場で網に阻まれ空中から地面に落ちた。

「本物の忍者みたいだな……。てか、……。机つて飛ぶっけ？ ……ポルターガイスト現象ですか！？」

ポルターガイストとは、そこにいる誰一人として手を触れていないのに物体の移動などなど説明の出来ない現象。今を見ると、それにピッタリ当てはまる。

「いや……。気配を感じる……。そこ」

服部は、クナイを教室の一角に投げた。すると教室内から悲鳴が上がった。そして教室から転がりながら出てきたのは

「お前は……。明智！！」

肌白男は尻に刺さったクナイを抜こうと奮闘中だった。

「明智……。何で、こんな悪趣味な悪戯をしたんだ？ 事によっては容赦しねえぞ……」

伊達が刀を構えたまま、明智を脅すように近づぐ。

「伊達さん……伊達さん？ モノホンの刀を突きつけながらって言うのは恐いですよ……？」

徳川が怯えたように言う。そんな徳川を睨むように見つめる明智。そして、ゆっくりと指を動かし、

「伊達さんに気安く話かける……！」

明智は手から白色のガスのような物を徳川へ向かって飛ばす。

「危ない……！」

それを伊達は俺の前に立ち阻んだ。そして伊達の中にガスのような物が入りこんだ。

「伊達ッ！？」

「ぎゃああああああああ……！」

悲鳴を上げたのは明智だった。見ると、その腕が変な方向に折り曲がっていた。キョトンとした三人の耳に足音が聞こえてきた。

「対価じゃな……」

そう言って現れたのは豊臣と坂本だった。二人は深刻そうな顔をして明智の症状を見ていた。

「功歩。異常能力には二つの種類があるゼヨ……」

伊達や服部が居るのにも関わらず、スラリと『異常能力』という単語を出す坂本。

「一つは、俺みたいな難しい演算を使わず、能力を使える者。そして、もう一つは、普通の能力者では在り得ないような能力を持つ者。そして、二つに共通する物がある。それは対価だ」

いつものフザケタ口調では無く、真剣そのもので話す。

「まあ、例外もあるが、能力にも使うに従って条件という物がある。その条件を破つたものには……対価を払う事になる」

「コイツの条件は、夜中じゃないと力は使えず、無機質の物を自由に操る。しかし、コイツは条件を破り、人間に入れて操ろうとしたそれがこの始末じゃな。行き過ぎた欲は身を滅ぼすと言言葉は知っておるじゃろ？」

暗く語る坂本と豊臣。伊達は、そんな二人を見て、不信感を感じているみたいだ。

徳川自身も、そんな事を知らず、そんなに危険な物だとは思ってもいなかった。

俺の吸収アブソードの罪クライも条件を満たしていないから使えないのか？……でも、俺ははつきりと能力者では無いと言われた。不意に、倒れている明智が呻いた。

「僕は……ただ……伊達さんが好きで……一緒に仲良く追いかけてこしていたコイツが憎たらしくって……」

「コイツの唯一の幸運は、昼間の恐くて能力を使わなかった事ゼヨな」

「ちよつと待てよッ！ こいつは、能力の事や、条件や対価の事は初めから知っていたのか？」

徳川の問いに、坂本は苦笑いを浮かべながら答える。

「それは無いゼヨ。能力でさえ、無意識の内に発動するんだ。説明書付きで能力が振ってくるとでも思ったか？」

徳川は坂本の答えに絶句した。      なんだよ、それ。いつの間にか超能力が使えるようになったと思えば、それは実は爆弾付きの代物でした、みたいなもんじゃねえか……。

「まあ、一件落着ゼヨ。だから功歩も気をつけるゼヨ？」  
「待てよ！どこに連れて行くんだ！？」

明智を掴み、どこかへと連れ去ろうとしている坂本。坂本は徳川にだけ聞こえるように耳打ちする。

「（功歩。こいつは能力を無闇に使ったゼヨ。行き着く場所は尋問所。その結果的には、能力者専用の刑務所……）」

それ以上は聞きたくなかった。そして坂本は明智を連れて去っていった。豊臣は徳川の傍に寄り、一言言う。

「これが現実……。それが常識として世界は回ってるんだよ……」

それだけ言って、豊臣は徳川達の前から去って行ってしまった。

結局、何が何だか分からないまま帰る事になった三人。徳川は深刻な顔で、深く傷ついたように俯きながら夜道を歩く。服部と伊達

の二人は、後ろから徳川を心配そうに見つめるだけだった。

『説明書付きで能力が振ってくるとでも思ったか？』

(だったら、何で先に助けてやらねえんだよ……)

『その結果的には、能力者専用の刑務所……』

(勝手に付いた能力オウシヨンのせいで人生を潰されなきゃならねえのかよ……ッー！)

『これが現実……。それが常識として世界は回ってるんだよ……』

(そんな現実認めて良いのかよ……そんな常識で納得して良いのかよ……)

彼らに言われた事を思い出して、自問自答を繰り返す。徳川は初めて、この組織に対して嫌悪感を覚えた。どうしても納得が出来ない。

「……徳川。一つ良いか？」

心配そうに見つめる伊達が言う。徳川はコクリと頷くだけで、顔を上げず、声も出さない。

「お前達は……何者なんだ？」

徳川は答えられなかった。組織に嫌悪感を覚えたばかりなのに、ルールは守ってしまう。それよりも、彼女達を巻き込みたくない。そんな気持ちのせいか、徳川は何も喋れなかった。



沈黙が続き、このまま一生続くのでは無いかと思った時だった。

「真夜中のデートは危ないんやよ？」

それは、電柱の上から聞こえた。そして、声の方を向くと

十話」とある部活で肝試し」（後書き）

何か明るいはずだったのが一気にドヨンっと……

そこがこの小説の売「（単なる作者のミス

本当だったら、一話で書けば良かったんですけどねー  
そして気になる声の正体とはッ!？

十一話「とある魔術の陰陽術師」(前書き)

皆様のおかげで順調にアクセス数などが上がっております!!  
この調子で頑張って生きたいと思うのでw  
よろしくお願いします!

## 十一話「とある魔術の陰陽術師」

「真夜中のデートは危ないんやよ?」

ソイツは電柱の上に立っていた。ソイツは神社などの神主などが着ている様な真っ白な礼服。

その男は、電柱から跳躍して、スッと地面に降りる。はずだったらしい、

「痛ッ!!! コンクリート硬ッ!!!」

思いつきり飛んだせいか、足を捻ったらしい。そもそも、電柱の上に立つてるのがおかしいのだが、その男が纏う雰囲気にならぬ違和感を感じる。警戒するように男を見つめる徳川。

「カッコよう登場しようと思ったんせやけどなー?」

頭をかきながら呟く男。そして、徳川達を見て尋ねる。

「どう? 今のワイかっこよかった? いやー、ホンマやったら月夜に照らす中、颯爽さっそうと現れるッ! みたいな感じにしたかったんせやけどねー」

関西弁を喋る男は一人で長々と喋る。ウンザリしたように、徳川は口を開いた。

「あんだ……何者だ?」

「ん? ワイは魔法使いやけど?」

それはアツサリと言われた。唾然とする徳川達に向かって、男は勝手に喋りだす。

「やっぱり名前を名乗った方がええー？ では、改めてワイの名前は安部晴陰あへのせいしん。しつとるでしょ？ あの有名な陰陽師。その末裔って所かなー」

「オン……ミヨウジ？ マホウツカイとか、あんたふざけてるのか……？」

酒に酔っ払った感じでは無い。いたって真面目に話す安部と名乗る男。

「いやー真面目やよ？ 特技は宴会芸やツ！ 現在28歳独身で、寂しい思いをしておるので彼女募集中やツ！」

やっぱり酔っ払いか、と徳川は呆れたように思う。その表情を察したように、安部は必死に弁明する。

「いや、今のは冗談やって！ 兄ちゃん悪乗りやなー。そないんじや、大阪行ったら殴り殺しに会うで？」

「ああー黙れ。これ以上の面倒事は嫌だから。いつそ病院に連れて行ってやるうか？」

相手の調子にイライラし始めた徳川。イジケたように口を尖らせ、安部が呟いた。

「せつかく、君の能力について教えてあげようと思ったのになー」  
「ッ……！」

その一言で態度が変わる。こいつは、アブノート吸収の罪クライについて何か知っているのか？　。相手を睨むように見つめる徳川。

「あんた……何を知ってるって言うんだ？　さっきから意味不明な事ばかり言ってるが、本当だろうな？」

「ワイはホンマに知つとるって。君の『吸収の罪』についてね」

数歩、周囲を見渡してから安部は言う。

「まずは、ワイが魔法使いって事を証明しなきゃならへんねーほいっとッ！」

安部は、空中に何かを投げつけた。すると、その紙のような物は一瞬で青く燃え上がる。そして、安部が真剣に何かを祈る様に呟き始めた。

『陣を五行説に基づき形成。天地から魔力の流れを計測。流れはよ陰。月、夜、闇、暗、水、女が妥当の位置に存在し、力をしん森羅万象の元ように証明する』

何が起きたのか分からなかった。だが、確実に何か起きたのを感じる。

「君達は、どうやったら魔術師がおると信じる？」

「どうやったら……お前、何をやっただだよッ！」

徳川は感じていた。明らかに感じる違和感を。後ろの二人は、それぞれの武器を構えて、安部を睨んでいる。

「ワイはただ、魔方陣を発動しただけだよ？　ワイの使う陰陽術が

あんじょう発動できるようにね」

「だから、陰陽術って何だっけ聞いてるのよ……ッ！」

やっと口が回るようになった伊達が叫ぶ。安部はため息交じりで、何かを呟く。

『陣の西方に大道。方角は合致……か。陣ヲ注シ活目シ。四獣ノ式ヲ重ネ清キ場ヲ規則ニ基シ定メ』

安部は念じるように指を構え、何かを呟く。その場には風などが一切吹かず、彼らの息を呑む音だけが、静かな空間に響く。

『西ノ白式ニ丑ノ刻ヲ進呈。時八月夜。西ヲ占メ道。万物ニ示ス金ヲ土カラ創』

静かに、地面に指で円を描き、その中に五芒星を描く。指でなぞった後には、青い炎を立ち上り、しかし、安部は全く熱がらない。そして、いくつかの文字を刻みながら続ける。

『相生ノ元ニ陰ヲ現ス。五行ノ名ノ元ニ頸輪ヲ付ケ現世ニ喚キ白ノ式』

そして、安部が円に白い人型の紙を置いたと思うと、円が荒々しく燃え上がり、何かの姿を現す。

ゆっくり出てきたのは、出現した円よりも数倍もでかい獣。真つ白な獣毛に荒々しい牙。そして威厳のある眼光。3m程もある白虎ビヤッコは音も立たず、静かに現れた。

「可愛いやろー。こいつはワイの自慢のマイフレンドや」

安部が近づいてくると、白虎は頭を自ら下げ、そのまま安部の手によって頭を撫でられる。

簡単に言えば、白猫が巨大化したと思えばイメージしやすい。

「これや<sup>「マジック」</sup>は式神や。陣と方位、それぞれの合致するキーワードを当てはめる事によって、陣内から精霊の僕<sup>しもへ</sup>を出現させる事ができること<sup>「</sup>ちや。まあ、そのためには地脈を流れる魔力を使うんせやけど。そこら辺は、魔方陣内のおかげで魔力が錬りやすくなるとるちゅうワケや」

啞然とする三人に簡単に説明をする。しかし、その内容が一切理解ができない。

「例えるなら、魔方陣のおかげで、そこら辺に流れる電気<sup>まじよく</sup>を集めやすくなって、何も魔力を流がしててない、つまり空の電池<sup>おふた</sup>に流し込み、強力な電池<sup>しきがみ</sup>の完成ッ！ って感じや」

詳しい事が省かれて、微妙に理解は出来た。原理として、それが合ってるのか疑問に思うが。

「科学はよう分かりまへんけど、これやでワイが魔術師って信じてくれはる？」

「そもそも、魔術師って何だ……？」

伊達の一言にワザとらしく大袈裟にこける安部。そこらからかいなと呟きながら言う。

「魔術師ってゆうのは世間的に『才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術』とか『偶発的に起きる奇跡的な現象を必然的に起こすこと』とか言われているけど、ワイから言わせて



貰っんやが、目立ちたがり屋のビツクリ人間？」

この男は、本当に何をしたいのだろうかと思う。白虎の頭を撫でながら説明する安部に徳川は慎重に尋ねた。

「魔術師……って言うのの存在は認めるよ。こんなの見せられればな……。それが何の関係があるんだ？ 俺の……この左手と……？」  
アブソールド・クライ

伊達の顔が歪む。まるで、自分だけ違う世界に居る感覚。徳川は一体何者なのだろうか。

徳川は、一切気付いておらず、安部を真っ直ぐに見つめる。

「順応性があるねー。でも、そない簡単に言ってもしょーもないやろ？ ここは一つ。楽しいゲームをしようやないかあ」

ニヤリと安部は笑って、白虎が唸る。すると、後ろに控えていた伊達と服部が徳川を守る様に立つ。

「徳川が、どんな厄介事に巻き込まれてるかは知らない。知らなくても良い！ ただ、コイツに手を出すって言うならアタシが黙っていないよッ！」

「若には指一本触れさせない……。魔術師だろうが、何だろうが、私は若を守りきる！」

突然の事に徳川は驚き、そして慌てて二人を除けようとする。

「お前らは関係ない！ これは俺の問題」

「黙れッ！！」

女子二人に大声で怒鳴られて、縮みこむ徳川。安部は、そんな光

景を笑いながら見ている。そして言う。

「参加は自由参加でええーよ。3分持ったら教えてやるよ」

その言葉が開戦の合図となった。服部は既に動いていた。

目にも止まらぬ速さで上空に飛び上がったおり、そのまま空中から白虎に向かって無数のクナイを投げる。

ガキンッ！ その音と共に、クナイは地面に弾かれた。クナイは確かに白虎に命中した。しかし、見た目以上に白虎は頑丈だった。

「白虎の方角は金だぞ？ 鉄の攻撃が通じる訳無いやろつが。つまり、おんどれらの勝率は限りなく0に等しいって事だ」

だが、それを聞いても服部と伊達は諦めない。伊達は、術師である安部を狙って一気に間を詰める。

「甘いんだよ」

すると、白虎は体に似合わぬ程の速さで移動し、一気に伊達へと飛び掛る。

「こつちからも攻撃するのは当たり前やろ？」

余裕に満ちた表情で告げる。そして、白虎の鋭い爪が伊達を襲う。何か欠ける音がした。

それは、白虎の振り下ろした爪だった。伊達は咄嗟に刀を抜刀し、爪を防ごうとした。それが爪へと勢い良く衝突した時、ミシリ、という音と共に白虎の爪が欠けたのだ。

「まさか、その刀……なるほどな……やけどッ！」

フツと安部が移動する。先程まで白虎の後ろに居た安部は、一瞬で伊達の前に立っていた。その手には御札を持っており、微かに周りに青白い火花が散っている。雷だ。

「直接攻撃やったら防ぎようが無いやろ？」

安部は、そのまま正体不明の御札を、伊達の心臓部分に押し付ける。はずだった。

その御札は横から突き出した左手によって遮られる。そして御札は、その左手によって吸収されて消える。伊達の前に立ち阻んだのは、徳川だった。

「……たとえ、俺がどんなに傷つこうが、馬鹿にされようが……仲間に出す奴だけは俺が許さねえ！！」

「おおー恐いなあ。……どうやら能力の方もキチンと発動できとるみたいやね」

安部は笑みを浮かべながら一歩後ろに下がる。その一歩で、一気に白虎の後ろまで下がっていた。

「では、君の覚悟って奴がどの程度か……教えてもらおうか」

白虎が全体に響くような咆哮。それと同時に、その巨大な体が空中に向かって大きく飛び上がる。

月と並ぶように写る白虎。その強大な牙は真っ直ぐに徳川の方へと向かって飛んでいた。

「徳川ッ！」

伊達が叫ぶ。しかし、徳川は振り返らずに、左手を突き出し、全身霊を左手に集中させる。

「ううあ、おおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！  
！」

まるで全身が弾け飛ぶような痛みと共に、絶叫が響き渡る。

白虎の頭が左手の中に消えていく。しかし、徳川の痛みも絶叫も続く。

白虎を最後まで吸収する覚悟で徳川は立っているのだ。たとえ、自身の体が裂けようとも。

そして、白虎の姿が綺麗さっぱり消え去る。それと同時に、徳川は崩れるように地面に座り込む。

「徳川あぁッ！！」「若ッ！！！」

同じタイミングで叫び、徳川へと駆け寄る。そして徳川の表情を見た。

徳川は笑っていた。

「さ……三分だ。三分持つてやったぞ、クソヤロウ」

笑みを浮かべながら、小さく弱弱しい声で呟く。声はしっかりと安部の耳に入っており、安部は頷いて、話す。

「まさか白虎を丸ごと吸収するとは思っていなかったや。でも君も分かったやろ？ それが君の能力の」

安部が喋ってる最中で、徳川は地面へと倒れこむ。そして心臓を強く抑えながら苦しみ始めた。

「徳川……？ 徳川！ お前、徳川に何をしたッ！！」

しかし、安部自身も焦った様に、顔をしかめていた。徳川の周りを黒い円状の壁が包み込み、伊達を離れさせる。そして啖安部は啖く。

「まさか……能力の『暴走』か……？」

十一話「とある魔術の陰陽術師」(後書き)

ついに魔術サイドキタ                   !!!

何か陰陽師っていうと土御門さんが……w

こんな所で豆知識。土御門家は安部の子孫の家系らしい。

そして能力の『暴走』とは……？

十二話「とある暴走の吸収の罪」(前書き)

突如倒れた徳川！彼の身になにが！？

単なる腹痛だったりして……

そんな気になる！話の続きです！どつぞー

## 十二話「とある暴走の吸収の罪」

徳川の姿は見えなくなっていた。徳川を覆いつくように出来た黒い円状の膜。

しかも、それは微かに蠢いていた。

「何だ……これ……？」

伊達が呟く。その黒い膜は、徐々に大きくなっているのが分かる。その膜は面している地面を、少しずつ削るように、大きなクレーターとなっていた。

「、」

服部が無言でクナイを膜に向かって投げつける。

クナイは黒い膜に当たった。だが、無意味だった。クナイは膜には当たったが、逆に生き物のように蠢く黒い膜に徐々に中へと引きずり込まれている。

「攻撃しても無意味だちゅうワケや。アレは例外なく中へと引きずり込み吸収していく。空気をやるうが、分子やるうが、なあーんもかも。それが証拠に、アレはちびつとずつ大きくなつとるやる？ 吸収した物を変換して、膜を大きくしておるんだ」

安部は面倒臭そうに呟く。そんな安部の胸倉を掴み、伊達は叫ぶ。

「じゃあどうするんだよッ！ 止めなかった、何もかもを吸収してしまっぞー！」

「せやよ。アレを何とかしても止めなければ、地球そのものが無く



なってしまう。ブラックホールと同じだな」

心底落ち着いたように喋る安部。そんな安部に今にも殴り掛かり  
そんな勢いで伊達は言う。

「だったら、さっさと止めなきゃいけないだろッ！ あの中では徳  
川が苦しんでるかもしれないんだ……。原因を作ったのは、あんな  
だろッ！！」

「君、アレを止める方法は知つとるのかい？ ……教えてやるよ。  
あの能力チカラを持つておる徳川功歩。彼を殺さなきゃ、アレは止まりま  
へん。ワイの魔術を使えば、あの黒い膜ごと徳川功歩を殺す事がで  
きる」

伊達には、あまりにも残酷な言葉に聞こえた。その現実じじつを否定し  
たかった。けど、根拠が無い。それゆえ、何も言えなくなつてしま  
った。そんな間にも黒い膜は広がり続ける。

彼を開放する方法が、彼を殺す事。何と言う皮肉だろうか。伊達  
は、瞳に涙を溜めながらも呟く。

「あいつは……こんなアタシを、体を張って守ってくれた……。だ  
ったら、アタシも体を張らないで、何になる！ そんなんで守れる  
か！」

自分に言い聞かせるように言う。      そうだ。そんなんで諦め  
られるか。そんな事でッ！

「アレは核ミサイルやろうが吸収するぞ。それでもやるのか？」  
「可能性は一つじゃない……。絶対に助ける方法が他にもあるはずだ  
ッ！ だったら、アタシはその小さな可能性キセキに賭けるッ！！」

安部は、彼女の言葉を聞いて、口元に笑みを浮かべて「合格や」と呟く。

何の事か分ならず、伊達は安部の方を見た。

「アレには吸収でけへん物が一つだけある。それは……『神様の加護』が掛かった物や！」

安部は空中に凄まじい勢いで、何かの印を刻んでいる。空中で黒く燃え上がる魔法陣。

「昔から日本では、長年大切にしてきた物には神様が宿ると言われている！ そう言う物を『神の加護』が付いた物とされておるちゅうワケや君の刀も宝刀かなんぞやる？」

伊達が頷くと、安部は安心したように安堵の顔を浮かべて、手を動かしながらも説明する。

「せやから、さいぜんも白虎ヒヤッコの攻撃も防げたって事だ。ワイは今から、あの黒い膜に、ヒビを作るちゅうワケやそのヒビに君は、その刀で斬りつけるんだ！」

安部の手が止まり、何かを念じこむように集中する。すると、1m程の大きさになった黒い膜の一部にヒビが入った。

「行けッ！穴を開けて、中へと入るんだ！ 中に入れば、暴走の原因が分かる。今ははよう行くんだッ！」

安部に言われたまま、伊達は全身全霊でヒビに向かって刀の最大の一撃を叩き込む。

そして、安部が言ったとおり、刀は吸収されず、ヒビに与えた傷ダメージ

により、人が一人入れる程の隙間が開いた。伊達は躊躇うこともせず、中へと入っていた。

服部は、ただそれを見つめる事しか出来なかった。

中は黒い暗闇が続いていた。見渡す限り黒。なのに、それははハッキリと見えた。

「徳川ッ！！」

中央で横たわる徳川。慌てて駆け出した伊達の前に、『ソイツ』は現れた。本来、徳川以外存在しない空間に、『ソイツ』は自然かのように現れたのだ。

「ッ！？」

「やあ。客人が来るとは思ってたよ」

『ソイツ』は銀髪の長い髪に、吸血鬼の様な赤い瞳。何より異様なのは、それ以外が黒い事。

『ソイツ』は人間と言うには不十分すぎた。一番の異様は『ソイツ』の顔が徳川にそっくりだった事。

「あんだ……何者？」

刀を構えながら尋ねる。すると相手は笑みを浮かべながら答える。

「敢えて言うなら『アフソート吸収の罪』と呼んで欲しいね」

穏やかな笑みを浮かべる。伊達は嫌悪感と不安感を同時に感じて

いた。目の前に居る存在は、何か別の気配を感じる。彼女の勘が危険を知らせていた。

そして安部の言葉を思い出す。「中に入れば、暴走の原因が分かる」。そして、一つの事実を確かめる。

「あんたが……あんたが徳川に何かをしたの……？」

「失礼だなー。いきなり人の領地しえいに入ってきて来て、そんな事を確かめる？」

そんな事を言う『ソイツ』は笑っていた。伊達は、その笑みに嫌な予感を感じる。その予感は当たることになる。

「大正解ー 正解者の貴方には、正当な罰と罪を」

先程の笑みを無くなり、本性を現す。狂気的な笑みを。そして奴は急速で間合いを縮めた。

「困るんだよねえ……。僕の事、邪魔しちゃ……。ここに入って、キ・チャ・ダ・メ」

恍惚的な笑みを浮かべて笑う。伊達は『ソイツ』が危ないと感じ、咄嗟に後ろに下がる。それは正解だった。

さつきまで伊達が立っていた場所を何か切り刻む。それは『手』だ。いや、さつきまでは『手』だったものだ。目の前に立つ狂人の両腕が黒く鋭い、死神をイメージさせるような、巨大な鎌に似た刀になっていた。

「能力者じゃない君がどうやって入ったかは知らないけどさあーいや、興味すらけどー僕の邪魔だけはしちゃダメなんだよ？」

狂気的な笑顔のまま、何の躊躇も無く切り込んでくる。伊達は必死に反撃をしながら、叫ぶ。

「アタシは……あなたの事情なんて知らない。でも、アイツを守りたいって気持ちは……変わらんない！！ 例え何があっても！ だからあんたを倒してでも、徳川を助ける！」

今度は伊達が押してきた。両腕を無闇に振り回すよりも、正確に相手の急所を狙った伊達の一撃。その一撃の威力は高く、狂気的な笑みは苦虫を潰したような顔になり、後ろへと下がる。

「君……本当は能力者じゃないの？」  
「知らないよ！！」

伊達は追撃をかける。咄嗟に両腕の刀で守備を固めるが、その守備を押し倒すような強力な一撃が叩き込まれる。

「こんな早く来るなんて卑怯だよ……？」

それでも『ソイツ』は笑っていた。だが、その体が次第に薄れていく。

「だから無理な運動は嫌だったんだよ。君って本当に殺したくなっっちゃうよ」

「生憎、こっちはあんたの事情なんて気にしてる余裕は無くてね」

止めの一撃を入れようと思ったが、『ソイツ』は自然消滅するみたいだ。放つて置いてても大丈夫だと思い、先に徳川へと駆け寄る。すると、『ソイツ』は最後の消えかける寸前で、誰にも聞こえないくらいに呟く。

「後悔するよ？」

『ソイツ』は消えていった。それと同時に、暗い空間が砕け、いつもの日常の風景が戻ってくる。

大きなクレーターに残された伊達と倒れた徳川。それ以外は、誰も残っていないかった。

彼女は異常な日常に巻き込まれ始めた。

安部は、暗い路地で誰かを待つかのように鼻歌を歌いながら歩いていた。

そんな彼を何者かが、虚空から話しかけた。

『随分と暇を持て余してるみたいだな、安部』

「おやおや、これは実に懐かしい奴だな。てか、タメ口？」

ふざけた様に虚空に向かって話しかける。そこには何も無い暗闇が広がるだけだった。そんな暗闇の中から、電話のように無機質な声が聞こえる。

『お前の行動は最初から見させて貰っていたぞ。いくつか忠告点がある。人払いの陣の位置がズレていた。やるなら真面目にやれ。このニート』

「んなツ！？ 最後のニートってどうゆう意味やるか！？ ちゃんと外出しとるもん！ 仕事しとるもん！」

子供のような言い方に、虚空の声は、はつきりため息を吐いた。そして続ける。

『そして、もう一つ。お前はふざけているのか？ いや、聞くまでも無いか。東の方位に用水路があり、季節は春。五行説に基くのなら、白虎ビョウコでは無く、青竜セイリョウを出すべきだったのでは無いか？』  
「そやかてー、青竜セイリョウって強いじゃん？ 素人相手に本気はねえー。それに、白虎の方がややこしい臭くないしー。何事も簡単な方がええーじゃん！」

『そんな二ート思考だから足元をすくわれるのだろう……』

「いやーまさか弟子に出し抜かれるとは思って無かったよ。君みたいな優秀な弟子が裏切るとはねえー」

『俺っちは後悔はしてないぞ。一応聞くが、現在お前を慕ってる弟子は何人だ？』

「……50人」

しばらく間が空き、呆れたように虚空から言う。

『嘘をつくな。お前の弟子は10人にも満たなかっただろう』

「中でも君と土御門君は優秀やったねえー」

『話を逸らすな。そして、土御門の奴は、ほとんどお前からは何も教わっていないぞ』

「もうーそない昔が懐かしいの？ 今でも師匠として教えてあげてもええーよ？」

『お前から教わることは無い。いや、教わっても無駄だと言っておこうか』

そして、虚空の声は平然とした様子で言う。

『お前みたいな『聖人』の原理を聞いても、凡人の俺っちには全く理解できん』

「いやーそれほどでもー」

『その聖人様様が、一般人である徳川に一体何の用があったか是非

教えてもらいたいな?』

「別にー。頼まれたんだよ。旧友の仲のよしみだちゅうワケや。そいつから、徳川に『枷』を付けてこいつて。彼は日常には戻れへんよ。そこら辺の所はよう覚えておけよ?」

虚空の声に向かって、忠告するように言う。虚空の声は、呟くように言う。

『不幸な少年は、不幸の原因によって、人生を台無しにされました……か。随分と皮肉な話だな』

「いや、その皮肉だって変えられるさ。人の生命力ってものは伊達じゃない。そこら辺を楽しませて見物させて貰うよ……」

『……標準語になってるぞ』

慌てる安部に対して、虚空の声は冷静に、言い放つように言う。

『ただ、最後に一言だけ言わせてくれ』

「?」

『あいつに手を出すな。それだけは許さない。例え聖人だろうが、どっかの科学国家だろうがな』

「……あの子と何かあったのか?」

『……似てるんだよ、あいつは。俺うちとな……まあ、そんな野郎はこの腐った世界には五万と居るだろうがな』

その声はしだいに小さくなっていく。もうすぐで、会話が切れるような感じだ。

「無理だけはするなよ?」

返事は返ってこない。安部は肩をすくめ、また夜道を歩き出す。



鼻歌を歌いながら、まるで楽しい事を発見したかのように。

## 十二話「とある暴走の吸収の罪」（後書き）

今回も「吸収の罪」について触れましたが、未だに判明されませんねー。

作者はどこまで焦らす気なのでしょうか（笑）

特に『ソイツ』の正体とは……？

そして安部さんまさかの聖人ですか。こんな最初から出していいものなのか……？

またまた疑問が膨らんだ『とある常識の異常能力』！！

伏線をたくさん仕込んで、徐々に判明してきます！

次回もお楽しみにー

最後の会話の正体は一体……？

十三話「とある悪友の絶対的皇帝」(前書き)

いやー、今回は色々徳川の過去について触れました。  
シリアスすぎて、台詞が多すぎて……自分でも反省しております。

### 十三話「とある悪友の絶対的皇帝」

見慣れた部屋。すぐ傍の窓が半開きになっており、暖かい日差しと、心地よい風が入ってくる。

真っ白なシーツのベッドに横たわりながら徳川は考える。

(……俺は、生きてるのか……?)

朝早い学校の保健室の一番奥のベッドで、徳川の目が覚めた。彼は体を起こして、自分の左手を見つめる。

普通の人と、何ら変わりの見えない左手。爆破するサイコロを吸い込み、謎の御札を吸い込み、巨大で威圧感のある白虎を吸い込むような『アブソルド クライ吸収の罪』を除けばだが。

「お前はよっぽど保健室が好きみたいだな？」

朝のコーヒを啜りながら、新聞を読んでいる中年のような林先生。徳川はボーっとし、やっと自分が保健室に居る事に気付く。

その慌てぶりを見て、ため息混じりで林先生は落ち着かせる。

「落ち着け馬鹿。あれから三日も寝てたんだから、少しは病人らしく寝てる」

ボスンッと微妙に硬い枕が顔面に衝突し、ベッドに顔を埋もれる。それ以上の混乱のしようで、騒ぎ立てる。

「ちょっと待ってください！……三日ッ!？」

「何度も言わせるな。ったく、俺が居酒屋帰りに家へと向かってる途中で、お前と伊達を見つけたんだよ。伊達は凄い泣き顔だったぞ

？　それで俺に助けってくれってな。後でお礼言っとけよ」  
「伊達さん……」

徳川は思い出した。あの白虎を吸い込んだ後、急に激痛が走って意識が朦朧もつろつとしていた。とても暗かった。まるで、自分の過去を再現しているようで恐かった。

そんな中、伊達の呼ぶ声が聞こえた。自分を闇の中から引きずり出してくれた。微かに聞こえた伊達の叫び。『あんたまでアタシは守れないのかよ……ッ！』　確かに伊達は、涙声で叫んでいた。

「俺の診断する限り、お前の症状はアレだ。心臓発作だ」

「……心臓発作？」

「そう。正式にはアダムス・ストークス発作だ。不整脈を原因で、脳への血液量が減少を惹き起こし、脳貧血により意識障害を起こす」

徳川には、言ってる意味がほとんど分からなかったが、とにかく三日も寝ていた事だから、相当危なかったと思う。

「ちなみに、お前が考えてることを否定させて貰うが、お前の心臓発作は一日で収まった。後は寝不足か何かじゃないのか？」

徳川は頭を抱えながら「うがああああ！　妙な不安にさせやがって！」と叫ぶ。

そんな徳川にズイッと顔を近づかせ、林先生は深刻そうな顔で囁く。

「実は、もつと重要な事があってな……」

「……まさか……」

後遺症でも、何かあるのでは無いかと不安になる。そんな徳川に

向かって林先生は落ち込んだ表情で言う。

「俺……昨日フラれたんだよ……」

「知らねえよ！俺には全く関係ねえよ！先生にとっては重要でも、俺にとっては一切合切関係無いです！」

林先生は「ほうーそんな事言つて良いんだな？命を助けてやった俺に？」と軽く脅しをかけてくる。

こんな人が教師で良いのだろうか、徳川は切実に思う。

「まあ、冗談はさて置き、本題はこっちだ」

と言つて、一枚の封筒を徳川のベットへ投げ捨てる。

「これ……何です？」

「封筒だ。妙な関西弁を使う、うざったらしい顔の変人からだ」

徳川の脳裏に一人の男が思い浮かばれる。安部と名乗った陰陽師だ。

「開けても大丈夫なのか……？」

警戒しながらも、その封筒を開ける。その中には、一枚の手紙が入っていた。

思ったよりも普通だ　　と思いつつも、その手紙に目を通す。仕掛けでもされているのでは無いかと、最初は警戒していたが、しだいにのめり込む様に、手紙に集中する。

そして、読み終わって、未だに信じられない様な顔で呟く。

「嘘だろ……」

徳川は慌てて、ベットから立ち上がり、真っ直ぐに部屋から出ようとする。

「待てよ」

その徳川を林先生が呼び止める。徳川は振り返りもせず、そのままの体勢で立ち止まる。

「その手紙に何て事が書いてあったかは知らねえ。だけどな、無茶だけはするなよ？ お前は唯でさえ病み上がり。それに加えて、色々負担が残っているんだ」

「……先生は読心能力でも持つてるんですか？」

冗談のように徳川は軽い口調で尋ねる。だが、その瞳からは確実に怒りが感じられる。

「お前の顔が物語ってるんだよ。まあ、俺はお前がどうなるのが構わないから、別に好きにして良い。ただ、忠告だけは言わせて貰うぞ。お前の左手。せいぜい使えるのは三度だ。三度目で心臓発作が起きる可能性もあるからな」

「……先生も……『ESP』のメンバーなんですな……」

すぐに分かった。身近から監視をしているという訳だ。

「まあな。『ESP』の専門医でもある。言っておくが、ちゃんと教員免許は取ってるからな？」

徳川は笑って、そのまま走り去ってしまった。一人残された林先生は、

「嫌な世の中になったもんだ。……ガキが、あんな表情をするようになったなんてなあ……」

と、独り言を呟く。そして、ライターを取り出し、煙草の先端に火をつけた。

徳川は学校の一角である男を待っていた。早朝のおかげで、人は少なく簡単に私服でも歩き回れた。

その場所に来るように、ある男に電話をする。そして数分後、男はゆっくりと現れた。

「……何の用だ？ トッコウよ……」

織田魔鬼。いつもと変わらず、大柄な体格に、威厳のある口調。

徳川は、睨むように織田を見つめ、そして一つの現実じんじつを確かめる。

「お前は、何でテロ組織の肩代わりなんてしているんだ？」

あまりにも率直な質問。織田は、しばらく徳川の顔を見つめながら黙り込み、そして観念したように言う。

「もうお前の耳に入ってしまったか。……仕方が無い」

直感的に何かが来るのは分かった。しかし、徳川は織田の行動が分からなかった。

織田は、腕を組んだまま、一言。一言呟いただけだった。



『ひれ伏せ』

その瞬間に、徳川の体が強制的に地面に押しつぶされる。無理やりひれ伏したせいか、骨が折れるような嫌な音がした。

しかし、徳川が呻き声もあげず、反抗的な目で織田を見つめ続ける。

「お前……いつからだ。いつから、お前は能力者だったッ！」

「最近だ。お前と同じように、俺も特殊な能力を持つてるらしい。  
『絶対的皇帝』とでも名づけるか」

余裕に満ちた表情で織田は語る。かつての腐れ縁は、既に腐ってしまった。しまっていた。

「お前の事は聞いている。変わった能力を持つてるらしいな？ 確か【吸収の罪】だったか？ 相変わらず変な事に巻き込まれるよな

……お前は……」

昔を懐かしむように呟く織田。しかし、徳川の様子は変わらない。

「その力で……何をやる気だ……？ 本気で能力で世界を従えるつもりか？」

「俺は、夢を実現させる……。俺が頂点に立ち、この世界を統治する……。だから、奴らの計画にも加担した」

「そんな世迷い事……叶うと思ってるのか？」

一瞬だった。織田は徳川の事を蹴り上げ、そして向かいの壁に激突する。大きな衝撃が、治り掛けている徳川の背中に走る。

「俺の夢に口出しをするな……愚民……」  
「甘い事……言ってるんじゃないぞッ!!」

激痛に耐えながらも、徳川は立ち上がる。そして獰猛な獣のように吼える。心の奥底から、本気で叫ぶ。

「あの言葉は撤回させて貰う。結局、お前は何も何も変わってねえよ!! あの手事件の事をいつまでも引きづった拳句、最終的に暴力で解決か？ ふざけるんじゃないやねえ！ お前は、ちっぽも進歩してねえだろ!!」

「……お前に……何が分かる……ッ！」

織田は再び命令を下す。『ひれ伏せ』と。しかし、徳川は左手を前に出したまま、その場に立っていた。

「効かない……だと？」

「お前の能力は知っている。その声の振動が、相手の脳に揺さぶりを掛けて、言葉通りの行動をするように、脳みそを操るんだろ？ 声がどうやって耳に届くか知ってるか？」

そう言って、徳川は自分の耳を指差しながら言う。

「空気だよ。つまり、俺の左手は能力が関係してる物だったら、見境無しに吸収するから、音を伝える空気を吸収すれば良いって事だ！」

理屈的には合っていないかもしれない。しかし、徳川は理屈などどうでも良かった。目の前の男を殴って、目を覚ます事さえ出来れば良かった。だから戦う。

「吸収か……」

厄介な能力だ。織田は、それは最初から分かっていた。だが、今の状況で徳川に勝率は無い。それは本人が一番分かっているはずだ。だが、徳川は逃げ出さない。

「お前は言ったな。俺の事を一生許さないと……」

その言葉に徳川が微かに動揺する。しかし、その瞳は揺るがない。

「お前にいくら憎まれようが、怨まれようが構わない。俺は、お前にそれ程の事をしてしまった……」

織田は静かに語っていた。本当に静かに、無表情で、そして、心の底から悲しそうに呟く。

「だが、俺は止まる訳にはいかないんだ。この能力チカラを持った俺にしか出来ない事があるんだ……。そう。この腐った世界を正すには、俺の力でねじ伏せるしか無いのだッ!!」

そして、再び言う。ゆっくりとした口調で『ひれ伏せ』と。しかし、それを左手を前にかざして吸収する徳川。

徳川の様子を見れば分かる。あの能力は、確実に徳川の負担となっていると。

しだいに息が荒くなる徳川。織田は、後一回でもやれば徳川は倒れるのでは無いかと思う。

それでも、徳川は織田の敵として、前に立ち阻む。

「お前がどんなに頑張ったって、彼女は帰ってこない……。それは、お前自身も分かっているよな？ だったら、自分から闇に染めるなよ

！ 俺やお前は、彼女から光を貰った！ いや、託されたんだよ！  
あいつは……俺に幸せになってって言ってくれた。だが、お前の  
作ろうとしている世界は絶対に誰も幸せにはならない！！」  
「それは俺だつて分かっている……。だが、俺はそれ以上に、この  
世界が憎い！ この憎しみは、けして安らぐ事は無いんだッ！ お  
前が俺の作ろうとしている世界を否定するなら……。お前も憎しみ  
の一部だ、徳川功歩！！」

そして織田は最後に言う。『死ぬ』と一言。あっさりど、何の躊躇も無く。その言葉を徳川へと投げかける。

徳川は、当然のように左手で吸収する。が、その後に異変が起きた。

突然、心臓を押さえて苦しみ始めた徳川。そして思い出す。林先生の言葉を。吸収のために、三度も能力を使ってしまった。

「ガ、ガハア！！」

床に崩れ倒れる。心臓発作が起き、苦しそうに息をする。

「……お前は、所詮その程度と言う事だ……」

徳川を見下すように真上に立ち、苦しむ徳川を見下す。そして一言言っ。

「今、楽にしてやる……」

そして、徳川は意識を失った。何も変える事が出来ずに、深い、深い闇へと落ちていった。

十三話「とある悪友の絶対的皇帝」(後書き)

ラストがツ！ ラストが凄い事に！  
この後どうなる！？ てか、作者も予想外！！ W W

十四話「とある過去の無力の罪」(前書き)

今回は徳川の過去です。

徳川と織田の間に、何があったのか……

## 十四話「とある過去の無力の罪」

それは徳川功歩、中学二年生の話だった

人間は全て平等では無い。それが、その頃の徳川の考えだった。中学生になって二年目。その考えは昔から変わらなかった。

昔から不幸続きの徳川は、生きてるだけで十分に感じた。

徳川は最低限の人付き合いをして、ほとんどは一人だった。自ら壁を作ったのだ。

周りの人に不幸が降り掛からないように　そんな考えをしながら暮らしていた。

しかし事件は起きる。

ある日、彼は普通に登校していた。不良に追いかけられながら。

「待ちやがれッ！！　金目の物を出せって……言ってるんだろっがッ！！」

息を切らせながら追いかけてくる男。しかし、そんな男を無視しながら徳川は走り続ける。

昔から日常茶飯事の彼には、どうでも良い事なのだ。

「このままなら間に合うか……」

遅刻の事を最優先にして走る。不良の事など、視界に全く入れず、その事だけを心配する。

すると、突然前から女子が猛スピードでこちらに向かって走って

きた。

「そこッ！　しゃがんで！！」

徳川は言われた通りにしゃがむ。

すると、その女子が徳川を跳び箱のようにして飛び、後ろの不良に蹴りを入れた。

「ッガッ！？」

不良は、突然の事に訳も分からず、伸びてしまった。徳川も、何が起こったのか分からなかった。

たぶん、この状況を理解できるのは、張本人である女子くらいだろう。

すると、その女子が俺の方を向き、笑顔で言う。

「君大丈夫？　怪我とか無い？　無いみたいね！　良かった、良かった！」

と、人の体を勝手に触りまくり勝手に確認した。徳川は思う  
何だ、この女？

「えっと……誰ですか……？」

徳川が遠慮がちに聞くと、その女子は胸を張って言う。

「筑島つくしま絵梨えり！　君が通っている学校の平和を守る生徒会長よッ！」

自慢げに言うが丁度、学校のチャイムが鳴る。後ろを振り返った  
まま固まる筑島。



そして、涙目で徳川に言う。

「どうしよう……遅刻になっちゃった……」

つまり、二人して遅刻になったのだ。気絶した不良を置いたまま、二人は怒られる覚悟をして、学校へ向かう。

これが、二人の出会いだった。

それから数日。彼女は徳川の周りによく出現するようになった。徳川が不幸な目に合うと必ず出てきた。

「……もしかしてストーカーですか？」

「なッ!? 失礼な!! 私は生徒会長として、困ってる人を助けたいだけ!」

と、毎度同じく自慢げに言うが、徳川は聞く耳持たず。

しかし、彼女の影響力は凄まじかった。今まで絡んできた不良が一切近寄ってこなくなったのだ。

「もしかし元暴走族の頭だったとか……」

「んな訳あるかああああ!!」

適当に冗談を言ってみる。徳川は、やはり冗談は疲れる、と思いつつも、微かに笑っていた。

少しずつだが、徳川は変わっていたのだ。

「たぶん……不良が寄ってこないのは、私じゃなくて彼の存在だと思っは……」

徳川は、それが誰なのか知っている。筑山の幼馴染でもあり、地元最強と言う噂がある男。

織田魔鬼。徳川は実際に見た事は無いが、凄まじい男らしい。

「でも、彼ってそんな恐くないわよぉー？　ワガママで天然って言うのかなぁー？」

「随分とイメージが違うのですが……」

そんな会話を繰り返しながら帰宅する。それが、いつの間にかに日課になっていた。

今日も変わらず、帰宅していた。

「トッコウよ！！　元気が無いがどうした？　カルシウムが足りてないのでは無いのか？」

「カルシウムは骨だよ……。頭良いのか悪いのかハッキリしてくれないか……？」

「もちろん織田は頭が悪いに決まってるでしょ！！　証明済みよ！！」

織田、筑山、徳川。徳川は自分でも、どうやったら、こんなシュールな絵になるのか疑問に思う。

徳川は筑山の紹介で織田に会った。そして速攻で『トッコウ』と言うあだ名がついた。

皆が噂にしているような感じでは無く、本当に天然みたいで、人が良い奴に見えた。

「それで、何で俺に付いて来るんだ……?」

「愚民が寂しげに歩いていてなあ！ わざわざ一緒に歩いてやってくるんだ！」

「友達居ないくせに……」

織田に反論する。そんな光景が、徳川は楽しくてしかたが無かった。でも、期待はしていなかった。

どうせ自分は不幸だ。恵まれる日など、来るはずが無いと。そう思っていた。

徳川は気づいていたら、筑山と毎日のように会っていた。そして、夏の終わりの時期。

二人きりで、花火大会を眺めている時に、徳川は思い切って言う。

「……筑島……。俺なんか言うのもアレだが……好きです。付き合ってください」

徳川は、初めて自分が恋しているのだと分かった。そして、思い切って告白をした。

告白までは時間が掛かったが、織田に背中を押され、やっと告白をする事が出来た。

顔を真っ赤にした徳川に、筑島は笑顔で返事をする。

「嬉しい……。私もだよ……。こういつ時って、よろしく願いますって言うのかな？」

「……そんな簡単に……アッサリと答えを出しても良いのでしょうか？」

二人は両思いだった。そして、無事に結ばれ、幸せな毎日を過ごす、はずだった。

時期は冬になっていた。

徳川はいつも通りに筑山と二人で道路の側の道を歩いていた。夜中だから余り人は居ない。

「こんな時間にデートなんて寒くないか？」

付き合い始めて何ヶ月か過ぎた。もう少ししてクリスマスと言う特大のイベントが控えている。

徳川の横を歩いている彼女は笑顔で言う。

「大丈夫だよ！ 功歩が居るから暖かい……」

半年前まで徳川は想像も出来なかった。自分が、信じられる彼女が出来るなんて。

そして、これから起こる惨劇も

「おい、てめえら……止まりな！」

唐突に後ろから声を掛けられ振り返る。そこには数人の柄の悪い男達がいた。

「何のようですか……？」

筑島は警戒しつつ、尋ねる。男たちはゲラゲラと笑いながら喋った。

「何のよう？ 簡単だ！お前らには、ここで人質になって貰うんだよー！」

「はあ？ 何の……？」

徳川は最初は勘違いでもしてるんじゃないかと思った。そして男たちは答える。

「お前の親友である織田魔鬼だよッ！！ あの野郎……いつまでも調子に乗りやがって……」

なるほど……逆恨みか、と徳川は納得する。

織田は、昔から喧嘩好きで、良く不良を滅多打ちにしていた。

徳川は筑島を連れて逃げようとする。が、

「私……闘う。こういう奴は一度叩き直してやらないと直らないのよッー！」

既に闘う気満々の筑島。徳川はため息混じりに呟く。

「お前、女の子なんだから、もっと穏やかにならないか？ せいぜい急所は狙わないようにしてやれよぉー」

徳川は筑島の強さは知っている。だからこそ、

「って言うフエイントを掛けての逃走ッ！」

徳川は筑島の腕を強引に引っ張り逃げ出す。

「え？ ちょ……離してよー！」

「嫌だ。女の子を一人戦わせるなんて俺がカツコ悪いじゃん？」

正直、筑島には闘って欲しくなかった。徳川は、自分が身代わりになるって言う手もあるが、筑島の性格上反対される。

そして追ってくる不良達から逃げ出す結果になった。しかし、相手はしつこいらしく、逃げ先に手下を配置していたようだ。

「逃がさねえぞ……」

ジワジワと接近してくる不良達。

「だから、あそこで闘った方が良かったじゃないッ!!」

「うるさいなあ……別に良いだろ……」

不可抗力だ。不良には悪いが、沈んでもらおう。そう思う徳川。

そして筑島と徳川は動き出す。徳川は、昔から不良との喧嘩に巻き込まれていたおかげで相手の動きなどを避けるのが上手かった。

そして、筑島は道場で鍛えていた時期があったらしく腕は最強だった。

「なるべく前には出るなよ……って聞いているのか……ッ!？」

徳川の忠告を聞かず、そこらの不良を投げ押していく。

その時、何か大きな音がした。その音の方を見ると、一人の不良が黒い塊を持っていた。

そして、その先に立っている筑島の腹が赤く染まっている事に気付く。

黒い塊は、拳銃だった。

「お、おい……お前……どこでそんな物を……?」

「あ、あの女が悪いんだッ！！俺の事を馬鹿にしやがってッ！！」  
不良達の中でも、打ち合わせになかった事態らしい。徳川は拳銃を持った不良には見覚えがあった。  
そいつは、徳川と筑島が初めて会った時に蹴られた男だ。

「お、おい！撤収だ！……織田に伝えとけ！お前が悪いんだ！来るなら廃工場に来やがれってなァッ！！」

不良達は散るように去っていった。その場に残された啞然とした徳川と、腹を赤く染めた筑島。

徳川は想像以上に冷静だった。携帯で救急車を呼んで、それまでずっと筑島を抱えている。

服が真っ赤に染まっており、その血は徳川の服にもこびり付いた。

「……功……歩……。ごめん……。ね……。言うこと……。聞かな  
くっ……。て」

弱弱しく喋る彼女。今までと同じ笑顔のまま徳川に話しかける。

「喋るな……」

「……笑ってよ……。昔みたい……。なってる……。よ？」

徳川は精一杯の作り笑いを浮かべて彼女を抱きしめる。目からは静かに涙が流れていた。

「……私……。功歩に出会えて……。良かった……。よ」

「俺もだ……。今までで一番幸せだった！！だから死なないでくれ  
！！ お願いだ！！」

徳川は感情が爆発し、精一杯叫んだ。今までで一番大きく叫んだ。悲痛な叫びを聞いても、筑島は笑ったままだった。

「お願いが……あるの……」

「もう喋るな……お願いならいつでも聞いてやるから……」

生きてて欲しい。徳川は心の底から願う。

しかし、彼女は最後に弱弱しく言った。

「私の分も……幸せになつてね……」

そして彼女は動かなくなった。そして、同時に来た救急車によって運ばれていった。

それを見送り、徳川は動く。血に濡れた手で夜道を歩き、憎き者を排除するために。

織田は、徳川から連絡を受けて廃工場に行った。そこで見たのは信じられない光景だった。

無残にもボロボロになった不良達。生きているのか死んでいるのかが不明な状態。

さらに不気味なのが、その真ん中で平然と座っている徳川だった。

「これは……どういう事だ……？」

返り血を浴びて真っ赤に染まった徳川に問い詰める。

「見て分かるだろ？ 俺がやった……それ以外に何かあるか？」



いつもと変わらぬ口調。だからこそ恐ろしかった。この状況で笑っている徳川が。

「何があった……？」

「絵梨が……殺されたんだよ……こいつらの手によってな。絵梨は最後まで俺の心配をしてくれた……最後まで笑ってと言ってくれた……」

俯く呟く徳川。その声は怨嗟に包まれていた。

「こいつらの目的が何だか分かるか？ お前の復讐らしいぜ？ 馬鹿だよなあーそんなのしても、お前が動くわけないのに……」

織田は何も言えなかった。

徳川は立ち上がり、ゆっくりと織田に近づき言い放つ。

「俺は一生お前を許さないッ！！ そして……自分自身もだッ！！」

怒りの半分は織田にぶつけ、もう半分は自分にぶつけていた。自分は無力だった。彼女の側にいて、誰よりも彼女を助ける場所に居ながら、救えなかった。

自分の人生に光を与えてくれた。こんな自分を心配してくれた。情けない自分を好きになっけてくれた。

徳川は唸る。何もかも失った喪失感を紛わらすため、喉が潰れるまで叫び続けた。

織田は、それを見つめる事しか出来なかったのだ。

それからだった。徳川が変わったのは……

そして、二人は別々の道を歩み始めることになった……

#### 十四話「とある過去の無力の罪」(後書き)

……徳川は、一人で悲しみを背負い、そして自分自身を変えようとしたんです。

誤字脱語などありましたら、指摘お願いします。

十五話「とある山中の特別修行」(前書き)

ついに物語りも終盤に入ってきましたねー

そして超えられない50の壁……orz(ポイントの話です)

どうやったたら、あんなにお気に入り登録されるのか聞きたい……  
努力の問題ですね、はい

## 十五話「とある山中の特別修行」

「何でこうなった……」

ため息をつく少年。彼の名前は徳川功歩。東京の高校に通う不幸な少年だ。

その少年は、涼しげな表情で見つめていた。緑溢れる光景。清しい空気が漂っている。

徳川は、山の入り口付近で呆然と立ち尽くしていた。

「ついてねえ……」

話は数分前に遡る。

「ここは……どこだ……?」

目が覚めた時には、青く広がる空が視界に入った。徳川は地面に仰向けで倒れていた。

足の感覚が戻り、何とか立ち上がる。足を使うのが何日ぶりな感覚。

何とか立ち上がり、自分の状況を思い出す。

「俺は……生き延びたのか……?」

あの時、織田を説得しようとして返り討ちにされたのだ。そしてアブノードクライ左手の影響で、心臓発作が起きた。あのまま、織田に止めを刺されてもおかしく無い状況だ。

そして、徳川は何かに気付いたように表情が固まり、しだいと笑みが浮かぶ。

「そうか……そうかよ……そう言うことか。……クク、ハハハ！」

突然狂ったように笑い出す。そして、徳川は笑うのを止め、何かを悟ったように優しい表情で呟く。

「織田……お前はまだ、そこまで堕ちてる訳じゃなかったんだな。だったら……」

そして力強く断言する。

「まだ救いようがある……！」

筑島、そして織田との三人の日常。その頃を懐かしむように思い出しながら決意する。

織田は、俺が気絶させてでも戻してみせる。昔みたいに笑い会えるように。

だけれが、支配するような世界は俺が絶対に阻止してみせると。

「目覚めたアルか。随分と眠っていたアルな」

急に背後から現れた男。思わず徳川は驚いて尻餅をつく。

目の前に立つ男は、胡散臭い中国服に、胡散臭い丸いサングラスを掛け、胡散臭い口調。

「あ、あんた誰だ!？」

それ以上に、さっきの独り言を他人に聞かれていた事に羞恥心を

感じ、全身真っ赤に染め上がる。

すると、徳川はある事に気付く。男の後ろに軽トラックが駐車されている。

その荷台に二人の少年が眠っていた。片方は、見知らぬ猿顔の男。片方は見覚えがある。坂本龍平だった。

二人は頭にタンコブを作って気絶をしているようだった。

「あんた……人攫いか!!」

「違うヨ。ワタシ『ESP』の指導教官アル」

相手を殴りつける。取り合えず、一発殴る徳川。胡散臭い。何もかもが胡散臭い。

鼻息を荒くして、相手を睨みつけながら言う。

「嘘をつくな！ 指導教官の話なんて聞いた事ねえぞ！ そもそも、簡単に殴られてるじゃねえか！」

「いや、この前までルーマニアに旅行にブボオ！」

再び殴られる。荒れた鬨牛のような勢いで徳川は殴る。

「旅行とか遊んでて良いのかよ！ そもそもルーマニアとかマニアック過ぎだろ！」

「さつきから人さんざんを殴って……大人を敬うアルよ！ そんなんじゃ、ちゃんとした大人になれないアルよ！」

彼らの時間が止まる。そう感じるほど、張り詰めた空気が漂っていた。

徳川のコメカミは引きつっており、今にも何かを爆発させそうな勢いで、

「そもそも、お前がちゃんとした大人って言えるのかよおッ！ あんたは全部が胡散臭いんだよッ！」

完全に無抵抗力の中年を殴る。徳川はいつも以上にツッコミとして猛威を振るっていた。

「まずは名前を名乗れ、名前を！！」

「しょうがないアルな……私の名前はジャムジー。君達の修行を任されたアルよ」

「修行？」

疑心に満ちた目で徳川は見つめる。そんな事になるのは分かっていたようで、ジャムジーは落ち込む。

分かっている、落ち込んでしまふみたいだ。

「疑ってる目アルね？ 無理も無い。まあ、君が早とちりをして、織田と接触し、全ての作戦を台無しにし様としていた事は上から聞いているアルよ」

「……ッ！ ……織田の事を……上は知ってるのか？」

「むしろ、何故君が知っているのかワタシは疑問に思うアルよ。テロ組織の一員を一人尋問して、やっと手に入れた情報アルよ？」

ジャムジーは語りながら、何かの書類を出し、徳川に渡す。

「今のところ、相手の戦力はざっと、五人。その中の二人は見覚えアルよね？」

上手く言ったつもりらしいが、徳川は聞いていなかった。渡された書類には織田の写真まであった。

そこに、あの爆弾ボムを使う、イガルスと名乗った男の写真もあった



からだ。

「一人、組織の者をスパイで送つアル。奴らは、まんまと騙されてくれたアルよ。そして、敵が本格的に動く日にちが分かった」

「……いつなんだ？」

その日が、織田との決戦になりかねない。徳川は真剣に言葉を待つ。

「三日後だ。その日に。奴らは織田の元へ集まる」

「三日後って……すぐじゃないか！ それなのに……今頃修行？」

「そうだ。その三日後に、君達には織田を止めて貰うために、この山に籠って修行をしてもらうアル」

相手の言葉の意図が分からなかった。啞然とする徳川は、口を開いたまま尋ねる。

「山に……籠って修行……いつの……いつの時代の話だ、そりゃあああああー！」

徳川の絶叫が響き渡る。ジャムジーは冷静のまま、説明をする。

「君達に残されたのは、この三日。これが最大限の修行になる。ルールは簡単。この山に籠って三日間生き残ればOKアル」

は？ と、思わず声を出してしまう。そんな徳川はお構い無しに、ジャムジーはトラックに向かって走る。

そして、荷台に乗った二人の少年を徳川に向かって投げつける。

「ちょ……ッ!? 危ないッ!？」

いきなりの攻撃に慌てて二人をキャッチする徳川。もちろん重くて押しつぶされる。

それ以上に驚きなのが、この重さの二人をまとめて投げつけきたジャムジীর腕力だ。

そのジャムジীরは、急いでトラックの運転席に座り込み、言い残す。

「じゃあ、ワタシはGWを満喫するアルよ！ では、良いGWをツ！ ちなみに忠告だけど、あまり逃げ出そうなんて考えは持たない方が良いアルよー」

その言葉を最後に。ジャムジীরはトラックに乗って、細い道路を猛スピードで走り去ってしまった。

そして、現在に至る。二人は気絶したまま。ジャムジীরは居ない。

「てか、GWなのか……」

思えばあつという間だった。部活を作ったのが、つい昨日のように感じる。

「……俺の出席日数は大丈夫なのか……？」

最近は、ほとんどが保健室に居た気がする。徳川は、気のせいだと自分に言い聞かせた。

すると、ボケーっとしている徳川の後ろで気絶していたはずの二人が同時に飛び起きた。

「ここはどこゼヨ!? 私は誰ゼヨ!?」

「はい、古典的なボケはツッコみませんからね、俺は!」

「……可愛い美少女は……夢か……」

「何か、凄い嫌な予感してきましたよ、俺! 何か、この猿顔から馬鹿さかのうえの匂いがプンプンするんですけどッ!」

徳川は、果てし無く嫌な予感がした。そして、嫌な予感が的中する。

GWの最悪な山籠り修行が始まる……

十五話「とある山中の特別修行」(後書き)

何か唐突に始まった山籠り修行!!

あまりにも古典的過ぎて作者も絶句……

もっと衝撃的展開が欲しいッ! って方はドンドン言ってください  
いつでも主人公交代は出来るのだよwww

## 十六話「とある自分だけの現実」(前書き)

お気に入り登録10件突破いたしました！登録ありがとうございます！  
す！

そしてユニークが2000人突破しました！！  
いつも見て頂きありがとうございます！

これからもよろしく願います！！

## 十六話「とある自分だけの現実」

「ここどこだあああああ!?!」

どこだか分からない山の入り口付近で喚く猿顔の男。

「何をそんなに驚いてるゼヨ?」

「いや、むしろお前は何で冷静で居られるんだ?」

それを冷静に眺める徳川と坂本。坂本は起きてから何故か納得したような表情をしている。

そんな二人を他所に、猿顔の男は喚き続ける。

「どこだよここ!?! お前ら誰だ!?! 警察か!?! SPか!?!  
もしかしてFBIじゃ」

「取り合えず黙れ。まずは黙れ。てか、いい加減にしやがれ、このクソ猿ツ!!!」

「えつと……俺の名前は北条猿好（きたじょうざるこう）つす……。何か、うるさくしてしまつてすみません」

二人の前で土下座をさせられた北条。徳川は不機嫌そうに北条を睨みつけていた。

ただでさえ、色々とストレスが溜まっている状態なのに、意味の分からない場所に来させられ、されに勝手に修行をしろと言われたからだ。

「あの野郎……今度会ったら、絶対に殺してやる……」

この場所には居ない者に殺意を覚えている徳川をなだめるため、坂本が話を変える。

「まあ、事情は分かったゼヨ。三日後までに修行して、自分を鍛えろって事ゼヨな？」

相変わらずの暢気な口調で徳川の話を整理をする。すると、北条がオドオドと手をあげて言う。

「話が付いていけないのですが……修行って何？」

「こつちが聞きたいわ!!」

一喝する徳川。相当、苛立っているのが分かる。

坂本はなるべく、徳川に触れないように、と北条に注意を促して、気になる事を尋ねる。

「そう言えば北条は何の能力者ゼヨか？」

「能力者って……何？」

首を傾げながら言う北条。

「だから、超能力だよ。お前のは？」

落ち着いたようで、普段の口調に戻っている徳川。そんな徳川に怯えながらも答える。

「だ、だから……能力って何だよ……？ 何かの特撮か？」

「……。どうやら、事情を知らないみたいゼヨな……」  
「……。あのクソ中国人モドキ！！ 関係ない奴を巻き込みやがったかあああああああ！！！」

今にも、そこら辺に生えている木を吹き飛ばしそうな勢いの徳川。北条は完全に怯えて、木の陰に隠れ、坂本は徳川の怒りの闘志を消そうとなだめる。

「落ち着けよ功歩。俺もなんだが、能力の事を知らないのに、いつの間にかに能力者になってる奴も居るんだゼイ？ こいつは、能力者だと判断されたが、まだ自覚が無いだけだと思っゼヨ」

その言葉で、荒れ狂っていた徳川は動きを止めて、それで落ち着いたように言う。

「……確かに……。な。何かゴメン。八つ当たりしてた……」  
「真面目にすいません。……話が全く分からないのですが!？」

北条の嘆きに、坂本は苦笑いを浮かべながら説明を簡単にする。

「つまり、君は超能力者<sup>エスパー</sup>って事ゼヨ。だから、問題を起こす前に、こちらの組織である『ESP』と言う能力者対策機関に加わって貰うって事ゼヨ。それで、悪の能力者と戦う！ 返事はイエスorはい!！」

「選択肢同じだし!!！」

そして、徳川が呆れたように詳しい説明を北条をした。





珍しく疑問符を出した坂本。それも無理は無い。徳川の後ろに巨大な白黒模様の生き物が居たからだ。

「どうしたんだお前ら？……………ッ！？」

徳川も後ろを振り向き、我が目を疑った。何故なら、そこには2mを超える凶暴そうなパンダが立っていたからだ。

しかも二本足立っており、その手には笹を持っていた。笹と言っても先は尖っており、十分刃物として扱える。

「……………お、美味しそうな笹ですね……………」

徳川がお世辞を言った瞬間に、パンダが雄たけびを上げて、徳川に向かって笹を振り回す。

「ギヤアアアアアア！！！」

紙一重で避けて、必死に逃げる。山の方へ向かって全速力で走る。

「あ、ちよい待て！！！」

北条と坂本も徳川の後を追う。もちろん後ろには全力ダッシュで追いかけてくるパンダ。

「徳川が変な事を言うからゼヨ！！！」

「だって気まずかったじゃんか！！ 坂本！お前の木刀で撃退しろ！！！」

「動物愛護法で捕まるんじゃないか……………？」

余裕そうに会話をしている風に見える三人だが、実際は全然余裕

じゃない。

後ろからは、今にも肉を求める猛獣のような勢いで追ってくるパンダ。それは並みの速さではない。

「北条……あいつはパンダなんかじゃない。化け物だ!!」

「てか、北条が猿顔だから、それで闘争心が出たんじゃないゼヨか？ だから圏をやるゼヨ！」

「誰が猿顔じゃ!! てか、パンダと猿って闘争心なんて出るのか!?!」

そんなギャグのような始まり方で、彼らの修行が幕を開けた。

修行二日目。昨日は散々だった。パンダに追いかけれ、山を一周したかと思うほど走った。

死ぬ覚悟をしながらも、何とか振り切り寝床を確保した。

「あ、あれは何なんだよ……」

「俺……もうダメだ……」

徳川は、地面だろうが構わず寝そべり、北条もグツタリしていた。

唯一元気なのが坂本だった。

「こんなんで疲れてちゃ話にならないゼヨ?」

「あのなあ! こっちは連続の激闘で疲れてるんだよ! 今度はパンダですか!?!」

「俺は、お前らとは違って常人なんだよ! 能力も何も持ってない平凡な市民なんっす!!」

徳川と北条が猛烈に物申す。坂本は呆れたように岩に腰掛けながら、話を始めた。

「こんなの、まだ甘いほうだゼイ？ 俺が初めて、この組織に加入させられた時は、へりで富士山の頂上に一人置き去りにされたゼヨ  
ー？」

思わず絶句する二人に対して、坂本は続ける。

「あの時は本気で死ぬと思ったなー。一ヶ月かかって降りる事が出来たゼヨ。食事が無いから、雑草を必死になつて探して、そのうち自然の素晴らしさが身に感じたゼヨ……」

二人は静かに坂本の話聞く。それに比べれば、こんな修行は比べ物にならない。

坂本を尊敬しかけた所で、最後の一言を言う。

「降りた後のハンバーガーは最高だったゼイ！ あんなに美味しいと思えたのは無かったゼヨ！！やはり、一番は肉ゼヨなー」

その言葉に思わず転びそうになる二人。そして息をピッタリに叫ぶ。

「人が尊敬しかけてたのにさあ！ もうちょっとシリアスな雰囲気だったのに、最後が肉が最高つてぶち壊しだよ！！」

そんな話をしていたせいか、三人は自分のお腹が極限状態だという事を思い出す。

昨日から何も食っていないせいか、三人揃って腹ペコだ。

「腹減ったあああああ！！！」

北条は空腹に腹を押さえて叫ぶ。もちろん食料など持って来ては居ない。

「パンダって食えるのゼヨ……？」

坂本の一言に二人の視線が集中する。そして、彼らは食料の調達を始める。

「ああー食った、食った！」

北条が満足げに言う。彼らは火を起こし、それを囲うように座っていた。

その火では鳥を焼いていた。坂本が風を操り、鳥が飛ぶのに逆風を起こし妨害してバランスを崩す。

そして落ちてきた鳥を捕まえて、焼いて食っているのだ。

「能力が合って良かったゼヨ……」

徳川は腹を壊して寝込んでいた。能力が無い二人は、地道に食べられそうな植物を探していたのだが、徳川が食べたものは全てがハズレだった。

「能力か……どんな能力か分からないのか？」

北条の問いに、坂本は考え、悩みながら答える。

「良く分からないぜヨ……。能力つてのは『自分だけの現実』<sup>パーソナルリアリティ</sup>しだいぜヨからなー」

坂本は火の片付けをしながら、説明する。

「自分だけの現実？」

北条は理解できずに、さらに頭を抱える。徳川も分からずに、坂本の説明を聞く。

「能力者が持つ独自の感覚で、超能力を発動するための土台。ぶっちゃけ精神障害と同じぜヨなー」

理解したが、理解したく無いような内容。

坂本の話通りになると、ここに居るのは全員狂人と言う事になる。

「まあ、自分の信じる道を、どれ程信じられるかで、能力の強さは変わる……。って事だぜ。信じる気持ちは、力に変わるって事ぜヨ」

坂本の言葉を聞いて、徳川は真剣な表情で黙り込む。

(自分の信じる道……。か。俺は……。この能力で何を信じるんだ?)

自分の左手を見つめ、しばらく考え込む。他の二人も徳川と同じように考えていた。

彼らの、自分自身が信じる物を……。そして、彼らは、己の道  
を突き進む。

「こいつは驚いた……」

三日目の朝、ジャムジーは驚いていた。目の前の光景に信じられない物を見たかのように、我が目を疑う。

成長して、パンダを従えている三人。ジャムジーは納得したかのように、荷台を指差す。

「乗るアルよ。今から全速力で走って、決着をつけるアル。場所は」

そして、ジャムジーの口から、織田との決着の場所が告げられる。

「君達の学校だ」

そして、彼らの戦いが、始まるうとしていた。

十六話「とある自分だけの現実」(後書き)

容量の関係で、修行編をカットさせて頂きました^^;

期待していた方、すいません！そして、期待していなかった方！

次にいよいよ決着編です！！

徳川と織田の因縁の戦いが……今、始まる！



十七話「とある学校の能力開戦」(前書き)

ついに徳川と織田の決着編です！

他のキャラクター達の戦いも乞ご期待ください！！

## 十七話「とある学校の能力開戦」

ここは学校昇降口。

辺りは不気味なほど静まり返っていた。GWだから誰も居ないという静かさでは無く、外部から遮断された様な感覚。

そんな雰囲気を出す中を平然と歩く男達。先頭の男はロープを着ており、サイコロを弄っている。

「随分とやるねえ」織田とか言う野郎は……おじさん驚いちゃったよ」

イガルスは眼下に広がる光景を見て呟く。そこらに静かに眠る生徒職員達。

全ては織田という男が一人で作り上げた空間だ。

「ケヒヒ……『眠れ』って命令するだけで、この有様かよ。実に面白い能力じゃねえか！」

「あまりハシヤグな……。我々の目的が成功するまで大人しくしている」

不気味に笑う小柄な男。それを黙らせる坊主頭の鋭い目つきで、大きなバツクを持つ男。

その後ろで幼い少年と静かな青年は静かに付いて歩いていた。

彼らは不法侵入者だが、咎める者がおらず平然と階段を上がって上を目指す。

「しっかし、俺らを呼び出すとは、随分と生意気なガキじゃねえか？ ケヒ……しばくか？」

「ダメだよー？ おじさん達の目的は、彼を利用しないと達成でき

ないんだからね?」

イガルス言葉にウンザリとした調子で「あいよ」とぶつきら棒に返事をする。

「我々の目的は、あくまで『改革』だ。なるべく無益な殺生を避けるためにも、奴を使うしかないんだ」

「分かってるけどよー? せっかくの能力があるのに殺生を避けるか? 矛盾してるだろ! 俺は、『能力』<sup>チカラ</sup>があるから組織に加わったんだぜ? 力が全てだつて証明するためになッ!」

高笑いする小柄な男に、呆れた坊主の男は話をするのを止める。

「おじさん的には、もう少し緊張感を持って欲しいなー。ほらあ…敵さんのお出迎えだよ?」

三階へ上る階段を登ってすぐの広間。そこには、一人の少女が立っていた。

ポニーテールの少女、豊臣は腕を組んだまま、彼らを見つめる。

「ケヒヒヒ!! こうーゆう展開を待ってたんだよッ! この女は俺が料理する…手前らは先に言ってやがれ…」

呆れたように他の者達は男を止めず、見向きもしないで上へと向かって階段を登っていく。

「追いかけてなくて良いのかあ? 足止めするんじゃないのかよ」

「安心せい。貴様の相手など、すぐに終わる」

そう言って、豊臣の手元に何か重たい物が出現する。それは少女

が持つには余りにも似合わぬ物だった。

ハイボット  
二脚が付き、安定した射撃ができるように作られた軽機関銃。  
まるで映画の世界のような武器を出現させ、豊臣は笑顔で言う。

サブマシンガン  
「軽機関銃の威力はどのくらいかのおー」

そして一気に唸るように弾丸が飛び出す。その目標ターゲットの小柄の男に向かって、飛び交う銃弾。それは、確実に命中していた。

しかし、相手は悲鳴を挙げる事は無かった。それ所か笑みを浮かべた。

「知ってるかあ？ 俺の能力？ ……ゲヒヒヒヒ！！」

男に当たる寸前で宙に漂う弾丸。それは、何かを溜め込んでいるかのように震えだす。

「ヒヤハハハハハ！！ 俺の『モスト・リフレクト極力反射』は最強だ！！」

男が叫んだ瞬間、宙に立ち止まる弾丸が弾けるように跳ね返る。もちろん、一発残らず豊臣へと真っ直ぐに向かって。

「困るゼヨなあー。お嬢に手を出されると、俺がクビだゼイ？」

唐突に窓から入ってきたヘッドホンを被っていて、茶髪少年が飛び込みながら告げる。

その手に持つ木刀を着地寸前に大きく振り回し、その勢いで強力な突風が吹き荒れ、弾き飛んできた弾丸は風力によって地面に落とされる。

「お主……少し変わってないか？」

茶髪の少年、坂本の風に違和感を感じた豊臣。そんな豊臣をへらへらと笑いながら適当にあしらう。

「お嬢は先に行っていて欲しいゼヨ。この場は俺が引き受ける！」  
「ビシ！　　と親指を突き立てて言う坂本。

「……そもそも、お主が来るのが遅いから、わらわが一人で相手をする破目になったのだが……」  
「ツギク！」

自らで効果音を出し、冷や汗を流し始めた坂本。

「こ、これは誤解だゼイ！　途中で車のガソリンが足りなくなったり、功歩がわがままを言うから、先に屋上に飛ばしていたりしてですぬ」

「結局は遅刻した事には変わらん。五十歩百歩じゃ！」

頬を抓られ、お仕置きを受ける坂本。そんな二人のやり取りを眺めている小柄の男が叫ぶ。

「俺を無視するんじゃないやねえ！」

男が叫んだことによって、坂本は男の存在に気付く。そして陽気な笑顔のまま言い放つ。

「無視してた訳じゃないゼヨ。むしろ隙を見せてただけだゼイ？　それなのに攻撃してこないって事は、遠距離戦は苦手か？」

凶星のようで、男は苦虫を潰したような顔で歯をギシギシ鳴らす。今度こそ、豊臣を先に行かせて本当の一对一になった。そして坂本は静かに呟く。

「ここからが正念場ゼヨ……」

階段を上がる集団。下からは騒がしい音が聞こえる。

そして、彼らは四階の屋上へと上がる階段の前で震える男と鉢合わせしていた。

「おじさんは邪魔者が本当に嫌いなんだよおー分かる？」

イガルスは猿顔の男に優しく語りかける。サイコロを弄りながら。

「し、知るか！！俺だって好きでこんな事をやってる訳じゃねえんだよ！！」

猿顔の男、北条は震えながらも大声を出す。すると、ずっと後ろを歩いてきた青年が前へ出る。

薄い青色に染めた長髪。腰まで伸びているが、途中で一本に結んである。

その腰の部分には少し細めの鞘がぶら下がっていた。

「そうか……ならば通らせてもらおう。お前が手を出さなければ、こちらも手を出さない……」

「行かせるかよ……それだけは譲れない！この先では徳川キローが戦ってるんだあ！！その邪魔だけは」

北条の体が後ろへと吹き飛ぶ。イガルスイガルスの放ったサイコロが直撃したのだ。

「だから邪魔者は嫌いって言ってるでしょうがぁー」

黒く煙を上げる死体シタイに目もくれず、イガルスは坊主の男と一緒に上へと向かって歩く。

青年と少年も上がるうとするが、青年の足を何者かに捕まれる。

「行かせるかって……言ってるだろうが……」

体中を焦がしながらも立ち続ける北条。どうやら偶然ゴウゼン、急所はハズれたようだ。

「呆れた奴だ……」

青年は静かに、腰の鞘から太刀を取り出し、そして遠慮なしに切りかかった。

しかし刃は届かなかった。

刃が当たる寸前で北条が人間の動きとは思えない速さで後ろへ飛ばされる。

まるで、何者かに強烈な蹴りを喰らったように、呻き声を上げながら壁に衝突する。

「？」

そして青年は気づく。このフロアに何かが居る気配を感じた。

そして、声が聞こえた。

「若の邪魔をする者は許さない……」

そして、反撃が始まる。

屋上には、一人の孤独な織田が立っていた。屋上から下を見つめ、後ろの男へと話しかける。

「まだ息の根が残っていたか……トッコウ……」

変なあだ名で呼ばれた男は笑いもせず、怒りもせず、無表情で言葉を返す。

「お前だろ？ あの時、俺の心臓発作を能力で止めたのは……お前の能力は便利だよな」

無表情で話す徳川。しかし、その喋りは冷淡で知ってる者では想像できないほど冷たかった。

「何故、俺に止めを刺さなかった？」

徳川は冷たく吐き出す。その言葉に織田が反応を示した。

「貴様如き、俺様が止めを刺す価値など  
「嘘をつくな」

感情を押し殺したように徳川が言う。そして、真っ直ぐ織田を見つめ、言葉を続ける。



「お前は、本当はこんな事をしたくないんだよな？ 誰かに止めて欲しいんだろ？ そうに決まっている！ 怒りに飲み込まれたお前は後戻りが出来なくなつて、それで俺に止めて欲しいんだろ！」

「……愚問だな。俺様の夢は世界の統治だ。犯罪も戦争も全てを抹消する絶対的世界だ……。それ以外の事など、興味が無い」

「……お前は確実に道を踏み外した。話が聞けないつて言うなら

俺はお前をぶん殴つても覚ましてやるよ！ お前の憤怒を<sup>チカラ</sup>超

えてやる！！」

そして学校の戦いが始まった。

十七話「とある学校の能力開戦」(後書き)

ついに始まった彼らの戦い  
彼らは何を思い、何を信じて戦う  
のか

何か問題点などが合ったら、言ってください。  
よろしく願います！

十八話「とある疾風の圧縮空気」(前書き)

いやー今回は自分でも頑張ったと思います！  
少し、間違ってる所もあるかもしれませんが、よろしく願いしま  
す！

## 十八話「とある疾風の圧縮空気」

「アンタの名前は……確か蘇我<sup>そが</sup>だったぜヨか？ レベル4の強能力者<sup>そが</sup>と……」

小柄の男を眺めながら呟く坂本。その表情は余裕のようであった。

「いつまでも……笑ってるんじゃないよクソガキッ！！」

故に腹が立った。目の前の強敵<sup>そが</sup>の前で、笑っていられる存在が許せなかった。

蘇我は、タツクルするような勢いで坂本に向かって突っ込む。

「危ないゼー？」

坂本は、突っ込んできた蘇我に対し木刀を振り回す。

「舐めるなああああああ！！」

振りかぶった木刀が時間差で反射される。その動きに合わせて、坂本の体も仰け反る。

「ツク……これは反射できるゼヨか……」

思考を張り巡らせ、相手の能力を解析する。

蘇我は相手の特徴を見て、何かに気付いたのか下劣な笑みを浮かべ、手に隠したナイフを振りかぶる。

「テメエはイガルスに負けた坂本とか言うガキだよなあ？ 強能力者<sup>レベルフォー</sup>ごときが、この大能力者に勝てるとも思ってたかッ！！」

ナイフを紙一重で避ける。

しかし動きを読んでいたので、避けた坂本に向かってナイフを投げた。

咄嗟の攻撃に反応して風でナイフを振り払うが、それが落ちる傍には蘇我が立っていた。

「反射の恐さを思い知らせてやるよ……」

蘇我の直ぐ傍に落ちようとしたナイフは空中に少しだけ漂い、向きを変えて発射される。

ナイフは真つ直ぐに坂本の方へと飛んでいく。尋常じゃない動きにかわす事が出来ず、顔を左手で庇う。

弾丸のような速さで突き刺さった。痛みに顔を歪ませながらも、相手を見つめる。

「……ッ！ なるほど……落ちたナイフを反射させて、こつちまで飛ばしたぜヨか……」

反射。あやるゆ物を反射させる能力。ここまで恐ろしい物は無い。あの反射は少し変わっていた。当たる前に空中で漂わせ、その間に向きと速さを変える。

坂本は小さく悪態を吐く。

「ケヒヒヒヒ！ 木刀も通じない！ 格闘でもやるってかあ？ ナイフで一刺しにしてやるよッ！」

上機嫌になった蘇我は、懐から数本のナイフを取り出す。それを、

思いつきり上へと投げた。

坂本には、相手の行動の意味が分かった。落ちてきたナイフは、真っ直ぐと蘇我を狙っている。

それが蘇我に当たる寸前で、全てのナイフは止まる。そして、ゆつくりと標的ターゲットを変える。

「あの世で嘆きなッ!!」

蘇我が叫んだと同時に、何本ものナイフが坂本へと向かって発射される。

避ける暇さえ与えないナイフの速さに、坂本はなすすべも無く、無残にも全身穴だらけになる。

はずだった。

坂本に向かつて飛んでいったナイフは木っ端微塵に破裂する。まるで風船が割れたかのようにアツサリと破裂した。

「な、何が起きた!？」

「手品にでも見えたぜヨか？」

そして蘇我は気付く。木刀を持つ方の反対の、ナイフが突き刺さっている左手。

その左手にはいつの間にかに持っていたのか、真っ黒なカラートーンの拳銃が持っていた。

「そ、そいつは……?」

「こいつ? 確か『ベレッタM92』とか言う拳銃ゼヨ」

警察などが持っているような拳銃。オモチャでは無い。本物だ。

蘇我は、混乱していた。

世界に改革を。その言葉を聞いて戦っていた。だが正直、改革とかに興味は無かった。

この能力を最大限に活かせるのは戦場だ。だから、組織の手伝いをしていた。

馬鹿げていると言って、組織を抜けたのは何人も居た。だが、蘇我は最後まで残った。

そして、戦場を楽しんで戦うはずの蘇我はガキに恐怖している。

「そ、そんな銃で……そんな威力の無い銃で、ナイフが全部消し飛ぶはずが無い！！」

「それが、お前の常識だ、能力者」

坂本は静かに言い放つ。先程までとは違い、妙な威圧感を出す。

そして、坂本は静かに言う。

「空気銃って知ってるよな？」

まるで昔話を読み聞かせるような穏やかな物腰。ゆえに、蘇我は口を挟めなかった。

ここは戦場。その事実を壊されたような感覚だった。これが蘇我の限界だった。

「圧縮空気式プレチャージって言ってな？ 高压空気を充填し弾丸の発射に用いる方式で排気バルブを打撃し短時間開放することで一定量の圧縮空気を出す事が出来るんだ。つまり、圧縮空気をを使用して弾丸を発射するわけだ」

「何が……言いたい……？」

「手っ取り早く言つと、俺は普通の拳銃と同じ構造を組み込む事が出来る。この風の能力チカラによってな」

つまり、坂本は普通の拳銃の威力に加えて、圧縮空気の力を足して銃弾を放った訳だ。

だが、蘇我は認めない。微かな矛盾を衝く。

「そ、そんなの無理だッ！ 普通の拳銃が、そんな事したら拳銃が圧縮空気に耐え切れず、破裂するはずだ!!」

普通の拳銃は、空気圧縮に耐えられる構造はしていない。高圧に耐えられる構造はしてないのだ。

だが、坂本はウツスラ、と笑みを浮かべて言う。

「誰が拳銃に圧縮空気の能力チカラを加えたって言ったぜヨか？」

坂本は、懐から一つの銃弾を取り出す。それで蘇我は謎が解けた。敵は空気さかもとを操り、弾丸を発射すると同時に圧縮空気を追加したのだ。

「クソ……何なんだよ……何なんだよ強能力者チカラごときが！」

「その傲慢が……時に生死を左右するぜヨ？」

坂本は引き金を引く。何の躊躇いも無く、人を殺せる道具を扱う。弾丸は蘇我に真っ直ぐ飛んでいく。目にも止まらぬ速さで、蘇我の頬をかすった。

「反射が……効かない……？」

轟！ という音とともに、蘇我の後ろの壁が、爆発したかのように崩れ去る。

弾丸は、蘇我の頬をかすって後ろの壁に衝突し、大きなクレーターを作り上げた。



「アンタの『反射』じゃ、俺の弾丸は弾き返せない」

笑みを浮かべて、言い放つ。それと同時に引き金を引いていた。

「ッ！！！？？？」

蘇我は声にもならない程の痛みを感じ、その場に倒れこむ。痛みを訴える足を蘇我は見てしまった。見てはいけない物だった。

蘇我の左足の膝から下が綺麗に跡形も無く吹き飛んでいた。

坂本は蘇我の足を狙って弾丸を放った。威力が大きすぎて反射もできず、弾丸は足へと直撃した。

痛み以上の吐き気がする。溢れ出す血の海。蘇我は意識を失えなかった。

あまりの出来事に、神経が完全に麻痺してしまってるのだ。その代りに、彼は完全に壊れた。

「う、があ、がああああああああッ！！」

意味の無い叫び。それを坂本は静かに見つめていた。その表情は、微かに沈んでいた。

坂本は、既に相手に戦意が無いと思ったのか、その場に座り込む。

「命までは取らない……そう俺は誓った……」

誰も聞いていないと分かっているながらも、独り言のように呟く。

「だが、けして俺は優しい訳じゃないゼイ？」

坂本は、自分の腕に突き刺さったナイフを抜き取り、ボンヤリと虚空を見つめている。

まるで、何かを思い出しているかのように。

そして、何かを決心したかのように立ち上がり、上へと向かう。

そして去り際に告げる。

「そう言えば、言い忘れていたけど。……俺も大能力者レベルフォーゼヨ」

これが成長した坂本。けして優しくは無く、それでも自分の信念を貫く。

先の上へと上がっていた豊臣。坂本が心配ながらも、徳川の元へと向かって走っていた。

しかし、その足は止まる。ある人物を見つけてから。

「あ、貴方は……」

十八話「とある疾風の圧縮空気」(後書き)

坂本強エー 自分で書いてて、そう思いましたWWW  
これでレベル4で良いのでしょうか？

十九話「とある忍びの影法師」(前書き)

倒れた北条。

刀を持った青年と後ろに控える少年。

そして、闇から動く影。

彼らの戦いも始まった……

## 十九話「とある忍びの影法師」

下で蘇我と坂本が闘っている時、上では険悪な雰囲気になっていた。

「……若の邪魔をするならば……私に殺される……」

確実に殺意の振りまく声。しかし、その声を出した者が見当たらない。

青年は辺りを警戒して、気配を探す。

そして突如、後ろからクナイが青年に向かって飛んでくる。

「危ない……」

青年は気づいてたが動かなかった。動く事自体が無駄だからだ。クナイは青年に当たる前に、何かに衝突して床へと落ちる。

「な、何だ……何が起きたんだ……？」

壁の所まで蹴り飛ばされた北条。

そして突然クナイが飛んできたと思うと、青年に当たる寸前で何かに当たったのが見えた。

二つの現象。それは昔の彼だったら信じられない事だった。

「そこに隠れてないで出てきたらどうだ……女」

青年は階段の影に隠れる者に向かって言う。

そして出てきたのはくノ一の服装に身を包んだ少女だった。

「……若のたために来てみたら……色々と暴れてるみたいだな……織田魔鬼」

青年の事よりも、そこに居ない存在を怨むように虚空を見つめる。その表情に、どこか寂しさを感じさせる。しかし、青年は相変わらず無表情で言う。

「若と言う男の事は知らないが、俺の邪魔はするな……俺は」

言葉の続きは服部が投げたクナイによって遮られる。クナイは、青年に当たる前に何かに衝突して落ちる。

「シールド防壁……？」

北条が呟く。クナイが何かに当たる寸前、何か青い物が見えた気がした。

「話しが通じないみたいだな……。念のため、名前くらいは名乗ってやろう。私の名前は源頼守だ。……女、子供だろうが、容赦はない」

青年、源は刀に手をかけて、隙を窺う。全く隙を見せない両者。しだいに、北条は映画でも見ているような感覚になった。すると、少女がうつすらと笑みを浮かべて呟く。

「女だからって舐めたら……痛い目見るぞ？」

俊足な足を利用して一気に接近する。本物の忍びの様な足取り。いや、北条の目には本物の忍びとして少女が写っていた。クナイを両手に持ち、相手が反応する前に仕留める。それが、忍

びの鉄則。

くノ一の少女、服部は一気に接近して、その首元を狙って一閃。

「ダメだ！！そいつに近づくな！！」

何かに気付いた北条が叫んだときには、既に遅かった。

服部のクナイは、何かにぶつかった。しかし、それは源では無い。そして服部は見えた。自分が斬りかかった男の周りに半透明で青い防壁<sup>シールド</sup>を。

「策略無しに突っ込む事は寿命を縮めるぞ……？」

クナイは、その防壁<sup>シールド</sup>を突き抜けていたが、それ以上動かせなくなっていた。

腕が塗りたてのコンクリートに吞まれた様に、抜け出せなくなっていた。

そして、源はゆっくりと刀を抜く。

散閃契り。

源が呟くと同時に半透明な青い何かが飛び散ったと思うと、それが服部に突き刺さる。

「ツクウ……」

それが砕けた瞬間に動けるようになり、すぐさま後ろに除けるが、痛みが全身を覆う。

体中に刺さった半透明な青い物。それはガラスのようで綺麗に光っていた。

「ガラス……？」

ガラスのような半透明な青い物を見て呟く北条。服部は痛みを堪えながらも、相手と距離をとる。

哀れみの目で見る源は喋る。

「これは防壁<sup>シールド</sup>……。完全防壁<sup>パーフェクトバリア</sup>だ。この防壁は硬軟自由に選べる。君が切りかかってきたときに防壁を軟らかくして、ギリギリで硬化させた。そしてガラス並みの硬さになった防壁が割ればガラスのように体に突き刺さる……」

物静かに語る源。その口調は穏やかで、何か罪悪感を感じている罪人のようにも見えた。

北条は、思った事をそのまま言う。

「まるで、自分の能力をワザとバラして倒してくださいとも言ってるみたいだな……」

「源…… 本当は嫌なんだよね？」

その時、初めて源の後ろで控えてる少年が喋った。

「……ハンデだ。弱い奴にはハンデを与えなければならなだろう……」

だが、相手の能力が分かったところで、北条には何も出来なかった。

戦闘能力が無いのは誰よりも自分が知っている。そしてくノ一は全身に怪我を負っている。

完璧に不利な状況。しかし、それでも少女の目は死んでいなかった。



「…………能力がどうした…………」

服部は呟く。徳川も小さな事は気にしなかった。服部は徳川に影響されているのだ。

だからこそ、徳川が自分から離れた存在になっていた事に傷ついた。

少女は知らなかった。徳川の中学時代、そんな過去があったなんて。

少女は知らなかった。徳川の左手に宿る能力の事も。アブソールド・クワイ

少女は知らなかった。能力者の事も、魔術の事も。徳川が未知の世界に足を踏み入れてる事も。

そして、その踏み込んだ徳川は後悔もせず、仲間を守っている事に。大切な者を守るために命を欠けている事に。

だからこそ、自分が許せなかった。何も知らない。徳川の事を愛してゆくせに何も知らない自分。

だからこそ、追いつきたかった。異常能力の『ESP』の事も。徳川の周りの事を全部調べた。

そして、服部は決心した。何としても、徳川を守り、徳川の喜ぶ道を作り上げると。

「そんなの…………関係ないッ！ 私は…………若のためだったら、この命を捧げてでも道を作り上げる！」

服部は叫んで、防壁の事も構わず、突っ込む。その手に持つクナイを強く握り締め。

「守りたい者が居ることは良い事だ…………否定はしない。しかし」

源はそこまで優しくない。相手の決意を聞いたとしても、関係ない。

源にも、貫かなければならない信念があるのだから。

そして刀を構え、服部を迎え撃つ。しかし、予期せぬ邪魔者が入った。

「右からの斬撃!! 左に避ける!!」

服部は、その言葉通りに行動する。

源は右に向かって振り下ろしていた。

「なに……?」

源は一瞬、声の主の方を向いてしまった。その声の主とは、猿顔サマシの男だった。

その隙について、服部は俊足で相手の背後を取り、切り裂く。

「……ック」

源は、勢いに任せて、背後に刃を向けてクナイを防ぐ。防壁の能力を使わず、刀で防いだ。

(つまり……防壁は後ろまで守備出来ないって事か?)

北条は冷静に考える。

服部は、攻撃を止めず、そのまま両手のクナイで連続で切り裂いていく。

それをギリギリの所で防いでいく源。怒涛の嵐を何とかかわし、大きく後ろに跳ぶ。

「……中々やるな……」

「大人しく私に殺される……」

見た目に似合わず、物騒な事を呟く少女。思わず、源は笑ってしまった。

そして、真剣な表情になって告げる。

「ここは本気で行ったほうが楽しめそうだ……」

そう呟いたと同時に、今度は源から攻撃を仕掛けてきた。一気に間合いを縮める源。

服部は後ろに下がろうとしたが、それよりも早くに源が攻撃を繰り出す。；

この状況を打破するには、己の能力を最大限に活かすしかない。そして決意する。

散閃衝竜。

防壁を頑丈にして、服部にタツクルを喰らわす。予想以上の衝撃。それと同時に、上に飛び上がっていた源が大きく刀を振り下ろす。クナイを盾代わりにするが、あっさりと破られる。

何とか、服を微かに斬られた程度で済んだが、衝撃が大きく頭に響く。

「大丈夫かッ！！」

すると、倒れこんでいた北条が少女に駆け寄った。なるべく視線を合わせないように。

服部の服は胸の辺りが切断されていて、今にも少女の小さな胸が

見えてしまいそうだった。

一応は健全な男子の北条。見てはダメだ、見てはダメだ、と心の中で呟き駆け寄る。

「……………私は……………やはり弱いのか……………」

服の事など気にした様子は無く、むしろ精神的にダメージを受けているみたいだ。

その少女に何と声を掛ければ良いのか、と戸惑う北条。そんな彼らに源は言っ。

「これが力の差だ……………。弱い者は倒れ、強者は残ってしまう世界。俺だって……………こんな世界は認めたくない。だが、これが現実だ。弱い者は、強い者に怯えて生きるした道が無いんだよ……………」

源は寂しそうに告げる。そして、その刀をゆっくりと北条達に向ける。

「源はね。人質を取られてるんだよ」

それは、源の後ろに控えていた少年の口から出たものだ。全員の視線が少年へと集まる。

「源はね、奴らに大切な妹さんを隠されているんだよ？ 言う事を聞けば、返してやるってね」

「……………朝日<sup>あさひ</sup>。無駄口を叩くな。奴らに、そんな事を教えて何になる」

そこで初めて源が動揺しているように見えた。

「彼らなら敵を全員倒してくれるかもしれないよ？」

「、」

その言葉に源は少し黙り込んでしまう。

その隙を見て、北条は服部にこっそり耳打ちをした。

(少し無理な相談になるんだけど、手伝って欲しいんだ……！)

服部は、少し怪しんだが、助けてくれた事もあるので北条の話  
を聞いた。

「……やはりダメだ。……これは俺の問題だ。俺は、俺自身の手で  
助け出してみせる……」

源は何かを決意をしているようで、刀を持つ手に力が入る。

だが、服部達は準備が出来ていた。

服部は煙幕を使って、自分達の姿を隠した。

「姿を消したって同じ事……俺の死角に入るのは不可能だ」

先程のは油断していた。相手は、自分が後ろにまで防壁を回せな  
いと勘違いをしているが、実際は違う。

源は、全体的に防壁を張れる。しかし、不意打ちと集中力が無く  
なると防壁は消えてしまう。

故に警戒は怠らずに、周りをしっかりと見る。そして煙幕の効果  
が薄れてきて、相手が見えてきた。

「やはりか……」

煙幕の所に残っていたのは北条だけだった。いや、女が着ていた衣服も残っていた。

源は疑問に思いながらも、気を緩めない。女の方は忍びだ。背後の警戒を強化する。

しかし、相手は大きく予想を裏切った。何かが自分の背中に刺さる。小刀サイズのクナイ。

「な……に？」

自分の影から首元までだけを生やした服部。服などは着ていないらしく、それ以上出たら危ない。

影から腕を伸ばしてクナイで源の背中を思いっきり刺していた。

「私の能力は『影法師シャドウの潜入ダイブ』。影は私のテリトリー……」

背中源の痛みで気を失い欠けるが、刀を振るい服部を斬ろうとする

だが、その刀は何らかの力で動けなくなる。いや、二人の動きが止められたのだ。

「その辺にしておきなさい、お二人とも」

それは一人の男性だった。後ろに豊臣を引き連れる男性。

「やっと来ましたね。待ちくたびれましたよ」

それは朝日という少年が言った。その二人以外は状況が全く読めなかった。

そんな状況の中、急に上から物凄い衝撃音が聞こえた。

「始まりましたね……」

男性は、静かに告げる。

十九話「とある忍びの影法師」（後書き）

北条の能力が未だに判明してない件についてー

未来予知？ とは少し違いますとだけ言っておきます！

そして、まさかの服部の能力！！強いですねー

そして、いよいよ次回最終話……では、シーユアゲイン！！



**最終話」「とある因縁の吸収対皇帝」(前書き)**

ついに最終話です……では、よろしくお願いします!!

## 最終話「とある因縁の吸収対皇帝」

「なーんで君しくがわが居るのかなー？」

屋上に居たのは織田と徳川の二人のみ。

そこにイガルスと坊主頭の男は織田の後ろの階段から上がってきた。

「誰だ……アイツ？」

坊主頭の男は警戒するように徳川を睨む。

だが、徳川と織田は他者の存在を否定するかのように見詰め合う。そして、織田がゆっくりと言う。

『ひれ伏せ』

徳川以外の二人が地面に這いずるように強制的にひれ伏す。目の前の徳川は、分かっていたのか左手を前に掲げていた。

「な、何をしているッ!？」

坊主頭の男は突然の織田の行動に動揺を隠せず、喚き散らす。

イガルスは、静かに抵抗もせず、二人を見つめていた。

「俺様と徳川の戦いの邪魔は入れません。黙って見ている」

織田は静かに、それでも威厳のある言葉を言い放つ。高校生の言葉に大人が思わず黙ってしまった。

「計画が台無しになるんじゃないか？ 音声拡張機スピーカーを使って半径10kmにも及ぶ服従のつじやくを使うつもりだったんだろ？」

徳川は、軽い調子で話す。織田も同じく、友達と話すかのような調子で返す。

「そんな事はいつでも出来る。まずは、お前を潰すことが先決だ。来るならいつでも来い」

「随分と……余裕だなッ！！」

徳川は駆ける。織田に接近して、一発顔面を殴り飛ばしてやるつもりで。

「無謀だな……」

織田は、徳川の考えは分かりきっていた。それこそ、何度も戦いを潜り抜けてきた織田には、徳川の一撃など避けるのも、たわいもない事だった。

徳川の拳を軽々と避けて、がら空きになった懐に強烈なカウンターをする。

つもりだった。

「いつまでも同じと思うなよ……？」

その織田のカウンターを紙一重で避けて、徳川は強烈な蹴りを足に決める。

バランスを崩し、倒れるかと思っていた。

「その程度か？」

徳川の一撃は織田にとっては痛くも無かった。まるで蚊にでも刺されたかのような表情だ。

織田は、その表情のまま、徳川に思いっきり頭突きをしようとす  
る。

しかし、それも避けられる。まるで自分の動きを分かっているか  
のように。

「お前……相変わらずの回避能力だな……。いや、昔以上か？」

織田は昔から徳川の事を高評価していた。徳川は尋常が無いほど、  
回避能力が高い。

昔から厄介事に振り回されているせいか、自然とそのような能力  
が磨かれているのだ。

だが、中学時代の時は、ここまで動きが滑らかではなかった。ま  
るで、喧嘩慣れをしているような。

少し間を置いた場所に避けた徳川は、少し息を荒くしながら言う。

「言っただろ……。俺は昔から変わったんだ。無力を嘆き、そして、  
力を欲した。お前とは逆なんだよッ！！」

「嘆いて何になる？ そんな平和主義<sup>バカらしい</sup>考えは、俺はけして認めん  
！」

しだいに熱が籠ってきた織田。その様子を見て、徳川はうつすら  
と笑みを浮かべる。

「俺様……じゃなかったのか？ それとも、その威張った態度は演  
技か？」

「……黙れ愚民。貴様は、俺様には勝てない。それは絶対的だ！！」<sup>けつていしつう</sup>

「いい加減にしゃがれ、織田魔鬼ッ!!」

徳川は怒りをあらわにする。まるで、悪戯をしていた子供を叱る様な言葉で。

「お前も、内心は違うんだろ？ 止めて欲しいんだよな？ だったら、演技をするなッ！ この場所に立つな！ そんな半端な考えで俺と戦うなッ!!」

「……黙れッ!! 俺は……そんな事は思っていない!」  
「だったら、なんで能力を使わねえんだッ!!」

それが決定打だった。織田の顔は歪み、苦痛の表情になる。そして、苦虫を潰したような表情で、急速な勢いで徳川に接近して強烈な打撃を徳川の腹に決める。

「ガハッ!!」

屋上のフェンスに当たるまで飛ばされた。急な不意打ちに反応する事が出来なかった。

そして、織田は化け物のように憤り叫ぶ。

「所詮は逃げ足が速いだけだ……。力の前では無力なんだよ!!!!  
力こそ全ての世界に通用はしない!! それが、俺が知った世界だッ!!!!」

感情を出し切る織田。織田の過去に何があったかは知らない。合わなかった間に何かあったかも知れない。

だけど、徳川は微かに笑っていた。

「それがお前の本音か？」

徳川は倒れたまま言う。

「何……？」

「それがお前の本音かって聞いているんだよ！　そんな理由で夢を諦めたって言うのかよ！！」

よろよろと立ち上がりながら、今度は徳川が叫ぶ。

「黙れ！！　お前に何が分かると言うのだ　ッ！」

ジワジワと接近していく織田。だが、徳川はけして臆せない。

「分からねえよ……だが、これだけは分かる！　お前は現実から目を背けたただけだろ！！」

『黙れ！！』

織田は能力で黙らそうとする。しかし徳川の左手を前に出し、無効にする。

「お前は自分の夢が叶えられない……そう諦めて力に頼ってるだけだろ？」

「警告だ……次喋ったら死ぬぞ……？」

「お前は現実からも夢からも目を背けた！！」

『……黙れ！！』

それでも徳川は倒れない。その左手で能力を受け止める。アブソールド・クライ

しかし織田は重い拳を握り、全力で徳川の頬に向かってぶつける。

しかし徳川は倒れなかった。

徳川はその場に立ち続ける。織田の拳を真正面から受け止めても苦痛の表情さえ浮かべず、織田の瞳を真っ直ぐと見据えて言い放つ。

「諦めんなよ……まだ何もやってないだろ！！ 現実から逃げんなよ！ 夢を諦めるなよ！！」

「何で……お前は立っていられるんだ……？」

呆然とした織田の前に立つ徳川。そして、徳川はその左手を強く握り締め、そして告げる。

「俺は……既に生きる意味を失った……だから、他の奴にはちゃんと生きて欲しいんだよ！！」

辛い過去。それを乗り越えて今が存在する。そして、徳川は続ける。

「お前が怒りに飲み込まれているなら救うまでだ！ その怒りに堪えられないなら、俺が怒りも全部、吸収し<sup>つげとめ</sup>尽くしてやるッ！！」

そして、徳川は、その左手で織田の頬を全力で殴った。戦意が無くなった織田は避けることもせず、その拳を受ける。

そして、織田が倒れた事によって、戦いは終わった。徳川の勝利によって。

**最終話「とある因縁の吸収対皇帝」(後書き)**

この後、エピローグに続きますッ!!



## 一章 エピローグ(前書き)

皆さんのおかげで一万PV突破しました!!  
本当に感謝です!!ありがとうございます!!

## 一章 エピローグ

「あの……これは何の拷問ですか？」

徳川は、もはや徳川専用になった純白のベットで横になっていた。目が覚めた時には、保健室に居た。縄でグルグル巻きに巻かれて

「次お前が運ばれてきてもベット貸し手やんねーからな」

いつもと変わらず煙草を吸っている林先生。

「え、ちょ、それってどう言う事ですか!？」

「お前は俺の機嫌を損ねた。一つ! お前は俺の忠告を無視しやがった。二つ! ……理香ちゃんにフラれた……」

「いや、明らかに二つ目俺に関係ありませんよねッ!? 全くの無関係ですよ俺!！」

そんな徳川に忍び寄る影が二つ。

「縄で縛られた若……やりたい放題……」

「お主も好きじゃのー……燃える……」

何やら鼻息が荒い服部と豊臣が徳川のベットを挟むように立っていた。

「いや……豊臣さん? その言葉、色々と危ないですよ……? てか、服部は既に危ない道を歩もうとするなッ!! それ以上は止めろー!! つ、ついてねええええええええええ!!！」

徳川の悲鳴が保健室の中を響き渡る。

「……………三つ。保健室で騒ぐなアホ共」

徳川がベットで襲われる数時間前。徳川は織田を倒した。

織田は、思いつきり殴られ、屋上の地面に倒れる。そして、ゆっくりと言う眩く。

「……………俺の……………負けだ」

「ふ、ふざけるなあ！」

織田の降参に声を荒げたのは坊主頭の男だった。

「お、お前の存在が無ければ、我々の計画は水の泡になるんだぞ！  
？ それを今更止めるだと！？ ちよ、調子に乗るなツ！！」

坊主頭の男は、狂った狂犬のように喚き、懐から拳銃を取り出す。

「お前なんか……………クソがああああ！！」

その銃口を織田へと向けて、その引き金を引く。

だが、織田は避けようとしなかった。目をつぶり、それを受け入れるかのように、その場に留まる。

「織田ああッ！！」

徳川は叫んで、走り出す。織田が何をするか分かったからだ。

織田は、死ぬ気だ。

罪を償うために、そのまま銃弾を受ける気だ。

納得が出来るか。徳川は内心で叫び、その銃弾を防ごうとする。

しかし、距離が間に合わない。それよりも先に、引き金が引かれたからだ。

徳川が遮る前に、銃弾は織田の額に直撃。

する事は無かった。

銃弾は、織田の目の前で停止していた。そのまま空中で止まっていたのだ。

ここに居る全員が呆然としている中、一人の男性が言う。

「危ないところでしたね」

全員の視線が声の方向を向く。そこには金髪で優しい笑みを浮かべた男が立っていた。

その後ろには、豊臣、服部、北条と見慣れたメンバーが。

「だ、誰だお前ええええ！！」

謎の現象に怯えたように声を荒げる坊主頭の男。それに答えたのは、意外にもイガルスだった。

「困ったねえー。まさか、アンタが戦場に出てくると思って無かったよ、おじさんは？」

イガルスは、本当に険悪な表情で、言葉を続ける。

「レベルファイブ超能力者の『スピリッツ・ユニティ精神統一』の能力を持つ、『ESP臨時総裁』の馬場聖徳さん」

その言葉にほとんどの者が驚愕する。

「な、何でそんな人が……？」

「君達が危ない橋を渡っていると報告を受けましてね。遅かったですが、増援に来ました」

徳川の疑問に穏やかに答える馬場。いつの間にか徳川の背後に移動しながら。

「妙な能力を使うねーおじさん困ったなー。適当に爆弾<sup>ボム</sup>でも喰らうておく？」

イガルスは、そう言うのと同時に大量のサイコロを宙に投げつける。

仲間である坊主頭の男が居るのも構わず、屋上全体に向かって投げつける。

徳川は慌てて左手をかざす。だが、左手を馬場に押さえつけられる。

「何を!？」

答えはすぐに分かった。

彼らの周りに飛んできたサイコロは爆発したが、その衝撃は徳川達に及ばなかった。

馬場が何かをしたのが徳川には分かった。

「大丈夫ですか？」

優しく問いかけてきた馬場に、徳川は頷く。

がレベル5……。

凄……これ

徳川は、純粹に凄いと思った。それと同時に、この人が自分を組織に勧誘したのだ、と思い出す。

爆発のせいで煙が上がっていたが、屋上のおかげで風が吹くため、すぐに煙は無くなった。

そして、イガルスの姿も消えていた。残されたのは坊主頭の男のみ。

「何だよ……お前ら……一体、何なんだよおおおお!!！」

「私たちは、サイキッカー本当に普通な人間ですよ」

そこまで徳川は覚えていた。疲労と過度な運動のせいで目眩がして、その場で倒れたからだ。

その後の事は何も知らない。織田が、どうなったかも。

徳川は危険を逃れ、安全な事を確かめてベットで横になりながら思いつく。

能力を悪用した者は、刑務所に送られるという事を。

織田をせっかく助けたというのに、この結果だ。

「クッソ……」

強く拳を握り締め、悪態を吐く。それと同時に、保健室のドアが思いつきり開く。

「元気がトッコウよッ!!！」

思わず唾然とする。この呼び方をする奴は世界に一人しか居ない。徳川はゆつくりと扉の方を向く。そこには威厳があり、頑丈そうな体つき。

織田魔鬼と北条が入り口に立っていた。

「……………はあ？」

「どうしたんだ？ あ、土産でゲテモノプリン買って来たぞー」  
「俺はトッコウの好みは分かってるからな！」

暢気な北条と織田。思わず疑問の声を上げてしまふ。そして一度落ち着き、そして叫ぶ。

「何でお前がここに居るんだよツ！？ 刑務所に行ってるんじゃないのか？ そもそも何だよ、ゲテモノプリンって！」

薄緑色のドロドロとしたプリンなのか疑わしい物体を指差しながら叫ぶ。

二人はキョトン、として居て徳川が怒り狂ってる理由が分からないみたいだ。

代わりに豊臣が、徳川の疑問について返答する。

「確かに、能力を悪用した者は刑務所に送られる。けど、この者はお主が改心させたろう？ それさえ出来ればOKと言つ事」  
「なんと適当な組織なんだ……。そして、俺にその汚物を<sup>プリン</sup>食べせよ  
うとするな！！」

織田と北条は不気味な笑みを浮かべて汚物を徳川の口元へと寄せ<sup>プリン</sup>る。

動けない徳川には防ぎようが無く、バタバタと暴れる。

「つ、ついてねええええええ！！ オツプ……ウゲエエエ！！」

叫んだ時に調度、口の中へと放り込まれて、その味を良くかみ締める。

(し、死ぬ……。……そういえば、坂本の姿が無いな？)

ふと、坂本の事を思い出す。が、今は汚物フリンの口の中への進入を防ぐことで精一杯だった。

広々とした部屋に高級そうな机や家具が置いてある。

その椅子に座る馬場の前に坂本が深刻な顔をして尋ねる。

「イガルス……。奴らの目的は何ゼヨか……。？ あの組織に潜入し操ってたといえ、利益が見えないゼヨ……」

「予測ですが、目的は【アブソールドクライ吸収の罪】『イマジンブレイカー解明でしょう。あの能力は学園都市に存在する『イマジンブレイカー幻想殺し』と同等貴重です……。しかし、情報を奴らがどうやって探ったか……」

「俺も、あんたがどうやって功歩の事を探ったのか気になるんだがな？」

坂本は真剣な表情で、いつものヘラヘラした調子が全く無く、冷たく言い放つ。

「あなたには関係ない事ですよ。それでは、引き続き徳川君の護衛を頼みますよ？ 奴らの目的は徳川君ですから」

「……………俺はあんたが何を考えているか分からない。あんたが黒



幕じゃないかとでさえ思う」「

馬場に背を向け、出口に向かう。そして部屋から出ると同時に言葉が続ける。

「だがな。あいつは俺の親友だ。その親友を利用するなら、俺はアంతも裏切ってやる」

そして坂本は部屋から出て行ってしまった。一人部屋に残った馬場は、小さくため息をこぼす。

「黒幕……ですか。それも良いかもしれませぬ……」

何を思っているのか、窓の外に広がる空を眺めながら一人呟く。

「これは相手の裏の取り合い。どっちが先に完成できるか……。競争ですね、アレイスター・クロウリー」

## 一章 エピローグ（後書き）

無事に一章を終えることが出来ました！  
これからも二章をよろしくお願いします！！

## 二章 2・1「とある事件と竜天伝説」(前書き)

二章突入です!!ここまで続けられて良かったです……

皆様のおかげで70ポイント達成いたしました!!

一章はバラバラでしたが、二章からシリーズっぽくやってみます!  
では、二章もよろしくお願いします!

## 二章 2・1「とある事件と竜天伝説」

六月の後半。あの学校の戦いから約一ヶ月が経った。

そろそろ梅雨が終わりそうな中、水溜りの側を通った少年の隣を車が横切る。

水が思いつきり跳ねて、少年の衣替えして涼しくなったシャツにかかる。

「ついてねえ……」

黒いニット帽にどこにでもあるような顔。体格は普通で、頭の中も並。

そんな、特徴の無い少年、徳川功歩とくがわこうほは嘆く。

彼の左手を除けばどこにでも居る。唯一の隠れた特徴が彼の左手にはあった。

異能の力が関わっているのならば問答無用で吸収をする『アブソールド吸収の罪』クライ。

その力を持っているせいで、異常能力者対策の機関『ESP』に所属することになった。

「朝から不幸……この後にも不幸が控えている予感……八八八……帰っても良いですか？」

独り言をブツブツと呟きながら登校する。彼はこれ以上、学校を欠席する訳にはいかなかった。

能力者との戦い。魔術師との戦いに明け暮れる日々。そのせいで、保健室に何度行ったことか。

これ以上、出席日数が少なくなると退学の可能性もあると先生に言われているのであった。

それに授業に追いつくために最近、ほぼ徹夜。

「もっ……嫌だあああああああ!!」

今日も、彼の不幸な不幸な一日が始まる予感。

授業中、睡魔に襲われながらも何とか耐え切った徳川。そして放課後になって皆は部活へ行く。

徳川としては部活動こそ、一番の問題だった。メンバーがアレだからだ。

このメンバーだと必ず何かが起こると徳川は考える。そして、今日もその予測は的中した。

「何ですか……これは……?」

部室に入って、そのまま硬直して尋ねる徳川。中には伊達や坂本、豊臣に服部というお馴染みの部員。そもそも、この部活はそれしかメンバーが居ないのだが。

そんな中、徳川は一人、伊達の持っている物を指差し啞然とする。

「可愛くて………つい……」

「いや………ついつい言うかですね……」

いつもの伊達からは考えられないような恍惚な表情を浮かべている。

そして徳川の様子は硬直したままで、他の部員達はその光景を愉快そうに見ている。

「…………あのねえ…………だからって…………ドラゴンなんて拾ってくるなあ  
ああああああああああ！！！」

今日も波乱万丈な一日になります。

部室全体に響くほどの大声を出した徳川。だが、周りは伊達の持つて来た生き物に興味津々だった。

伊達に抱えられたダンボールの中に敷いてあるタオルでスヤスヤ眠っている白くて蛇みたいな生き物。

細長い体についた手足そして翼。全長は15cmくらいだろうか。

「ドラゴンを見るなんて初めてゼヨー」

「…………俺もだよ…………そもそも現実に居るとは思っても居なかったよ……………」

色々な意味で疲れ、グツタリしていた。そんな徳川の気も知らないのか、豊臣はテンションを上げて語り始めた。

「お主ら…………勘違いしておらんか？ これはドラゴンでは無い…………竜じゃ！！ そもそもドラゴンとは西洋の想像上の生き物で邪悪の象徴として、トカゲのような生き物。そして竜とは東洋で神として崇められていて、どっちかと言うと蛇のように細長い生き物。この愛くるしい姿！ どう考えても竜じゃ！！！」

「いや、アンタ最後見た目で判定しましたよね？」

徳川の冷ややかな言葉を無視し、その後も長々と説明している。さらにはアニメの話にまで飛んでいく豊臣のオタクトーク。

他の者は全員ウンザリした表情となっていた。

「お嬢……アニメの話はもう良いゼヨ……」

流石の暢気な坂本も呆れていた。全員が呆れるほどの長々しい説明。

徳川は切実に思う　どこで道を踏み外したのやら。

独り言のように説明を長々続ける豊臣の話は誰も聞かなくなって、徳川は伊達に尋ねる。

「……所で、そんな物どこで拾ってきたんだ？」

「そんな物って……」

徳川は生命の危機を感じる。目の前の抜刀少女が目をギンギンにして、こつちを見ていたからだ。

「今の言葉は撤回するのでまずは落ち着いてくださいませ伊達様……。マジで！　本当に刀で斬られたら俺でも死ぬので！」

何とか伊達の怒りを収め、ちゃんと刀も収めさせてから話を戻す。

「実は、学校に行く途中の小さな路地で……他の組の者をぶっ潰した後に見つけてな」

「……。色々と言いたい事があるんだが、取りあえず……今すぐに捨ててきなさい！！」

やっぱり自分の周りには普通じゃないです、と叫びたくなった徳川。そんな徳川を今にも切り裂く　というか、既に伊達は刀の矛先を徳川の鼻の先へと向けていた。

「お前には血も涙も無いのか……？　雨上がりで寒さに震えている

こんな愛くるしいのを捨ててこいと！」

「いや、マジですいません！ 俺は真剣白刃取りが出来る訳では無いので！ 危ないってツ！！」

紙一重で本気で斬りに掛かってきた伊達の刃を避ける。

「これは合成獣キメラだと思うんじゃないか？ ……？ 今の最先端の科学技術を使えば合成獣キメラなど作れるからの。角は鹿、頭はラクダ、眼は兎、体は大蛇、背中の鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、耳は牛と、それぞれのDNAを混ぜたのでは無いか？ そんな非科学的な事は信じられないのー」

「そいつは夢が無いゼイー。番組でやってたけど、狼男や吸血鬼は居るんだゼイ？ 竜が居ても不思議じゃないゼヨ！ 日本は昔から竜の伝説とか多かったし、実は隠れて現代まで生きていたって事もあると思うゼヨー。昔の絵でも描かれるけど、空想だけであんな上手く書けると思うゼヨか？」

いつの間にか豊臣と坂本は理論的な話を繰り広げていた。  
服部はと言つと

「若の焦り顔……可愛い……」

こいつからは本当に逃げた方がいい気がする、と本能的に徳川は感じた。

「好きにしていいますけど、でも責任を取って飼うように！」

母親のような言葉を言うが、他の奴らは既に徳川の話聞いていない。

どこで飼つかを決める話になっていた。

しよせん俺は空気かけす



ですか。

落ち込む徳川の耳に豊臣の話が聞えてきた。

「ならば、わらわが飼おう！ 責任取って高級ビーフを餌にして、小屋は廃棄された牧場で良いかのう？」

随分と豪華で、自分の生活よりも豊かな生活ができる竜を羨ましく思う。

すると坂本が冗談みたいに軽い調子で言う。

「もしかしたら、竜が肉食になって、大きくなってから人間を食うようになったりしてー……ゼヨ？」

全員の視線が坂本に集中する。痛々しい視線に「あ、あれ？ 何か問題でも？」とオドオドしている坂本に対して、女性陣が声を合わせて言う。

「「そんな事するわけ無いだろうがあああ！！」」

変人でも、可愛い物には目が無いのは同じなんですなー、つものんびりしている徳川の隣では、女子達に首を絞められ、今にも死にそうな坂本。

「豊臣が飼うのは止めたほうが良いかも……」

「私が飼う！ 部屋だって普通だし、食事だって！！」

徳川の提案に素早く便乗して手をあげて主張する伊達。よっぽど飼いたい様だ。

それに、伊達の家だったら大丈夫じゃないか？

徳川が思った時に、服部がさり気なく言う。

「ペットというのは飼い主に似ると言う。……ッ」

勝ち誇った笑みを最後に浮かべる服部。全員が思い出す。伊達が任侠系の組織の娘だということ。

「な、何よその目は！ そんな……迷信よッ！！」

「実例を出そう。私は若のペットだから、良く若に似て」

「ねーよ！ そもそも俺がいつそんな大人がやるような変体プレイをやったんですか！？ 誤解を招くような台詞は控えるッ！」

結局、全員が納得できなかつたので、伊達の家は却下。

そして残つたのは、徳川と坂本と服部。

「爬虫類苦手」

「うおい！？ 二人が脱落したら俺になるのですが！？ てか、お前ら絶対嘘だろ！ 顔笑ってるもん！」

うつすらと笑って、面倒事を徳川に押し付けさせようとしている服部と坂本。

このままだと、完全に徳川が飼う事になる。

すると、部室のドアが勢い良く開き、一人の男が入ってくる。

「お困りのようだな、トッコウよッ！！」

「却下。お前だと根本的にダメな気がする。てか、普通に登場すなッ！」

突然現れた織田を一言で一蹴する。織田にだけは任せてはいけな

い。  
意地でも自分が飼うのが嫌な徳川は、色々と案を考える。

「部室で飼うっていうのは……？」  
「ダメじゃ。ここで飼うとしても、逃げられたらどうする？」  
「その場合は檻の中に入れておけば……？」  
「檻から逃げたらどうするの？それに、責任者が居たほうが保険になるし……」

豊臣と伊達の連合軍によって徳川艦隊は沈没。もう投げやりになった徳川。

「じゃあ初心に帰って捨ててくるのは……」  
「却下……」

全面否定。不幸だ……、と心の中で呟く。  
ため息を漏らす徳川。これは諦めるしか無いみたいだ。

「ついてねえ……」「キユウウウウウ……」

全員の視線が竜へと移る。

竜は、いつの間にか起きており、徳川の声に合わせて嬉しそうに鳴いたのだ。

「……癒される……」

徳川は、その可愛さに癒されて飼うのも悪くないかも、と思う。  
不幸などと一瞬で吹き飛んだ。

そして、名前を呼んでやろうと思ったが、ある事に気付く。

「そついえば、こいつの名前はどつするんだ？」

他の者も徳川の思っていたのと同じ事を考えていたのか、どんな案が出てくる。

「白い悪魔はどうじゃ?」「却下。色々な意味でダメだろ」

「刃苦劉はくじゅうはどうだ!」「伊達さん……。あんたは、この竜りゅうに何を求めてるんだ?」

「竜」

一番適当な答えをした坂本は全員にボコスカ殴られる。

「徳川こ」「お前は喋るな!! 何で、同姓同名のペットと暮らさなきゃいけないんだよ!」

「ならば、ここはペペロンチーノは」「織田のネームセンスに最初から期待してねーよ! てか、お前はさっさと帰れッ!」

織田を追い出し、息切れをしている徳川。全員がネームセンスが無に等しすぎる。

ここは何とか考えなければ、と必死になるが考えた所で出てこないのが徳川である。

頭を抱えながら考える徳川。隣で鼻息が荒い服部を無視しながらも考える。

「……ナイトなんてどうだ?」

必死に考えた末に出たのがこれだ。全員が冷たい視線で徳川を見つめる。

結局、他に何も案が出なかったおかげで、一番まともな『ナイト』が名前となった。

徳川には何故か敗北感が残ったが。

そして、今日の部活は終わった。最後の豊臣の不気味な笑みが気

になったが。

その日の夜、徳川は目の前の光景に心底後悔していた。

「……………承諾するんじゃないかった……………」

竜の食欲は凄まじいと良く分かった徳川。冷蔵庫の中は新品のよ  
うに空になっていた。

「ハハハ……………ついてない……………」

そんな落ち込んでいる徳川の家にも、誰かから電話がかかってきた。

「何の用でしょうか？」

相手は豊臣だった。実に楽しそうな声で、まるで遠足を楽しみに  
している子供のように無邪気に徳川に告げる。

『明日は、部活のメンバーで湖に行くぞい』

明日は土曜日。久々に休める土曜日。ぐっすりと寝れる土曜日。  
買い足しに行くはずだった土曜日。

それは、脆くも崩れ去った。これが事件の始まりだった。

二章 2・1「とある事件と竜天伝説」(後書き)

突然登場した竜の『ナイト』!!

ありなのか……ありなんです!だって二次創作だk(殴

調子に乗り過ぎたかもしれませんね……

何か誤字脱語や、意見などありましたらお申し付けください!

これから竜が、どのように物語りに関わっていくかッ!!

## 2 - 2 彼のスキルは無量大(前書き)

二章に入って題名方式が変わりました。

正直言います。「とある」だけで題名を貫くのは無理ッ!!

こんなチヨロチヨロ変わる小説ですが、お気に入りが増えたり作者はテンション上がりっぱなしです!

## 2 - 2 彼のスキルは無量大

徳川功歩。現在、何故か湖に来ております。

昨日の電話での衝撃発表。何それ、と聞く前に電話を切られてしまい、呆然としていたが次の日になってすぐに分かった。

ボロアパートの前に停まっている黒くて、こんな場所に似合わないリムジン。

もちろん乗っているのは豊臣で、車から出てきて真っ直ぐに徳川の家ドアをバンバンと叩く。

徳川の「近所迷惑ですって！」という悲痛の叫びも空しく、腹を満腹にして畳の上に寝転がっていた竜の子供の『ナイト』を連れて強制連行。これが数分間の内に行われたのだ。

「ついてねえ……………」

いつも通り黒いニット帽は被っており、服装は古着屋で買った安物だ。肩にバツクをぶら下げているが、中身は一匹の竜が入っているなど誰も思わない。

そんな徳川はやつれた顔で呟く。彼は山奥の大きな湖に来ていた。森林に囲まれた青く輝く湖。観光客は大勢居て、徳川もその一人だった。

雄大な大自然の中で一人、徳川は呟く。

「まさか迷子になるとは……………」



徳川は強制連行された拳銃、迷子になっていた。

「ここが湖かあ……」

事は数分前。リムジンで強制連行されて湖へと到着した徳川。そこにはオシャレをした伊達と服部が居た。

二人の服装は言うまでもないが私服。伊達のジーパンは周りが思わず見てしまうほど似合っていた。

そして服部は、少し露出の高いミニズボン。ヘソまで出したシャツ。

豊臣は高級そうなブランドの私服。サングラスまでかけてる。必要以上に目立っている集団だった。

「あれ？ 坂本は？」

徳川は、いつもは騒がしい坂本が居ないのに気付いた。

「坂本は急用があるから後から来るみたいじゃのおー」

わざわざ顔を逸らして言う豊臣を、呆れた表情で徳川は冷たい視線を送る。

「まあ別に良いか……」

こういう事には深く問い詰めない方が長生きできると言う長年の知恵を発揮する。

ただ不満があるとすれば、何故自分がこんな所に連れてこられたという事だった。

「で、こんな所で何をやるんですか？ U M A探してもするんですか？」

「良かるつツ！話してやろつぞツ！ この湖の伝説を……」

『竜天伝説……遙か昔から存在するこの湖。この湖には一つの伝説があった。それは、この湖には白竜が住んでいると言う伝説。その白竜は己の後継者が現れた時、勾玉を地に落として天に帰る』

この話を聞いて徳川は気づいた。自分のバックの中でスヤスヤ寝ている白竜の事を。

「ナイト……」

「そう……もしか、ナイトが伝説の中に出てきた竜かもしれんという事じゃな……」

「にしても、設定が臭くないですか……？アニメや漫画じゃあるまいし……特に後継者のくだりな」

思わず言葉にしたのが豊臣の逆鱗に触れたようで、アニメをバカにするなー！、と殴られてボコボコにされた徳川。女性陣三人は徳川を放って置いて、先に行く事にしたらしい。

「ら、乱暴な……」

最近、周りの扱いが酷い、と感じてきた徳川。そして起き上がったある事に気付いた。

「あいつら……。……どっちに行った？」

ここは入り口なのだが、道が二つに分かれていて湖を一周できる  
ようになってる。

そして、女性陣がどっちに行つたか分からなくなつてた。電話  
をかけてみたが、県外と表示されて繋がらない。

「どうなつてゐるんだ……？」

取りあえず、その内に歩けば出会うだろと思い、適当に道を選ん  
で歩み始めた。

「どうするかね……普通なら服部が探知して来るんだけど……」

そして現在、誰にも遭遇せずに今に至る。

服部には徳川レーダーでも付いているのではないかと思うほど、  
正確にこちらの居場所を当ててる。

しかし、一向に服部が来る気配が無い。今日は調子が悪いのだろ  
うか？

「はあ……無計画にし過ぎだな……」

自分の過ちを反省しながらも、皆を探す。

どんどん突き進むにつれて不安になっていく。出会う人は少なく  
なつていき、とうとう誰にもすれ違わなくなった。霧が出てきて、  
しだいにその不安は恐怖となつていた。

「おいおい……この展開だと俺は誰にも会えずに、そのまま神隠し  
つて事はねえよな？」

独り言を呟き、何とか不安を吹き飛ばそうとする。が、やはり誰にもすれ違わない。

さらに霧は濃くなり、よりいつそう人を探すのが難しくなった。

「……白骨死体になって発見されるっていう死亡<sup>バットメント</sup>だけは本当に勘弁だぞ……」

目的が仲間探しから、人探しに変わっていた。足がガクガク震え、今にも泣きそうな顔。前にも言ったが、徳川は怖いのは苦手だ。苦手のくせに、そういう幽霊<sup>オカルト</sup>などを信じる。

そして、心霊番組だとナイス、と言えるタイミングで徳川の側の草むらがガサガサ揺れた。

「ッ！！？？」

声にもならないほどの恐怖心に包まれ、今にも持ち前の逃げ足を發揮しようとする徳川。

だが、徳川が逃げる前に草むらから出てきたのは普通の少女だった。

歳は12、14程度だろうか。幼さを残した顔立ち。薄い青色の短い髪。だが、少女は何かから逃げるかのような緊迫した表情をしていた。

「大丈……」

声を掛けようとした瞬間、少女が石に躓き徳川の方へと向かって大きくこける。

もちろん徳川は、反応する前にそのまま一緒に転んで地面に激突する。そして苦痛の声を上げる。

どうやら徳川がクツションになったせいか、少女に怪我は無いや

うだ。

「だ、大丈夫……ですか？」

徳川の方がキツそうな声を出しているが、実際は目線のやり場が無く困っていた。

少女の服装はボロボロだった。ただ、布を巻きつけただけのように傷だらけの服。

顔や髪を見ても、そこら中がボロボロになっていた。まるで、ずっと洞窟に居たような。

「……ご、ごめんなさいです」

少女は徳川の事に気付いて、慌てて立ち上がる。そして、オドオドとした表情で小さく礼を言う。

徳川は平気平気、と立ち上が、実際は顔面真っ赤で精神的に危険な状態。

心配な事は服部が運良く見ていないか、という事だ。見られていたら二人の命は無い。

だが、周りは濃い霧しか漂っておらず、人影も何も無い。

「えっと……大丈夫？ 怪我とか？」

「え……わ、私は大丈夫です。あの………すみません………」

少女は律儀に頭を下げているだけだ。

「気にしなくて良いよ。それより、何か急いでるみたいだけど、何かあったの？」

初対面の人にここまで聞くのは失礼だと思うが、見るからに訳あ

りの少女。

徳川は、基本的にお節介だから厄介事に自分から足を突っ込むことが多い。

「実は私……」

そして徳川は後悔する。やはり、不用意に関わってはいけない事だった。

少女は続ける。

「悪者に追われてるんです……」

徳川みたいな人の事を俗に、バカ自業自得と呼ぶ。

「徳川の奴め……どこに行きおつた……」

豊臣はイライラしていた。同じ場所を何度も何度も回つても徳川が見当たらない。

それを後ろから見守る二人の男。

「そんな慌てる事無いゼヨ。功歩の事ゼヨ。また何か厄介事に巻き込まれてるゼヨツ！」

「イライラするのは良くない……牛乳を飲む事をオススメする」

呑気な男と冷静な男。その二人がますます豊臣の怒りの威力を上げていた。ホルテージ

「逆に聞くが、お主らは何故そこまで呑気なんじゃツ!？」

「「……さあ？」」

坂本と腰に刀を帯びた源は一緒に答える。豊臣は呆れてため息しか出ない。

現在は湖の入り口付近で待機している三人。伊達と服部は単独で徳川を探しに行ってしまった。

「お主の頼みなど聞かなければ良かった……」  
「すまない……」

豊臣の呟きに源は申し訳なさそうに謝罪する。

「まあまあ、源もこの場所で行方不明になった妹が心配なんゼヨ？だから、わざわざテロ組織なんかに加担してまで妹を助けようとしたゼヨ！」

坂本たちの目的は実はこの場所で行方不明になった源の妹の捜索だった。

この場所では最近、行方不明事件が多発して源の妹も被害者の一人だった。

それを探してやるという組織の言葉を信じて、あのテロ組織に加担していたのである。

『ESP』でも、こん行方不明事件には能力者が絡んでいると考えているらしい。

「しかし……徳川も被害者になるとは……しっかり監視しとけば良かった……」

その妹を部活と称し、捜索しようとしたんだが逆に被害者が増えってしまった。

湖は現在、豊臣の権力によって封鎖されていた。だから簡単に見つかるはずなのだが、

「あの服部でさえも見つける事が出来ないとは……けっこう大きな力が関係してるかもしれないゼヨ……」

「それで僕に頼んだんですか？」

そこに、一人の少年がやってきた。それは学校での戦いの時に、源の背後にて待機していた少年だった。

「待っておったぞ竹中弟よ！」

「僕の名前は朝日あさひだよ……」

「君は……」

「お久しぶりですね、源さん」

顔は良く覚えていた。しかし、スパイだとは考えていなかった。

「それより、本題に入るゼヨ」

「この近くに何人の能力者が居る……？」

豊臣の問いに、竹中朝日は精神を集中し始めた。

「彼の能力は……？」

実際に少年の能力を見るのは初めてだった。源の問いに、坂本は笑いながら答える。

「アイツの能力は強能力レベルスリーの『地域検索エリア・アクセス』。周囲の能力者を検索サーチする能力だゼイ」



## 2 - 2 彼のスキルは無限大（後書き）

何か事件が起きましたねー

徳川居るところ事件あり（笑）

誤字脱語などありましたら、教えていただくと感謝です。  
これからもよろしく願います！

## 2 - 3 彼女のハートは感無量(前書き)

着々とお気に入りが増えて恐縮の限りです！

外伝というか作者のノリだけで作ったギャグ作品」とある奴らのS  
S物語」の方もよろしくお願いします！！

## 2 - 3 彼女のハートは感無量

「……本当にゴメンなさい」

「ゴメンで済むと本当に思っているのか……？」

「……何を差し出せば良いのでしょうか？」

「……命」

悲鳴が湖にこだまする。今にも死にそうな表情の徳川に鬼の形相で刀を首筋に当てる伊達。

それを側で眺めている少女。何故、こうなったかと言つと数分前。

「悪者に追われてるんです……」

服がボロボロになった少女に、この発言。色々と危ない想像をしてしまうお年頃の徳川。

思わず噴出しそうになったが、深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

「そ、それは……どんな奴に追われてるのかな？」

「……信じて……くれないんですか？」

「いや、信じるけど！ で、でも……やっぱり相手の事は知つた方がいい気が……」

突然そんな事を言われれば、疑つてしまつのは普通だ。それでも、泣きそうな少女に背を向けて立ち去る訳にも行かない。

戸惑う徳川に、少女は抱きつく。

「お願いです……助けてください」  
「な、な、ななななんああああ!!」

突然の事に混乱する。慌てて離れようとするが、動きが止まる。徳川は見てしまった。自分の事を見つめる一人の女性に。腰の辺りに刀を帯びて、顔が引きつっている伊達。

俺、死んだな？

案の定、伊達は予想以上の速さで徳川に詰め寄り、刀を向ける。

「……テメエはどうやらロリ趣味があるみてえだな……？」  
「伊達さん……？ 言葉が恐いですよ？ 見た目だけで判断しないんで欲しいんですけど……てか、俺の話を聞いてください！ 暴力反対!!」

伊達は「問答無用！」と叫んで徳川を斬りにかかるが、持ち前の回避能力で危機を脱出する。それから数分間の逃走劇を繰り広げて、現在の現状へととなった。

結局は徳川は暴力の前に屈したのだが。

「勘違いさせやがって……」  
「ほとんど勝手に暴動を起こしたのでは」  
「何か言ったか？」 「イエス！ マム！ 何も言ってますん！」

そんな軍の上下関係を表したかの様な会話を繰り広げる二人の後を少女は俯いたまま付いて来ていた。

「……何か……親子みたいで」  
「な、なあ、何を言ってるんだおま、お前はッ!!」

言い掛けた徳川の背中を全力で殴りつけて黙らせる。そんな伊達

の顔は真っ赤になっていた。

「俺……もう全てが嫌になってきました……」

「変な事を言うからだろッ！！いきなり親子って……。……まだ付き合っても無いのに……」

最後の辺りは、声が小さくなっていて徳川の耳には聞えず、首を傾げていた。

とにかく、立ち上がり湖の入り口へと向かって歩き出す。

「……それで、何で迷子なんてなっているんだ？ 高校生の男子が」

さっきまでの事を無かった事にするため、無理やり話題を変える。徳川は照れたよう頭を掻きながら答える。

「いや……迷子っていうか……体質状の影響かと……」

「体質？」

「ほら、俺って不幸体質じゃないですか？ そのせいか、影が薄いに加えて地味で……」

そこまで自分で言っつて、自己嫌悪になる徳川。地面に膝をついて、人生に絶望したような形になっている。

「何でも体質のせいにするなよ？ 変えようと思えば変えられる事なんだから」

「分かってますよ！ 努力してますよ！ 幸運のブレスレットとか、お守りとかいっぱい買いましたよ！！」

伊達はうわー重症だコイツ……、と呆れ半分、哀れみ半分の表情を浮かべる。そんな徳川の肩を叩いて、励ましの言葉を投げかける。

「大丈夫だって。いつかは報われるさ……」

「そう言いながら笑い堪えるの止めてくれませんか？ 何か涙が……」  
「泣くなつて男が」

二人は苦笑いをする。そんな二人を少女は見つめている。

「それで、そろそろ話してくれる気になつたか？」

はい？ と疑問符を浮かべる徳川に伊達は詰め寄る。急に話が変えられて頭の中の整理が追いつかない。

そんな彼を構わず、伊達は真剣な表情で告げる。

「あの日からずっと待っていたんだ……二人きりつて訳では無いけど、話せる時間をね」

「あの……だから何の話ですか？ 全然見えてこないんですけど……」

「明智の事についてだ」

その名前を聞いて、徳川は妙な冷や汗をかく。明智を捕らえるため、豊臣たちに利用されて部活と称して夜の学校へ行った時の事。

色々な事があり過ぎて、すっかり忘れていた。そして、不意に疑問に思う。

何で坂本は部外者の伊達と服部を同行させたのか？

普通は部外者に存在を気付かれてはいけない組織『ESP』。しかし、あの日は計算の内かのように、豊臣たちは平然としていた。

「まさか……」

徳川はある事に気付いてしまう。

「おい、どうしたんだよ？ さつきから妙に緊張してるみたいだけど……話は逸らすなよ？」

あの後分かった事は、服部が能力者だったという事だ。その事実  
に徳川は驚いていた。つまり、あの日、一緒に来ていた服部は能力  
者だった。ならば 伊達も能力者では無いのか？

「嘘だろ……おい」

「ど、どうしたんだって？」

「伊達さん！ 最近、変な現象とか起きなかった？ 少しの事で良  
いから何か無い！」

伊達の肩を揺らしながら尋ねる。伊達は顔を染めながらも頷く。  
徳川は唸るように小さく声を出す。ここは本当の事を話すべきな  
のか？

しかし、彼は伊達を巻き込みたくないという気持ちがあった。こ  
れは常人が関わってはいけない世界だ。

「ダメだ……やっぱり話せない……」

「なッ！ 何でだよ！！ アタシ達は仲間だろ！ だったら」

「だからこそ巻き込みたくないんだッ！！」

いつもなら気弱で臆病な徳川が、珍しく声を荒げた。その二人を  
少女はずっと見ていた。

思わず、徳川の怒鳴り声に体が震える。しかし、それはけして怯  
えでは無い。

怒りだった。

「勝手な事を言ってるんじゃない？……巻き込みたくない？ その台

詞は一丁前になってから使うもんだ！お前程度が安く使ってるんじゃないやねえ！ アンタは誰かを守る力はあるのかッ！」

その言葉は徳川の心の奥底にグサリ、と突き刺さる。昔、彼女を救えなかった少年に。

「アタシは……守れなかった……。たった一人の大切な人でさえ守れなかった……。だから、アタシは強くなるうとした！ 友達くらの役には立ちたいんだよッ！！」

自分と同じだ。大切な人を守れなくて、そして乗り越える為に力を欲した。全く自分と同じじゃないか、と彼は唇をかみ締めながら声を黙らす。

だからこそ、自分と同じだからこそ、巻き込みたくない。それだけは変わらない。

黙りこむ二人。それを後ろの少女は静かに眺めていた。二人は気付かない。少女の目が最初からずっと虚ろな事に。そして、傍の茂みが揺れている事に。

「これだけはダメなんだ……。これは普通の人に関わっちゃいけない事なんだ……」

いつまでも意地を通す徳川に嫌気が差したのか、その手を腰の刀へと寄せる。

「いつまでも話さないっていうなら力尽くでも聞き出すよ……それ程の覚悟はあるのかッ！！」



もちろん、伊達は手を出すつもりは無い。こうやって脅せば徳川は話し出すと思っていた。

しかし、徳川ははつきりと言う。

「断る……絶対に巻き込みたくないんだ……俺だって守りたいんだよ……！」

けして折れる事の無い決意の眼。伊達は、その眼を見て諦めた。やはり似ているのだ。

伊達が守りたかった人に。故に、伊達は徳川を守りたかった。

だからこそ、茂みから飛んできた槍を俊足の速さで切り落とす。

「ッ!？」

どうやら徳川は気付いていなかったらしい。茂みの中の存在を。伊達は刀を茂みの方へと向けて、鋭い眼光で睨みつける。

「そこに居るのは分かっているんだよ……出てきな！」

そう言っつて、ゆっくりと茂みの中から出てきたのは、その両手に槍を持った男だった。民族衣装のような派手な服に身を包み、額に赤いハチマキを巻いている。

「お前……やるな……俺と戦えッ！」

徳川は、もしかや少女が言っていた患者では無いかと思う。チラリと少女を見るが、顔が無表情のままだが、微かに震えていた。

「だ、伊達さん！ こいつは悪人です！」

「どう見たって悪人でしょ。そもそも槍持ってる時点で危ないって

……。悪いけど、アンタに付き合ってる暇は無いんだけど？」  
「ほざけ女ッ！！」

急に突進して槍を振るう男の攻撃を軽やかに横にステップを踏んで避ける。そのまま、体を流れる任せるかのように再びステップを踏み、勢いをつけて抜刀する。

その刃は見事に二槍の柄の少し先の辺りを真っ二つに切断する。

「女を舐めるなよ、素人」

こうやって見ると、伊達はとても頼もしい。あくまで、常人の戦いだったらだ。

男は、真っ二つに切断された槍を放り投げる。

「……面白い！！ 面白いぞ女！！ この宮本無限みやもとむげん！！ 全力で御相手するッ！！」

男は実に楽しそうに笑みを浮かべながら、何も持っていない手に新たに二本の刀を出現させる。

「なッ！ 武器が……現れた!？」

あまりの出来事に声を出して驚く徳川。そしてもしやと思う。相手は能力者では無いかと……。  
それと反対で伊達は笑っていた。とても楽しそうに笑いながら言う。

「All right! そっちがやる気だっというなら、こっちも本気で行く」

伊達も宮本も刀を構え、間合いを取る。風が止んだ。次に風が吹いた時に、二人の戦いは始まる。

「予想外の結果が出ましたよ……」

朝日が汗を尋常じゃない程噴き出しながら言う。思わずよろける朝日を坂本が支える。

「無理をさせて済まんの……」

「いえ、大丈夫です。それより聞いてください」

朝日は支えられながらも、重要な事を告げる。

「この地域半径10km以内に能力者は、僕たちと服部さん、伊達さんを除いて、3人居ます……。僕も知らない能力者ですよ……」

それは異常だった。普通のただでさえ珍しい異常能力者が、組織でも組んでいない限り、偶然の三人も集まるのは稀に無い事だった。

「嫌な予感がするぜイ……」

## 2 - 3 彼女のハートは感無量（後書き）

服部さんが全く出てきませんが、たぶん搜索中かと^^^；  
色々と急展開過ぎた気がします……意見など、よろしく願います！

## 2 - 4 彼らのバトルは理不尽(前書き)

現在、お気に入りが増え、作者が有頂天になってきています。

作者の暴走にご注意ください。

## 2 - 4 彼らのバトルは理不尽

「伊達さん！ 戦っちゃダメだ！！」

刀を構える二人に割り込むように止めにかかる徳川。しかし、それが合図となって戦いは始まった。

宮本と名乗った男は、徳川の事を無視して斬りかかる。その二本の刃は確実に徳川の頭上へと振り上げられていた。それを分かっていたかのように伊達は動く。

伊達は、空いた片手で徳川を掴み、横へと放り投げた。もちろん、突然の事に徳川も宮本も啞然とし、徳川はそのまま地面へとうずくまる。

そして、伊達の一閃が宮本の二本の刃を的確に砕いた。よほどの威力でなければ砕くことは出来ないであろう。

宮本は、その光景を目の辺りにして、うっすらと笑った。

「楽しいぞ女ツ！ 女のクセに……強いッ！ 強いぞ女！ その強さを俺は超えてみせる！」

「勝手にほざいてなッ！ アンタみたいな剣の構えもなっていない奴に負ける気は無いねッ！」

宮本は、次は二本の斧を出現させて、その重さを利用して、伊達に突進をした。その勢いで斧を振り下ろしたのだ。

流石に砕くことは出来なかったが、伊達は一本の刀で何とか踏みとどまる。そのまま押してくる宮本の斧を伊達は、全力で押し返す。再び、二人に間合いができ、そのまま硬直する。その二人の顔には笑みが見えた。二人は楽しんでいるのだ。

「何やってるの徳川。さっさと、その子を持って逃げなさい！」

「で、でも……伊達が……」  
「アタシがあんな軟弱に負けるとでも思ってるの？ アタシはすぐに追いついてやる。事情は分からないけど、これじゃあ巻き込まれても仕方が無いでしょ？」

楽しんでいる伊達を邪魔すれば、さらに酷い罰がありそうな気がする。徳川は、さっきまでの気迫はすっかり無くなり、しょんぼりと苦笑いをする。

そして伊達が振り返った瞬間、目線の先に手斧が見えた。投げられるほどに減量されたのが手斧だ。

その手斧が二つ、伊達に向かって飛んできていたのである。もちろん投げたのは宮本だ。

何とか刀で弾こうとするが、伊達には分かる。今からじゃ間に合わない。どうするか考えているうちに、手斧は伊達の目の前まで迫っていた。

だが、手斧は突如見えなくなる。伊達の目の前に遮るように現れた手。その左手は手斧に触れた瞬間、吸い込むように手斧が消えた。そして、伊達は隣を見る。左手を突き出した徳川を。

「本当だったら俺が戦うところだったんだけど……。悪いけど、任せられるか？」

「聞くのが野暮ってもんよ」

お互いに目線で納得し、徳川は少女の手を引いてその場を後にする。

「追わなくても良いの？ まあ、アタシが全力で止めるけど」

「俺の眼中には無い。お前と戦えればそれで良い……いざ尋常に勝負ッ……！」

「既に不意打ちしてるじゃない！」

二人の剣士は戦いを始める。

少女を連れて、戦いから遠ざかるように走る徳川。すると、ふと少女が立ち止る。

「どうしたの？ 足が痛む？」

心配そうに話しかける徳川。さっきから少女の様子がおかしい。妙に顔が青ざめ、まるで何かに押しつぶされそうに苦痛の表情を浮かべている。

すると、少女はかすれた声で、

「こっち……」

と、一人で茂みの中へと突き進んでいく。

「え？ ちょっと待って！ そっちは森だよ！？」

慌てて止めに入るが、少女の歩くスピードは予想以上に速く、まるで道を最初から分かっているかのように的確に通りやすい道を進んでいく。

そして、二人は森の中へと進んでいった。

徳川達が居なくなつて、宮本が出現させたのは二つの槍だった。槍の方が気に入っているのか、宮本は楽しそうに鼻歌を歌う。



「お前みたいな強い奴は久方ぶりだ……日本中を歩いてな！」

「どこの昔の武者修行だよ……それで、少女を狙う理由は何？ もしかして飢えてて犯罪に手を染めているの？」

「？ 少女つてお前の事か？」

首を傾げる宮本の苛立ちを感じたのか、伊達は怒鳴るように言う。

「違う！ さっきの小さな女の子よ！ アンタが追い掛け回していたんでしょッ！」

「何の事を言っている？ 俺は森の中を進んでいたら偶然、刀を持つているお前を見つけたから勝負を挑んだんだが？」

「ッ！」

伊達は、相手の言っている事が信じられなかったが、もしやの可能性を考える。そしたら、こんな人が全く居ない場所で二人だけというのは非常に危険すぎる。

「何の事を言っているが分からんが……とにかく特攻！！」

槍を使って神速の速さで突きを繰り出す宮本。その攻撃を軽々と避けて、そのまま考え込む。

「だったら少女は何から逃げているのか？ そもそも豊臣が立ち入り禁止にしたのではなかったか？」

徳川みために警報が届いていなかったのか、と考えながら横から突き出した槍をかわす。

「それだったら何故警報は届かなかったのか？」

「お前……真面目に戦えッ！ 避けてるだけでは無く刀を振るえッ！」

宮本の本気の一突きを刀の刃の部分のみで受け止める伊達。そして吐き捨てるように言う。

「ああーうつさい……少しは黙って集中させやがれッ!!」

伊達は知らない。少女が森の中から出てきた事に。そして、この森には不可解な現象が起きている事を。

「や、やっと追いついた……ッ!」

森を突き進む少女の肩を掴み、息を荒げながら止まらせる。他人が見れば、今にも危ない事をしそうな男である。しかし、周りには人など一人も居ないから大丈夫だが。

「いきなりどうしたの……? 何か落とし物でもあったの?」

未だに少女の事を疑いもしない。少女の様子が明らかにおかしい事にも気付かない。少女は小さな声で言う。

「……いい……」

「いい?」

何を言っているのか分からなかった。そして少女は再び、次ははつきりと言う。

「もついい」

「え? 何が?」

「もういいと言っているのだよ、少年」

最後の言葉は後ろから聞えた声だった。中年の男のような声。そして後ろを振り返る前に気絶をさせられる。背後から思いつきり首筋を叩かれて。

「今日も一人の少年が犠牲者になりましたとき、めでたしめでたし」  
その人影は楽しそうに笑う。酷く暗い闇を表したかのように。少女は虚ろな目で見つめていた。

「いい加減にしろって言ってるのよッ!!」

武器を次々と出す宮本に怒りを覚え、一撃一撃に熱が籠り、本気と書いてマジと読む、の如くの刀捌きかたなさはを見せる。

宮本は何とか応戦していたが、しだいに異変に気付いた。

(相手の速さと威力が格段に上がっている!?)

それだけでは無い。反射神経も確然と上がっていた。宮本の投げた手裏剣も剣も斧も槍も、次々と真つ二つにしていく。それも正確に。だが、徐々に伊達の息遣いが荒くなるのも分かった。

「はあ……しつこい……。どんだけ武器を持つてるのよッ!?!」

「ッハ! 俺の手は武器倉庫になってるんだよ! じつちゃんが言っていたが、四次元とか言う奴に武器を送って、それをいつでも取り出せるらしい! 原理とかは知らんッ! とにかく、俺の武器庫には100種類以上の世界中の武器が詰まっているのだッ!?!」

「卑怯だツ！ 刀一本で戦ってるこつちの身にもなりやがれツ！」  
突き上げた槍を真つ二つに斬られながらも、次の武器を出す。その武器がやられれば、また新たな武器を出現させる。そうやって宮本は戦っていた。

「ああーもうむしゃくしゃする……本気でやらせて貰おうか……ッ！」  
「ハツハツハ！！ やれるものならやってみや」

宮本が言い切る前に全ては終わった。  
それは本当に神速というに等しかった。さっきまで2m程の距離があつた二人の間合い。それを一歩。

それだけで宮本の背後へと回っていた。驚くべき所はそれだけでは無い。宮本の出した刀、そして宮本の額の赤い八チマキが気付かない内に切断されていた。

そして、伊達の刃は宮本の首元に。

「疲れたあー。つたく、苦勞させやがって……何か言う事は？」  
「……参り……ました」

そして、圧倒的な強さで伊達は勝利する。それを見届けていた者が一人。

「流石じゃのー伊達。そなたも、一流の剣士という訳か」  
「豊臣さん？ いつの間に？」

戦っているせいか、全然気付かなかつた。妙に落ち込む豊臣だが、重要な事を言う。

「このままじゃ徳川が危ない。徳川はどこいったのじゃ？」

## 2・5 我的プランは無頓着(前書き)

久々の更新ですー。やはり忙しくて更新が思うようにできません  
^ ;

なるべく頑張って更新するのでよろしく願いします！

## 2・5 我のプランは無頓着

「ここ……は？」

徳川の目が覚めた場所は薄暗く、湿っぽい空間。たいまつの火のおかげで周りがうつすらと見える。

ジメジメとした洞窟。徳川が起きた場所はどこかの洞窟だった。手足がしっかりと縄で縛られ、自由に身動きが出来ない。しかし、彼の思考は違う事に集中していた。

「何だよ……ここ……」

彼の視線の先には、薄汚れた衣服をし、痩せ細った子供達。何十人も子供達がそこには集められていた。全員、目が虚ろになっており、一切動かない。生きているのかも分からない。

そして、何より目立っていたのは子供達よりも奥で眠る巨大な生き物。純白のような鱗は、洞窟のせいか泥などがついて汚れており、その大きな翼は折り畳まれている。今にも死にそうに苦しそうに眠っている生き物。そこには、竜が静かに眠っていた。

「目が覚めたかね、少年よ」

不意に後ろから声をかけられ、首を動かして声のした方を見る。そこには、一人の男性が立っていた。薄気味悪い笑みを浮かべ、ぐしゃぐしゃになった髪が目立つ男。

「あんたか……俺を背後から襲ったのは……？」

「いかにも。君に用件があってね。少し乱暴だが、ご招待させてもらったよ」

ちよつと乱暴か、と心の中で悪態を吐き相手を睨みつける。良く見ると、男の後ろには先程の少女が立っていた。やはり、周りの子供達と同じで目が虚ろだ。

「まずは自己紹介をするべきだな。我の名前は田沼泥禪<sup>たぬまじゆうみん</sup>。初めまして、『<sup>アフタークライ</sup>吸収の罪』の少年よ」

「ッ！ ……アンタ、何者だ？ 何で俺の左手の事を知っている… …？」

田沼と名乗った男を注意深く見つめる。うつすらと笑い声を出し、徳川に告げる。

「我は、ある科学結社に所属していてな、君の事は耳で聞いた事があるのだよ。だが、我は組織に違反したせい、追われる身となった。酷く惨めな人生だった……。だが、我にも挽回する機会がめぐって来た。見えるだろ……。あの竜が？」

そう言つて、田沼は竜の事を指差す。しかし、徳川は相手の動機が分からなかった。

「科学結社とか意味分からない事ばかりだけださあ……。それに俺がどう関係あるんだ？ それに、こんなにたくさんの子供……。俺と同じように誘拐したのか？」

「その通り。しかし……。君はまだ自分の価値が分かっていないのかね？」

なに？ と徳川は顔をしかめる。田沼は楽しそうに語る。

「あの竜は見ての通り重症だ。組織に受け渡して、土産としようと



したんだが、このままでは組織に渡す前に死んでしまう。だから、子供達という餌いけにえを与えて回復させようと思ったのだが……。どうやら、その必要も無くなったらしい。君のおかげでね」

徳川は田沼の言葉を聞いて拳を握り締める。

「命を……何だと思ってやがるッ！！ そんな理由で、子供達を誘拐したって言うのかッ！ それで、どれほど子供達の親が心配していると思ってる！ 今すぐに子供達を解放しやがれッ！」

自分の事よりも他人の事で激怒する。それが徳川という男だった。だからこそ、田沼は笑っていた。

「自分の事より他人かね？ まあ、君のおかげで子供達や竜は用無しだ。君の望み通り解放してやろう」

そして田辺は顔を歪ませて言葉を続ける。まるでオモチャを手にした子供のような笑みで

「もちろん死体としてな。さぞかし愉快だろう」

「テメエ 人間の感情つてもんを持っていないのかッ！！」  
「黙れクソガキ」

田沼は酷く冷たく残酷な目で徳川を見下す。一瞬で笑みが消え、その場が凍りつく。

「我がどれ程の屈辱を受けたか分かっているのか……ッ！ 組織の者に裏切られ、そのせいで追われる身となった！ 我は完璧だった！！ なのに奴のせいでッ！！」

荒れたように叫ぶ。憎しみをさらけ出し、その怒りを徳川へと向けていた。

「組織は貴様の事を酷く欲しがっていた。ならば話は簡単だ。貴様を組織に渡す。そして、奴を陥れる……フッフ……ハッハッハッ！君には私の生贄となってもらおう」

そう言って、田沼は徳川のニット帽の上に手を乗せる。そして残酷な表情のまま告げる。

「左手が使えなければ、まさに能無しだな。君には、あの子供達と同じ状態になって貰おう。簡単な話、精神を崩壊させ、能を洗脳するだけだ。この『潜在観念』インフェリオリティ・コンプレックスによってね」

そして徳川の意識が途切れる。

少女らは走っていた。徳川を探すため、豊臣と伊達は湖の周辺をくまなく探していた。

「しかし、未だに信じられないね……超能力とか、その変な組織とか」

「変なじゃなくて『ESP』じゃ。そもそも竜など拾ってきたほうが信じるのは難しいと思うのじゃが……」

二人はそんな会話をしながら、徳川を搜索していた。しかし、一向に見つかる気配が無い。

諦めること無く探し続ける二人。

「徳川も隠せざるおえない……か。そんな秘密は普通は誰にも言えないしな……。まあ、目撃してるから意味がないと思うんだけどな」  
「虎とか召還してるのちゃんと見たし」

虎？ と豊臣が疑うような目で見ているのに気付かず伊達は気になる事を口にする。

「それで、アタシの能力は何なんだい？ 妙に反射能力とかが上がつていた気がするんだけど？」

「詳しい事は判明してないが『アクティブティター・デュアル動力倍増』。瞬発力や腕力、体力的な物をサポートする能力じゃな。今度、システムスキャン身体検査をするかのー」

「……変なのじゃないよね？」

「それはやってからの楽しみかのー」

背筋が凍るほどの寒気を感じる伊達。そんな二人の後ろをノロノロと付いて行く、というより連行されている男が一人呟く。

「悪女どもめ……」

宮本は腕を縄で縛られて連行されていた。反抗使用と思えばできるのだが、豊臣にある弱味を握られているため逃げ出す事が出来なかった。

「何か言ったかのう、宮本君？」

「い、いや、な、何も言っていないぞ豊臣！ 俺はけしてお前の悪口など断じて言っていないッ！」

「完璧に言ってるじゃねえか……」

二人に呆れられて思わず唸る宮本。そして、そのまま唸りだす。

「うがあああ！ いい加減に開放しやがれッ！ やっぱりお前らは  
おかしい！ 俺の武器を吸い込むやら、人並み以上の動きをするや  
ら、お前らは化け物かッ！！」

「アンタが言うか、この武器男」

「武器を吸い込んだ、じゃと？」

宮本の言葉に眉をひそめる。そして、考える人のように腕を組み  
小さく呟く。

「……………」  
『アブソールド クライ』  
「吸収の罪」……………アレは本当に能力なのか……………」

ここは……………どこだ？ 真っ暗な暗闇の中、徳川は自分が漂ってい  
る事に気付く。

そして、彷徨っている内に光が見えてきた。

これは……………。どれもこれも、徳川の見覚えがある物だった。

それは、徳川の記憶。

映画のフィルムのように流れていく記憶。悲しく、切なく、楽し  
く。一気に感情が流れ出す。

「これはこれは、随分と愉快的な人生を歩んできたみたいだね」

その声は自分の真上からも聞え、真下からも聞え、全方向から聞  
えた。どこに居るか分からないが、その声が田沼の声だと分かった。

「人というのは、自分の過去「コンプレックス」に触れられると、想像以上に壊れる。  
それは人間共通の特徴だ。特に、子供の頃など一番時期が良い」

楽しそうに喋る田沼。徳川の頭は酷くボンヤリとしていて、話の

内容など頭の中には入っていかなかった。しかし、これだけは感じる。嫌悪感。田沼の声は酷く徳川の気持ちに突き刺さる。

「これだから人を壊す時の快感は素晴らしい。相手の過去を弄くり回し、そして崩壊していく人格。これこそ、人間の本質なのだと感じるよッ！！」

声を荒げて叫ぶ。徳川は、しだいに意識が埋もれていくのに気がついた。このままだと、自分が一生浮き上がれない闇に埋もれる気がする。

「さあ、早く壊れたまえッ！ このまま我の礎いしすえとなれッ！」

「そいつは困るな！。うん、本当に困る。これはどうするべきだと思っ？」

誰だ？ 徳川は、危うく闇の中に溺れる寸前で覚めた。真っ暗な空間に漂う徳川と田沼。その間に割り込む様に現れた少年。

「さて、覚悟はできてるかな？」

銀髪の少年は楽しそうに笑いながら告げる。

2・5 我のプランは無頓着（後書き）

またまた新展開くくどんだけ読者に気にさせれば気が済むのやら  
笑）

2 - 6 奴のアクトは未知数(前書き)

皆さんー未だに原作キャラが出なくてすみません。  
やっぱり一年前という設定がダメだったんでしょうか……

## 2 - 6 奴のアクトは未知数

「さて、覚悟はできてるかな？」

『ソイツ』は楽しそうに穏やかな笑みを浮かべる。

銀髪の長い髪に、吸血鬼の様な赤い瞳。全身が真っ黒でとても人間とは思えない。

田沼は目を見開き動揺していた。

「な、何故だ……何故……何故ここに第三者が存在する！？ ここは小僧の精神世界だツ！ 我と小僧意外は存在するハズが無い……なのに何故貴様は平然と存在している！？」

混乱しているせいか、喚くように叫びつつ『ソイツ』から逃げるようにのた打ち回る。

己の現実を否定するかのよう<sup>現実</sup>に存在する『ソイツ』はゆっくりと告げる。

「何故って？ そんな質問かい？ 答えは簡単さ」

笑っていた。『ソイツ』は楽しそうに狂気的な笑みを浮かべる。

そして一瞬で田沼の目の前に移動して優しく頬を撫でながら告げる。

「ここが僕の居場所だからだよ、邪魔者」

その手を強く握り締め、鈍い音と共に田沼の顔を握り潰された。しかし、血は一切飛び散らなかった。

顔面が潰れた田沼を放り捨て、『ソイツ』は徳川の方へ振り返った。



「やあ。こんにちわ、かな？」  
「、、」

呆気なく動かなくなった生物。徳川の目の前で人が死んだ。そのシヨックは徳川の心を大きく揺さぶった。

動揺のせいで、足も動かず、口もろくに動かせない。ただ、目の前の奴は平然と笑っていた。命を奪ったと言うのに、全く気にした様子も無く笑っているのだ。

それが彼には許せなかった。

「あれえ？ 怒ってるの？ もしかして、この男に同情とかしちやったかな？」

「違う……違えよ……。お前は……何者だ？」

その言葉には色々という意味が込められているのだろう。それを分かっているのか、『ソイツ』は小さく鼻で笑って答える。

「『僕』は『君』であって、『俺』は『お前』だ。『我』が『貴様』であって、『私』が『貴方』でもある」

「……どういう意味だ？」

「分からないかな？ 説明すると、初めまして『徳川功歩』。そしてお久しぶりです『主』よ。僕は君の影でもあって、主の刃チカラでもある。これで分かったかな？」

その言葉で気付く。徳川は、ゆっくりと相手の名を呟く。

「お前は……『アブソルデ吸収の罪』……。そうだろ？」

「正解正解大正解 にしても、この名前は長いと思わない？ 気軽に『クライム罪』って呼んでよ」

「久しぶりとはどういう意味だ？ 俺とお前は会うのが初めてのはずだけどな」

徳川の表情は酷く曇っていた。いつもの様な優しい口調では無く、相手を屈服させるかのようにキツイ口調。

そんな彼の様子をお構い無しにクライムは説明する。

「僕の事を忘れたの？ まあ、アレは会ったに入ってないかな……君も、色々あつて忘れちゃったかな？ それに君は幼かったからしょうがない。だんだん昔に戻ってきてるみたいだし、その内に思い出すかもね？」

「自問自答してるんじゃないやねえよ。俺の質問に答える。……お前は……俺なのか？」

認めたくない事実。だが、結果は目で見て分かる。目の前の者は自分と全く同じ顔をしている。まるで鏡に写ったように瓜二つだ。

先程の言葉も、その事を言っていたのだろう。

「だとしたら……この左手は俺が作り出したものなのか……？」

「それは思い込みだよ徳川君。そんな理想的に世界は出来ちゃいない……全ては絶望の中で出来てるんだ」

そして『クライム』は背筋が凍るかと思わせるほどの冷たい声で言い放つ。

「だから、君の体も僕が貰っちゃうね」

黒い両手が蠢き、それが鋭い刃の形になる。まるで死神が持つ鎌のように禍々しい二本の刃。

そして真っ直ぐに徳川を見つめて、恍惚な笑みを浮かべて、動き

出す。

「君の存在が目障りなんだよ……君の首、もうーらったッ！」

大きく刃を横に振る。その刃が徳川の首を的確に捉えた。

かと思われた。しかし、それは空を掠めた。徳川はしゃがんで刃をかわしたのだ。

「……やっぱり、認められねえな……お前が俺だって？ 影だって事は信じてやるよッ！」

しゃがんだ体勢からカウンターで拳を上突き上げる。丁度相手の横腹に命中し、奴は呻き声を上げて倒れる。

「俺はな、こんな所で死ぬ訳にはいかないんだ……ッ！」  
「……君は何も分かっていない。この左手が意味する事を、僕が存在する意味もねッ！」

再び突進して両手で切り込んできた。だが、手馴れたように徳川は横に避けて、そのまま全力で蹴りを入れる。

よろけながらも、奴は立ち上がる。まるで、殺し合いを楽しんでいるのか様に笑いながら。

「君みたいな、何も知らないお子様には退場して貰いたいんだけど？」

「だったら教えてもらおうか……その意味とやらをッ！」  
「僕に勝つ事が出来たらねッ！」

飛び上がって刃を全力で振り落としてくる。それを後ろに下がっ

てかわすが、相手は分かっていたのか、前に刃を突き出す。

徳川は通用するか分からないが、左手で防ごうとする。

が、左手の効果は通用せずに刃が突き刺さり、呻き声を上げる。それを気にせず、刃を無理やり抜き取ったせいか血が飛び散った。力強い眼差しで奴をにらみつけながらも間合いを取る。

「ツクソ……遠慮つてもものはねえのかよッ！」

腕の激痛に耐えながらも、精一杯叫ぶ。

しかし、奴は気にした様子も無く、再び斬りかかってきた。

ツチと、舌打ちをしながら、紙一重でかわしていく。わざと相手の動きに合わせてギリギリの所で斬撃を避けているのだ。

「随分と余裕だね。僕に殺されたいの？ その方が手っ取り早く体を奪えるから良いんだけど」

「全然余裕なんて……ねえよ!!！」

その時を狙っていたかのように徳川は動き出す。二本の刃の間を縫って、右手の拳を相手の顔面へとめり込ませる。

その衝撃で、奴は後ろへと吹き飛ぶ。相当の威力があったようだ。

「お前は俺の真逆だ……。平気で人を殺し、平気で人に殺意を持っている……。俺を狙う理由も、何でお前が存在するのも詳しい事は俺には分からない。だがな、俺は絶対にお前を認めない！ お前の全てを俺が否定してやるッ!!！」

宣言するように奴に向かって言い放つ。それを聞いて、奴は笑い出した。その笑いは、楽しくて笑ってるのでもなければ、無理に笑っているのでもない。狂気に満ちた笑いだ。

「ハハハハハハハハッ！！ 僕は、君と全く同じ考えだよッ！ 僕も君を認めないッ！ 現実から逃げてるのは誰だろう？ 彼女を失って、それで人生やり直す？ 何を幻想を抱いているんだい？ 君は決して現実には帰って来れない。それが君の招いた運命だッ！ これこそが、君が作り出した心の闇だああああああッ！！」

『クライム』の体は暴走するかのよう蠢き始める。まるで、何が生まれるかのよう。

「僕は絶対に君を認めないッ！ いつまでも夢見がちな少年なんか、生き残れると思ってるのかい？ そんなの無理だッ！ ……神様は残酷だ。こんな無垢な少年に運命を背負わせるなんて……だから僕が君に代わって背負ってやるッ！！」

そう言いながらも、『クライム』の体は蠢きながら大きくなっていく。

「これが闇だッ！ これが真実だッ！ ここには常識なんて言葉は通用しないんだよッ！！」

それは黒き漆黒の竜だった。白銀に輝く鋭利な角に、血の様に真っ赤に染まった瞳。

それが、徳川が無意識の内に作り出した心の闇だった。

「……心の闇か……。いつの間にか作ってたんだろっな、こんなの……」

それでも徳川は臆せずに進む。漆黒の竜に自分から歩み始めていた。

「確かに、俺は彼女を失ったことで深く傷ついたかもしれない……けどなあ、それ以上に俺は彼女の最後の言葉を守って決めたんだッ！俺は、彼女の分まで幸せになるって決めたんだ！だから、俺は絶対に死なない！死ねないんだッ！」

そのまま漆黒の竜に向かって走り出す。竜の攻撃をかい潜り、そして相手の懐へと入り込む。

「たとえ間にわが身が飲み込まれても、俺はそれを超えて吸収し尽くしてやるッ！」

そして左手で竜を殴りつける。通用するとは思ってなかった。それでも、思いは伝わった。

流の動きは止まり、二人は時間が止まったかのように静止していた。

「……君は結局、どう足掻いたって逃げる事はできないよ。それだけは覚悟しておくんだね」

竜の体はしだいに薄れていく。それは、奴の死を意味するのか何も分からない。

「全く、この前の傷も癒えてないのに無茶させるね？僕にどのくらい働けって言うの？」

「急に軽口になりやがって……シリアスな雰囲気か台無しじゃねえか……」

全速力で走ったせいか、全身の緊張が抜けて、その場に座り込む。

「今回は僕のほうが時間切れだったから見逃すけど、次こそは君を

殺して、人格を奪う。絶対にだ。また会える日を楽しみにしてるよ……」

「俺もだ。次こそは勝って、全部知っている事を吐かせてやる……。ここまでやっておいて、何も知りませんっていうオチはねえよな？」

奴は笑いながら、その質問に対するの答えを告げる。

「心配しなくても大丈夫だよ。そんなに信じられないなら一つ良い事を教えてあげようか？」

体が薄れていく中、奴は心底楽しそうにしながらゆっくりと言う。

「君の左手は、未だに本当の力を発揮していない。副産物みたいなものさ」

なに？ と驚いたように立ち上がる徳川は無邪気に笑いながら最後に言った。

「ここから先はゲームをやってからの楽しみ せいぜい殺されるなよ。僕以外にね」

そして奴は消えた。それと同時に、徳川の意識が朦朧とし、再び意識が飛んだ。

## 2 - 6 奴のアクトは未知数（後書き）

《キャラ紹介》

さかもと  
『坂本 龍平』  
りゅうへい

> i 1 1 6 3 0 — 1 5 6 2 <

誕生日：1月3日 歳：15 特技：狙撃 特徴：能天気 ヘッド

ホン

能力：音速疾風  
サウンド・ウインド

特徴：周りの空気を操って、空気圧縮など突風を巻き起こすなど出来る。

徳川のクラスメイトでいつも笑顔を浮かべている茶髪の少年。その頭にはいつも大事そうにヘッドホンを被っている。見た目によらず、徳川よりも成績が良い。

その歳で豊臣のボディガードをするほどの実力の持ち主。ちなみに豊臣の事を「お嬢」と呼ぶほどの仲良らしい。（本人談）

『ESP』の新人ながら、その仕事はプロとも言えるほどの実力を発揮している。

木刀と拳銃を使い分け、相手を確実に戦闘不能にさせてきた。いつもは、ゆったりとしたマイペースぶりを発揮している。



## 2・7 この事件のエピローグ（前書き）

何か全員をガツカリさせてしまったようですね……すみません。

こんな小説でも90ポイント突破させてもらいました！ありがとうございます！  
ございます！

どうか、原作キャラとのコラボをお楽しみにしてください！

## 2・7 この事件のエピローグ

「、」

目が覚めた場所はやはり洞窟だった。先程までの事が夢だったのかと思える。

「……それで、服部は何をしているのでしょうか？」

自分に体に馬乗りになるように座っている服部に向かって呟く。徳川の目が覚めた事に気付き、いたって冷静に答えた。

「若の事を発見して、それで起きそうになかったから襲おうとしたら起きてしまった。非常に残念」

「残念じゃねえよ！ 俺の意識が失っている間に何やろうとしてるんだよッ！！」

「具体的に言つと」「それ以上は何も言つなあああああ！！！」

やっと実感が湧いてきた。自分は、いつも通りの正確に戻れたのだと。

それよりも色々気になる事があった。田沼と子供達と、あの巨大な竜だ。辺りを見渡すと、案の定で近くに泡を吹いて倒れている田沼を発見した。

(死んでいなかったのか……)

どこか安堵の気持ちがある事に気付く。少し自己嫌悪しながらも、子供達と竜の方を見る。

先程と変化は無く、子供達の目に生氣は戻っていなく、竜も苦し

そうだった。

「この竜は……もしかしたら……」

そう言つて、服部に縄を解いてもらいバツクの中から幼竜のナイトを取り出した。

キュウウと、無邪気な鳴き声あげ、首をブルブルと振る。ずっとバツクの中に居たせいで色々と不満を感じていたのだろう。

徳川の頭によじ登り、ニット帽の上でうずくまる。

ゆっくりと落とさないように徳川は巨大な白竜へと近づいていった。

「やっぱデカイ……」

近くで見ると、それは壮絶な光景だった。狭い洞窟のせいか、その白竜が異様に大きく見える。

しかし、その姿は弱弱しく今にも倒れてしまうのではないかと心配になる。

すると、徳川の足音で目が覚めたのか、竜はうつすらと黒い瞳を見せる。

その瞳は細く、真つ直ぐと徳川を見すえていた。

「言葉つて……通じるのか？」

悩みながら、一応声をかける。すると、その竜は何かを考え出したのか、瞳を強く閉じる。

『この声が聞えるか、人の子よ』

それは心の中に語りかけるように響いた。一瞬で竜が語りかけた

のだと気付く。

「こんな事なんて出来るのか……やっぱ竜は凄いな……」

素直に感心していると、竜はクスクスと笑い出した。

『お褒めの言葉として受け取っておこう。それよりも、私に何か用があったのではないか？』

「そうだ。この頭の上に乗っている竜。こいつはあなたの仲間ですよね？」

第三者から見れば徳川が独り言を呟いている風にも見える。その所は見ているのが服部だけなので、あまり気にしている様子は無かった。

『その通りだ。その子は、一族の最後の生き残りとも言うておこう。改めて感謝させて貰う。ありがとう、人の子よ。我が娘を保護をしてくれて』

思わず徳川は嘖き出す。性別とかは気にした事が無かったから、メスだとは思っていなかった。

「俺が拾った訳じゃないけど……とにかく何があつたんですか？」  
『見て分かると思うが、私の命は長く無くてな。そんな時に洞窟で暮らしていた私たちの前に、その田沼と名乗る男が現れた訳だ。私は、もう動く事もできない。せめて娘だけは逃がしたが、私はこのザマだ。私も命も残りわずかだ……君になら娘を託す事ができる』  
「そんな……まだ諦めちゃダメですッ！ 知り合いに医者が居ますから、そこに行けばきつと」

その言葉を否定するかのようには白竜は首を横に振る。

『人の子よ。己の命の最後と言うのは、本人が一番分かるものなのだよ。私はもう疲れたのだ……最後に心残りだった娘の顔も見れた。既に私には心残りは無いのだ』

徳川はただ、黙って心の中に響く声を聞いていた。

白竜は、徳川の頭の上に乗っているナイトに頬を擦りながら言う。

『後の事は頼んだぞ、人の子よ。そして、無理な願いをしてすまない……』

白竜は微笑んでいた。それは人間の徳川でも分かった。そして竜は、地面に寝そべり、ゆっくりと瞳を閉じた。

「ちゃんと……守り抜いて見せます……」

徳川は願うように頭を下げて、冥福を祈る。服部も、白竜が亡くなった事に気付き、徳川と同じく頭を下げる。

そして二人に見送られて、白竜は天へと登っていった。

しかし、一人だけ違っていた。そいつは、泡を吹きながらも立ち上がり、狭い洞窟の中で叫びだした。

「ふざけるなああああああッ!!」

先程まで倒れていた田沼は立ち上がり、目の前の光景を見て絶叫する。

雄たけびを上げながら田沼は徳川へと押し掛かり、その首を締め付ける。

「クツソツ!! 人の計画を邪魔しやがって、この化け物があああ  
あッ!! 今すぐに殺してやるッ!」

懐から拳銃を取り出し、それを徳川へと向ける。だが、徳川の方  
が動きが早かった。

「邪魔してるのはお前だろうが」

徳川は両手を使って、田沼の拳銃を持った手を捻り潰す。その力  
は怒りが込められ、力は絶大だった。

田沼は、苦痛を訴え拳銃を離す。が、徳川は許さない。

「今すぐに子供達の洗脳を解け、今すぐだ」

その声は酷く冷淡で、今にも田沼を殺しかねないほどの殺気に向  
けていた。

だが、徳川の手を優しく服部が包み込む。

「若……落ち着いて。そんなの、全然若らしくない……」

その言葉で徳川は覚める。手を離して、悶える田沼を見つめる。

自分は、何をやっているんだ ? 突然、徳川は嫌悪感を感  
じる。

この感じは、『クライム』と向かい合っている時と同じだった。  
しかし、その嫌悪感自分へと向けられている。

まるで、自分が『クライム』になったような感覚。

「何なんだ……?」

自分の身に何が起きたか分からず、徳川は呆然としていた。その瞬間を、田沼は見逃していなかった。ポケットの中に手を突っ込み、何かを弄る。それを目撃した服部は、洞窟の異変に気付いた。

「これは……若ッ！　ここは危ないッ！」

それと同時に徳川も気付く。洞窟全体が揺れている事に。田沼は笑いながら叫ぶ。

「ハッハッハッハッ！！　このまま全員道連れだッ！！　我には生きる道が無い。……なのに、何故こいつらには未来があるのだ！？　そんなのおは可笑しいッ！！　我こそが選ばれた天才エリートなのだよッ  
！！！」

こいつッ！　と、殴りそうになったが、服部に止められる。それよりも、子供達を非難させる事が先決だった。

「これでは間に合わない……せめて若だけでも……」

服部は最後まで徳川の事を心配している。洞窟の中の揺れは大きくなり、しだいに上から土砂が降ってくる。

どうするか考えるが、その時間さえ勿体無い。すると、不意に徳川の袖を何者かが引っ張った。

「君は……」

それは、最初に湖付近で出会った少女だった。その少女はゆっくりと小さな声で言う。

「掴まって……」

へ？ と徳川が疑問符を思わず言う前にそれは起きた。徳川と服部と少女、そして子供達の体が急に空中に浮いた。

そして、猛スピードで出口へと向かって飛び出す。誰もが夢を見る空を飛ぶと言つのを、実現したようなものだった。

だが、現実とは違う。

「ちょッ！ 危ッ！ って、っがッ！」

意外と運転は乱暴で、たまに天井に頭をぶつける。それでも、空中を飛びながら全員が洞窟から脱出する事ができた。

「……悲惨な程に泥だらけなんですけど……」

森の中に降り立ち、改めて泥だらけの徳川は呟く。少女は、どうやら意識が戻ったらしく、自分が能力者である事を徳川達に告げた。

「すみません……」

「泥だらけの若……意外と良いかも……」

お前は何でも良いんだろッ！ と、徳川の叫びが森全体に響いた。これで、湖の神隠し事件の幕が下りた。

「兄弟揃って能力者ですか……非常に珍しいパターンだと思いませんか？ それに、源兄弟は『ESP』に協力すると宣言してくれましたし」

「全ては思い通りか？ 馬場総裁さんよ」



馬場と坂本は本部の一室で向かい合って座っていた。

臨時ですよ、と馬場は一言言っ、坂本の目を見る。その瞳には微かに敵意も見えていた。

「お前は、一体何を考えているんだ？ 俺に功歩の護衛をしておけと言っておきながら、わざわざ功歩を敵の元へと向かわせる。これは俺への挑戦状と取っていいのか？」

「まさか。そんな考えではありません。これは全て偶然が重なっただけです。それに、私一人に組織を動かす程の権限はありませんからな」

どうだか、と悪態を吐く。坂本は、話すのにウンザリしたのか、部屋から出て行くこととする。

そして去り際に馬場に聞えるように呟く。

「一つだけ忠告しておく。俺の仕事は功歩の護衛だ。お前らが、功歩に何をしようとしているか分からないが、牙を向けるとなれば遠慮なく俺は組織に喰らいつく。それを覚悟して動くんだな」

それが言いたい事だったのか、坂本は部屋からズカズカと出て行った。

馬場は長いため息を吐き、丁度良く鳴った携帯の着信に眉をひそめる。

「もしもし、私は忙しいのですが？」

『そないの知りまへーん』

聞えてきたのは陽気で、どこか酔ったような関西弁を使う男の声だった。

「君に電話番号を教えたのは間違っていたかな……」  
『そないつれへん事を言うなよッ！ 旧知の仲やる』

馬場は少し顔をしかめながらも会話を続ける。

「用件は何かな？ 君の嘘なら聞き飽きているのだが」  
『ホンマに冷たいな！ 取りあえず用件は簡単だ』

少し間を置き、静寂が訪れる。それに似合った声が響く。

『彼の「<sup>アブソールド クライ</sup>吸収の罪」についてだ。お前が言ったように調べてみたが、魔術サイドにはそんなモノは存在しない』

「……………」  
『本当に学園都市は何も知らないと言い張っているのか？ ワテの情報が正しいなら、似たような能力が学園都市には存在すると聞いているが』

「統括理事長は断固否定しています。お互いに、腹の探り合いと言った感じでしょっかね……………」

そして馬場はククク、と笑う。まるで楽しんでいるかのように笑っているのだ。

「どちらも考えている事は同じという事ですよ。ただ、趣旨が違うだけでね…………」。私は、どうもこういつのは苦手です……………」

『嘘つけー。君には似合っとするよ？』

「……………」  
『う、嘘嘘ッ！ 冗談やってッ！ それより、耳寄りな情報を持ってきたでッ！』

相手の無言に恐怖を感じたのか、急に話題を変える。

『京都の話し何やけど』

それは、這いずるように土砂の中から湧き出た。それは人の手だった。次は頭、胴、下半身と一人の人が這い出てきた。その者の名は田沼。

「生き……てる……。我は生き残った……ッ！ やはり、我はこんな所で死なないのだッ！！」

生きてる実感を得て、喜びのあまり、両手でガッツポーズを取る。不意に、田沼の両手首が綺麗に切断される。

真っ暗な夜の中に光る月を、覆い被すように真っ赤な血が当たり一面に飛び散る。

「ッ！？ ギイがアアアアアアアアッ！！」

あまりにも突然の出来事と電撃が走るような激痛に、うずくまっ  
て叫ぶ。

「全く持ってその通りだな。貴様みたいな裏切り者は、この手で殺さなくては気が済まん」

暗闇の中から声だけが響く。その声を聞いて、田沼は怯え始めた。

「お、お前は……石田いしだッ！！」

「貴様は既に用済みだ。役にも立たん。最後のチャンスも見逃した」

そして、何かが唸るようにガシャガシャ、と音を立てながら田沼に迫る。

「裏切り者には血の裁きを」

そして闇が赤く染まる。

## 2・7 この事件のエピローグ（後書き）

一応、湖事件編は終了です。でも、二章が終わった訳ではありません  
ん。

ぶっちゃけ、書きたかったのはこの後のストーリー何ですよー  
早く書きたくてウズウズしております（笑）

次回もよろしく願います！

### 3 - 1 裏の世界で暗躍する者の休暇（前書き）

皆さんの応援のおかげでついにPV2万突破しました！！  
ありがとうございます！

それでは、「とある常識の異常能力」をお楽しみください。

### 3 - 1 裏の世界で暗躍する者の休暇

『七月二十日 AM 4:30』

暗い路地を一人、走る男が居た。その男は何かから逃げるように後ろの闇に怯えながら走っていた。

その表情に余裕は無く、絶望によって顔を歪めていた。

男は走り続ける。すると、後ろから声が聞えた。

「随分と怯えてるじゃねえか？ 夜は一人じゃ眠れないタイプか？」

闇の中から響く声。逃げる男は、さらに顔を歪ませて必死に逃げる。

それを見て、後ろから追いついている黒髪の少年は笑みを浮かべる。

「本当に俺から逃げれると思っているのか？」

その一言は、男を絶望の淵へと追い込む。人間というモノは、己の命の危機に直前すると、実に面白い行動をする。

追われている男は、言葉になっていない声で絶叫し、周りに聞えるように叫ぶ。

そんな行動を見て、少年は楽しそうに笑う。そして心の中で呟く。

なんて無駄な事だろう。

こんだけ騒ぎを起こせば、一人くらいが気付いてもおかしく無い。しかし、現実には誰も気付く事は無く、誰も助けには来ない。

「そろそろ諦めたらどうだ？」

追われる男は、さらに勢いを増して真っ直ぐに路地を走る。

後ろから聞える声に耳はかさず、ただひたすら走り続ける。後ろを振り返り、こんなの夢だと信じたいが、彼には振り返る勇氣は無い。振り返ってしまったら、この悪夢は現実になってしまうからだ。しかし、現実とは実に残酷だった。

目の前に広がる壁。その路地は、そこで行き止りになっていたのだ。

すると、ゆっくりと後ろから足音が聞えてくる。そして、その足音と共に、少年は告げる。

「もう鬼ごっこは終わりかあ？　じゃあ次は大人の遊びをしようじやねえか」

声は実に楽しそうで、ゾットするような声だ。覚悟をして、男は後ろを振り返った。

そこには一人の少年が居た。黒髪に焼けた肌。どこにでも居るような少年。だが、それは彼の本性を知らない者だけが言える特権だ。男は見てしまった。少年の本性を。少年の異常さを。だから男は酷く怯えていた。

そして、壁に寄り添うように下がり、隠しておいたサバイバルナイフを躊躇い無く全力で少年に投げつける。

軌道は真っ直ぐと少年のこみかみの部分に飛んでいた。

だが、少年が手を上げ、それを防ぐように顔の前にやる。実にゆっくりとした動きだ。やる必要も無いと言いたそうなダルそうな少年。

だから少年は普通じゃなかった。ナイフが少年に衝突した瞬間、そのナイフは急に何かに引っ張られるように地面へと勢いを増して落ちる。

「見たんだよな？　俺の能力チカラを？　分つーかんねーなあ。何でそん



な無駄な事をするんだ？」

少年は傷一つ無い。逃げている男も怪我などは一切していない。しかし、精神的には完全に敗北していた。

この少年には何をやっても勝てない。認めたくないのに、脳がそう判断する。逃げる事を必死に考えるが、少年は構わずに近寄ってくる。

「しかし、いきなり物騒だよな？ 金髪に修道服を着てるから、いかにも聖職者って感じなのに。やっぱ、見た目で判断するのはダメだなー」

のんびりと話す少年に、恐怖を感じる。まさに少年は恐怖の塊だ。金髪の男は震える声を絞り出し、やっとの思いで言葉を発する。

「あ、貴方の目的は……？」

あん？ と少年は頭を掻きながら適当な返事をする。そして質問の意味が分かったのか、急に高笑いをしだし、そして少年は話す。

「俺の目的？ そいつは難しい質問だな、オイ。まあ教えてやるよ。簡単だ。俺の目的は最強って奴を潰したいんだよ。この手で……。生半可な気持ちじゃ達成できないんだよなー。だから手伝ってくれないか？」

少年は、男のすぐ傍に来て囁くように告げる。

「役割を聞きたいよな？ 簡単だ。テメエみたいな哀れな子羊は、大人しく俺に喰われれば良い。な？ 簡単だろ？」

ガクガク震える男に優しく手を添えて、グシャリという音と共に一人の人間が消えた。

少年は顔に付いた赤い液体を拭いながら笑顔を浮かべる。

「こつやって狼に襲われた子羊は、一匹残らず食われました、とさ。めでたしめでたし」

少年は笑う。その笑い声は、闇に潜む怪物のように、ずっと闇の中で響き渡った。

『東京某所 七月二十日 AM 6:21』

ここでも少年が走っていた。

黒いニット帽に何の変哲も無い服装の少年、徳川功歩は暗い路地を走り続ける。

彼は東京の高校に通う高校一年生だ。

昨日まで、猛暑の中を校長の長話を生死を彷徨いながらも聞ききり、先生の出した宿題の量に絶望し、明日から休みだー！ と、叫んでいるような普通な高校生だ。

今日は7月20日。夏休みの初日の朝、彼は太陽が昇る前の時間から走っていた。

けてして体力をつけるためにジョギングしている訳では無い。これは彼の仕事の一つだった。

その仕事内容は、普通の仕事では無かった。

「ついてねえ……」

「功歩、愚痴って無いでちゃんとシャキっとするゼヨー」

彼の隣を走っている茶髪に木刀を持った少年は坂本龍平。徳川のクラスメイトでもあり、仕事の同僚でもある。

彼らの仕事は学園都市外で暴走および能力を悪用する『異常能力者』という者達を取り押さえるという仕事である。

そんな仕事をする彼らも実は『異常能力者』だった。

彼らの所属する『ESP』という組織は、そういった変わった組織なのだ。もちろん、口外する事は禁止されている。

「でもね、俺は昨日まで疲れていた訳ですよ。それなのに、人が布団の中で寝ている中、ドアを突き破って、布団ごと俺を連行したのはどのどいつよ!? 何で俺はこんな朝っぱらから仕事をしなきゃいけない訳!? 何で俺はこんなに不幸なんですか!？」

愚痴を次から次へと吐き出す。そんな愚痴を軽くスルーして、坂本は適当に慰める。

「落ち着け功歩。不幸不幸言ってるけど、きっと世の中には功歩より不幸な奴はたくさん居るぜヨ!」

「何の慰めにもなってるねえよ! そして不幸の原因はお前らだと俺は推測するぞ!」

早朝にも関わらず、近所迷惑になっても構わないのか大声で口論をする二人。

すると、徳川はある事に気付く。寝起きで目が覚めていなかったから、先程まで気付かなかったが坂本の上に何やらゴツイモノを被っている事に気付く。

「……坂本君。今頃聞くのは少しどうかと自分でも思うが、その頭の上のは……何?」

「? これゼヨか? これはごく一般的な赤外線ゴーグルだゼイ!」

「……坂本さん。私としてはどこが、ごく一般なのかとお尋ねしたい。何でそんな、どこかの特殊部隊が持つてるような物を持つてるんですか!？」

「流石に特殊部隊は俺でも無いゼヨ。ざっと、フリーの殺し屋止まりだゼヨ」

「……今、聞いてはいけないような言葉を聞いた気が。てか、冗談ですよ？ そんなリアルに聞えるような嘘は心臓に悪いはず？」

何だか言葉がおかしくなっているが、坂本は気にせず喋りだす。

「まだまだ家にはたくさんあるゼイ？ 例えば」

それ以上は何も言うな！ と徳川は叫ぶ。徳川としては、後ろの席に座っている奴が色々と危ない物を持っている変人とは認識したくないらしい。

すると、坂本が急に何かを呟き始めた。どうやら無線で仲間と会話をしているみたいだ。

仲間と言うのは彼らの仕事の先輩に当たる豊臣美吉。ちなみに同級生だ。

「どうやら、ターゲットはこっちに向かっているらしいゼヨ」

そう言って走り出した坂本。それを追う様に徳川も走り出した。

「聞いてなかったんだけど、今回の仕事内容は何なんだ？」

徳川の問いに、坂本は振り返りもせず言う。

「今回のターゲットは透明になれる盗人ゼヨな。そこら辺が厄介だからコレを持ってきた訳」

そう言って坂本は頭に被っている赤外線ゴーグルをコンコンと叩く。

徳川はなるほど、と納得して改めて感想を言う。

「にしても、能力って便利だよなー。色々の種類があつて」

一学期だけで色々な能力者と出会ってきた。その度に驚きの連続だった。

「徳川的能力が一番珍しいぜヨけどな……」

「そうか？」

そんな会話をしながらも二人は走り続ける。しかし、一向にターゲットと衝突しない。

不意に坂本が立ち止り、悩むように頭を抱える。

「もう見つかつてもいいはずゼヨけどな……。前も居なければ、後ろも居ない……か」

この路地は一本道だ。だから衝突するはずだ。そして、坂本は上を向いて、空中に一本のロープが路地に伸びている事に気付く。

「なるほどな……。前も居なければ後ろも居ない。ならば……上だ！……」

そう言って、徳川の上の不自然にへこんでいるロープに向かって突風を起こす。

「功歩！ 左手を上に掲げる！」

全く意味が分かっていない徳川は首を傾げながらも、左手を上につき上げる。

すると、何か左手に衝突する。ゴキユリ、と鈍い音と共に、徳川の左手が不自然に曲がり、呻き声をあげる。上空から一気に重みがかかった物が降ってきたのだ。

徳川は、柔らかい感触に気付かず、自分が手を押さえて地面を転がりまわったせいで、何か地面に落ちた事に気付かなかった。

それは人間だった。昔の盗人のように小汚い服装をした少女。何故だかお尻の部分を押さえて、顔を真っ赤に染めていた。

どうやら徳川がクッションになったせいで大きな怪我は無いみたいだ。

「やっと見つけたぜヨ。逃げようと思うなよ？ また透明になって逃げようとしても、こっちには赤外線ゴーグルがあるからな」

少女はすぐに体勢を直し、どうするか迷うが考えた後、両手をあげて降参した。

坂本の威圧に押されたのか、地面を転げまわって呻いている徳川に同情したのだろうか。

『AM6:43』

「」苦勞じゃな

ポニーテールの少女、豊臣が二人に向かって言う。

坂本は笑顔で、徳川はムスっとしていた。

「何で俺は寝ていたのに仕事に強制連行されて、突如振ってきた少女のせいで左手を捻挫したのに最後にビンタを受けなければならぬいのでしょうか？」

頬に手形が残るほど強力なビンタを喰らった徳川は不満を一気に爆発させる。

「少女は、どうやら金持ちのクソジジイ共から金を奪っては、貧乏人に配っていたらしい。まさか、そんな善人な少女を捕まえるのは気が引けるのでな。組織に加入してもらおう事になったぞい」

「いやー世の中には優しい人も居るもんぜヨなー。現代の五右衛門つて所ゼヨか？」

「あれ？ 俺の事は完全スルーですか？ 無視ですか！ 俺が一番頑張りましたよ！？」

そんな悲痛の叫びを訴えるが、豊臣は聞く耳持たず。リストラされたサラリーマンのように両手を地面につき絶望を全体で表現する徳川。

そんな徳川を尻目に豊臣は何かを思い出したように言う。

「そういえば、お主らにとっておきの情報を持ってきたぞ」

「どうせ仕事の残業か何かでしょうー……。分かってますよ、はい。どうせ俺は報われないんだって」

そんなメガタイプの塊の徳川に、豊臣はサラッと告げる。

「明日は皆で京都に行くぞい」

はああああああ！？ と、徳川は喜びと驚きの入り混じった声で叫ぶ。

3 - 1 裏の世界で暗躍する者の休暇（後書き）

ついに始まった「京都編」。

今回も色々と彼らが暴れます（笑）



### 3 - 2 表の世界は平凡な日が通常（前書き）

感想が50件達成！ユニーク五千突破！お気に入りが20件突破！  
そして気付かなかったんですが更新を始めて一ヶ月が経過（笑）  
嬉しい事が絶えない日々ですが、これからも上を目指して頑張りま  
す！

皆さんありがとうございます！！

### 3 - 2 表の世界は平凡な日が通常

『七月二十一日 AM 8:00』

7月の猛暑の中、彼らはゆったりと京都へ向かっていた。

「ついて……いるのか？ いや、ついてはいるはずが無い！ 絶対裏に何かがあるッ……！」

さつきから一人ブツブツ呟いている男は徳川功歩。彼は巨大なバツクに大量の荷物を詰め込んで、京都へと向かっていた。

その周りでワイワイと騒いでいる声が聞える。しだいに騒音が大きくなり、徳川も注意した方が良いと思い、そちらをチラリと見る。

「やっぱり夏休みと言ったら水着でしょうが！ 俺つち的にはスク水がベストッ……！」

「分かってないゼヨナー。この猛暑の中、薄着の彼女！ そのチラリと見える素肌に興奮するってもんだゼイ……！」

「……ガキ共が。結局は全部脱ぐんだかッグボ！」

それ以上は危ないので、徳川の拳によって制止される。

そこには異常に人が集まっていた。何故か派手なアロハシャツを着た坂上、坂本、坂田。ちなみに坂田は酔っている。

そして、校医であるはずの林先生も白衣を着たまま乗客していた。

「若の体調が悪そうだ……。ここは私が体を張って暖めるしかないよんだな」

「男子どもは相変わらずね……。って、アンタは服を脱ごうとするなッ……！」

「あんまり機内で騒がないで欲しいんじゃないか？ ……誰も聞いておらんか」

そして反対側の席には運動がしやすそうなTシャツに、好みなのか毎回同じのダメージジーンズを穿いている伊達。その隣で何故か花柄の浴衣姿の服部は、脱ぎだそうとしている所を赤面になっている伊達に止められている所だった。

ちなみに豪華なワンピースを着ている豊臣は、隅っこでクロスワードパズルを一人寂しそうにやっていた。

「……何でこんなに混沌カオスな事になってるんだ……」

徳川は一人、呆然と眺めながら呟く。そして現実カオスから逃避するため、窓の外を見る。

眼下に広がる大空。そして、下を見ると多くの建物がミニチュウのように見える。彼らは今、大空を飛んでいた。

彼らは豊臣の専用ジェット機で京都へと向かっていた。その速度は速く、あっという間に到達するらしい。

「そもそもジェット機を私物で持っているのがおかしいよな……うん。やっぱり、何かあるッ！！」

未だに信じる事が出来ず、何かドッキリなのでは無いかと、辺りを隈なく目を配る。そして、徳川はやっと気付いた。隣の部屋から何やら騒音が聞える。

「豊臣さん……向こうには何が居るんでしょうか？」

「ん？ ああ。向こう側にはライオンと猿がサッカーを観戦しているから邪魔しない方が良さぞ」

こつちには目もくれずに淡々と説明するが、徳川には一切内容が分からなかった。

すると、隣の部屋から大歓声が沸き起こり、全員の視線が向こうの部屋へと集中する。そして、タイミング良く部屋の扉が開いた。

「いやーやっぱサッカーは盛り上がるっすねえー」

「全くだ。だが、俺ならあそこでオーバーヘッドキックで決めていたがなッ！！」

そこから出てきたのは猿のような顔の男、北条。そしてボサボサのライオンのような金髪の髪型の織田だった。

「むトツコウでは無いか！ 貴様も来ていたのか！！」

「それはこつちの台詞だッ！ 何でお前が居る！ いや、この場を持って言わせて貰うと……何でこんなに人がいるんだ！？ 聞いてねーぞ！ てか、これがもしや不幸なのか！？」

と最後の辺りは意味不明になっていたが、頭を抱えながら叫ぶ。

「別に誰が来ても良かろうが。何か問題があるのか？ 友達じゃろうが」

「友達じゃなくて腐れ縁だつてッ！ こいつが居ると余計に俺に不幸が押し掛かって来るんだよー……」

既に起き上がる気力もなさそうに、うな垂れながら言う。

「トツコウよ！ 何を憂いてるかは知らんが、久々に語ろうじゃないか！」

そんな事を気にせず、織田は徳川を意図も簡単に掴みあげて、連れ去ろうとする。

「は？ お前離せてッ！」

呆然と隣の部屋へと連行されていく徳川を眺める一同。

すると突然、坂本が立ち上がり追う様に歩いていく。北条の首根っこを掴みながら。

「あの……これは何スか？」

「たんなる連れシヨンゼヨー。まあ、気にすんな」

そうやって、はば強引に連れて行かれる北条。それを見ていた豊臣も立ち上がる。

「すまんが、伊達と服部。お主ら少し手伝ってくれぬか？ 後ろの荷物の整理をしなくてはならなくてな」

「あ、ああ……別に良いけど……」

そうして豊臣、伊達、服部も隣の部屋へと行ってしまった。

「集団誘拐……？」

残された坂田がボソリと呟く。

『飛行機内 AM8:10』

「それで？ このメンバーはどう見てもアレですよ？ どうせ『ESP』関連ですよ？ そーですよ、こんな簡単に旅行の話なんて転がってきませんよ。結局はついてねえッ！！」

ここに集まったのは徳川、豊臣、坂本、織田、服部、伊達、北条の六人だ。

服部と織田と北条は、学校での戦いが終わってから組織に所属。伊達は、能力が発覚した事から湖事件の時から組織に所属する事になった。

「流石に気づかれるゼヨかー。つま、簡単なお使いだ。京都で一人の少女が行方不明になったらいい。現在、京都支部の奴らが搜索してるらしいが、まーったく見つからないらしい」

「それで、増援としてわらわ本部の者が呼ばれたと言う事じゃ……」

真剣な表情で語る二人。だが、一つの疑問が浮かび上がる。

「……だったら、何であの二人は来てるんだよ!？」

「……実は、わらわと坂本が京都の話をしていたら、偶然聞かれたみたいでな……」

「そしたら、一緒に行くと一点張りで、しょうがなく連れて行く事になったんだゼイ!」

「そんな嬉しそうに言わないでくれ……お願いだから」

もう呆れるしかない徳川。そんな会話を織田、伊達、服部は黙って聞いていた。

「……あの……三人はどうしたんでしょうか？」

「若が女と仲良くしているのが気に喰わない」

「お前らの仲が良いなーって思ってるね。まさかまだ隠し事なんてしてないだろうね?」

っと言いながら服部はクナイを構え、伊達は手を刀へと添えてい

る。

「脅迫！？　そもそもお二人は何故に銃刀法違反にならないのですよ  
うか！？」

今にも一つの命が無くなりそうな修羅場だ。そんな光景を見ていた織田が、何かを思い出したように言う。

「これがハーレムなのかッ！　昔からトッコウは色々な女と関係を持っていたからな！」

「この馬鹿野郎！　この瞬間で誤解を招くような台詞を言うな  
伊達さん？　機内では刀を振り回してギヤアアア！！　伊達さんと服部がご乱心を！？」

狭い機内で暴れまわる三人を見ながら、豊臣は深い溜息を吐く。坂本も苦笑いをしながら光景を眺めていた。一人の猿顔の男が徳川の盾となって既に犠牲になつてゐる事に気付かず。

『AM9:10』

色々と問題があつたが、徳川は何とか生存する事が出来た。そして、

「やっと京都に……到着だあああああッ！！」

テンションを上げて叫ぶ徳川。先程までスルメのように干からびていたのが嘘のようだ。

「功歩は何でそんなテンションが高いんだゼヨ？」

「だって……中学時代の修学旅行で行くはずだった京都は前日に交通事故にあって行けなくなっただけ……。思い出せば、俺の旅行は全て邪魔されてきた……だが、今回は違っ！　無事に生きて京都へ立つ事が出来たぞおおお！　！」

もう徳川の面影が無くなるほど気分が高揚している彼を、全員が哀れな目線で見つめる。

「待ってるよ金閣寺！　そして銀閣寺！　俺はお前達を眺められるなら死んでも構わんわッ！！」

ちゃんとした人物がここまで壊れると、もはや誰も何も言えなくなる。

「あ、そう言えば、旅館の予定とか取っているのか？　俺っちは何も聞いていないんだけど？」

空気を読まない坂上の質問で場が凍りつくように固まる。さっきまで、意気揚々としていた徳川さえも凍っている。

全員の視線は豊臣へと自然と集中していた。その視線の真ん中の豊臣は、悪気があるように小さく呟く。

「……すまん。忘れていた」

くおおおおお！　何人かが、それを合図に呻きだす。けして、何者かに襲われた訳では無い。精神的なショックが大きいだけだ。

「どうするゼヨか！？　今から旅館の予約を取るゼヨか！？」

「いや……どっかの高い旅館にすれば……」



「アタシ達は自分で旅館の金を払うんだぞ!? そんな高い所に行ったら破綻するだろ!？」

もちろん彼らは多めに金を持ってきた。だが、豊臣の言う高いというレベルは次元が違いすぎる。

そんな彼らのやり取りを坂田は静かに見つめていた。そして独り言のように呟く。

「今は夏休みだから客も結構居るだろうしな……」

彼の現実じゆんじは終わった。寝泊りする場所が無ければ、体を休められる訳も無い。

「だったら、俺の知り合いの旅館に行くか? あそこなら、客も少なく、安いと思うぞ」

そう言ったのは腕を組んで立っている織田だった。まさに彼らの救世主となっていた。

「とにかくよう……早くここから離れないか?」

徳川が呟く。ここは京都にある大きな空き地。どうやら事前に許可を取っていたみたいだが、周りにはたくさんの人だけが出て来た。突然ジェット機が降り立ってくれば、誰でも気になるが。

『AM9:34』

織田を先頭に彼らは人だかりの中を進む。やはり夏休みだから人は多く、ほとんどは観光客だった。

その中でも織田は目立っていた。金髪に長身というだけで十分目立つ。それも変わった連中を引き連れていれば尚更だ。

「まだ付かないのかのうー。正直、この暑さに人口密度が高くて熱さも増しておるぞ?」

ぐうたらと弱音を吐く豊臣を引っ張りながらも、坂本は前を見失わないように歩いていた。

前から織田、坂上坂田、林先生。その後ろを北条、伊達、服部と続き、最後尾に坂本と豊臣。

「あれ……?」

坂本は、何かを忘れているような気がしたが、今はそれ所では無かった。弱った豊臣を引きながらも、人ごみを分けて前へと突き進む。

この時に気付いている者は誰一人居なかった。また、徳川は行方不明になっている事に。

『AM9:32』

「困った……また迷子になってしまった……」

真面目そうに聞えないが、本人はいたって真面目である。彼は、旅行など皆無に等しく、旅のお土産などに目が無かった。

そして、色々とお土産を見つめていたら、いつの間にか自分が一人になっている事に気付くという始末である。

彼は、建物と建物の間にある小さな路地の手前で必死に悩んでい

た。

「どっち土産を買うか……こっちも美味しそうなんだよな。でも、こっちも捨てがたい！」

自分が迷子になった事を忘れてまでお土産に目が夢中になっているみたいだ。

そして、改めて自分が迷子になってる事を思い出し、改めてどうするか考える。こんな時に肝心の携帯は充電切れ。

「ついてねえ……」

前を通り過ぎて行く人々を眺めながらぼんやり呟く。すると、急に何者かが背中を小指で突く。

振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。真っ黒な長い髪に、黒い瞳。まるで人形のように白な肌。そして似合う以上に、体の一部じゃないかと思えるほど紫色の着物を着こなしていた。

歳は同世代だろうか、と徳川は思う。そして、その少女は徳川に向かつて尋ねる。

「何かお困りですか？」

### 3 - 2 表の世界は平凡な日が通常（後書き）

やっと京都に到着ですー。ここまで話が盛り上がりとは思っても居  
なかつた……

次回からやっと京都で暴れます（笑）  
ではこれにてー！。

### 3・3 隠れて全ては動き出した(前書き)

ホアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

ついに、ついに、ついに100ポイント突破しました!!  
本当にありがとうございます!!

どうか、これからも朗読よろしく願います!

これからも頑張りますぞー!! ( ) の乱用( )

### 3・3 隠れて全ては動き出した

『七月二十一日 AM9:50』

「色々ありがとうございます」

徳川は目の前に座っている少女に深々とお礼を言う。

現在、彼は少女の案内で携帯が充電できるファーストフードでくつろいでいる。向かい側に座っている少女は、笑顔で食事をしていった。もちろん徳川出費出だ。

「こちらこそ、食事を奢って頂きありがとうございます。この恩はいつか必ずや返してみせるので」

と高速で食べ物を口の中に放り込みながらも、しっかりとした言葉で喋る。徳川は少し苦笑いをしながら、いや大丈夫ですよと、答える。

徳川は少女の助けが無かったら、良く当ても無く大変な事になっていただろう。そこに現れた少女が、実に献身的で優しい事が幸いしていたのだろう。少女は、困っている徳川の要望を聞き、要は携帯を充電できる場所として、ここに案内した。

そして彼に一言『すいませんが、お金が無く……何か食事を恵んでくださらないでしょうか?』と。

その時から徳川は推測していた。 ああ、何か、また厄介事に巻き込まれる気がする。

それでも、困っている少女を目の前にし、携帯を充電できる所まで案内して貰ったのに何もしい訳にはいかなかった。

そして、事は現在に至る。

少女は見るからして、丁寧に食事を取っている風に見えるが、その速さが尋常じゃない。まるで、大食い選手権を見ているようだった。

「よつぽど……お腹が減ってたんですね……」

「かれこれ三日は何も口にしていなかったものでして……ここで貴方様に出会ったのも、きつと神様のお導きに違いありません……」

そんな、教会の人が言うような事を言いながらも三食目を平らげる。このままでは徳川の財布が空になる可能性が出てきた。

(何だかんだでついてないんだな……)

そんな事を考えながらも、店員にさらなる注文をする。そのオーダーの間は、しばらく時間が空き、自由に話す時間が出来た。彼女は食事中でも喋れるようだ。

「えっと、自己紹介がまだだったよね？ 俺の名前は徳川功歩。見ての通りの旅行中に迷子になりました……」

苦笑いを浮かべながらも、そんな自己紹介をする。改めて自分で言っ、己が間抜けだと実感させられる。

すると、少女は徳川の事を疑うように見つめ呟く。

「これが……ナンパというモノですか……」

思わず、徳川は嘖き出してしまった。そして、慌てて手を横に振って全力で否定する。

「ち、違いますよ!? これは、助けてもらったし、名前くらいは名乗った方が良いと思ひまして! けしてやましい事を考えた訳では無いでありますよ!?!」

語尾が慌てたせいか、おかしくなっているが気付かない徳川。そして、周りの視線が冷たく自分に刺さっているのには気付いた。

少女は首を傾げながら、うーんと、悩んでいた。

「女性に話をかけて、名前を名乗るのがナンパでは無いんですか?」

「それだったら世界中の人がナンパしてる事になってしまいますよ!?!」

「そして、その後にホテルに直行するとか?」

「それは犯罪です! 良い子の皆は真似しないようにッ!」

そこで徳川は確信する。この子は世間知らずだと。いつも以上に疲れる気がしていた。

それでも、少女の追い討ちが迫る。

「それではチカン……という奴でしょうか? それともヤカン?」

「これ以上の誤解を招くような発言は止めてくれませんか!? てか、ヤカンって物じゃないんですか!?!」

「むうー……じゃあ何なんですか?」

「関係と言われましても……とにかく黙ってくれませんか?」

徳川は今にも倒れそうになっていた。周りの野次は一層に二人の会話に耳をたて、中には警察に電話でもしそうな雰囲気だ。

何とか、この場を離れたいが、充電は終わっていないし、注文した物は届かない。テーブルにうつ伏せになりながら呟く。

「ついてねえ……………」



それを遠くから眺めている人物が居た。その女性は双眼鏡を使っ  
て、遠くから二人を監視していた。随分と大人びている雰囲気を出  
し、その顔を見れば誰もが美人と言っだろう。腰まで届く長い黒髪  
をポニーテールでまとめており、腰には長さ二メートルは超える日  
本刀が鞘に収まっていた。

だが、その格好は少し変わっていた。古着の青いジーンズに白い  
半そでのTシャツ。ジーンズは左脚だけ太ももの根元から綺麗に切  
断されており、Tシャツは脇腹の方の布を縛ってヘソが見えるよう  
にしてある。

さらにヒザまであるブーツに日本刀は拳銃みたいなホルスターに  
挟むようにぶら下げている。

いかにもおかしな格好をした女性は、誰かと連絡を取り合ってい  
た。

「<sup>ターゲット</sup>目標は捕捉しました。それで、どうすれば良いですか？ 彼女の  
隣には黒いニット帽を被った少年が居るのですが……」

『黒いニット帽かにやー？ ねーちゃん。それは、もしかしてトクヤ  
んかもしれないにやー』

独特の猫ボイスと訛りが聞える。ねーちゃんと呼ばれた女性は、ト  
クヤん？ と、首を傾げる。

『とにかく、今は行動を起こさない方が得策って事だぜい。引き続  
き監視の方をよろしく』

そして通信が途絶える。女性は、周りを気にせず、大きく溜息を吐く。

「随分と疲れておるみたいやね？」

急に背後から聞えた声に、その女性は振り向きながら刀に手を添える。そこには一人の男が立っていた。真っ白な浴衣のようなモノを着ている男。その手には御札がいくつか握られている。

「陰陽師……ですか……」

女性は警戒態勢のまま、相手を観察する。魔力が全く分からなかった。気配すら感じられなかった。

「悪いけど、ちびつと時間稼ぎをさせて貰うよ？ チトした実験のためにね」

「それは『聖人』相手にも言える言葉でしょうか？」

男は笑っていた。その瞳を盛大に開き、そしてゆっくりと言葉を告げる。

「安心しろ。ワテも『聖人』や」

『AM9:50』

坂本と織田は、薄暗い路地を歩いていた。旅館に付き、何とか空いている部屋を借りる事ができた。

そして、徳川が居ない事に気付き、携帯も繋がらないので、しょ

うがなく皆で搜索する事になったのだ。

「しっかし、毎回のように迷子になるゼヨねー。それも功歩スキルの不幸ゼヨか？」

笑いながら喋る坂本とは対照的に、織田は暗く、うつ伏せて何かを考えているようだった。そして、織田が口を開く。

「坂平……一つ聞いても良いか？」

「そ、それは俺のあだ名ゼヨか……？」

織田は変なあだ名をつける癖がある。たぶん、坂本と最初と最後の文字を取ったのだろう。

微妙な表情をしている坂本の事は気にせず、織田は続ける。

「トッコウの『アブソルテ吸収クライの罪』についてだ……」

「……それが、どうかしたのか？」

坂本の反応に、しばらく織田は睨むが、すぐに言葉を続ける。

「あいつは、能力が関係したものだったら問題無用で吸い尽くす。しかし、物理的に考える。その、吸収エネルギーされた力はどこに行く？」

「だから、それで心臓発作が……ッ！」

そこで坂本が織田の言葉の意味が理解できた。

「……三回も吸収して、体が絶えられる訳が無い……」

「そう。能力の事は詳しく分らんが、その力は強大なモノだ。それを、三回も吸収しておいて、体にかかる負担が、心臓発作だけで止まるはずが無い」

つまり、エネルギーとは吸収した所で消える訳ではない。例えるなら、スポンジと同じように、水を吸い取った所で、水が消えるの  
では無い。そのスポンジの中に水が溜まっているという事だ。

それを徳川はたくさんのエネルギーを吸収して、心臓発作が起  
ると思っているが、本当は違うのでは無いかという事だ。

そして二人は唸るようにして考えながらも、道を突き進む。だが、  
二人は不意に足を止めた。

近くから腐ったような、そして鉄のような匂いが漂う。二人を不  
快感が覆う。

「何だ……この匂いは？」

「この辺からするゼイ……。このポリバケツだ」

そう言って、匂いの発生源であるポリバケツの蓋を開ける。そこ  
には、大量の肉片が詰まっていた。ポリバケツの中は、真っ赤に染  
まっており、微かに白い物が見える。それは骨だ。人間の頭蓋骨。  
つまり、これは前までは人間だったモノだ。だが、今では人間と判  
断するには違い過ぎた。

まるで巨大な生物に潰されたように、その肉片は骨ごと潰れてい  
た。何故か、金髪な頭部の一部の髪の毛だけが抜けていた。

二人は、その元人間だったモノを見て静かに黙っていた。そして、  
坂本は背筋に冷や汗を感じた。

「また、厄介な事になりそうだゼイ……」

そして、すぐさまに豊臣に電話をかける。坂本は知っていた。死  
体の元の人物を。坂本は知っていた。死体の役割を。坂本は気付く。  
これによって起こる事件を。そして、それで何が起きるかを。

そして、坂本は告げる。『奴らが動き出した』と。

そいつは、路地からゆつくりと出て、人ごみの中を歩き出す。鼻歌交じりで、その表情からは何か楽しい事があったのかと伺える。

「楽しみだよな？　これは本当に楽しみだ。そっちの仕事は任せなせ。上手く混乱させろよ？」

「当たり前だ。小僧。お前に言われなくても。分かっている」

すれ違いざまに、屈強な体に口ひげが目立つ男と言葉を交わす。そして、二人は反対方向へと向かって歩いて行く。

「これからは、本当に混沌パーティーだよな？　ああー本当に楽しみだぜ」

そう言って、男は目的地の前へと辿り着く。窓際に座る着物姿の少女とニット帽を見つめながら、舌を這いずり回す。

「次の子羊ちゃんはどうな味だろうなー？」

そして、闇は動き出す。

### 3・3 隠れて全ては動き出した(後書き)

さり気なくある人物達を出しました。

てか、やっと出せました……

何故「にゃー」さんが徳川を知ってるかは、

「とある奴らのSS物語」でその内やりますので、そちらもお願いします。

3 - 4 彼らは戦いを止めない(前書き)

ポイントが1000に行ったり行かなかったり……早く安定して欲しいです(汗)

そんなこんなでユニークが6000突破ですー！

### 3 - 4 彼らは戦いを止めない

『AM10:05』

豊臣と坂本は急ぎ足で京都の町を歩いていた。周りの事など気にせず、とにかく表情から急いでいる事が伺える。

「その情報は確かじやろうな……？」

豊臣は、前を向いて尋ねる。坂本も真剣な表情で答えた。

「ああ……。本部より派遣された能力者がゴミのように潰されていた。もしかしたら……の可能性もあるゼイ。本部から連絡は入っていないんだな？」

「全くもって、そんな連絡は入っておらん。連絡の意図的な遮断……と考えるのが合理的じゃのう。本部がやる理由が無いとすれば……おそらく、京都支部の手によって情報がもみ消され取るかものう」

二人は真っ直ぐに歩き続ける。その事実を確かめるために。そして、ある建物の前で立ち止まる。

「こういうのは直接本人に確かめるのが手っ取り早いゼヨな」

そして二人は、建物の中へと入っていった。

『AM10:08』



「見つけましたよ」

京都市内のファーストフードの一席の前に立ち、男が言う。その男の視線の先には、着物姿の少女と、ニット帽を被った少年が座っていた。

「何だ？ 連れか何かですか？」

「貴方は……どうしてここが？」

黒いニット帽を被った少年、徳川と少女は同時に尋ねる。その間に、金髪の修道服を着た男は、優しい笑みを浮かべながら答える。

「私は、この方を連れ戻しに来た者です。皆が一斉に貴方を探していたのですよ？ 急に居なくなつたから、心配しています」

徳川は少し眉をひそめる。外見的には良い人そうだが、話の内容が少しおかしい気がする。

「……あんた等……何者だ？」

「初めましてと言いましょるか徳川功歩さん。私達は『ESP京都支部』の者です。彼女は今川いまがわ鶴つる。我々の仲間ですよ」

その言葉に驚愕する徳川。話には聞いていたが、まさか偶然出会うとは思っていなかった。

そして徳川は、今川という名の少女を見て、疑問に思う。

何でこんなに顔をしかめているんだ？

「さあ、今川様。すぐに皆の元へ戻りましょう」

「嫌です。私は、あそこには戻りません」

目の前で繰り広げられる口論。徳川は意味も分からず、ただ見守っているだけだ。

「何が不満なのですか？ 食事なら好きなだけ」  
「そう言う事ではありません。ただ、私は今は帰りたくないだけです」

断固拒否する今川に、困ったような顔をする金髪の男。不意に、男の携帯が鳴った。

「失礼……」

そう言っつて、男は少し離れたところへ行つて誰かと会話をしている。

(修道服に携帯つて違和感感じるな……)

そんな事を考えていると、今川が徳川の裾を引っ張り、言う。

「ここから逃げて」

え？ と徳川が疑問を浮かべた。小さすぎて良く聞えなかったのだ。

すると、金髪の男が急いでこっちに駆けて来た。

「な、何かあったんですか!？」

今川が何か言ったのは、後で聞けば良いと思い、険しい表情をした男に意識が集中してしまう。

「大変です！ 今、京都で科学結社が『ESP』の勢力を一掃しようとして、活動しているみたいです！ 今すぐにこの場から逃げまじょうー！」

言われるがまま、徳川は引つ張られ、それに今川も引つ張られる形になった。三人は店を出て、金髪の男に連れられるがまま、路地をかけて行く。

「もう手遅れ……」

徳川に腕を引つ張られながら呟く。その声は小さく、走っている徳川には聞えなかった。

そして、周りにも人は居ないせいか、今川の独り言となった。

『AM10:09』

京都市内の、とある十字路。そこに、浴衣姿の少女が佇んでいた。その名は服部三島。

「若の匂いがする……」

そんな事を呟きながら、服部は前を向いていた。そしてゆっくりと歩き出す。

後ろから飛んできた小刀を見もせずを受け止めながら。

「こんな所まで来ていたとはな……私の邪魔をするなど言っただが？」

「ソイツは困るねー。これでもオイラの仕事だからさあー」

服部は、相手が一筋縄ではいかないと察し、後ろを振り向く。そこには何も居なかった。服部の視界の中には。

「いつも背中がから空きだよねえ！。そんなに尻でも触らたいの？」

自分の背後から来た攻撃セクハラに振り返りながら回し蹴りを入れる。だが、当たったのは堅い感触。人の皮膚ではない。木の棒だった。

「ぐべえ！？ とでも叫んで欲しかった？ ソイツは残念でした！」

服部の耳元で囁く声。そして首元に押し当てられた小刀。そして、背後でニヤけている黒い忍者服の男。

「夜だけじゃ足りなくなったのか？ 馬鹿猿野郎……」  
「それはお互い様だって！。オイラだって、本当はこんな事したくないんだよ？ どうせやるなら、夜のベットの**中ぐばあ**……！」

最後の所で服部は足を後ろに思いっきり蹴り上げ、相手を潰す。容赦なき攻撃。

だが、振り返ると、男は10m程の距離を下がっていた。たった一瞬でだ。

「ひ、人が喋っている途中で攻撃って卑怯じゃない？ しかも急所を狙うって……相変わらずおっかねー」

「人の体に触つといて、精神的にも肉体的にもセクハラしている奴には十分だ。そもそも、私達は卑怯者の血が流れているから当たり前前の事じゃないか？」

「全くその通りだよ……普段はお前の方がセクハラしてくせ  
」

その先は飛んできたクナイの嵐を避けるために全ての筋力を使っ  
た。

「ここで死ぬ……猿飛佐意さおと字あじツ！！」

「女の復讐ふしうって怖いねー。そんなんじゃ徳川とくがわって子にモテツ！？」

鬼のように急接近してきた服部はクナイを全力で猿飛へと突きつ  
ける。

が、それを空中に軽やかにジャンプして電柱の線に飛び乗る。

「こいつは足止めどころじゃ無くなったねー。さてさて、どうやっ  
て押し止めるか……」

果てし無い速さの世界の戦いが繰り広げられる。

幸い、周りには誰も居なく。これを目撃した者は居なかった。

『AM10:10』

「遅い……」

伊達と北条は、京都の空き地の前で待っていた。

「トイレにしては長いっすよねー。坂上の奴」

伊達と北条と坂上は一緒に徳川を搜索していた。林先生は気分が

優れない坂田を看病するため、旅館に残っている。

「他の奴は勝手に行動するし……残ったのはアタシと猿と、馬鹿さかのつえだし……。ぶった切って良いか？」

「念のために聞きますけど、今日が初対面つすよね？ 何故怒りの矛先を俺に？」

「そもそも徳川が迷子になったのが悪いんだー！」

「うおい！？ 本当に切りかかってきたよこの人！？」

つと、北条が後ろに下がったと同時に、先ほどまで北条が居た場所に巨大な斧が振り下ろされる。

それは、隣のフェンスをぶっ壊して振り下ろされていた。その斧の大きさはざっと、3mはあるだろう。

「あちゃー避けられちまったか。アカンねー。この一撃で仕留めるはずだったのに」

割れたフェンスの向こうから出てきたのは、赤く燃えるような真っ赤な短髪に、胸の所を強調するように、谷間が見えるような露出度の高い服装をした女性だった。

「いきなり危ない野郎ね……」

「巨乳キタ ツー！」

取りあえず、馬鹿猿北条をぶん殴っておき、刀を女に向け、相手の動きを見つめる。

「ウチの名前は武田たけだ 葛葉くずは。以後よろしくな」

胸をタップンタップンと揺らしながら、自己紹介する女。胸が揺れる

たびに隣の北条が雄たけびをあげる。

北条の首を絞めながら、伊達は真剣な面持ちで尋ねる。

「アンタの目的は何？ この馬鹿猿ばうじやうだったら、すぐに渡すんだけど？」

「残念ながらちやうねん。ウチの目的は個人じゃなくて、組織や」

もしかやと思い、さらに緊張が走る。

「『ESP』が狙い……？」

「簡単に言えばそうなるな！。大人しく首を捧げてくれへん？」

そう言いながら、脅威の速さで斧を振るう。予備動作が全く無く、刀を振る感覚で意図も簡単に巨大な斧を振るったのだ。

北条が慌てて伊達を押さなかったら、体が真つ二つになってた所だ。

「だからって……胸を触るな　　！！」

「不可抗力というか助けたのにいい！？」

見事なスカイアッパーが決まる。これでも耐えてる北条は凄いほどだ。

武田も素直に感心しており、拍手までしている。

「なんや？ そいつ予知能力フアービジョンでもあるん？」

「さ、さあな……。伊達さん！ こいつは俺が食い止める！　だから先に　　」

と振り返ったら、既に伊達は走り出していた。北条が喋りだしてからすぐに走り出していたのだろう。

かなり遠くなった所から伊達は大声で、

「後は頼んだー!!!」

「薄情者おおおお!!!」

一人、巨大な斧を持つ女性の前に置いていかれた北条。ゆっくりと振り返り、気弱な声で言う。

「と、取りあえず、お茶でも……?」

もちろん返事は巨大な斧による斬撃だった。それを北条は死ぬ覚悟で避ける。

偶然なのか、この辺りに人影は無く、この戦いを見ていたものは居なかった。

『AM10:13』

北条を置いて走る伊達は、後ろかな何か猛獣のような雄たけびが聞える気がした。

「伊達殿おおおおおおおおおおおッ!!!」

取りあえず、他人の振りをしようと決意した伊達は、振り返る事もせずに声を聞き流す。

そんな伊達の事など関係無しに、声は聞える。

「伊達殿の噂はあああああ京都でも聞いているでござるうううううう!!!  
是非ともおおおおお拙者と勝負をううおおお



おおおおおおおおー!!」

だんだんと声は大きくなり、近くで響いてる気がした。そして少しだけ後ろを振り向くと、さっきの女よりも真つ赤な髪を無理やり後ろで結んだような男が、二本の槍を持ちながら物凄い勢いで迫っていた。

(また槍使いか……)

呆れて溜息が出る。そして、その男が思いつきり飛び上がり、上空から槍を伊達に突き刺そうとする。

それを鞘から瞬時に抜いた刀で受け止める。

「拙者の名前は真田まいた 吹雪ふぶきと申すでござるッ!」

「空中からの自己紹介とは、随分とイカすじゃない……ッ!」

刀を思いつきり前へ押し、その反動で相手は飛ぶが一回転して地面へと着地する。

「サーカス団の方が向いてるんじゃないの? つま、そのうつつうしさが邪魔になると思うけど」

「んな!? う、うつつうしい……だと!」

伊達は軽く挑発をしたつもりなのだが、相手は予想外の動きを見せる。

「拙者は……うつつうしかったのか……。そうだったのか……。だから皆は拙者の事を邪魔そうに……」

「え? あのー……だ、大丈夫ですかー……?」

両手をついて落ち込む男。テンションの上下が途轍もなく、伊達  
はついていけなかった。

周りには人は居なく、人の目を気にしなくても済んだが。

『AM10:11』

「随分とやってくれてるのー支部長」

建物の上階の一室。そこからは京都が良く見下ろせた。

その窓際には、一人の男が立っていた。屈強な体に口ひげが目立  
つ男。

その男は、入り口に立つ豊臣と坂本の方を振り向きもせず、淡  
々と語る。

「情報とは実に面白いと思わないか？」

男は静かな口調で語る。それを豊臣たちは静かに聞いていた。

「情報を一つ狂わせれば、全てが狂う全く……。人間とはどこまで  
愚かなのだろうか……。全て情報に頼り、それを信じて疑わない」

「お前も、その一人じゃないぜヨか……。久々に合ったのに、素  
顔は見せてくれないぜヨか？」

坂本の問いに、男はうつすらと笑う。

「お前に。姿を。見せた覚えは。無いんだが……。どこで。気付  
いた？俺が。支部長では。無いと？」

「こんな芸当が出来るのはお前くらいぜヨ……。相手を完全にコピ

「できる。そんな奴が何人も居たら、世界はとつくに混乱してる」

男は、黙って坂本の話聞いていた。相手からの反応が無く、坂本は険しい表情になって言葉を続ける。

「まさか……お前が『<sup>エスパー</sup>超能力の城<sup>キャッスル</sup>』に所属しているとはな……」

「何。些細な事だ。俺にも。お前と同じく。目的があると言つ事だ」

そして、京都の戦いは始まる

### 3 - 4 彼らは戦いを止めない(後書き)

今回が特に場面転換が多かった…やっぱり、キャラが多すぎるのは問題ですね！。

今回の事件は色々と情報が混雑していて読んでる方も分かりづらいかと思います。しっかりと説明できるようにします。

「GOD EATER アフターダーク」の方もよろしくお願いします！

3 - 5 漆黒の闇と純白の光（前書き）

久々の更新です。大変ながらくすいませんでした。  
何とか脱スラです！ 題名が痛いのは気にしないで……（照）

### 3 - 5 漆黒の闇と純白の光

『AM10:20』

そこは暗い路地を抜けた先の広場だった。子供などがボール遊びなどをしていそうな雰囲気だが、今は誰一人居ない。そこに三人は辿り着いた。

「ちよつと……休まない……？」

徳川は息を荒くして修道服の男を止める。男も、それに賛同したのか走るのを止めた。

「そうですね……ここまで来れば大丈夫でしょうか……」

男は傍にあったドラム缶の上に座り込む。今川も疲れたように地面に座り込んだ。

それから徳川は充電しておいた携帯を取り出そうとする。

「どうしたんです？」

「いや、携帯で仲間に連絡を取ろうと思いましたが……」

男の問いに携帯を取り出しながら返事をする。そのため徳川は見逃した。修道服の男が表情を曇らせていた事に。

「誰に連絡を取るおつもりなんですか……？」

「やっぱり、最初は豊臣さんにも……」

「それは本当に信頼できる方なんですか？」

その一言に徳川の動きは止まる。  
徳川はジツと男を見ながら尋ねる。

「それは……どういう意味ですか？」

「そのまんまですよ。今回の事件は、どうやら組織内に裏切り者が居たらしく……。そのせいで情報がかく乱されて仲間同士で戦いを繰り広げている……。それで、あなたの仲間は裏切ってないんですね？」

「当たり前だ」

それは即答だった。一瞬の迷いも無く、徳川は堂々と答える。

「俺の仲間……友達に裏切り者なんて存在しない。全員が信頼し合っている！！」

徳川のあまりにもはっきりした返答に、男は少し面を喰らったような顔をしたが、それはすぐに豹変する。

歪んだ笑みへと。

「ククク……ヒヤハハハハ！　このご時代に熱い友情ゴッコか？　泣けるねー」

修道服の男は、格好から似合わないような声と顔で笑い声をあげる。

あまりの豹変ぶりに、徳川は開いた口が塞がらず、今川は静かに男を睨んでいた。

「やはり……貴方だったのですね……。裏切り者は……」

「え……？　う、裏切り者！？」

今川の言葉に、一番驚いたのは徳川だった。  
男は笑ったまま、鋭い眼光を見せる。

「今頃か？ 間抜けども……それに、俺は裏切っちゃいねーぜ？  
だってよ……」

そうやって男は、修道服を投げ捨て、その中にはシャツを着ていて、その肌の色は白から日焼けしたように黒い肌が見えた。

そして、その顔は別人のものだった。金髪では無くて、黒髪。その眼光は光では無く、血のように真っ赤な瞳。

徳川はその笑に見覚えがあった。

あの『アブソールド クライ吸収の罪』の人格と同じ狂氣的な笑みだ。

「俺は元々別人だぜ？」

男は笑みを浮かべたまま言う。

「今の技術って凄いやなー？ そっくり人間登場で会場も盛り上がるぜ？ さて、問題です！ さっきの男に変装して俺は何をしようか！  
としていたのでしょうか！」

「何だと……」

徳川の呟き声を聞いて、ますます嬉しそうに笑みを浮かべながら続ける。

「正解を聞きたいよな？ さあ、子羊ちゃん。狼による食事の時間だぜ？」



「『<sup>エスパー</sup>超能力の城<sup>キャッスル</sup>』って知つとるか？」

真っ白な浴衣のようなモノを着ている男は余裕の笑みを浮かべながら、目の前にいる女性に尋ねる。

「随分と余裕ですね……」

女性の方は、長さ二メートルは超える日本刀を構えながら答える。息を荒くして、その状況がこんな事になっていなければ少しは色気を感じたかもしれない。

周りの建物などが半壊していなければ。

どうやら、周りには人が居なく、それも計算に入れて戦っていたのである。そこまで計算しておいて余裕の笑みを浮かべている男を鋭く睨みつける。

「そない怖い顔せんぞ。ワイは普通に話しとるだけせやけど？」

「どこが普通なんですか……。私の『七閃』を無傷で居られるなんて……」

「そう？ でも君、まだ使ってへんよね……聖人の力」

「それは……貴方もでしょうッ！」

言葉を発すると共に、目にも止まらぬ速さで男に急接近する。そして、その巨大な日本刀を男に向かって全力で振り下ろす。

だが、女性には分かっていた。これで終わるはずが無いと。

予想は的中してしまう。刀は確かに男の頭上には当たっていた。だが、本来の用途の『斬る』。これだけは出来なかった。

何故なら男の体が刀以上に頑丈だったからだ。まるでダイヤモンド

ドに向かって刀を叩きつけたような感覚が手に残る。

「痛ッ！！ それって打撃専用なん！？」

「うるさいッ！！」

ふざけたような口調に苛立ちを感じながらも、すぐに後ろへと下がって間合いをとる。

「何なんですか……その体は……」

「ん？ これ？ ああー簡単や。『降霊術』の応用や」

その言葉に顔を顰める。そして何かを分かったように表情を変える。

「陰陽師の特有の式神を……その身に宿したというのですか……？」  
「その通り」。流石博識やな。まあ、一般論だと、体が保てなくなつて無理そやかて言われとるけど……例外中の例外なら可能やろ？」

つまり、聖人の力を使って不可能を可能にしたという事だ。確かに聖人は驚異的な力を持っているが、それを応用するという考えは無かった。

「とにかく、ワイは彼らの成長タタカイを邪魔する訳にはいかないんだちゅうワケや」

「……納得しかねません。……あなたの目的は何ですか？」

その質問に、少し悩みながらもゆっくりと答える。

「まあ、アレや。話戻すけど『超能力の城』って知つとるかって聞

いたよな？」

「…………ええ…………。それが何か？」

「その組織に事を簡単に説明すると、世界征服よりも性質の悪い組織なんや。それを止めるために、正義のヒーローを育成中だちゅうワケ。その計画の途中なんだけど…………。」

だんだん表情が真剣になって、男は目を細めながらも言う。

「それを邪魔させる訳にはいかないんでね…………。これ以上、触れると、死ぬよ？」

そこからは完全な殺気。そして、恐怖感が直に伝わってきた。  
この男が、どれほど恐ろしいかも。

『AM10:22』

「どついつ事だよ…………お前は誰だ!？」

突如、ガラリと変わった男に対して、徳川は警戒するように叫ぶ。  
だが、男はそれほど気にした様子を見せずに、ダルそうに答える。

「俺は俺だけど？ お前らが子羊だったら、俺は狼かねー。でも、あれだ。さつき衣装へんそうはダメだ。キャラも合わねーし。喋り方もキモいし。第一真夏にあの格好だぜ？ 頭がイカれてるんじゃないか」

と言いながら馬鹿にしたように笑う。

そんな男に対して、今川は冷たく言い放つ。

「……その人はどうしたんですか？ ……どこに監禁しているのですか？」

「ああ……？ そんなもん、とっくの当に喰ったよ。何を聞いているんだ？」

その答えに、徳川は啞然とする。喰ったという言葉に、嫌な考えしか浮かばない。

「その意味……どういう意味だ……」

「分からねーか？ そのまんま、殺したって意味だよ！ 実に愉快な死に顔だったぜー！ 写メでも送ってやるーか？」

その言葉が終わる事には徳川は男の胸倉を掴んでいた。

「……ふざけるんじゃないぞ……。冗談だったらもつとマシな事を言えッ！」

「……俺に触って良いとでも思ってるのか？」

その瞬間、徳川は思いつきり地面へと叩きつけられる。男に押された訳でも、何か降ってきた訳でも無い。

まるで空気に押しつぶされるように地面へとめり込んだ。

「ぐがあッ!？」

呻き声と共に、地面のコンクリートがひび割れる。それを愉快そうに上から眺める男は冷静に言う。

「別に人一人殺したって変わらねーだろ？ 世界には五万と人は居るんだしよー。もしかして友達だったのか？」

「て……テメエ……正気で……言ってるのかあッ!!」

何かに押しつぶされながらも、必死に叫ぶ徳川。  
男は、答える。

「ああ。全くもって俺は正気だぜ？」

あまりにもあっさりとした答え。徳川は思わず対抗するのも忘れて呆然とする。

「俺は何も無い。俺には家族も、友達も、絆も、名誉も、プライドも、誇りも、金も、家も、ゲームも、愛情も、権利も、自由も何も無い。あるのは黒田くろだ 慰なぐさっていう名前と能力と所属する組織だけだ。だから俺は欲しいんだよ……。歴史上最大の殺人鬼って言う肩書きや、世界一の狂人でも良い。学園都市最強を倒したって言うのも悪くない……。とにかく何か欲しいんだ！ そのためだったら何でも壊す！ 潰す！ それさえも、俺の感情を満たしてくれるからな」

壊れたように笑いながら語る男は、まさに狂人だった。  
そして、狂人は笑みを浮かべながら、徳川に告げる。

「お前は俺に、何を与えてくれるかな？」

3・5 漆黒の闇と純白の光（後書き）

新キャラ登場！

黒田さんキタアアアア

！！

このキャラは初期の段階で考えていたから早く出したかったであります（笑）

続く狂気的な戦い……この戦いはどこへ向かっているのか……？

3・6 熱風の如く燃える(前書き)

最近忙しいです……誰かヘルプミー

### 3 - 6 熱風の如く燃える

『AM10:31』

「ぎゃあわあああああああああー！」

そんな悲鳴を上げながら北条は逃げ回っていた。

後ろからは巨乳の胸を揺らしながら、巨大な斧を振り回す武田と名乗った女性が追いかけてきていた。

「安心せや。一発で終わらせてやるから。だから動くなッ！」

「んな理不尽な命令聞かッ！！ どこをどう安心すれば良いのか是非とも聞きたい限りっす！！」

そんな事を言いながらも、次々と振り下ろされてくる斧の斬撃をかわしていく。

それにしても異常だ。大きさが3m程もありそんな斧を軽々と振り回し、余裕の笑みを浮かべながら本気で殺しに掛かってくる。

「もしかして……俺にフラれた一人？」

「誰がお前なんかにはフラれるかいッ！！」

「ですよね！ 俺に一度も彼女なんて出来た事ないっすからね！

自分で言っただけだ、チクシヨ　　！！」

一応、二人の追いかけては続いている。意外と余裕を見せている北条。

だが、その逃走劇も終結を迎える。

クライマックス

「んな！？ 行き止まり！？」



北条が逃げた先は通行止めになっており、引き返すしか道は無かった。

だが、背後には巨大な斧を持った女性<sup>オニ</sup>。

武田は笑みを浮かべながら徐々に接近してくる。

「こっちの方が京都の道は詳しいんや。盲点やったな」

「……。最後に一つ聞かせてくれ……」

「なんや？ 遺言でも残すんか？」

北条は真剣な面持ちのまま、ゆっくりと告げる。

「どうか、3サイズを教えてください！！」

直後、容赦なき斧の攻撃を必死に避ける。息を荒くして、北条は叫ぶ。

「いきなり不意打ちとか卑怯じゃないっすか!？」

「うるさいわ！そこは普通、お前は何者だ？とか重要な事を聞くやろ！」

「俺にとってはそっちの方が重要っすよ!!！」

再び武田は斧を全力で振り下ろす。が、北条は横に飛び、その斬撃を避けた。

「俺にとっては女性の胸の方が重要なんす！変な組織に強制的に入れられて、いきなり森に放り込まれて！周りは野郎ばかりで！それで、やっと女性の仲間に出会ったと思ったら、全員が貧乳ばっかだったんすよッ!!！」

この悲痛の叫びが誰かに聞かれていたら、確実に北条は肉片になっただろう。

武田は、そんな涙を流しながら熱弁している北条を、哀れみの目で見つめる。

「取りあえず……死んどく？」

「嫌っす！　せめて、その乳を拝んでからでも……」

北条の言葉を最後まで聞かず、片手で斧を振り下ろす。それを北条は先ほどの動きと同じように避ける。

が、直後に北条の腹の部分に強烈な痛みが走る。

「があ！？」

自分の腹の部分を見ると、そこには巨大な岩が激突していた。呻き声を漏らしながら倒れた北条に、武田はゆっくりと近づく。

「ウチの武器が斧だけでも思っていたんか？　それは間違いや。

ウチの武器は、この力！　『パワーアップ動力上昇』の能力によって最大限まで上げられた力や！！」

「だ、だから軽々とあんな斧を振り回していた……訳っすか……」  
「まあ、ネタバラしも済んだし。……終わりや」

そして動けなくなっただけの北条に向かって、両手を使い斧を振り下ろす。

だが、武田はすぐに気付いた。北条の表情が、微かに笑っている事に。

鈍い音と共に、斧が地面へめり込む。地面が割れるほどの威力で振り下ろしたから仕方が無い。

しかし、そこにあるはずの血は流れていなかった。北条は、斧をしっかりと避けていたのだ。

「アンタの斧はリーチが長い……。そして威力も高い。つまり、アンタに接近戦で勝つのは無理だ。だが、そのリーチが長いのが仇になったな……」

北条は武田のすぐ目の前に立っていた。  
顔を引きつらせる武田に向かって、北条は言葉を続ける。

「その長いリーチの代わりに、アンタは懐に入られると無防備な状態になる。そして、今の攻撃は確実に俺を殺すため、全力でやった。だから、地面から抜くのも、かなりの力が必要じゃないか？」

「……そこまで計算しとったのかい……」  
「いや、さつき咄嗟に考えただけだ」

暢気に答える北条に対し、齒軋りをする。

「その計算力があつたからこそ、ウチの攻撃を全部かわしていたって事？」

「買い被り過ぎ。俺は相手の動きを計算するだけで精一杯だ。だから、そこを能力で使う訳すよ」

北条は笑みを浮かべながら言葉を続ける。

「俺の能力は『プロシエクシヨライシス危機の予測』って言って、相手の殺気を先読みし、それを回避するために頭をフル回転させてるだけだ」

そこまえ説明されて、武田は笑う。

北条は少し動揺するが、すぐに何かに気付いたように慌てて動い

うとする。

「久方に楽しめたわ。だが、ここで終わりや」

武田は北条に向かって、蹴りを入れる。斧に支えられているおかげで、かなりの威力が出ていた。

数十メートルほど離れた壁に激突して、ようやく北条は地面に落ちた。

「ウチの力が手だけでも思っていたんか？ 甘いな。考えが甘つちよろいんや。そうやってペチャクチャ喋って油断しているから……死ぬんよ？」

呻き声をあげながら壁にめり込んだ北条に向かって、武田は地面にめり込んだ斧を抜き取り、そのまま狙いを定めて投げつけた。

『AM10:26』

「伊達殿！！ 流石でござる！！ それでこそ、関東の鬼と言われる実力！！ 尊敬するでござる！！」

「やかましい！ 少しは黙って戦えないの!？」

二人は激しい鏝迫り合いを繰り返していた。

連続で放ってくる槍を、全て一本の刀で押し返す伊達。

彼らが戦い始めてから数分しか経っていないが、既に二人の体力は限界に達していた。

その後、真田と名乗った男を慰めた伊達だが、急に男は斬りかか

「つて『敵に同情されるのは男の恥じでござる!』と喚きながら攻撃してきた。」

その事にキレた伊達は、意気揚々とその戦いを引き受けてしまった。

そして、現在はお互いに全力で戦っている。息を荒くして、間合いを取りながらジワジワと

「アンタは一体何者……目的は何?」

「伊達殿を倒し、そなた達の計画を阻止する事でござる! そのためだったら、この命! 投げ出す事も躊躇わん!! それで借金も気にしなくても良くなるし……」

「最後チラつと変な事を言わなかった……? と、とにかく、計画つて何の事……?」

その言葉を聞いた瞬間、真田は急接近して突きを入れようとしてきた。

それを刀で何とか防ぎ、踏みとどまる。

「とぼけるつもりでござるか……ッ! 親御さんが泣くぞッ!」

「とぼけるも何も……知らないって言ってるのッ!!」

刀を全力で押し、真田を押し返す。

再び、二人にかなりの間合いが出来、相手が動くのを待つ。

「そなた達の計画は知ってるでござるぞ……。『ESP』を裏切つて、敵の勢力に寝返り! 油断した拙者達を討つつもりだったのであるう!」

その言葉に、思わず呆然とする伊達。そして首を横に振って慌て

て否定をする。

「ちょっと待って！ そんなのアタシ達は知らない！ アンタ達が狙っていたんじゃないの!?」

「嘘をつくな！ 拙者達が支部長の言葉を聞いていなかったら、容赦なく京都支部を潰す気だったろ！」

「京都支部……?」

「そう。『ESP』京都支部をな!! それは拙者が全力で阻止してみせる！」

そして伊達は気付く。自分達は何かとてつもない勘違いをしているのでは無いかと。

真田は、そんな様子に気付かず、二本の槍を放り捨てる。

「やはり、そなたには全力でお相手しなければならんようだな……」

そう言いながら、真田は手を合わせて何かを祈るように目を閉じる。そして、少しずつ手を広げていき、その掌の間に何か赤いモノが見えた。

炎だった。それは徐々に大きくなり、何かの形になっていく。

それは一本の薙刀になっていた。一つ違つとすれば、それは燃え盛っている事だ。

「拙者の薙刀は斬るではなく、焼き斬る……。この『業火』に斬れぬものなど存在しない!!」

そう言つて、真田は燃え盛る薙刀を手に、伊達に斬りかかって来た。

そして、辺りに熱風が襲う。だが、伊達はその場に立ち尽くし、刃を受け止めた。

「OK……。最近、アタシも温く感じてたんだ……。熱くなるうぜ  
！」

腰の鞘から二本目の刀を取り出して受け止めていた。その表情は  
竜のように鋭く、それで楽しそうに笑っていた。

3 - 6 熱風の如く燃える（後書き）

今回も中途半端です。すいません。  
時間が足りない。時間が足りない。重要ですから二回言いました。



3 - 7 忍びの世界の掟（前書き）

徐々に勢いが戻ってきております紅蓮烈火です！  
劣化しないように頑張ります（笑）

### 3 - 7 忍びの世界の掟

『AM10:24』

「忍びの心得って覚えているか？」

猿飛の周りには人影は無く。独り言のように見える。

「心得一つ。けして主人を裏切るな。たとえ拷問されようがな？  
二つ。常に相手の裏をかけ。それが俺達しんびの本質しんびって奴だ。そして三  
つ。忍びは裏方に徹底しろ。けして表に立とうなんて考えるな」

猿飛は頭を下げながら言う。それと同時に猿飛の頭の上を何か鋭いものがかすめる。

それは電柱に突き刺さり、良く見るとそれはクナイだった。

猿飛は特に気にした様子は見せず、言葉を続ける。

「さてお前に一つ問うが……」

風がなびき、辺り一面に静寂が訪れる。

そして猿飛は、それを破るかのように冷たく言い放つ。

「お前は心得を一つでも守れたか？」

反射的に、猿飛はダガーを振るう。急接近してきた服部のクナイによる攻撃を予測していたのか、それを弾く。

金属がぶつかり合う音と共に、クナイが宙を舞う。

一切動きに無駄が無い猿飛に対し、どこか焦ったような感情を出しながら戦う服部。

力の差は歴然としていた。

猿飛は余裕の笑みを浮かべたまま、自分を睨みつけている服部を見下すように言う。

「図星か？ お前は忠誠を誓ったはずの主人を裏切り、違う奴に犬みたいに尻尾を振って……。そんなに徳川という男に価値はあるのか？」

「うるさいッ！ 私はお前達とは違う！ 血の掟などに縛られるのは」

「そんな戯言「ガママ」が通用する程、忍びの世界が甘くないっているのは知っているよな？」

服部を黙らせるように猿飛は氷のように感情も無しに言う。

その言葉は服部に深く突き刺さり、動く事も忘れてしまう。

「お前も同じ分かるよな？ 血には何があっても抗えないって事は結局、今は自由に動けても、最終的にはツケが回ってくる。それも、周りの人を巻き込んで……。それにお前は耐えられるか？」

服部は俯いたまま、返事も何も無い。呼吸をしているのかも疑わしい。

猿飛は相手からの返事が無い事に諦め、最後にチャンスを与える。

「今ならまだ間に合う。すぐに『コッチの世界』に戻るんだ。お前の心から大切にしている人を守りたいならな……」

ここまで言えば、と猿飛が考えていると服部は、ようやく口を開いた。

「私は……確かにワガママかもしれない……。若を守るためだったら、この命をも絶つ。でも……ダメ……私には無理だ……。若の元を離れるなんて……」

弱弱しい声で喋る服部だが、確かにそこからは感じるものがあった。

それは彼女の強い意志だ。

「若は今も危険に晒されているかもしれない……。だから私が傍で支えなければならぬんだ！ 若の敵は私の敵！ 私のせいで若が傷つくなら、それさえも私が防いでみせる！」

服部は瞬時に飛び、懐から取り出した鎖鎌を猿飛に投げつける。だが、それを猿飛は後ろに飛んで避けた。

「そうか……。それがお前の意思って言うなら、俺は容赦なく叩き割るまでだ……」

そ言いながら猿飛は白い玉のようなモノを投げつける。それは地面に衝突すると同時に、煙を巻き上げながら辺りを覆い始める。

その量はかなりの量らしく、すぐに周囲は煙に囲まれ、視界が見えなくなってしまう。

「煙幕か……」

それでも落ち着いた様子で服部は意識を集中させる。すると、先端に鉄鉤のついた縄を取り出し、それを振り回す。

「おおっとッ！ 危ねーなあッ！！」

背後から声が聞え、そこに狙いを定めて縄を投げつける。

「おいおい……危ないのだけは勘弁してくれよ？ 手加減が出来なくなっちまうぜ」

そう言いながら縄を避けた猿飛の顔が煙幕の中から現れる。

助走を付けて走ってきた猿飛は片手にダガーを握り締めて、それを服部に向けて突き刺す。

だが、服部もただでやられる訳では無い。同じく金属を使った小刀を取り出して、その刃を防ぐ。

「お前が邪魔するのならば、私は敵となる……。知っている事を全て言えッ！！」

「……そいつは無理な相談だぜ、服部。オイラにも負けるような弱者が言うセリフじゃねーや」

「何をい……ッ!？」

服部は何か気付いたように、慌てて後ろへ飛ぶ。だが、その時には既に遅かった。

飛ぶ段階で、服部の足は動かなかった。それ所か、体中が金縛りにあったように動かせなくなり、その場に崩れる。

「言っただろ？ 常に相手の裏をかくようにってな。オイラ能力の事は盲点だったか？」

「き、さあ……ま……」

服部は猿飛を睨みつけながらも、若干に動く舌を使って怨みの声をあげる。

体がシビれたように動かない。脳からの命令を受け付けられないのだ。

「俺の能力はLV3の『感電電流』だ。最初の時点で気付けよ。オ  
イラが金属系の武器しか使ってないって事に。金属さえあれば、電  
圧を自在に操れる。忍び向きの能力って所だろ？」

苦笑いを浮かべながら猿飛は語る。

そして服部に顔を近づけて子守唄のような淡々とした調子で話す。

「お前は無力のままだ。あれから色々と苦勞を重ねているが、そんな無駄な事をしても変わらないモノはたくさんある……。お前が相手にしているのは何だか分かっているのか？」

そして耳元に囁くように告げる。

「お前の相手は『ESP』の本部であって、国家でもある。そして、一つのサイド丸々を相手にしなければならぬという事だ……」

それは服部の心を大きく揺さぶる。そんな事が信じられる訳が無い。  
い。

猿飛は表情を変えず、顔を離し独り言のように呟く。

「まあ、これはオイラとかの意思じゃないから見逃すわ。殺すのも手間がかかるし。お前みたいな弱者には何も出来ないだろ？ 諦めるよ。今頃お前が駆けつけた所で、あの男は手遅れだ」

猿飛は侮あなごっていた。服部がどういう人間かと忘れていた。  
目標を見つけた彼女は行動が早かった。

服部はよろけながらも立ち上がった。

それに驚いた猿飛は顔をしかめる。自分の能力は相手を確実に感電させ、一時間は動けないはずだ。

猿飛は、彼女が何をしたのかすぐに分かった。服部の口から滴り落ちる赤い血。

つまり、彼女は自分の唇を力強く噛み締め、痛みによって強制的にシビれを無くしたのだ。

「おっかない女だ……」

「……こんな近くに居たなんて……。若の邪魔をする人間が……」

服部はよろけながら立ち上がり、口からは血を滴らせながらも、笑っていた。

「私も、言っただはずだ。若の敵は私の敵。それが、たとえ国家だろうが何だだろうが、揺るぎはしない！」

服部は駆け出し、猿飛に蹴りを入れる。

それを片手で防ぎ、猿飛はもう片方の手で握っているダガーを突きつける。

服部は予測していたように、紙一重で刃を回避する。金属にはより一層に注意しながら行動をする。

「流石に学習能力はあるかっ！」

これは忍びの戦い。目にも止まらぬ速さの斬撃と打撃の攻防戦。

それは、誰にも介入できないような空間を作り上げる。

それでも、二人は笑っていた。

「いつまでも昔の私だと思っなよ……鈍足」

「これでも関西の瞬神とも言われてるんだけどね」

二人は余裕のある会話をしているが、手と足の動きは常人の動き

を超えていた。

それでも両者は一步も譲らず、このまま戦いは一生続くのかと思われた。

だが、一瞬の隙が敗北へと繋がる。猿飛は少しだけ手元が狂う。それを服部は見逃さなかった。

手元の修正におよそ0.02秒。その間に服部は刃を猿飛の首元に突きつける。

「大人しく手を上げるんだな。ノロマ」

「こりゃ、一本取られたねー……」

手を上げながらも武器を地面に落とし、そのまま降参を認める。

「若の居場所はどこだ。それを吐けば、後は勝手にすれば良い」

「本当に服部ちゃんはお優しいこった……」

そして猿飛は軽口を叩きながらも言う。

服部は気付かない。この男の目が、未だに力の入っている事に。

「その甘さが、未熟だって言ってるんだよ」

猿飛は、何かを持った手で優しく服部に触れる。反応が遅れた服部は、猿飛の攻撃を許してしまう。

服部に触れたのは、たんなるキーホルダー。ごく普通の金属で出来ているもの。

服部は何かを言う暇も与えられず、その場に倒れこんでしまう。

先ほどの違いは、意識が完全に失っていることだった。



「こつ言っているオイラも甘いんだけど……。まあ、オイラとは違うのは、まだ人を信じるって事が出来る事かな……」

猿飛は独り言を呟きながら、服部を見下す。だが、そこにあるのは侮辱では無く哀れみの表情だ。

「本当に可愛そうな奴らだよ……。どこに居たって、上層部は屑ばかりで、格下の奴は捨て駒の如く扱われる……。か……」

男は一人、静かに倒れている少女の目の前に立ち眩く。

まるで、何か遠いものを怨んでいるかのように。

『AM10:24』

「お前は俺に、何を与えてくれるかな？」

肌が焼けた黒髪の少年、黒田は楽しそうに訪ねる。

まるで、今にも目の前のオモチャを壊したがっている子供のように。

「何が……何も無いだ……」

地面に押し潰されている徳川は、吐き出すように声を絞り出す。

「だったら、何でこんな事をしているんだよ！ 何か欲しいなら、そんなくだらない事をやってるんじゃないやねえよ！」

「……黙れ」

「グフウッ！」

「徳川さん!!」

黒田が鋭く呟いた後、徳川を押し付ける力が大きくなった。  
口元から血を吐き出す徳川を見て、思わず今川は悲鳴をあげる。

「良いねーその悲鳴ねえー? やっぱり、お前はただでは殺さねーよ。『超能力の城』<sup>エスパー</sup>の邪魔になる可能性があるガキを殺せて言われて、やる気無くしてたけど面白い展開だなあ、オイ。まさか、ガキのお使いのついでに大物が釣れるとは」

「誰を……殺すだつて……?」

「その女に決まってるだろ? お前は運が良いことに、俺らの組織に必要なから、上品にお連れしてやるよ。まー、ミンチになつても文句はねえーよなあ?」

ギャハハハハ、と笑いながら黒田はうつ伏せになって倒れている徳川の背中を踏みつける。

強く足をねじ込ませ、徳川は苦痛に満ちた声をあげる。

だが、徳川は抵抗しない訳では無い。強い力に逆らいながら、全力で手を動かす。

そして左手を背中に回し、その黒田の足首を力強く握り締める。すると、一気に徳川の体が軽くなる。先ほどまでの重みが嘘かのように。

「ふざけるんじゃないぞ……」

驚いた黒田は、思わず後ろに引いた。

それと同時に徳川は立ち上がりながら、声を絞り出す。その声は弱弱しく今にも聞えなくなりそうなか細い声だが、その声には妙な気迫があった。

「お前が何をしようが構わない。勝手に俺を痛めつけようが、勝手に誘拐しようがな……。だがな。これだけは許さねえ……。誰かを殺す事だけは許さない！俺の目の前で、誰かを傷つける事だけは、何があっても許さねえッ！！」

雄たけびのように叫ぶ徳川に、少し驚いたような顔になる黒田。だが、すぐに表情を戻す。

> i 1 2 2 7 4 — 1 5 6 2 <

「何を言っているんだ？我が身を差し出し、他人を助けるってか……善人気取りかクソ野郎ッ！初対面の野郎のために、何を熱くなっているんだ？たかが、一人死んだくらい、大して変わらねえだろうが！」

「お前には一生分からないだろうな……。人の命が、どれ程の重みがあるか……。だったら、俺が教えてやる！お前にぶつけてやるよッ！この重みをッ！！」

その言葉で、苦笑いを浮かべる黒田。だが、その瞳だけは真実を語っていた。

それは肉に飢えた獣のように、食事を目の前にした獣の目だ。

「面白いぞクソ野郎……。じゃあ、俺はお前に命が簡単に潰せるって事を教えてやるよッ！！」

3 - 7 忍びの世界の掟（後書き）

誤字脱語などありましたら、遠慮せずに教えてください。お願いします！！

3 - 8 黒く深い傷痕（前書き）

ちよつと今回はダメダメです……。色々根気詰めすぎてる気がします……。

### 3 - 8 黒く深い傷痕

『AM10:23』

「まさか、その程度の実力で『ESP』を潰そうって思っていた訳じゃないゼヨなあ？」

坂本は目の前の男に拳銃を突きつけて軽い調子で言う。

現在、この部屋には三人の人物が居る。

拳銃を突きつけられた黒いフードで顔を隠した男。

拳銃を突きつけている坂本龍平。

そして、その二人を見届けている豊臣美吉。

決着はアツサリと着き、坂本がこのまま勝つのは一目瞭然いちもくりょうぜんだったが、一つだけ腑ふに落ちない事があった。

姿を変えた黒いフードの男は、全く反抗の意思を見せず、坂本に銃を突きつけられた。

「お主の本当の狙い……教えてもらおうかのお……」

「……聞いて。どうする？ 俺は。下っ端の中。下っ端だぞ？」

「それでも、組織の目的くらいは……話せるゼヨなあ？」

坂本の問いに、鼻で小さく笑う男。やはり、何かがある。

そう感じた豊臣は警戒するが、その警戒は脆くも崩される。

「科学サイド。そして。魔術サイド。その両方の。……破滅だ」

あっさりと言われた言葉。その言葉に、二人は顔をしか顰める。

大体は予測していた。ここまでは本部から受けた情報通りだったからだ。ここまでは。

「そして、『原罪』の暴発だそうだ……」

「原罪の……暴発？」

豊臣は男が何を言っているのか分からなかった。だが、坂本の反応は違った。

「……何で……お前達がそれを知っている……？」

「知ってるも。何も。我々が『彼』を狙っている。時点で。気付くだろ？ どうやら。俺や。お前のような。格下の駒には。言えない。事情というモノが。上には。あるらしい」

豊臣だけ、彼らが何の話をしているか分からなかった。自分だけが外された会話。

そもそも、なぜ坂本の方が詳しいのだろうか？

そう考えていた豊臣も、予想外の展開で話に加わる事になる。

「『異常能力研究』……。それくらいは。聞いた事が。あるよな？」

「ッ！？ ……あぁ……あぁあぁあぁあぁ！！！」

その単語を聞いて、急に叫び声をあげながら頭を抱えて倒れる豊臣。

突然の事に、坂本は慌てて豊臣に駆け寄る。

「どうした！？ お嬢！！ しっかりしろ！ ……何をした……？」

男を睨みつけながら坂本は豊臣を支える。

その問いに、男は淡々とした調子で答える。

「なに。誰にでもある。トラウマ。というモノを。穿ほくり返した。だけだ。どうやら。刺激が。強すぎた。みたいだな。お前は。聞いた事。が無いのか？」

無言で睨み続ける坂本が知らない判断したのか、男は独りでに話し出す。

「昔。ある街で。異常な少女が居た。その奇抜さから。ある都市に連れられ。一年間。以上も。彼女は。実験と薬漬けの。毎日だった」

男の言っている意味を理解する坂本。つまり、今の話の少女こそが豊臣と言う事だ。

「……何でお前はそこまで詳しいんだ……？ 明らかに下っ端っていうレベルじゃないゼヨなあ」

すると、黒いフードの男の姿が一瞬で変わる。

それは中年の男だった。強面の男を目の前にして、坂本の両目が見開かれる。

「……フム。ならば、私は下っ端では無いのかもしれないな。簡単な話。私の敵はお前達だけでは無く、組織自体までもが敵と言う事だ」

「……人のトラウマを弄るのが相当好きみたいゼヨな。……お前は、一体何を目的に動いているんだ？」

坂本があまり動揺しなかったのに感心しながら、男は話す。

「私の目的は一つ。ただ、一人の人間を救う事だ……。捨て駒覚悟



で、こんな事をしているのだ。死ぬのも覚悟の上だ。そのためだつたら、昔の同僚も手加減はせん」

「それはこっちのセリフだ。俺は容赦なく、この引き金を引くぞ」

そう言つて、銃口を男に向ける。だが、男は一言告げる。分かつておきながら言つのだ。

「お前に、この『私』を撃てるのか？」

「……………」

「もう一度、撃つ事が出来るのか？」

男の問いに、坂本は何も返事が出来なかつた。ただ、その手は震えていた。

男は、そんな坂本の様子を気にせずには出口へと歩いていく。

「今回の作戦も、所詮は捨て駒を使つての計画の短縮だろ。我々は上層部に上手く利用されている訳だ」

それだけ言つて、男は部屋から出て行く。

残されたのは俯うつむく豊臣と坂本の二人のみ。

外傷は無いが、精神トラウマを土足で踏み弄られて終わった。完全に敗北であつた。

『AM10:30』

そこは、まるで地獄だつた。

言葉の通り、辺りは燃え盛り、熱気が二人を襲う。だが、二人は気にした様子も無く斬り合つていた。

「ッハ！ 中々やるじゃないか坊主……。ここまでやるとは思わなかったよー！」

二本の刀を振るう伊達。そして、薙刀の形をした炎を自由自在に操る真田。

状況は真田の有利だった。燃える刃のせいで、あちこちが焦げている伊達。

だが、彼らは戦いを止める事は無かった。

「拙者の炎の刃を受け止めたのは伊達殿が始めてでござる……」

「……これを誰かに見せた事はあるの？」

「……っは！ そういえば、人に見せるのは初めてだった！！」

バカか……。と呟きながらも両手の刀でリズムカルに斬撃を加えていく。

技術の面では真田の事を評価していた。

次々と来る刃を、一本の薙刀で振り落としていく。そして、一瞬の隙間を狙って強烈な突きを繰り出す。

だが、それでやられるほど伊達も弱くは無い。

薙刀を足で打ち払う。直接、炎に触れたせいで熱さを感じるが、そのスリルがたまらなかった。

でも、動きはワンパターンなんだよな……。

伊達はそう思いながらも、真田の連撃を避ける。

炎さえなければ、ただの刃だけで何の脅威も無い。

(そろそろ本気で行くこうかね……)

そう考え、その両手に力を込める。

「さっさと終わらせて、早く馬鹿とくがわを助けに行かなきゃいけないんでね……」

「そうでござるか……伊達殿の事情は良く分かった！ しかし拙者は負ける訳にはいかないでござる……仲間のためにも！」

そして二人は駆け出す。お互いの武器を持ち、その刃が唸りをあげる。

伊達は神速の速さで刃をぶつける。

そして真田は紅蓮の炎が勢いを増して相手を包み込む。

二人が刃は交わり、そのまま数歩だけ走り続ける。

そしてお互いに背を向けたまま立ち止まり、静寂が辺りを覆う。

だが、二人はけして振り返らなかった。

「……アンタの刃。確かに届いたよ……」

伊達は、己の腹部を押さえながら呟く。服が焼け落ち、露出した肌を押さえる手の間から血が滴り落ちる。

「伊達殿……噂通りの……武人でござる……」

真田は呻きながら、その場に倒れる。だが、切り傷は無く打撃による気絶だった。

最後まで手加減をしていた伊達は、よろめきながらも地面に座る。それと同時に、伊達と真田の地面がひび割れる。戦いの衝撃が、今頃になってきたのだ。

「アイタタタ……。流石に、無茶しすぎたな……」

腹部を抑えながらも呻く。伊達は一切能力を使わずに勝利したのだ。疲れているにも関わらず、立ち上がり仲間の心配をし始めてた伊達達。

そんな彼女の横を高速の速さで何かが通り過ぎる。

「ッ!?!」

伊達は、しっかりとその目で見えた。吹き飛ばされていたのは人間である事。

それが、猿顔の北条である事を。

「北条!?!」

飛んでいった北条は建物に当たり、瓦礫の中に埋もれていた。

そして、伊達の背後から女の声が聞えた。

「妙に逃げ足が速かったで〜そいつ。ウチの斧をギリギリで避けて、何とか時間稼ぎをしようとしたみたいやけど……やっぱダメやね〜素人は」

巨大な斧を担いだ武田は、ゆっくりと近寄ってきていた。

伊達は齒軋りをしながら、刀を構える。

「そつちがやる気なら……アタシも全力で斬るよ」

「その傷でかいな? 無理無理。この戦力差で勝てるかも?」

確かにそれは伊達も分かっていた。致命傷を負った伊達は、まともには戦える状態ではない。

それでも、彼らは戦う事を止めない。お互いに出来た勘違いは、  
けて直る事が無い。

だが、一人の男がそれを変える。

『座れ』

まるで王者のような威厳のある声。それが聞えたと同時に、伊達  
と武田は体が勝手に動き座ってしまう。

「これは……？」

「盲点やったな……。確か本部にはこんな能力者がいたんやったや  
な……」

二人が見つめる先には、ライオンのようにボサボサした金髪をし  
た織田魔鬼が立っていた。

「先にトツコウを見つけるはずだったのだが……。あんな衝撃音  
が聞えれば誰でも気付くか」

そう言って、織田は二人に近寄る。威厳のある態度に、二人は若  
干押し負けてしまった。

それほど、織田には気迫があった。彼はそのまま二人に告げる。

「残念な話になるが、お前達の戦いは無駄だ。敵に上手くかく乱さ  
れたな」

険しい表情になる二人に対して、織田は続ける。

「敵の狙いは、トツコウと今川という少女のみ。結局は邪魔者同士  
で戦わされたと言う事だ」

あまりにもアッサリと言われて反応に困る伊達と武田。  
織田は腕を組みながら、自信気に宣言する。

「だが安心しろ！ 二人の戦いを無駄にもしないために、俺が戦いを引き継いでやろう！！」

「何でだよ！」

「何、言ってるねん！」

二人に猛烈に怒りをぶつけられる織田。徳川が危険な目にあつても知らず。

3 - 8 黒く深い傷痕（後書き）

相変わらず空気が読めない織田さんでした（笑）

3 - 9 重力の崩壊（前書き）

いよいよラストバトル開幕です！

徳川VS黒田の戦い……その戦いは常人の戦いを超える……



### 3 - 9 重力の崩壊

『AM10:26』

いつもに増して徳川は本気だった。本気で殴りにかかる彼に対し、黒田は笑みを浮かべたままだった。

「おいおい？ そんなパンチが当たると思ってるのかあー？」

黒田は紙一重で徳川の拳を交わしていく。そして、横を掠めた拳を黒田は握り締める。

その右腕を握る手に力を込めて黒田は囁く。

「重みつてモンを教えてくれるんだよな？ だったら、先に手本を見せて貰わなきゃなあー」

そう呟いたと同時に、再び徳川の全身に重みがかかる。

呻きを上げながら地面にめり込む徳川。その時に、徳川は確信した。

「お前……その能力……」

「今頃気付いたのか？ 俺ら『エスパー超能力の城』キャッスルは、名前の通り異常能力者の集まり。お前ら『ESP』みたいななあー？ そして、俺はレベルファイブ超能力の能力を操る……。世界中の重力、そして抵抗を操る……」

今までに無いほどの気迫を込めて黒田はゆっくりと吐き出す。

「『グラビティ・コラプス重力崩壊』……世界最強の能力だ！」

それで徳川は今までの現象が理解できた。

黒田は重力を操り、徳川を押し潰していたと言う事だ。

「この能力は便利でなあー？ 重力を操れば相手を押し潰す事ができる！ テメエじゃ俺には勝てねえー理由は分かるよな？ お前は俺に触れる事すら、立ち上がる事も出来ねえんだよ！！」

その言葉と共に、徳川に圧しかかる重力はさらに増す。

徳川の周りには数十メートル程の大きなクレーターが作り上げられる。

黒田は、それで勝ちを確信していた。もはや、自分の邪魔を出来るものは居ないと信じていた。

そして、今川の方を向いて、笑みを浮かべながら尋ねる。

「……さて、遊びも終わったし本題に入るか？ スクラップ どんな死体になりたい？ 望みがあるなら、期待に応えるけど」

笑いながら話す黒田に向かって、今川は静かに話す。

「……私は最後まで諦めません」

「まだ言うか？ もう逃げ場なんて、お前には無えんだぞ？」

「……だって……諦められる訳が無いじゃないですか……。全くの他人を巻き込んでおいて、それでいて傷つけてしまいました……。でも彼は諦めていない」

言葉の意味が理解できず、黒田は首を傾げる。そこで彼は今川の視線に気付く。

今川は黒田ではなく、その足元を見つめていた。

黒田も、自然と足元へと向く。

「彼は諦めていない……。なのに、私が諦められる訳が無いじゃないですか!!」

「その通りだぜ……」

黒田の足元に潰されている徳川は立ち上がるうとしていた。その左手は黒田の足首を掴んでいる。

そして二人の目が合う。徳川の瞳から通じて感じる気力。諦めずに、立ち向かおうとする信念。

「そう言えばそうだったなあ……？ その左手<sup>アブソルド・クライ</sup>。いかなる能力を吸収するだっけな？」

「この左手に何度も助けられたもんだ……。巻き込まれた原因事態だがな……」

徳川は立ち上がり、その瞳で真っ直ぐと黒田を見つめる。

「……お前の重みはしっかりと感じた……。だったら、次は俺の番だよな？」

「おいおい？ まさか今ので全力だと思ってないよなあ？ 二割だクソヤロウ。次こそ潰してやるよ……その左手ごとなあ!!」

黒田は、徳川に向かって飛ぶ。言葉のままに、空中を飛んだのだ。およそ、自分の重力を変えて飛び上がったのだろう。

すぐに順応した徳川は、次の行動を予測して後ろへと飛ぶ。

「必殺キックてかあー？」

黒田は軽口を叩きながらも、空中から瞬時に下へと落ちる。

蹴りを入れようとしていたのだろうか。片足が地面へとめり込ん

でいた。

だが、威力は絶大だった。その場には二つ目のクレーターが出来上がっていた。

徳川は反応が早く後ろへと避けていたので、その被害は受けなかった。

（完全に不利だな……。チートっていうレベルを超えている……）

頭の中で対抗策を考えるが、それよりも早くに黒田の追撃がやってくる。

連発して繰り出される黒田の突きを、逃げ腰で全神経をフルに使って回避する。

その突きが空気に触れる度に、轟！！と音が鳴るのを聞けば、当たるのは絶対に避けるべきだ。

（死ぬ！ 確実に死ぬ！！）

この戦いに徳川の勝率は無いに等しかった。

黒田の能力は何度でも使える。が、徳川の『吸収の罪』は残り一回。

この状況で逆転するには

「一発で決める！！」

徳川は叫びながら、その左手を黒田の頬へ向かって放つ。

全身全霊の力を込めて黒田を殴りつけた。そこに作戦などは無い。ただ、この一撃で決めるつもりだった徳川。それは能力に邪魔される事も無く黒田に命中した。

それで終わると思っていた　　だが、そこまで甘くは無かった。

「……効いたぜえ……ゴミ野郎！ だがなあ……その程度で俺を、倒せると、思っんじゃねえぞ三下がッ！！」

その拳を受けながらも、立ち尽くす黒田は狂気のような叫びを上げる。

そして一気に徳川へと重力が押し掛かる。それも今まで以上の。三つ目に出来たクレーターは今までの二倍以上の大きさとなっていた。

「があ、あああああああああああッ！！」

「ハシャハハハハハハハハハハ！！ 潰れる！ 潰れる！ 潰れ消えろッ！！」

そして、徳川の左手の感覚が無くなる。

彼の左手は、肉が飛び散り骨が剥き出しとなっていた。その骨も、ヒビが入る。

「あ、あ、あ……」

もはや気絶寸前の徳川。今川の叫びが微かに聞えるが、それを気にしている余裕は無かった。

「少しガタが外れちまうが……まあ、良いよな？ ったく……舐めた事をしやがって……」

「舐めているのはどっちだ？ 人の親友を、こんなにまで傷つけておいて？」

それは黒田の背後から聞えた。そこには一人の男が立っていた。

赤いサングラスをかけ、ピアスなどを多数付けたアロハシャツの男。

その男は指でサングラスを直しながら、黒田に向かって言う。

「徳うちから、その汚い手を離せ」

「……誰だ……お前？」

黒田は初めて顔を顰<sup>しか</sup>める。

そして男は、懐から何かの釘を出して告げる。

「俺は坂上。単なる、そいつの友達だ」

3 - 9 重力の崩壊（後書き）

最後に出てきた坂上！？ 何故この男が……  
そして、次回ついに決着です！！

3 - 10 原罪の刃(前書き)

いよいよ『京都編』クライマックスです!!!



### 3 - 10 原罪の刃

『AM10:』

「知らねえー名だな？ …… お前も邪魔つもりか……？」

徳川の元から、一瞬で間合いを詰めて坂上の目の前に立つ。

そして反抗する時間も与えぬまま、坂上の首元を掴み地面へと押さえ込む。

「威勢がいい割にはアツサリとひれ伏してるなあ？ 能力を使うまでも無い」

黒田は笑みを浮かべながら吐き捨てる。そこまで余裕だった黒田だが、一つ気がかりな事がある。

その押さえ込まれている男が笑っている事だ。

念のために能力を使おうとしたと同時に、男は告げる。

「さてさて、ここからは俺っちの大逆転タイムだ」

そう言っつて坂上は釘を周囲に投げつけて言葉を続ける。

「魔方陣は展開済みだ。後は六芒星にはら撒かれた釘で対象を捕捉ターゲット。そして最後に魔法の言葉を唱えるだけ……」

黒田は相手が何かをしようとしている事に気付き、慌ててその場から離れようとする。

が、それよりも坂上の方が早かった。

「silenti um 873」

それと同時に、地面に転がっていた一本一本の釘が一人で地面へと突き刺さり、淡い光を放つ。

その六本の光は黒田を巻きつくように体にウネリ、その体を束縛する。

「テメエ……魔術師か？」

「残念ハズレだ。俺っちは魔導士だ」

黒田の事を眼中にも入れないのか、真っ先に徳川の元へと駆け寄る。

光の拘束を無理に引きちぎろうとするが、腕力ではどうにもならず、動く事も出来ない。

「徳っち……大丈夫か？」

「さ、か……うえ……？」

意識が朦朧とする中、視界に入った坂上。徳川は自分の事も忘れてたように声を絞り出す。

「ダメ……だ……。早く逃げ……」

「もう……お前は戦わなく良いんだよ徳っち。後は俺が引き受ける……。色々と騙していてゴメンな……」

視界がハッキリしていないが、坂上が笑っているのが見えた。優しく微笑みかける坂上は、そのまま徳川を立ち上がらせて、路地の奥へと運ぼうとする。

が、その笑みは突如に消え去る。

徳川の目の前に地面に押し潰された坂上。そして徳川の視界に邪

悪な笑みを浮かべた男が再び入る。

その男は、笑みを浮かべたまま坂上に触れて能力を使っていたのだ。

先ほどまで拘束されていたはずの黒田慰によって。

> i 1 2 4 8 9 — 1 5 6 2 <

「俺を拘束するなんて面白い考えだな？　だが、甘い！　俺の能力はあらゆるモノを潰す！！　それが魔術だろうが、異端の能力だろうがなァッ！！」

大きく高笑いする黒田と、坂上の止む事の無い絶叫が徳川の聴覚から脳へと伝わる。

全身の痛みを忘れ、徳川はたたきと立っていた。

そして、右手を振り絞り、その両方の声をかき消す様に、徳川は絶叫する。

「ああ……あああああああああああッ！！」

本能による行動。何も考えなしに黒田へと殴りかかる徳川。それには、ただ友達を助けなければという考えしか無かった。

黒田は全く動かず、ただ徳川の行動を嘲笑っていた。所詮は当てる事等出来ないのだと。

そして徳川の拳が黒田の目の前へと迫る。

拳は黒田の頬へと直撃する。黒田の能力が発動せず、重力に邪魔される事もなく、命中した。

「なあ………にい………？」

その場に何とか踏みとどまるが、黒田は信じられないモノを見た。

潰されたはずの左手を無理やり動かし、それを黒田の体へと触れさせていたのだ。

黒田は、笑っていた。だが、それは怒りによる狂気な笑い。

「ふざけやがって…… 廃人があああああああ！！」

その左手を逃れて、徳川に能力を行使する。相手の重力の影響を無くし、蹴りつける。

それは、無重力の中を漂うように、徳川は勢いがついたらまま吹き飛ばされる。

壁に激突するまで吹き飛ばされ、これで完全に意識は失っていた。生きているかも分からない。

だが、黒田は別にそれでも良かった。組織に文句を言われようが、別に気にしはしない。

だからこそ、徳川は瓦礫の中を再び立ち上がったのに、心底驚愕した。ここからは良く見えないが、徳川は笑っていた。

「本当に廃人になりやがったか……？」

心の底から鬱陶しく吐き捨てる。

黒田は、相手の動きに注意するが、その時に徳川の口元が動いているのに気付く。

それは、何かを呟いているようだった。

オイシイエサヲ、アリガトウ。

徳川は笑みを浮かべたまま、その左手を上空へと向けて突き上げる。

所々が潰れていて、骨が丸出しの左手。その左手から微かな黒い物体が見えた。

その黒い物体は、まるで徳川の中から出てきたように左手から湧き出し、しだいに徳川の左手を包み込むように蠢く。

その様子を見ていた誰もが背筋が凍った。

それは刃だった。一本の黒い刃。その刃は一切の光を受け付けず、まるでこの世のモノでは無いのかのような。

黒い物体が蠢くのを止め、その左肩の上空に黒い輪のようなモノが出現する。

天使の輪のように左肩の上で回り、不気味な黒い光を放つ。

「マジで化物染みてるじゃねえか……そりゃ、誰だって欲しがるよな？」

黒田の言葉に誰も答えない。背中には冷や汗のようなモノが滴り、これが恐怖なのだと思田は初めて感じる。

未知なる領域に踏み込んでしまったような、気味が悪い感触が黒田を蝕む。

全く動かない徳川に対して痺れを切らした黒田が動き出す。

その足元の石の重力を変え、それを徳川に向かって蹴り飛ばす。

威力は最強。当たれば肉が抉れるのでは無いかと考える。

黒田はニヤリと笑いながら、その惨事を待つ。だが、黒田の気持ちは一気にどん底へと叩き落される。

黒田の蹴り飛ばした石つぶは、徳川の目前へと迫る。そして徳川の行った行動は実にシンプルだった。

その黒き刃を振るう。

刃は石つぶに当たり、その事が嘘だったかのように石つぶは跡形も無く消え去った。

吸収だ。

黒田はすぐに黒き刃の本質に気がついた。あの刃は斬る為ではなく、触れた物を吸収するのだと。

徳川は、ついに動き出した。ゆっくりと歩く。黒田へと真っ直ぐに向かつて歩き始めた。

「何だよそれ……随分とチートじゃねえか？ ……ふざけてるんじゃないぞクソツたれ！！俺がさっきまでは強者だったんだ！狩る側だったんだよツ！それを一発で逆転だと……。そんなのは、俺が認めねえ！！」

黒田は叫びながら、両手を前にかざす。そして、何かを考えるかのように目をつぶる。

歩き続ける徳川に対し、黒田は目をつぶったただけだった。とうとう、二人の戦いは人間の常識<sup>レベル</sup>を超える。

突如、黒田の目の前の空間が歪み始め、小さな黒い点が出る。

その点は、徐々に大きくなる。

辺りの空気も光をも吸い込み、何もかも吸い込みつくす。それはブラックホール<sup>ブラックホール</sup>と類似惑星と呼ばれるものだ。

「ハッハッハッ！！隠し玉対決だ！どっちの吸収が強力か、白黒はつきり着けようじゃねえか！！」

一振り。

徳川は、その黒い刃を振る。それが擬似惑星<sup>ブラックホール</sup>に衝突したと同時に、黒田の隠し玉は跡形も無く吸い尽くされる。

「嘘……だろ……？」

啞然とする黒田を前にして、真っ赤な瞳の徳川は笑みを浮かべて言う。

「美味しい『エサ』をありがとう」

そして、二人の決着は着いた。

3 - 10 原罪の刃(後書き)

エピソードへと続く……



### 3・表 エピローグ『異口同音』(前書き)

今回は二つのエピローグを書きたいと思いますー  
では、どぞどぞー。

### 3・表 エピローグ『異口同音』

全体的に白をイメージしたような部屋に置かれた白いベット。そのベットでぼんやり徳川は横になっていた。

その隣には、同じくボロボロになった少年が立っていた。その手には曲がった釘を数本も持ち、深刻な表情で徳川に話していた。

そして少年が口を閉じると同時に、徳川の口が開く。

「ありがとう」

ぼんやりとした頭でも、徳川は笑顔で言う。その言葉に少年は、苦笑いを浮かべて部屋から退出した。

その後も、徳川は横になりながらボソリと呟く。

「居るんだろ……服部」

「若のお呼びならば」

と言いながら服部はベットの下か現れる。いつもの徳川なら驚いていただろうが、今は上の空のようで、さほど驚いた様子は見せない。

そして徳川は上を向いたまんま服部に尋ねる。

「さっきの坂上の話。お前は信じるのか？」

「……世界には魔術サイドと言って、三つの三大宗派があり、その内の一つの『ローマ正教』の一員という話ですか？」

徳川は小さく頷く。

その問いに対し、服部はアッサリと答える。

「若が信じるのでしたら、私は信じます。私は……若さえ守れば……」

急に口ごもり始めた服部に、徳川は優しく頭を撫でる。  
そして気まずそうに呟く。

「今回も迷惑をかけたみただな……ごめん」

それと同時に服部が目を輝かせて、徳川に馬乗りになる。

「これはOKという意味で取ってもよろしいのですね？　ならば私は若の意志に答えるまで……」

「なわあーッ！　違うわ！　ちよ、お前！　人の服を脱がそうとするなあー！！」

その後、病室に徳川の絶叫が響き渡る。

ここは、寂しい雰囲気漂う部屋。その部屋に現在は四人の男女が集まっていた。

その内の一人の女性。豊臣が仕切るように話を始める。

「今回の件は、本部からお咎めは無しのようなようだ。情報の錯乱。そして相手の不意打ち。それが原因じゃからな……」

平然とした表情で話す豊臣。それに反抗するように赤髪の女性、武田が立ち上がって言う。

「そんなの納得いかなあー。こっちは支部長と、派遣された本部ほんぶよっかっ

直轄の部下まで殺された。さらには、本部の者まで勘違いして攻撃を行うと言うへまをした。せめて、ウチだけでも落とし前をつけられるべきやと思うけどな？」

「そんなヤクザみたいな事はしなくて良いと思うゼヨ。落とし前って言っても実質的にこっちの被害はゼロだ。ここは、総裁の優しさに甘えるべきだゼイ？」

「それでも、私達京都支部としては、このままでは納得いかないのです。私達のせいで事件は雪ダルマ式に大きくなりました……」

武田をなだめる様に坂本が喋ったのだが、黒髪の少女、今川は申し訳なさそうな顔で言う。

このままでは拉致が空かないと思った坂本は、頭を掻きながら一つの案を提案する。

「そうゼヨ。ここは、一つ情報提供という事で話をつけないゼヨか？」

「情報提供？」

「何を……ですか？」

武田と今川は顔を顰めて坂本に尋ねる。

彼は笑顔のまま言葉を続けた。

「なあに。簡単な話だ。この事件で未だに分からない事がある……何故、今川の命が狙われていたのか？そして、それに気付いた今川は逃げて、あの刺客と徳川の戦いを見たんだよな？最後に何があったのか……。はっきりとして貰おうか」

笑顔なのだが、その目は真剣そのものだった。

そして今川は話し出す。

「……この、意味の無い戦いで何があったか……それは」

「私達は本当に何のために戦っていたのやら……」

「全くつすよ……。こんな怪我までして、どうせなら、あの巨乳を一回だけでも……」

無言で伊達は、隣で怪我をしてベットで横になっている北条の腹に重い一撃を加える。

「い、痛いっす……」

「当然の報いだ」

伊達は静かに北条に告げて、向かいに立っている織田に一言の礼を言う。

「今日はありがとね……。アンタの助けが無ければ死んでいた……。なに。構わん。俺は当然の事をしたまでだ」

織田は仁王立ちをしたまま頷いた。

伊達は、歯を噛み締めながら口元を微笑ます。そして織田に向かって指を向けて言う。

「今回は助けてもらったけど、いつかはアンタを超えてみせる。それまで首を洗って待ってな！」

「ッフ。威勢が良いものだな……。ところで、首はボディーションプーとリンスシャンプーのどっちを使えば良いのだ？」

首を傾げる織田に対して、二人は思わず転びそうになる。

伊達は血管が浮かびそうな勢いで怒鳴る。

「そんなのボディーションプーに決まっているでしょ!！」

「いや、ツッコむ所が違うだろ……」

北条は冷静に言うが、すぐさま顔を真っ赤にした伊達に踵下ろしを喰らう事になる。

「若……。気持ちいですか……?」

「……誤解をするような言葉はなるべく避けて欲しいのですが……。まあ、気持ちは良いけどさ」

徳川はベットにうつ伏せになり、その肩を服部が揉んでいた。服部の頭にはタンコブが出来ており、何があったかは大体予測が出来る。

「このまま手を下に持っていけば……」

「ヤメエーいッ!! 何で病室+服部=シモになるのですか!？」

「それが若への……愛情」

「顔を染めながら言うな! 俺はそんな一方的な愛情はいらんはッ!」

まるで、痴話喧嘩のように叫ぶ徳川。それでも、服部の魔の手は止まらないので病室といっても、ほとんど休憩出来ていないのだが。そこに救世主のごとく、何者かが部屋に入ってきた。

「失礼しま……」

入ってきた今川は、二人のやり取りが目に入った瞬間に動きが止まる。

上半身裸になっている徳川は服部を押さえつけようとしているのだが、第三者から見れば確実に襲っているように見える。

「お取り込み中でしたか。では、また後で来ます」

「ちよいちよいちよいッ！ それ誤解ですから！ 全く持って違いますから！！」

何とか誤解を取り除き、今川は納得したようにベットへと近づく。その今川を服部はジロリと睨んで溜息混じりに呟く。

「今度の少女はこの子か……。いつその事、殺<sup>や</sup>るか……」

「そこ物騒な事を言わない。ってか、何ですか？ その、またか、みたいな口ぶりはッ！！」

「あの……良いですか？」

オズオズとして話に入れない今川は二人に向かって言う。

徳川は服部を黙らせてから、どうぞ、と今川の話聞いた。

「今回の件は、すみませんでした」

「いや、別に気にしないって！」

慌てて徳川は否定するが、隣の服部が鋭い視線のせいで無駄に汗を流す。

「全部、私のせいなんです……。私が身勝手に仲間を信じられず、逃げた拳句、徳川さんまで巻き込んで……。結局は、全部私の自己満足なんですよ！」

「それは違う」

徳川は真剣な表情ではつきりと言う。真正面から見つめ、ゆつくりと話し出す。

「確かに今川さんは逃げ出したかもしれない。だが、それは逆を言えば仲間を巻き込みたくないための行動だろ？ 俺の事を巻き込んだって言っても、敵は俺も一緒に狙っていたんだし。そこに、今川さんが背負う事は無いと思うけど……」

「若の悪い癖……。女性を見たら見境なしに助けたくなる」

服部の小言に思わず噴き出し、服部を黙らせようとするが見事に足が絡まり派手に転ぶ。

「病室ではいつも静かにしろっつてんだろっつがああああああー!!」

眼鏡をかけた医師、林先生がドアを蹴り飛ばしながら叫ぶ。

その白衣には、所々に泥がついており、汚い場所にも言ったのかと疑問に思いながら言う。

「いや……。先生こそ静かにした方が良いのでは無いのでしょうか……?」

「病人は黙ってる。部外者はさっさと出て行け!!」

林先生に押されて病室を出て行く服部と今川。

最後に、今川は徳川に深々と頭を下げてから出て行った。

「ったく……。馬鹿共が。無駄に怪我をして、何のための休暇旅行なのやら……」

「無駄では……。無いですよ」



煙草を吸う医師に徳川は独り言のように呟く。

窓から見える暗い夜空と星空。それを眺めながら徳川は口元に笑みを浮かべながら。

「救える命を救えた……それさえ出来れば無駄なんかじゃないですよ……」

3・表 エピローグ『異口同音』(後書き)

エピローグ表でした。  
次は裏へと続きます。

### 3 - 裏 エピローグ『一方通行』

「ハハハ……まるで冗談みたいだなあ、オイ？ あんな事がありながら生きていられるって奇跡か何かか？」

暗く細い路地の道を、壁に寄り添いながら黒田慰はおぼつか無い足取りで進む。

その腕からは血が滴り落ち、足もそろそろ限界を達しているようだった。

だが、その表情にあるのは笑み。それも、次の獲物を見つけた狩人のような笑みだ。

「ククククハハツハツハツ！！ 最強やら、仕事やらは後回しだ。

絶対に殺してやるぞ……」  
『アブソールド クライ吸収の罪』ツー！！」

黒田は忌々しそうに『エモ敵』の名を叫ぶ。だが、その叫びを聞く者などは居ない。

その叫びを聞き流している男は居たが。

黒田の通る細い路地の出口の先に一人の男が立っていた。

影のせいで顔は見えないが、特徴は分かる。

白い短髪に、肌も白い。全体的に白いのだが、服装は真逆の黒い上着。

その眼光からは、爛々と紅い光を放っている。

黒田は眉を顰しかめながら相手を見つめる。どうやら、相手の視線から察すると用件は自分にあるらしい。

「なんだア、このボロボロのゴミ。こんなン一人殺すために来た訳かア？ 学園都市も、とうとう子供のお使いを頼むようになってン

のかア？」

白い髪の少年はゲラゲラと笑いながら喋る。

黒田は、相手の事を睨みつけながら同様に、笑う。

「そいつは残念だったなー？ 俺みたいなゴミの掃除で。お勤めにくろっさんよー。まあ、謝罪のつもりですぐに終わらせてやるよ？」

黒田は壁に寄り添うのを止め、自力で足を動かす。そして、ゆっくりと少年へと近づく。

「気が利くじゃねエか。そんなら話は早エな」

「まあ、待てよ？ まずはゴミ収集車を呼んでからだろ。話はそれからだ。なあ？ だからガキ。黙って、そこを退きやがれ」

あくまで笑みを浮かべる両者。そして少年は黒田に返答する。

「悪いンだが、生憎ここは一方通行だ」

「わざわざ戦いを止めに来るとはご苦労様ですね……土御門」

「にやー。本当だぜいー。ここまで来るのにどんだけ苦労した事か。それに、あのまま二人が戦っていても、どっちにも利益は無いし、下手すれば京都が地図から消えるかもしれないからな」

アロハシャツにサングラスをかけた土御門と呼ばれた男は、傷ついた女性の横と一緒に歩く。

その女性の髪は乱れ、所々が擦り切れていた。

女性は、気になる事があるのか、土御門の方を向きながら尋ねる。

「あの男は貴方の知り合いなのですか？ そのような口ぶりでしたが……」

「昔の知り合いだにやー。つま、今は会いたくない奴の一人でもあるがな。にしても、本当に俺が止めに入らなかつたら大変だったぜい？ 建物だつて半壊していたし」

「その事についても気になるのですが……」

女性はそう言つて、後ろを振り返る。

夜なので照明などがつき、それぞれの光を放つ京都。それを見つめながら女性は呟く。

「あの後、周囲でたくさんのお戦いがあつたみたですが……。建物が壊された形跡などが全くありませんでした……。まるで戦っていたのが嘘かのように……」

「嘘にされた、が正しい見解だな」

土御門は呟く。まるで、遠くを見ているかのような顔で、言葉を続ける。

「あの結界は良く知っている。『浦島太郎』の話を知っているかにやー？」

「一応は……」

「『浦島太郎』は竜宮城に行き、何年もの月日が経っている事に気付かなかつた……。いざ返つてきたら、何年も過ぎてしまつていた自分だけの時が止まつてしまつたかのように。それで貰つた玉手箱を開けると、歳を老いてしまつた。それこそ、竜宮で止まつていた時が、一気に過ぎたようにな」

「それが何か？」

土御門の意図が掴めず、女性は首を傾げる。そして得意げに言葉を続ける。

「その応用だ。あそこに張られた結界は、解除されると共に『戻っていく』。最初の時の景色にな」

「そんな結界が……？」

「俺の知り合いならやりかねないんだにやー」

そして土御門は寂しそうに一人の男の名前を口にする。

「ったく……やっちゃまったぜ。俺っちピンチ的な？」

「何を言っているんや？ 自業自得のクセに」

坂上と安部は蕎麦屋で悠長に蕎麦を啜<sup>すす</sup>っていた。

安部の綺麗な服装とは反対に、坂上の服はボロボロだった。包帯を所々に巻いて、血がにじみ出していた。

「だって、これが上層部にバレたら俺っち確実に消されるぞ？」

「その時はその時や。土御門が自分で決めたように、お前も自分で決めたんやろ？」

「だがよお……俺の本来の任務は『学園都市周辺の監視』である訳で、別に命令違反はしていいよな？」

「『神の右席』にでもバレたら確実に消されると思うがな」

安部の言葉に思わず坂上は嘔き出す。あまりにもアッサリと重要機密を口にしたのだ。

咳をしながら、坂上は安部を睨みつける。

「何をさり気なく、そんな大層な名前を出してるんだよ……」

「所詮は人間の道を捨てた愚か者やる？ 何をそんなに驚く？」

「あのなあ……俺でさえ知るのに苦労したんだぞ……」

とぼけている安部は、全く気にせず蕎麦を食べ続ける。

坂上はお代わりを頼み、話題を無理やり変えようとする。

「それでよお、今川が狙われた理由はやはり、アレか？ もしかして『計画』が漏れてる訳ではないよな？」

「それは無いと思うで。つま馬場聖徳君のほうはバレてるみたいやけどなー」

「どいつもこいつも、陰気な計画を立ててるモンだなー」

暢気に喋りながら、お代わりの蕎麦を受け取った。

そして言葉を続けながら、蕎麦を食べようとす。

「じゃあ、相手は単に魔力が絶大な今川を危なそうだから排除した……という事か？」

「……敵の考えてる事が分かったら苦労しないちゅーねん。魔力の塊である今川を欲するなら分からも無いやけどーな」

夜空を眺めながら蕎麦を啜る。

「聖徳君も忙しいやろーな！。徳川君も順調に育ってるみたいやし……。そろそろワテも動きましようかねー」

そして立ち上がった安部の目線の先には黒いフードを被った者が数名。

坂上は気にした様子を見せずに蕎麦を食べ続ける。

「さて、若い者達には試練を与えなきゃな。来たるべく戦いのためにも！」

「まるで最終戦争に備えるみたいだな……」

ラグナロク

二人は笑みを浮かべながら、目を合わせる。

そして、安部は彼らを引き連れて暗い闇の中へと消えていく。

見ていた坂上はため息を吐いてから呟く。

「せいぜい殺さないようにな。または、殺されないようにな……かな？」

彼は暗い夜を盛大に照らすような輝かしい都市に居た。

その片手には携帯電話を持ち、何者かに電話をしていた。

そして携帯から、何者かに繋がる音が聞える。

「久しぶりですね。統括理事長。いや、アレイスター、クロウリーと呼ぶべきですか？」

携帯からはクリアな音質が聞えてくる。

『統括理事長で十分だ。それで一体なんの用件でここまで来たのだ？ 学園都市に何か用がある訳ではあるまい』

馬場聖徳は、それを聞きクスリツと笑いながら学園都市の夜空を眺める。

「いや、この街は美しいと思ひまして……。私は忠告と警告をしに



来たんです。直接会いたいのですが、無理な事でしょう。それだったら、貴方の『庭』まで行くのが礼儀と思ひましてね」

『そこまで重要な事なのか？』

「はい。とつても重要な事です」

そして馬場は少し間を置いてから話す。

「まず『超能力の城』<sup>エスパー</sup>が動き始めました。貴方の『計画』にも支障が出るかもしれませんから、警備の強化をおススメします」

『……。それは君達の仕事じゃないのか？』

「ええ。しかし念には念を入れですよ。そして、もう一つ警告です」

『まだあるのか』

「はい。これは私的な事なのですが……私の『計画』に手を出さないで貰いたい」

『意味が理解できんな』

「良いですよ。知らないのならば。では、私の用件はこれだけなので、ではまた今度お願いしますね」

それだけ言つて、馬場は電話を切ろうとする。

『こちらからも一つ言わせて貰おう』

「？」

『君の計画は失敗するだろう。やっても無駄な事だ。人材には恵まれているがな』

「……………」

馬場聖徳は携帯電話を切り、呟く。

「それも百も承知さ……………」

そして男は学園都市を後にした。

色々な陰謀が渦巻く世界を救済するためにも、計画を企てる者達

そして計画に捨て駒として用意された者達

それぞれの信念は、しだいに渦を巻いて絡み合っていく

### 3・裏 エピローグ『一方通行』（後書き）

これにて「とある常識の異常能力」の半分が終了いたしました。  
いよいよ折り返し地点に入り、これまで以上に頑張りたいと思いま  
す。

これからも、どうかよろしくお願いします!!

## キャラクター紹介（前書き）

今頃！？

って思っている人が8割と予想します。

しかもメインキャラのみです。すいません。

## キャラクター紹介

『救える命を救えた……それさえ出来れば無駄なんかじゃないですよ……』

> i 1 2 9 7 9 < r u b y > < r b > 1 5 6 2 <

『徳川</rb><rp>( </rp><rt>とくがわ</rt  
><rp></rp></rb></ruby> 功歩こうほ』

誕生日：12月26日 歳：15 特技：逃走 特徴：不幸体質  
黒いニット帽

能力：『アブソルードクライ吸収の罪』

特徴：それが異常の力だったら、触れただけで吸収してしまう。

異常の力が関係する物質も吸収する。ただし、吸収できる容量には限界があり、それを超えると心臓発作が起こる。

暴走などの起こる原因は不明だが、危険な事は確か。

京都での戦いで、潰れた左手が黒い刀へと変わり、その後は傷が消えていた。

東京の高校に通うために上京してきた高校一年。

黒髪に並のルックス。どこにでも居るような平凡な少年。

見た目は通りに大人しく、静かなイメージがあるが、不幸体質のせいか周りに問題児ばかり集まり苦労が絶えない。

その不幸体質のおかげでトラブルに巻き込まれるのは日常茶飯事。本人は諦めかけている。

ある日、事件に巻き込まれて強制的に『ESP』に所属される。この日がきっかけに、物語は始まった。

彼女を目の前で殺された過去を持つ。己の無力を嘆き、日々地道な努力を重ねる。

仲間の事を一番に考え、そのためだったら何でもやる。戦闘時は熱くなり、お互いの気持ちをぶつけあう。

『これが現実……。それが常識として世界は回ってるんだよ……』

>i12983<ruby><rb>1562<

『豊臣</rb><rp>( </rp><rt>とよとみ</rt>><rp></rp></ruby> 美吉<sup>みよし</sup>』

誕生日：2月6日 歳：15 特技：家事 特徴：金持ち オタク

能力：『<sup>オンサイド</sup>ポーター  
一方的移動』

特徴：遠くにある物体を自分の目の前へと移動させる事が出来る。

徳川のクラスメイト、そして『ESP』に連れ込んだ張本人。

大手豊臣財閥財閥の御曹司。幼少時から能力に目覚めており、ESPでも古株にあたる。

頭が良く、海外でも活躍していた。古典的な喋り方をしている。一人称が「わらわ」。

日本のアニメが大好きで、親友の竹中と一緒に鑑賞する日々を送っている。

海外で暮らしていたせいか、少し世間知らずな一面も。

昔に何かのトラウマらしきものがあるらしい。

『牙を向けるとなれば遠慮なく俺は組織に喰らいつく。それを覚悟して動くんだな』

>i12984<ruby><rb>1562<

『坂本</rb>><rp></rp><rt>>さかもと</rt>><rp></rp>></ruby> 龍平りゅうへい』

誕生日：1月3日 歳：15 特技：狙撃 特徴：能天気 ヘッドホン

能力：『音速疾風』サウンド・ウインド

特徴：周りの空気を操って、空気圧縮など突風を巻き起こすなど出来る。

徳川のクラスメイトでいつも笑顔を浮かべている茶髪の少年。その頭にはいつも大事そうにヘッドホンを被っている。見た目によらず、徳川よりも成績が良い。

その歳で豊臣のボディーガードをするほどの実力の持ち主。ちなみに豊臣の事を「お嬢」と呼ぶほどの仲良らしい。(本人談)

『ESP』の新人ながら、その仕事はプロとも言えるほどの実力を発揮している。

木刀と拳銃を使い分け、相手を確実に戦闘不能にさせてきた。

いつもは、ゆったりとしたマイペースぶりを発揮している。

昔に、どこかの傭兵をやっていた節がある。

『だから、アタシは強くなるうとした！ 友達くらいの役には立ちたいんだよッ！！』

< i 1 2 9 8 0 < r u b y > < r b > 1 5 6 2 <

『伊達</rb><rp>( </rp><rt>だて</rt><rp></rp>></rb>> 真<sup>まこと</sup>人』

誕生日：8月3日 歳：15 特技：居合い 特徴：伊達組組長の娘 二刀流

能力：『アクティビティ・デュアル動力倍増』

特徴：自身を強化する能力。この能力は、瞬発力や腕力、脚力と色々々と力を倍増する。

伊達組の組長の養女。ルックスが良く、クールな性格。

そのため男子から人気で、ファンクラブまで存在する。

しかし刀を振るうと豹変し、男勝りな口調、性格になる。

周りの影響のせいか、血の気が多く、戦いを楽しんでいる。

強い者に憧れて織田に戦いを挑んだが、あっさりと敗北。自分の弱さを思い知らされた。

止めを刺されそうになった所で、徳川に助けられて特別な感情が芽生える。

徳川の面影を誰かに重ね合わせて、彼を守ろうと決意した。



何年か前に、誰か大切な人を失い、強くなろうと決意した様子。

『若の敵は私の敵！ 私のせいで若が傷つくなら、それさえも私が防いでみせる！』

>i12982<ruby><rb>1562<

『服部</rb><rp>( </rp><rt>はっとり</rt  
><rp></rp></ruby> 三島<sup>みしま</sup>』

誕生日：?? 歳：15 特技：隠密 特徴：忍び 徳川ラブ

能力：『影法師の潜入<sup>シャドウ  
ダイブ</sup>』

特徴：相手の影に侵入する事が出来る。

徳川のクラスメイトで、小学生時代からの知り合い。

とある事件で徳川に惚れ、それからずっと、一途に徳川の事を思い続けている。

それは全て行動で現しており、俗にいうストーカーである。

徳川に害をなす者は、誰だろうと許さず排除してきた。彼の青春は服部によって訪れる事は無い。

ちなみに服部本人も徳川を襲う（性的な意味で）。しかし徳川のカードが固いようだ。

ほとんどが無口で、無表情。徳川以外には興味が無い様子。

昔は恋のライバルは残さず抹消してきたが、あまりにも鈍感な徳川

に対抗するためにも協力をする事もしばしば。

忍びの末裔らしく、その一族の因縁があるらしい。

『この腐った世界を正すには、俺の力でねじ伏せるしか無いのだッ  
！！』

>i12981<rubby><rb>1562<

『織田</rb><rp>( </rp><rt>おだ</rt><  
rp>)</rp></ruby> 魔鬼<sup>まき</sup>』

誕生日：5月12日 歳：15 特技：格闘 特徴：自己中心的  
ゴツイ体格

能力：『絶対的皇帝』  
アフソリユーエチンペラー

特徴：言葉一つで相手を意のままに操る事が出来る。

徳川の腐れ縁。不良によく喧嘩を売られるが、全焼してきた。

彼を未だに傷つけられたのは徳川一人と言われている。

運動、勉強共に優秀で、成績は学校一。パーフェクトまさに完全人間。

この力がモノをいう世界に憂い、力によって改革をしようとして、  
テロ組織に加担した。

徳川に説得されたおかげで、元の道へと戻れた。そして『ESP』  
に加入。

力とは違う何かで世界を変えるためにも。

派手な服装が目立ち、自己中のように見えるが、実は仲間思いな一面もある。  
周りの人間に変なあだ名を付けるのが趣味。

## キャラクター紹介（後書き）

イラストの方は二人の方に協力していただきました。  
ありがとうございます！！

## 能力者一覧（前書き）

半分まで終わったということ、今までに出てきた能力者一覧を作  
ってみました。

結構いるな……誰か忘れてないですね？（苦笑）

## 能力者一覧

### LVの基準

この小説でのLVの基準は、学園都市の基準に加えて、その異常さも関係する。

だが、代償が大きすぎるとLVも下がってしまう。

能力名：『アフソード クライ吸収の罪』

能力者：徳川 とくがわ 功歩 こうほ

LV：観測不能

徳川功歩の左手に宿る理解不能の力。その左甲が触れた『能力』の影響が多い物質は、その左手に吸収されるように消える。

実際、吸収しているように見えてるだけでは無く根拠もある。

その吸収量にも限度があり、最高でも三回までしか吸収できない。

それを超えると、心臓に負担がかかり、発作が起きてしまう。

暴走や、謎の刃。そして本人いわく、人格があるらしい。

まだまだ未知の領域の能力である。

能力名：『オンサイド ボーター一方的移動』

能力者：豊臣 とよとみ 美吉 みよし

LV：4

豊臣の持つ瞬間移動系統テレポートの能力。  
遠くにある物体を自分の目の前へと移動させる事が出来る。  
物体の座標、重量、物体の形など、色々な条件の下で使える能力。  
豊臣の場合は、別荘の座標を覚えて、そこに保管している多数の武器を手元に移動させて戦っている。  
LV4の能力者という事は、自信の事も移動させる事が出来るはずだが、それを見た者はいない。

能力名：『音速疾風』ソニックウインド  
能力者：坂本 龍平さかもと りゅうへい  
LV：3 4

坂本の持つ風力使い系統の能力。  
LV3の時は、周囲に強烈な突風を吹き起こしたり、風の斬撃を放つ程度だった。  
だが、LV4になってからは、突風を一点に集めて強烈な一撃を放つ程までになった。（空気圧縮）  
その威力は並みの防御を打ち破る。（蘇我の反射を打ち破り、足ごと吹き飛ばした）

能力名：『影法師の潜入』シャドーダイブ  
能力者：服部 三島はっとり みしま  
LV：3

異常能力中の異常で、影に侵入する事が出来る。  
その際は、衣服などが脱げるのだが、本人は気にしていない。

自分の影より小さい影には出て来れず、他にも法則性があるらしい。  
能力を使う代償はかなり大きいものらしい。

能力名：『絶対的皇帝』  
アフソリユータンペラー

能力者：織田 魔鬼  
おだ まき

LV：5

言葉一つで相手を意のままに操る事が出来る。

一種の催眠術なようにも見えるが、実際は声を振動させ発する。

それが空気を伝わって相手の耳に入る。その振動が相手の脳を揺さぶり、脳が言葉を受け入れてしまう。

この能力には未だに隠された効果があるらしいが……

能力名：『動力倍増』  
アクティビティ・デュアル

能力者：伊達 真人  
だて まこと

LV：3

自身を強化する能力。この能力は、瞬発力や腕力、脚力と色々と力を倍増する。

その発現の仕方は、本気で腕を振るう瞬間。（つまりは刀を振り下ろす時など）

振るう度に倍増していくのだが、あまり使いすぎると負担がかかる。

能力名：『範囲爆弾』  
レンジボム

能力者：イガルス



LV：4

発火能力とは少し違う異常能力。  
視野に入る四角い物体を爆破する事ができる。その威力はヤケド程度。

イガルスは特殊なサイコロを使って爆発的な威力を出していた。  
能力を乱用すると、周囲が爆破だらけになるので使うには細心の注意が必要らしい。

能力名：『プリズマー・コントロール心霊操作』

能力者：あけち明智 くらひで暗秀

LV：2

無機質の物体に何かの力を取り付かせて自在に操る能力。

その能力は、一度に一つにしか使えず、目標以外のモノに当たると対象としてどこかが骨折する。

生物などに力を取り付かせる事もできなく、夜中ではないと使えない。

能力名：『モスト・リフレクト極力反射』

能力者：そが蘇我

LV：4

自分に触れるものを反射する能力。

ただの反射なので威力などは設定できないが、位置などを微妙にずらす事ができる。

ただ、あまりにも強すぎるモノは反射できずに打ち破られる。

能力名：『パーフェクトバリア完全防壁』

能力者：源 みなもと頼守 よりもり

LV：4

自分の周りに半透明で薄い青色の防壁が張る事ができる。その物質は未だに解明されていない。

本人の意思で硬化または軟化をする事ができ、内側から攻撃して鋭利な破片を飛ばして攻撃する事もできて、汎用性が豊富。

自分が意識しているところまでしか防壁は張れなく、背後からの奇襲に弱い。

全体に張る事は無理だと判明もしている。

能力名：『プロジエクション危機の予測』

能力者：北条 ほつじょう猿良 ざるら

LV：2

相手の殺気を先読みする事ができる事から、ブレイクニッション予知能力系統の能力だと分かる。

実際に殺気を先読みして、相手の動きが分かるだけで後は北条の本能だと考察する事ができる。

自分に向けられるものだけでなく、いたる所にある殺気を感知する。

能力名：『インフェリオリティ・コンプレックス潜在観念』  
能力者：田沼たぬま泥禪どろみづ

LV：4

テレパシー精神感应系統の能力。相手の精神に干渉して、記憶を弄る事が出来る。

相手の過去を弄り、刺激する事によって精神崩壊をもたらす。大体は子供に対して有効。

能力名：『アームチェンジャー武器装填』  
能力者：宮本みやもと無限むげん

LV：観測不明

異常能力は定かではない能力。四次元の原理を利用して、武器をあらかじめ保存しておく。後は好きな時に武器を手元に取り出す事ができる。

他のモノを保存する事が出来るかもしれないが、本人の趣味で武器しか保存していない。ちなみに保存の限界は未知数。記録では100個以上は超えたとか。

能力名：『エアーズ・ダンス空中舞踊』  
能力者：源みなもと義秋あきせう

LV：3

エテロハンド風力使い系統の能力。

空気を固定化し、その上を歩けるようにする。その姿は宙を飛んでいるようにも見える。

能力名：『地域検索（エリア・アクセス）』

能力者：竹中 朝日

L V：3

周囲のA I M拡散力場を読み取り、どの方角に能力者がいるのか分かる。

能力者のL Vや能力までは分からないが、その能力は貴重なものだから、あまり能力を使いすぎると、脳に痛みが走る。

能力名：『重力崩壊』

能力者：黒田 慰

L V：5

触れたものの重力を自由に変更する事ができる。

重力を使って相手を押し潰したり、抵抗を調整して物体を爆破する事もできる。

ただ、それにはかなりの演算能力が必要なのだが、彼は楽に成し遂げる。

そして、かなりの演算が必要となる『擬惑星』を作り出した。

能力名：『動力上昇』

能力者：武田たけだ 葛葉くずは

LV：4

自身の腕力、脚力を上昇される能力。その力は、軽く巨大な斧を振り回せるほどの力。  
異常能力の中ではシンプルな方に入る。

能力名：『インフェルノ・フレイム地獄業火』

能力者：真田まなだ 吹雪ふぶき

LV3

周囲の温度を上げ、空気中の酸素を使って炎を作り出すパイロキネシス発火能力系統。

炎を自在に操る事ができ、それから炎の薙刀『業火』を作り出した。ただ、炎を出しすぎると空気中の酸素が無くなっていき、周囲の人に被害が及ぶ。

能力名：『エレキテル・ショック感電電流』

能力者：猿飛さるとび 佐意さい字

LV：3

体に微弱な電気をまとっている電撃使い《エレクトロマスター》系統。

ただ、金属を通す事によって強烈な電撃を与える事ができる。相手はスタンガンを喰らったように倒れてしまう。  
他にも多彩な使い方がある。

能力名：偽装者 カモフラージュ

能力者：????

LV：4

自分の姿を他人と全く同じにする事ができる。声まで同じで、気付かれる事はあまり無い。  
詳細は不明。

能力名：『スピリッツ・ユニティ』  
精神統一

能力者：馬場 聖徳 ばば しょうとく

LV 5

テレキネシス  
念動力系統。 詳細は不明。

## 能力者一覧（後書き）

結構、まとめるって疲れますねー……。

## 行間（前書き）

今回の見るに耐えない駄文です。  
どうでも良い所なので、見なくても大丈夫ですよー。



## 行間

いつも思いますが、この場所って薄暗くないと思いませんか？  
そんな恐い顔しないでくださいよ、石田さん。僕達は同じ幹部なんですから、ボスに文句を言いたい訳じゃ無いですって。

……僕ってそんな何かを企んでる風に見えますか？  
高杉、お前が一番気に食わないって……本人を目の前にしてそんなハッキリと……。

まあ、良いですよ。僕みたいに優男はどうせ何かを企んでいる風にしか見えないんですよ……。

この笑顔だつてですね！営業スマイルなんですよ！僕みたいな武器商人は、客がいないと成りなす無いですからね！客との信頼を一番！

……  
……  
……  
確かに『殺蛇の牙』の方とはちよつとしたイザコザになりましたけど……。そ、そんな事よりも聞きましたかッ！？

うんざりした顔をしないでくださいよ……。僕達が呼ばれた理由は知ってますか？

やっぱり石田さんは幹部の中でも一番の忠誠心ですからねー知っていても当たり前ですか。

黒田慰が生きていたって事を……。

確か、元幹部の田沼さんを処分したのは石田さんですよ？

あんな奴は幹部では無いって……ハハッ。石田さんらしいですね  
ー？

それで、今度は黒田慰君が裏切りですからねー。『エスパー超能力の城』キャッスル  
も慌しくなってきましたねえ。あの黒田君が裏切るなんて……。

？ どうしたんですか、石田さん？ 急に黙り込んで。もしかして悲しいとか？

そんなに睨まないでくださいって！ ……………。ボスに対しての忠誠心が足りない奴が多すぎる……ねえー。

まあ、石田さんはボスを心から崇めてますからねー。

とにかく、今回の呼び出しは黒田慰の処分。徳川功歩の捕獲。それで僕達と呼ばれたんですよね？

もちろん石田さんは黒田君の処分に行くんですよね？ じゃあ、僕は徳川君か……。

楽しみだな……。彼は僕達にとっての『鍵』ですからね。なるべく成功させますよ。

石田さんも、死なないようにね……。飼い主がいなくなった犬は凶暴になりやすいですから……。

僕は僕で楽しませてもらいましょうか……ねえ、徳川功歩君

## 行間（後書き）

敵サイド視点で書いて見ました。  
やっぱりこの書き方は難しいですね……

### 三章 4 - 1 日常に潜む闇？（前書き）

ついに始まりました、三章！

お気に入りも30件を突破し、めでたい事ばかりです！

テンションがハイになっている紅蓮烈火ですが、よろしくお願いします！！

### 三章 4 - 1 日常に潜む闇？

8月30日。

それは世界の終わりに近づいている事を告げ、多くの人々が嘆き苦しんでいた。

世界を混乱におとしめる『夏休みの宿題』。この悪夢に大半の人類は苦しんでいるだろう。

狭い部屋で机に向かい合い、唸っている男。この男もその一人だった。

いつも同じような黒いニット帽を被っているが、実は少しだけデザインが違うのをいくつも持っていた。

顔は普通中の普通。そんな、どこにでもいる少年、徳川功歩とくがわ こうほは宿題を目の前にして唸る。

「……終わらない……」

居間では、彼のペットである『ナイト』がぬいぐるみと戯れていた。その姿は、実に愛らしいのだが、今の徳川には全くの無効化だった。

むしろ、それを羨ましく思う。

「良いよなあ……竜には宿題が無くて……」

真っ白な蛇のような生物に羽がついた生物、ナイトは、キュウ、と嬉しそうに鳴く。

飼い主の現状が果てし無くピンチという事には気付いていないようだった。

8月30日から8月31日に移り変わる頃には、徳川のやる気は失せきつていた。

後一日。それで終わる気がしない。

そもその原因は、他にあった。けしてサボっていた訳ではない。

「そもそも仕事が忙しすぎなんだよぉー！」

彼の所属する『ESP』では、夏休みなんて一切関係なかった。能力者が出ればすぐさま出勤。そんな事が夏休み中に何度もあった。数えている方がアホらしく感じる。

「アレですか……夏休みに入ったからって浮かれた馬鹿が多いってことですかチクシヨー！ これじゃあ、完璧に『奥義チヨーク拳法乱れ撃ち』確定じゃねえーかッ!？」

頭を抱えながら絶叫する徳川。今が深夜で近所迷惑になる事さえ考える余裕が無いのだ。

そして必死に考えた結果が、

「そつだ、電話しよう！」

一人でも多くの増援なかまを呼んで、分担または手伝って貰えば終わるという光が見え始めるはずだ。

そう考えた徳川の行動は早かった。瞬時に携帯を手に取り、電話帳の一番最初の奴に電話をかける。

その人物が誰かも確認していなかった。

「……早く出てくれ……」

あの電話が出るまで流れる曲を聞きながらも懸命に願う。お願い

だ、出てくれ、と。

そして、電話が繋がる。

「もしもし!？」

『こんな時間になんの用だ、トッコウよ』

その声の主は瞬時に分かった。と言うより、言葉で分かった。

自分の事をトッコウと呼ぶ人間など、この世に一人しか居ない。彼の腐れ縁である、織田<sup>おた</sup>魔鬼<sup>まき</sup>した。

(よりもよつて、こいつかよ……! でも、改めて思えば、この時間に起きてる奴なんて居ないよな……。と、とにかく、勉強の出来る織田ならッ!)

織田は、こつ奇抜な感じなのだが、勉強運動共にできるといっ完<sup>パ</sup>壁人間<sup>ワケクト</sup>だった。

「なあ、織田。お前は宿題終わってるよな? 出来れば手伝って…

…」

『つふ、何を甘い事を言っているのだ、徳川よ』

その言葉は、大体は予測できた。どうせ、見せないつもりなのだろうが言葉巧みに誘導する自身はあつた。

……こつ考えると、自分つて凄く嫌な奴では?

そんな罪悪感を感じながらも、生死がかかっているので割り切つて頼もつとする。

だが、織田は予想外の事を告げる。

『この俺が宿題などやっつてる訳が無かるうがッ!…!』

「なんですとおおおおおお!？」

二人は完全に近所迷惑という言葉で辞書から消し去ったようだ。ナイトなど、ビックリして飛び上がってしまった。

それほど驚いていた徳川は、深呼吸をして落ち着きを取り戻してから訊ねる。

「な、何でやってないんだ……？」

『そんなの当然だろ。……俺は、学校などのきまりに縛られる事なく、己の』

プツリツと織田の言葉が途切れる。徳川が電話を切ったのだ。しばらく俯きながら、小さく呟く。

「……他を当たるか……」

それから色々と言話をかけたが、全員が却下または寝ていて出ない者ばかりだった。

もちろん、電話をかけたのは徳川がまともだと思っている者のみだ。

それも、全員があてを外れてしまった。

「ついてねえ……」

そう呟きながら床をゴロゴロと転がる。もう既にやる気はゼロになっただけだ。

そんな徳川の携帯が不意に鳴り始める。

「……誰だ？」

眉をひそめながらも、電話に出た。そこからは聞き慣れた声が聞



えた。

『よ、よお……伊達だけ。聞いたよ。宿題が終わってないんだって？』

「はい……そうなんですけど、どこから情報？」

『ちよっとした知り合いだよ！ き、気にするな！』

何故か慌てふためいている伊達に首を傾げながら徳川は首を傾げる。

『それで、宿題が終わってないんだろ？ だったら……アタシが教えてあげようか？』

「……マジツすか？」

『本当だよ……。そんなに信じられないのか？』

その言葉に思わず、徳川の瞳から涙がこぼれそうになる。涙声になりながらも、徳川が叫ぶ。

「あざっす！ アネさんツ！！」

『そ、そんな呼び方をするな！ って……何？ ちよっと！ 勝手に取らな』

だんだん伊達の声が小さくなり、向こうから何やら言い争っている声が聞える。

どうやら、電話を取られたような感じだった。

そして、再び聞えてきたのは伊達の声では無かった。

『お久しぶりです、徳川さん』

「え……片倉さん？」

向こうから聞えてきたのは伊達組の幹部であり、伊達の保護者の存在でもある片倉という男だった。

一ヶ月ほど前に、伊達組絡みの事件で知り合ったのだ。予想外な人物の登場に動揺する。

『こんな時間に電話なんてすいません。ただ、宿題が終わってないらしいですね？』

「はあ……」

どこまで話が伝わってるんだよ、と言いたいが、言えない。そんな事は死んでも言えない。

確実に死亡フラグを避けるためにも、慎重に答える徳川だが、現実<sup>み</sup>は徳川を見捨てた。

『保護者の立場から言わせて貰いますと、こんな時間に男女が電話する事が考えられないんですが、貴方は組の恩人ですから許すと思います。ただ、一緒に宿題をやるという話は別です』

「あの……話の行き先が見えないんですが……」

『つまりは、良い歳の男女が二人きりで、部屋にいる。そんな事をするつもりなんですよ？ 一つだけ言うぞ。うちの伊達嬢に手を出したら、ただじゃ済まさねえぞガキ。それとも、こっちに来てやるってなら話は別ですがね』

こっちの話は完全にスルーみたいだ。

しかも、勝手に一緒にやる事になっている。最悪、怖い人たちに囲まれてやる事になっている。

徳川は震え上がって、表情も固まって動く事もできなかった。まさに蛇に睨まれた蛙である。

それから相手は交代したのか、聞えてきたのは伊達の声だった。



そろそろ近所のオバさんが来るかもしれないが、もう徳川にはどうでも良かった。

そして、再び電話が鳴る。

徳川はムクリと立ち上がり、ゆっくりと投げ捨てられた電話へと歩み寄る。

そして携帯電話を耳元にあて、電話に出て一言。

「しつこいわッ！！」

『何がゼヨか？』

その声の主は坂本龍平さかもとりゅうへいという同級生であり、同僚でもある。

謝ろうとするが、一つだけ嫌な考えが浮かぶ。冷や汗を流しながらも、坂本の話聞く。

『良く分からないが、とにかく今すぐに集まってくれないゼヨか？』

「ちょっと待ってください坂本君？ この流れはアレですよね？」

『ああ、仕事ゼヨ』

「アハハハ…… やっぱりか、こんチクショーツ！！ どの馬鹿だ、こんな夏休み最後の日に宿題で忙しいって時に事件を起こす馬鹿はッ！……！」

徳川の悲痛の叫びは周囲に響き渡る。もう諦めた方が良さそうです。すね。

と考えている徳川に、坂本は冷静な口調で話す。

『何の事を言ってるか分からないけど、とにかく今すぐに仕度をして指定する場所に来てくれ』

もう勝手にしてください、と落ち込んでいる徳川の耳に、坂本の

言葉が入る。

『今回の事件は異例だぞ……。辻斬りだ』

はあ？ という徳川の間抜けの声が電話越しで相手に伝わった。  
長い、長い一日が始まる。

三章 4・1 日常に潜む闇？（後書き）

ついに始まった「辻斬り」編。

今回は同時平行で、もう一つの事件が起きます……。

さて、今後はどうなる！？

412 非日常に光は差し込むか？（前書き）

どもどもども、最近元気がたっぷりな紅蓮烈火です。

今回は、「日常編」と「非日常編」を同時並行で進めていきます。  
では、第二の主人公をどうぞツッ！！

## 4-2 非日常に光は差し込むか？

彼は日が照らし、人ごみが行き来する街を歩いていた。

今日は8月31日。

夏休み最後の日にも関わらず、人の数は減らず多くの人間が訪れる京都の綺麗な町並み。

そんな景色に溶け込みながら、黒田慰くろたなぐさは鼻歌を歌いながら歩いていた。

怪我が完治し、裏ルートを使ってここまで歩いてきた。

その間に何人の人が犠牲になったかは数えていない。

「邪魔くせーな……ぶつ殺しても良いか？」

「オイオイ、辞めてくれよ？ オイラの組織の管轄で問題起こすとか」

彼の隣を歩く男は、目立たずあまりにも影が薄いような服装だった。まるで、そこにいるのが気付かないような、不思議な感じだった。

その男の名は猿飛さるとび佐意さい字。

彼らは、けして仲間ではない。むしろ敵といっても良いはずだ。

だが、特に黒田は気にした様子はなく、ただ静かに相手の話を聞いていた。

「そもそも、迷子になっていたので見つけて連れてきてやったのに……。ここは奢るべきだ！ という事で、美味しい店は俺が知っているから、寿司屋へ行くぞー！」

「……そんなにミンチ寿司を食いたいならすぐに作ってやるぞ？」



隣を触れるだけだからな」

隣では必死に謝っている男がいるが、黒田は目も向けずに風景だけをボンヤリと眺めていた。

いつぶりだろうか、こんなのにんびりと歩く事ができたのは

彼は『エスパー超能力の城』の幹部として降臨していた。

ホス上層部に言われるがまま、特定の対象を暴虐の限りで抹殺してきた。

その事に、何の躊躇いも無かった。むしろ、彼は楽しんでいた。一方的な虐殺。それは、彼の乾いた心を満たすものだった。

だが、それも数日前まで。彼は数日前に一人の少女を殺そうとしていた。

いつもと同じ、しかし退屈な任務になるはずだった。あの男が立ち阻むまで……。

(胸糞が悪いなあ……)

黒田は言葉では表せないような苛立ちを感じながらも、猿飛の後をゆっくりと歩いている。

そして猿飛は人目の少ない路地へと進んで行き、その途中で隠し扉で隠されたような場所に入っていく。

それに何ら疑いも感じないのか、無表情のまま黒田も後を続いた。裏切ったら、殺すまでだ。

その中は広い空間となっていて、クラシックな曲が流れていた。それは一種のバーのようで、それでいて怪しい雰囲気漂っていた。

客も少なく、それでいて目つきの悪いような男ばかりだった。カッブルのような人などが入れる場所では無い。

それでいても、黒田は警戒する事も無く、鼻で笑う。

「どこに連れて行くと思ったら、こんなチンケな店か？ 拷問でもされると思っただけだな？」

「生憎、オイラにはそんな趣味は無いんでな。それに、ここの酒は上手いぞ？」

未成年に飲ます気が、ともっともな事を呟きながら適当に座る。  
店主に何かを注文する猿飛を横目に見ながら、尋ねる。

「それで、俺に何か聞きたいことがあるんだよな？」

ある程度は何を質問されるかは分かっていた。

そして猿飛は予想通りの質問を口にする。

「……察しの通り『超能力の城』<sup>エスパー キャッスル</sup>についてだ……」

「本拠地については不明。人員も同じ。ボスの名前は蘆屋<sup>あしや</sup>。超能力者でもあり、魔術師だ」

アツサリと口にする黒田に対し、猿飛は眉をひそめる。

そして黒田を睨みつけながらも、冷徹な物言いで再度確認を取る。

「今の言葉に嘘、偽りは無いな？」

「無い。そんな事をして、俺に何かあると思うか？ 現在は裏切り者として指名手配されてる身だぞ？」

無理に笑みを浮かべているようにも見えるが、猿飛は黒田の目を見つめて確信する。

「本当のようだな……。それならば、どうして不明な部分があるん

だ？ お前は幹部だと聞いたが」

しつこく尋ねる猿飛に嫌気が差して来たが、ここで殺したら協力を求める事ができない。

それで、仕方なく簡単に説明をする。

「本拠地は、いつも移動しているんだよ、あいつは用心深いからな？ 今頃は海外にでも行ってるだろうよ。そして、幹部っていつても何人もいて、それを様々な部署に分ける訳だ」

そして指を出して、一つ言う度に指を折っていく。

「この組織は目的がたくさんあってな。一つは、特定の人間を監視する部署。今の所は高杉の野郎が管轄だ。徳川……あのクソヤロウと、確かカミジヨウ？ そんな名前の野郎が監視下に置かれている」

それを猿飛は耳でしつかりと聞き、素早く手を動かしてメモを取っていた。

チラリと見えたが、一語一句間違えずに、かなりの速さでメモを取っている。

少しだけ感心はしたが、黒田にはあまり興味が無い事だった。

「……続けてくれ」

「隠密も大変なんだな？ とにかく、次は世界中に飛び回って、指定されたものを奪う。そんな泥棒臭い部署もあったな。何年か前に無くなったらしいが。まあ、最後に俺の管轄だった、対象の目的を抹殺する事だ。組織の害になりえる者や、協力を拒否した、または裏切った者。皮肉だよな？ 今では俺が裏切り者扱いだ？」

黒田は自虐的な笑みを浮かべながら呟く。だが、猿飛は知らない。

その笑みにもう一つの意味が込められている事に。

「……余計に厄介だな……。最後に聞くが、さっき言っていた……超能力者であって魔術師というのは、どういう意味だ……？」

「そのまんまの意味だろ？ 能力者でもありながら、魔術を使える。そんなチート野郎って事だろ？」

「それはありえない……。たとえ異常能力でも、脳の回路は変わっている。そこは、どう理由をつけるつもりだ？」

注文した酒が届き、猿飛はそれを受け取る。

若干だけ顔を引きつらせながら考えるが、黒田は諦めたようにため息を吐く。

「さっぱりだなあ？ ……俺らは組織に入って一般的な魔術の知識を叩き込まれたが、それでプロって言える訳じゃないだろ？ 今、考えるとおかしな組織だよな？ 異常能力者を集めておいて、魔術を習わせる。目的も分からなければ、ただ言われたとおりに行動する兵隊オモチャだったわけだ、俺らは」

そう言っつて、黒田は席から立ち上がる。

「俺の知っている事は全て教えたから、次はアンタの番だぞ？ 言われたとおりに、頼むぜ」

それだけを告げて、黒田は店から立ち去っていた。

猿飛は、その背中を見守るだけだった。

店から出た黒田は、先ほどまで暗い場所に居たせいか日差しが強

く感じた。  
それでも、あても無くフラフラと京都の町並みを見渡しながら歩いていく。  
先ほどのような薄暗い路地に居たせいか、昔を思い出しながら歩いていった。

彼は最初から一人だった。どこで育ったかも、親がどんなかも覚えていない。

気が付けば、薄暗い路地のダンボールの上で座っていたのだ。  
彼はすぐに気付く。 ああ、自分は捨てられたのだな、と。  
最初のうちは、いつか親が迎えに来てくれると思っていた。だが、いつまで経っても親は来ない。

雨の日も、猛暑の中も、雷が落ちる中も、彼はずっと親を待っていた。心配もした。

だが、しだいに心配は恨みへ変わっていく。  
親を憎み、憎み、憎み続けた。だが、それもすぐに失せてしまふ。

生きる事。それさえ、彼の頭には残らなかった。

元々治安が悪い土地らしく、同じような子供はたくさん居た。たくさん喰らった。

同じような人間だろうが、関係ない。全ては弱肉強食。

そんな言葉を知らない彼でも、生きるために弱者を喰らい続けた。

そんな彼の前に一人の男が現れたのだ。その男は、強者だった。

地面にひれ伏せられた彼は、男を鋭く睨んだが、男はうつすらと笑ったのだ。

そして、こう言った。

『面白い小僧だ。他の小僧とは違って、瞳に生気が残っている。気に入った。私と一緒に来ないか？』

彼の判断は早かった。その男に付いて行くと本能が命令したのだ。それから彼の生活は一変した。食事は与えられ、必要な知識を叩き込まれた。

能力に必要な知識。人を殺す知識など、様々だった。

彼は生きれば何でも良かった。生きるという渴望以外に何も無かった彼を引き上げてくれた男。

そして、その組織は彼に牙を向けている。だから、彼は生き残るためにも己の牙をぶつける。

全ては生き残るために。それは、昔から一時も変わらなかった。

そんな事を思い出しているうちに、時刻は昼になっていた。

どこか、適当な所で休もうと思ってレストランに足を歩めようとした時だった。

何者かが自分の裾を引っ張る。

「ああ？」

そんな言葉とともに後ろを振り向く。

人ごみに紛れながら、細くて白い腕が見える。そして顔が見えた。その顔には見覚えがあった。彼は仕事の時、出会った人間など忘れるタイプだ。

だが、この少女だけは忘れない。

あの男によって守られていた少女、今川鶴いまがわつるという少女。  
何でこんな場所に居るんだ？ と疑問に思った黒田に少女は口を  
開く。

「あの……道を教えてくだれませんか？」

黒田という男は、久々に呆然とし、間抜けなように口を開いてい  
ただろう。

そして一言だけ言う。

「はあ？」

4-2 非日常に光は差し込むか？（後書き）

黒田さんは何を企んでいるんでしょうね〜

「とある鬼神の不可抗力」

とコラボをした……

「とある『常識×鬼神』の原点交差」をよろしくお願いします！！



#### 4 - 3 日常に潜む闇？（前書き）

更新が遅くなっています。

何やらスランプ状態になっていたようでして^^^；

#### 4 - 3 日常に潜む闇？

「……功歩。その状態は何ゼヨか？」

ここは徳川のボロアパートと学校の間にある公園。

真夜中で人の姿も無い時間帯に彼らは集まっていた。

そんな中、一人だけ全身を縄で縛られてポツンツと中心に徳川は置かれていた。

うんざいとした表情の徳川に坂本は笑みを堪えながらも尋ねる。

「功歩……何があつたゼヨか？」

「聞くな。てか、聞かなくても分かるだろ……」

「若への愛情行為……」

徳川はもう何かを言う力も無いようで、グッタリとうな垂れていた。

部屋を出た途端に待ち伏せしていた服部に拘束され、抵抗も空しく捕獲されてしまった。

それ以前に徳川は何やら疲れきった表情でボソリと呟く。

「……せつかくの夏休みだっていうのに事件続きで宿題をする暇も無く変なところでたくさんお金を使わされて今では水道代も払えるか分からないし……ああ……もうついてねえんだよバツキャローツ！……」

どつやらいつも通りの不幸生活を暮らしているようだった。

それで皆はホッと安心した表情で口々に言う。

「どつやらいつも通りじゃな」

「ッフ。そのようだな」

「……若。私の思ったとおり……」

「お金の事ばかり言っているとケチに見えるゼー功歩」

他人事のように言っていく仲間達。

織田など、鼻で笑っていた。

もう徳川に近所迷惑という概念は無くなっており、嘆くように叫ぶ。

「元々はお前のせいだぞ坂本！ お前のせいで食費がゼロになったんだ！！ 仕送りまでどうやって過ごせと！？」

「雑草でOKだぜヨ」

親指で大丈夫という合図をする坂本だが、そのせいで徳川の怒りが頂点に達してしまふ。

野獣のように目がキラリと光、牙をむき出しにして飛び掛る。

「お前だけでも食ってやるうううううう！！」

「服部ガード〜」

そんなふざけた口調で坂本は目の前に服部を連れ出す。

もちろん飛び上がったっている徳川に動く余地は無い。そのまま顔を少しだけ赤く染めた服部に向かってダイビングする事に。

「若……嬉しい……」

「お、俺は嬉しくは……って何でお前が俺の上に馬乗りになる体勢になるんだ！？ 忍者の早業！？ そして俺のズボンが脱がそうとするなああああああああ！！」

その日、徳川は死を覚悟しただろう。

「ごめん、遅れた！ って……何してるんだアンタ？」

何やら手提げバックを手にして慌てて集合場所に到着した伊達。

その視線の先には地面に倒れこんだ徳川が地面に、何とか守りきった、とダイイングメッセージのような物を残していた。

全身が真っ白に燃え尽きたようになっていた徳川は無視され、豊臣は尋ねる。

「随分と遅かったみたいじゃが、何かあったの？」

「いや、組の奴らに説得するのもあったんだけど……皆がお腹が減っていると思つて弁当を作ってきたんだ……。良かったら食べないか？」

「食べる！ 食べます！ 食べさせてください！！」

その伊達の言葉にいち早く反応したのは真っ白になっていた徳川だった。

その目には闘志が燃えており、必死さが誰にでも分かる。

「いや、そんな必死にならなくても……」

「何でもします！ 土下座だろうが、何だろうが、やってみせてみます！！」

もはやプライドも何も無い。食欲しか残っていない人間は、ここまで必死になれるのだと全員が思った。

そして戸惑っていた伊達も、徳川の言葉に反応する。

「……何でも？」

「はい！ 何でもです！ 一生奴隷だろつとも構いません！！」

さり気なく凄い事を言ってるよと、豊臣と坂本はドン引きをしていた。それほど死に際だと言う事だ。そして伊達は、その言葉に顔を染めながら、何かを小さく呟く。

「だったら……アタシと……今度の週末でも……」

「若。実は私も弁当を作ってきた」

そう言って突然の服部の乱入で伊達は言つのを止める。そして服部を睨みつける。

服部は若干口元に笑みを見せながら伊達の実聞える程度で呟いた。

「……詰めが甘い」

伊達は歯を食いしばりながらも服部の弁当箱を見る。

見るからに豪華そうな弁当箱だ。それに比べて自分のは地味な、と落ち込む伊達。

だが、すぐにやる気を取り戻し声を張り上げる。

「こ、これは奇遇ね！ でも問題は中身よね？」

「……同意」

妙に張り合う二人を遠くから見つめる豊臣と坂本は言葉を交わす。

「……なんだか話に変な方向に進んでおらんか？」

「……女の戦いはやっぱり怖いゼヨなあー。もう完全に事件の事なんて忘れられてるゼヨ」

もう誰も二人を止められる者がおらず、話はどんどん進んでい

く。

飢え死にしそうな徳川は、じつくりと話が終わるのを待っていたが、とうとう口を出す。

「あの……まだ食べちゃ……ダメ？」

「待って！　まずは外見勝負だから！」

「……望むところ」

思わず涙目になる徳川。いつの間に勝負になったのだろうか？

今にも空腹に押し潰されそうなのに、弁当の良い匂いが追い討ちをかける。

そんな徳川の期待に応えるように、ついに二人が弁当箱の中身を披露する。

「これが自慢の……手作り弁当……！」

二人が息を揃えて声を張り上げる。もう近所迷惑とかお構い無しだ。

徳川は唾液を飲み込む音が聞えるほど待ちわびていたようで、じつくりと弁当を見るめる。

他の者達も、興味心身で弁当の中身を覗き込んだ。

「……………」

そして全員が絶句した。

服部の料理は、主に魚料理が使われており、海老が丸ごと一つ入っっていて、実に美味しそうに見えた。

他のも普通の凡人な徳川が食べられないような料理ばかりで、徳川には輝いて見えた。

そして伊達の料理は、真っ黒に見えた。言葉の通りで、ほとんどの料理が真っ黒に焦げていて、何の料理か見当も付かない。あの真っ白であるご飯でさえ黒くなっていた。それでいて匂いが良いのが異常である。

「……………え」

もう一言しか発せられない。その首筋には嫌な汗がダラダラと流れ、命の危険を知らせている。

あの織田でさえ、この弁当を見て表情を曇らせている。ドクフツ

「中々やるわね……………」

「……………そちらこそ」

そんな皆の反応を完璧無視して勝負を続けようとする伊達と服部もはや勝負ではなく、己の命が危機に面しているといっても過言では無い。

「……………トッコウよ。お前は良い奴だった」

「あれ、俺もう死亡確定!？」

「案外、外見はあれでも美味しいはずゼヨ! 匂いは良いし」

「お主は安心して、伊達の料理を食べてやるんじゃない」

そんな別れの言葉を告げていく仲間達。もはや、徳川を助けるものは無い。

送別会のような空気になっている所に、自信気になっている二人が話しかける。

「さあ、遠慮しないで食べてくれ。特に徳川」

「若……………残さずに食べてね」

そう言って豪華な弁当と、毒物な弁当を差し出す二人。

徳川はどうするべきかは分かっていたが、二人の視線のせいで躊躇う。

何故なら、二人は自分の弁当を食べないと殺す、と目で物語っていたからだ。

「お二人共。わしらも一口味見しても良いかの？」

そんな豊臣の問いに二人は頷く。

もちろん三人は一切の迷いもなく、服部の弁当箱に手をつけた。

そして口に入れると同時に、三人ともが泡を吹きながら倒れてしまった。

「美味しかったみたい……。ほら、若も食べて」

「これのどこが美味しかった人の反応なんですか！？ 全員が白目になってるぞ!？」

しまった！ こつちも毒か！？ と気付いた時には既に遅かったようだ。

二人は笑顔で弁当を持ち、その毒物を徳川の口元に押し込もうとしている。

「はい、アーン」

「い、嫌だ……嫌だあああああがあがあっ!! ゴハアツ!？」

徳川は再び、死を覚悟した。



「……皆、生きているようじゃな……」

かろうじて死地から生還した徳川を除く勇者達。

その頃、徳川は一人だけで三途の川を漂っていた。

どうやら弁当ドクフツは伊達と服部で仲良く食べたのか、すっかりと無くなっていた。

なのに二人は平気な顔をしている。そして、徳川の症状が酷く見えるのは気のせいだと思ひ信じる。

「皆、大丈夫？」

「いきなり倒れたから……心配した」

「だ、大丈夫じゃ……な？」

「……」

もはや言葉も出ない男二人。坂本と織田はこの世に絶望したような顔をしていた。

そんな暗い空気を変えようと、豊臣は必死に本題に入ろうとする。

「そ、そうじゃ！ この場に集まってもらったのは事件が起きたからじゃ！」

「はあ……」

仕事の話題でようやく何かを喋るが、それは疲れきったようなため息だった。

余計に空気が重くなるが、豊臣は困りながらも話を強引に続ける。

「今回の事件は、随分と前から話になっていた辻斬り事件じゃ。先週辺りからニュースで報道されておったじゃろ？」

「ああ、アレ？ あの何人も人が斬られたって言う。でも、何で今

頃？」

「それがのお……斬られた者が全員動かないのじゃよ。生きてはいるのじゃが、全く目を覚ます気配が無いのじゃ」

豊臣の言葉に首を傾げる伊達と服部。

豊臣は真剣な表情で言葉を続ける。

「……そして、月夜弟の能力を使って辺りを搜索したのじゃが、事に能力者の反応があつてのお……。この事件は能力者が絡んでみると見ても良いじやろう」

「なるほど……。目が覚まさないのも能力の可能性つて事ね」

「そうじゃ。では、これから二手に分かれて犯人を捜す！ この時間に関人の活動が活発にしておるからな……。今日中には片付けるぞい！！」

そして夏休み最後の仕事が始まる。

闇に隠れし者を探す、彼らの仕事だ。

#### 4 - 3 日常に潜む闇？（後書き）

物凄くすいません。果てし無くすいません。駄文でふざけ過ぎました。

良ければコラボとある『常識×鬼神』の原点交差」をよろしくお願ひします。

42部に登場キャラ紹介を割り込み投稿しました。イラストもあります。

4-4 非日常に光は差し込むか？（前書き）

久々の更新となります。

なんだか忙しくて忙しくて……

#### 4-4 非日常に光は差し込むか？

「何でこうなった……？」

黒田は外の景色を眺めながらボソリと呟く。

そんな彼の目の前では小柄な今川がバクバクと食事を続けていた。小さな体のどこにそんなに入るのか、と黒田は疑問に思うが、すぐにアホらしいと思って違う事を考える。

そもそも、何で殺そうとしていた奴と食事なんてする事になったのだろうか？

黒田は今川の言葉に呆然とする。

『道を教えてくだれませんか？』なんて言葉はどこをどう言い間違えれば出るのだろうか？

冷静に考えるが、全く思いつかない。聞き間違えでは無いのかと疑うほどだ。

目の前の少女を睨むように見つめるが、オドオドした表情でもう一度聞く。

「……あの、道を教えて頂きたいのですが……？」

「……お前なあ、俺の事を忘れてないか？」

完全に相手は自分の事を忘れていて、と諦めてため息を吐く。

この女はどこまで天然なのだろうか？

そんな黒田の様子に気にした様子も無く、今川は言う。

「黒田さん……ですよね？ 良かった……安心しました……」

「どこをどう安心したんだ？」

もはや呆れを超えて驚愕だ。

自分を殺そうとした奴に出会って安心する人間など、どこに居るだろうか。

「あの、お願いがあるのですが……よろしいでしょうか？」

「……………」

「そうだ！　まずはどこかで食事を取りましょう。そろそろ時間ですし」

「……おい」

「あの店なんかどうでしょうか？　黒田さんは大丈夫ですか？」

うんざりとした表情で今川を見つめ、そのまま無言で手を相手の額に乗せる。

「人の話を聞きやがるのが礼儀ってモンだよな？　殺すぞガキ」

黒田の能力の事は知っているはずだ。

触れたものの重力を操作する黒田の能力。

そして今、黒田は少女の額に手を乗せている。これの意味は馬鹿でも分かるはずだ。

だが、今川は透き通った瞳で、真っ直ぐに黒田の事を見つめる。

「……大切な話がある……そう言ったらどうしますか？」

「ああ……………」

「交渉ですよ。もちろん時間は空いてますよね？」

微笑む今川の顔は、先ほどまでの笑みとは違って何か裏を感じさせた。

その微かな変化に気付きながらも黒田の態度は変わらない。  
ただ、少しだけ興味が湧いた。

「ッハ……この俺に交渉だと？ 面白い冗談ジョークだな？ 良いじゃねえか。乗ってやる」

そこまでは良かった。どうせ後で罨やら来ると予想した上で交渉に乗ったのだ。

しかし、交渉の場としてファミレスに入っただけでこんな状況だ。今川は本当に全部食えるのかと疑問に思うほど注文して、さっきから食事に専念している。

何やら裏があるのでは、と思っていたのに敵どころかハプニングでさえ起きない。

今までに感じた事が無いほど、のんびりとした雰囲気味わう事になった黒田。

「……こいつは本当に何を考えてやがる……？」

色々考えるのがアホらしく感じてきた。それほどまで和やかな時間が過ぎていく。

しだいに苛立ちがつのり始めていた。

「おい、クソガキ。……いつになったら話を始めるつもりだ？」

「黒田さんは食べないのですか？」

「ワザとか？ その見事なスルースキルは？ これも策略のうちなのか？」

あくまで冷静を保つが、こんな腹の立つような会話は初めてだ。

そもそも誰かと話すこと事態が少ない黒田にとって、稀とない機会だ。

「いい加減にしろよ……俺はお前の食事につき合うために来たわけじゃねーぞ……」

「そんな恐い顔をなさらなくても……少し食べますか？」

コイツ、コロシテヤロウカ？

もう理性とか関係ない。今すぐにこの場で血祭りにしてやるのか。本気で殺意が覚えたが、目の前の今川がクスクス笑っているのが目に入る。

「黒田さんって、気持ちが一目で分かりますね。顔に出ていますよ？」

「……おちよくっっていた……ってわけか……」

「そんなつもりでは無いんです！ ただ、あまりにも退屈そうにしていたので……」

それで人の事を馬鹿にしたわけか、と心の中で悪態をつく。すると、今川は俯きながら寂しそうに呟く。

「すみません……私も、あまり人と話すのに慣れていなくて……」

そんな事は黒田にとってどうでも良かった。

もう、このまま殺して出て行こうかと思っていた。

「私、外の世界に出て誰かと話すのも十年ぶりなんですよ……」

その一言で黒田の思考が停止する。

十年ぶりだと？



黒田にとって今川はターゲットだった。だから、ある程度の情報は掴んでいるつもりだった。

今川が『ESP』に、どのように利用されていたか知っていた。

『異常能力の発現実験』

ESPの上層部は特殊な力を持つ今川は研究材料として監禁していたのだ。

その特殊な力は、違う業界では魔力と言われているが、その事実を隠して研究していたのだろう。

およそ、目的は魔術サイドの知識を得るため。

そのため、彼女のように膨大な魔力を持つ者が必要だったのだろう。

『ESP京都支部』メンバーという名目に裏では必死に研究をしていた。

その膨大な魔力を持つ今川を危険視し、『エスパー超能力の城キャッスル』が抹殺を決定したのだ。

その時の責任者は元京都支部の支部長。情報漏れの危険性があったので殺害した。

だが、十年前から監禁しかも誰とも話せないような状況に置かれていたなど初耳だった。

彼女を殺すために施設から抜け出させる手引きをしたのは黒田だが、そこまで厳重な管理には見えなかった。

「徳川さんや武田さん……猿飛さんや真田さん……外にはたくさん優しい人がいました……。初めて楽しいって思えました。黒田さんは思いませんか？」

「……何で俺に話を振るんだ？」

「猿飛さんから聞きました……。黒田さんも昔は一人だって……」

あのサルは次に会ったら絶対に殺そう。

いつの間にか情報が伝わっていたんだ、と考える暇も与えず今川は続ける。

「私……ずっと世界に捨てられたんだと思っていました……。でも、たった一つのきっかけで考えは変えられるんです。そのきっかけを作ってくれたのが……黒田さんでした」

「……………」

ただ無言で話を聞く。

その表情に感情は無く、静かに話を聞く。

「確かに皆は黒田さんを悪人として見ているかもしれませんが……。でも私は違います。ただ、世界に捨てられて寂しがつているだけなんですよね？」

「……………何が……言いたい？」

「……………。私達、この京都支部の一員になりませんか？」

大体は予測できた。

話の流れと今川の性格を考えれば。

だが、それを受け入れるつもりは無い。

「……………どんな交渉かと思ったら、ガキの戯言か？俺が今まで何人殺したか知ってるのか？」

「知ってます。でも、これから償っていけば良いじゃないですか！」

「……………他の奴が黙っていないぞ？」

「支部の皆は了解してくれました。皆……悩んでましたけど、黒田さんの事を信じてるんです」

信じてる……か。

心の中で呟きながら、黒田は思い詰まる。

すぐに決心するのは無理だ。だが、自分がどれ程の大罪を犯したかは自覚している。

「俺は、お前を殺そうとしたんだぞ？」

「元々、生きる価値が無かった命です……。この命のせいで誰かが傷つくのは嫌ですが、誰かが救われるのでしたら、喜んで差し出します」

決意の籠った眼差しが黒田を真っ直ぐに見つめる。

今までに感じた事が無い感情に戸惑いを感じながらも、あくまで冷静を装う。

その時、黒田の携帯電話が震え始めた。まるでタイミングを見計らっていたかのように。

「残念ながら交渉は決裂だ。飯くらいは奢ってやる」

それだけ言って黒田は立ち上がる。

今川は動揺した顔で黒田を見つめるが、何も言わずに黙って見送る。

そして、しだいに黒田の背中が遠ざかっていった。

携帯の画面に書かれた『猿飛』の名を黙って見つめる黒田。

そして携帯をしまって道を歩き出す。

「……今も大罪を犯そうとしている者に、救済なんて必要ねえ……」

必要なのは、道連れにする相手だけで十分だ。

彼は覚悟を決めながら、真っ直ぐと目的の場所へと向かっていた。復讐に満ちた瞳で真っ直ぐに前を向いて。けして振り返る事もせず。

4-4 非日常に光は差し込むか？（後書き）

黒田さんパートでした。

なんだか笑いが足りない気が……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2475n/>

---

とある常識の異常能力（アブノーマル）

2011年8月17日19時26分発行